

年として遡る放射性炭素年代である。

3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰ ; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_S - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_S$: 試料炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度 : (${}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C}$)_S または (${}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C}$)_S

${}^{14}\text{A}_R$: 標準現代炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度 : (${}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C}$)_R または (${}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C}$)_R

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度 (${}^{13}\text{A}_S = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に [加速器] と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ${}^{14}\text{C}$ 濃度 (${}^{14}\text{A}_S$) に換算した上で計算した値である。(1)式の ${}^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_N = {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として } {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として } {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_N - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{13}\text{C}$ に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

${}^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon

Age : yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$
$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して 10 年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv3.10 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

(8) 測定結果

溝 (SD01) 出土の炭化材 (IAAA-62557) の ^{14}C 年代は、980 ± 30 yrBP である。暦年較正年代 ($1\sigma = 68.3\%$) は、1004AD～1154AD に含まれ、平安時代後期中頃に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. (1977) Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon*, 19:355-363
Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon*, 37 (2) 425-430
Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43 (2A) 355-363
Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates , *Radiocarbon*, 43 (2A) 381-389
Reimer, P.J. et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

表3 BP 年代および炭素の同位体比

IAAA Code No.	試 料	BP 年代および炭素の同位体比		
IAAA-62557	試料採取場所 : 神戸市中央区楠町 楠・荒田町遺跡	Libby Age(yrBP)	:	980 ± 30
	試料形態 : 炭化材	$\delta^{13}\text{C}$ (%)、(加速器)	=	-26.77 ± 0.64
	試料名(番号) : 1	$\Delta^{14}\text{C}$ (%)	=	-115.0 ± 3.4
	(参考) #1625	pMC (%)	=	88.50 ± 0.34
		$\delta^{14}\text{C}$ (%)	=	-118.2 ± 3.2
		pMC (%)	=	88.18 ± 0.32
		Age (yrBP)	:	1,010 ± 30

表4 参考資料 : 暦年較正用年代

IAAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-62557	1	981 ± 31

ここに記載する Libby Age (年代値) と誤差は下 1 桁を丸めない値です。

Atmospheric data from Reimer et al (2004); OxCal v3.10 Brink Ramsey (2005); calib.r3 std:1.2 prob wsg[chron]

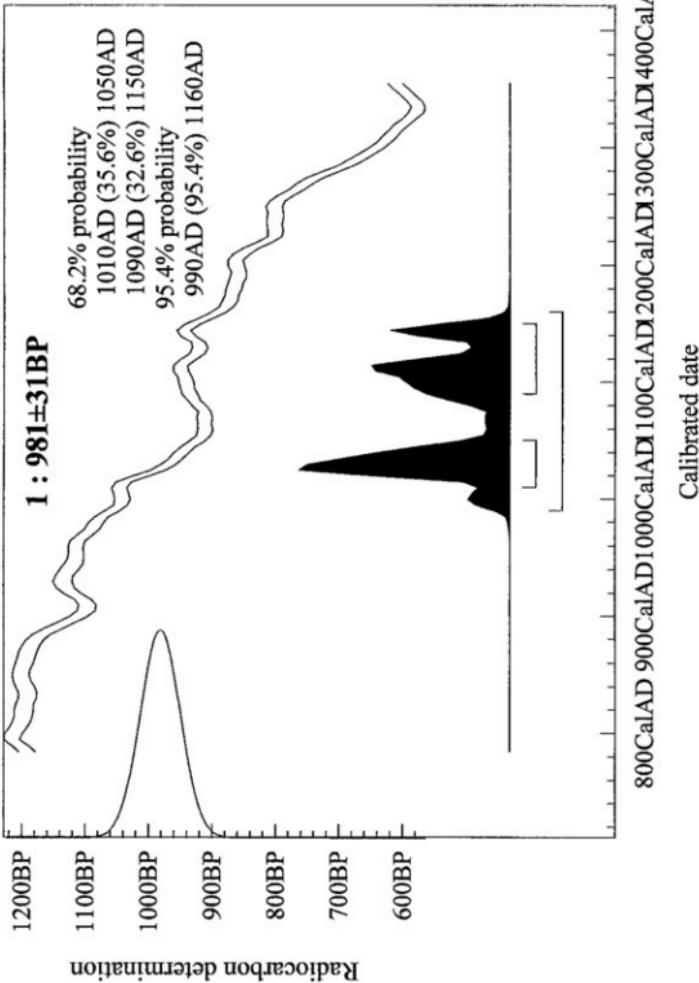


図 4 历年補正 Radiocarbon determination

第2節 楠・荒田町遺跡出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

矢作健二・石岡智武

はじめに

神戸市中央区に所在する楠・荒田町遺跡は、六甲山地南麓に広がる海岸平野の西部に分布する、段丘Ⅱ面とされる段丘上(太田ほか編, 2004)に位置する。遺跡は、平安時代末の福原京の範囲に含まれているとされ、発掘調査によって、平安時代から鎌倉時代とされる大型の溝や掘立柱建物跡などの遺構が検出され、土師器・須恵器・瓦器などの土器や陶磁器類などの遺物が多量に出土している。

本報告では、平氏一門の別邸とされる遺構から出土した土師器および瓦器について、その材質(胎土)の特性を明らかにすることにより、各土器間での胎土の類似性あるいは特異性を見出し、楠・荒田町遺跡から出土した土器に関わる資料を作成する。特に、今回の試料では、発掘調査所見により、その生産地の系統(例えば京都系など)が示されており、それらと胎土との比較対照を中心に考察を進める。

1. 試料

楠・荒田町遺跡では、平安時代から鎌倉時代にかけての時期とされる大型の掘立柱建物跡が確認されており、平氏一門の別邸に相当する可能性があると考えられている。試料は、その遺構に伴い出土した土器片であり、土師器片9点と瓦器片1点の合計10点である。各試料には、発掘調査所見による生産地の系統が示されており、その内訳は、京都系が5点、播磨系が2点、不明が2点である。また、瓦器については和泉系とされている。

各試料の試料番号、出土場所、推定产地などは一覧表にして表5に示す。

表5 胎土分析試料一覧および胎土分類結果

試料番号	出土場所	番号	発掘調査所見による推定产地	鉱物・岩石片				粒径	
				I	II	III	IV	a	b
1	SD01	499	京都系						
2	SD01	516	京都系						
3	SD01	475	京都系						
4	SK01	440	京都系						
5	SK01	450	京都系						
6	SD113上層	297	播磨系						
7	調査区東南部	336	播磨系						
8	調査区南半	347	和泉系(瓦器)						
9	SD01	506	不明						
10	Pt16	130	不明						

I:石英と斜長石の鉱物片を主体とし、岩石片は極めて微量

II:石英の鉱物片を主体とするが、少量～中量の斜長石の鉱物片を伴い、少量～微量のチャート、凝灰岩、流紋岩、デイサイト、花崗岩類などの岩石片を含む

III:石英および斜長石の鉱物片と花崗岩類の岩石片を主体とする

IV:石英の鉱物片を主体とし、中量のチャートの岩石片を伴う

a:粗粒シルトまたは中粒シルトをモードとする

b:双峰性の粒径組成を示し、細粒側のピークは細粒砂～中粒砂にあり、粗粒側のピークは中粒砂にある

2. 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるため、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られ土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面を行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の 3 次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3. 結果

観察結果を表 6、図 5～7 に示す。鉱物片および岩石片の組成をみると、試料間で類似する組成があり、それが複数あることも看取された。具体的には、10 点の試料から、4 分類の鉱物・岩石組成が認められた。ここでは、それらを I～IV 類とする。以下に各分類を述べる。

I 類：石英と斜長石の鉱物片を主体とし、岩石片は極めて微量しか含まれない。これに分類される試料は、試料番号 2～5、9、10 の 6 点である。

II 類：石英の鉱物片を主体とするが、少量～中量の斜長石の鉱物片を伴い、少量～微量のチャート、凝灰岩、流紋岩・ディサイト、花崗岩類などの岩石片を含む。これに分類される試料は、試料番号 6、7 の 2 点である。

III 類：石英および斜長石の鉱物片と花崗岩類の岩石片を主体とする。これに分類される試料は、試料番号 1 の 1 点である。

IV 類：石英の鉱物片を主体とし、中量のチャートの岩石片を伴う。これに分類される試料は、試料番号 8 の 1 点である。

一方、各試料の粒径組成(図 5)をみると、ヒストグラムの形状が、単独峰の山形を呈するものと双峰性を呈するものとに大別できる。ここでは前者を a 類、後者を b 類とした。a 類に分類される試料は、鉱物・岩石組成で I 類に分類された試料と一致し、b 類に分類される試料は、I 類以外の試料であった。また、a 類に分類される試料では山のピークとなる粒径すなわちモードは、いずれも粗粒シルトまたは中粒シルトである。b 類に分類される試料では、細粒側のピークは極細粒砂～中粒シルトにあり、粗粒側のピークは中粒砂にある。

以上述べた試料の胎土分類を表 5 に併記する。今回の胎土分類と発掘調査所見による推定产地とがよく対応していることがわかる。鉱物・岩石組成と粒径組成を合わせて Ia 類と表現するならば、京都系とされた試料 6 点のうち、試料番号 1 以外は全て Ia 類であり、さらに不明とされた試料番号 9 と 10 も同じ Ia 類に

表6 薄片観察結果(1)

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成												合計						
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	綠謫石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	岩石	多結晶石英	片流紋岩	花崗岩類	珪化岩	花崗斑岩	火山ガラス	植物珪化体
1 砂	細繊																			0
	極粗粒砂	1																		5
	粗粒砂	3	1										1	4	1					10
	中粒砂	3	3	2											2	1				11
	細粒砂	2		2	1						1					1				7
	極細粒砂	2		1																3
	粗粒シルト	6	1	4																11
	中粒シルト	10	1	4																15
	基質																			236
	孔隙																			5
2 砂	細繊																			0
	極粗粒砂																			0
	粗粒砂		1										1							2
	中粒砂																			0
	細粒砂	1						2												3
	極細粒砂	1	1	3																5
	粗粒シルト	10	5	14	1															31
	中粒シルト	4	3	15					1											24
	基質																			370
	孔隙																			7
3 砂	細繊																			0
	極粗粒砂																			0
	粗粒砂																			0
	中粒砂	1	1	1																4
	細粒砂							1					1							2
	極細粒砂		4	1																5
	粗粒シルト	7	3	18																28
	中粒シルト	9	1	12	1															24
	基質																			361
	孔隙																			8
4 砂	細繊																			0
	極粗粒砂																	1		1
	粗粒砂													1						1
	中粒砂		1																	1
	細粒砂	3					1													4
	極細粒砂	8	1	3	1															13
	粗粒シルト	8	3	13									2							26
	中粒シルト	11	1	14																26
	基質																			269
	孔隙																			2
5 砂	細繊																			0
	極粗粒砂																			0
	粗粒砂																			0
	中粒砂																			0
	細粒砂	1						2												3
	極細粒砂	2		2																4
	粗粒シルト	8	4	12						1										25
	中粒シルト	12	3	16					1											32
	基質																			362
	孔隙																			13

表7 薄片観察結果(2)

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成										合計				
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	輝長石	輝角閃石	不透明鉱物	チャート	頁岩	蘇灰岩	岩石片	花崗岩類	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体
6	細繊															0
	極粗粒砂															0
	粗粒砂	4							1	1	1	1				8
	中粒砂	23	4	2					3	1	1	5	3	1	1	44
	細粒砂	4	2	5						3				1		15
	極細粒砂	27	5	21					1	5			2			61
	粗粒シルト	19	5	18					1							43
	中粒シルト	13	1	5												19
	基質															525
	孔隙															11
7	細繊															0
	極粗粒砂															0
	粗粒砂	29	3						4	1	1	3	2			43
	中粒砂	30	7	11					2	4	4	4	2			64
	細粒砂	5	2	1						2						10
	極細粒砂	4	1	7										1		13
	粗粒シルト	5		8										1		14
8	中粒シルト	3		5												8
	基質															337
	孔隙															14
	細繊															0
	極粗粒砂															0
	粗粒砂															1
9	中粒砂	1	1						2			1				6
	細粒砂			1						3						4
	極細粒砂	2	1						1	1						5
	粗粒シルト	7							1					1		9
	中粒シルト	4														4
10	基質															195
	孔隙															2
	細繊															0
	極粗粒砂															0
砂	粗粒砂											1				1
	中粒砂															0
	細粒砂															0
	極細粒砂	1	1	4	1											7
	粗粒シルト	3	1	11			1									16
	中粒シルト	2		10												12
砂	基質															152
	孔隙															2
	細繊															0
砂	極粗粒砂															0
	粗粒砂	1														1
	中粒砂	1	1	1					1		1	1				6
	細粒砂	7	1									1				9
	極細粒砂	6	2	10												18
	粗粒シルト	7	5	9			1		1							23
砂	中粒シルト	5	2	8										2		17
	基質															266
砂	孔隙													6		

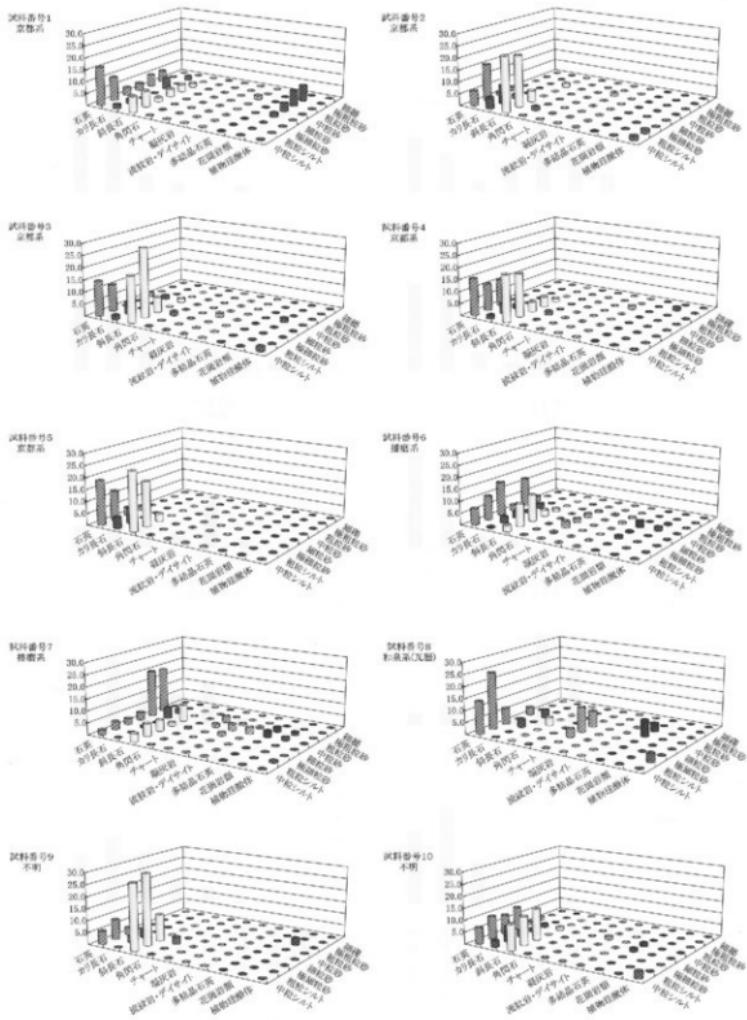


図 5 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

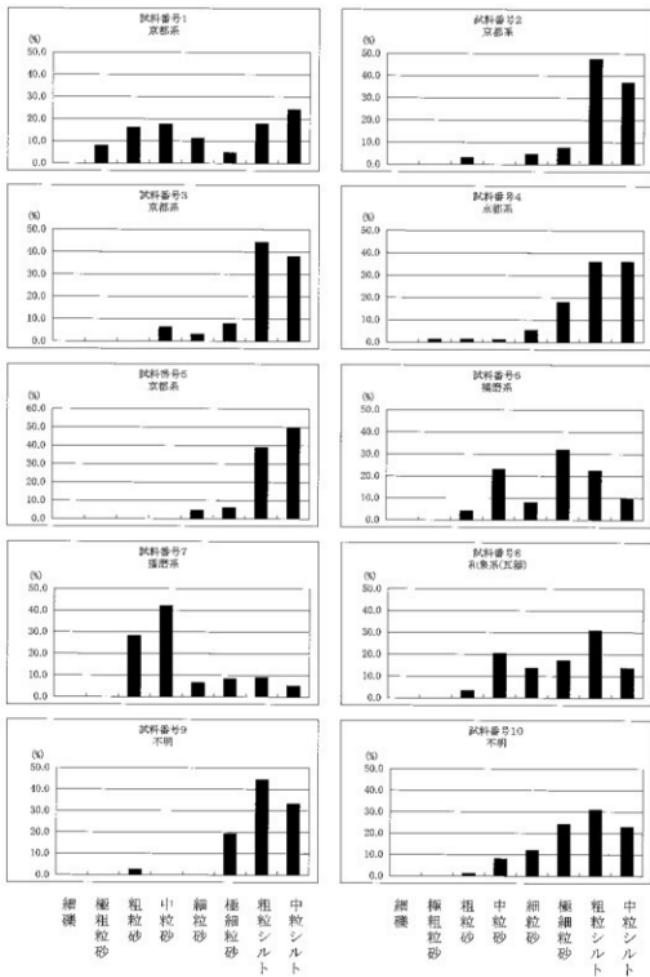


図 6 脱土中の砂の粒径組成

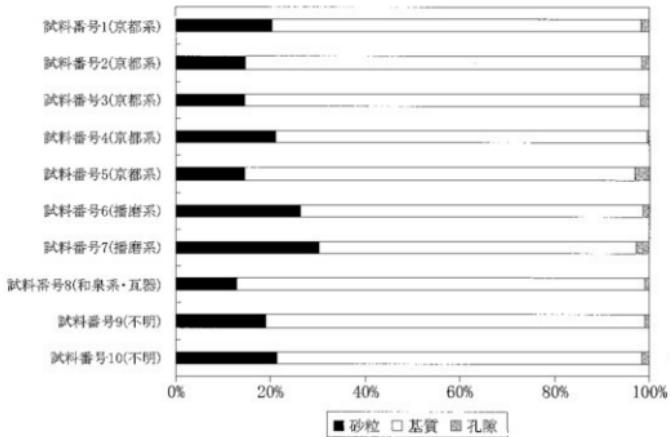


図7 砂粒・基質・孔隙の割合

分類される。播磨系とされた試料番号6、7はともにIIb類であり、今回の試料で唯一の和泉系とされた瓦器の試料番号8は、胎土でも他のいずれの試料とも異なるIVb類である。なお、京都系とされた試料のうち、試料番号1のみは、他のいずれの試料とも異なるIIIb類と分類された。

4. 考察

胎土中に含まれる鉱物片と岩石片の組成は、土器の材料となった粘土や砂が採取された場所の地質学的背景を示唆している。今回の試料では、鉱物・岩石組成の違いによって、I～IV類までの分類が可能であったことから、楠・荒田町遺跡で出土した上師器および瓦器の中には、異なる地質学的背景を有する少なくとも4つの地域で製作された土器が混在している可能性があると考えられる。すでに、発掘調査所見により、「京都」、「播磨」、「和泉」といった地域名が推定されているが、この程度の広がりを持った地域間であれば、それぞれ地質学的背景が異なることは十分に考え得ることである。前項で述べたように、I～IV類の分類と推定産地の分類とはほぼ一致したことから、今回の分析結果は、異なる地域で製作されたものが混在するという意味では、発掘調査所見を支持する結果であると言える。なお、推定産地不明とされた試料番号9および10は、京都系とされた試料番号2～5と同じ生産地である可能性が高い。

次の段階として、I類は京都系、II類は播磨系、IV類は和泉系という今回の対応関係において、それぞれの胎土分類の鉱物・岩石組成が、対応する地域で作られた製品であることを示すものであるか否かということを検討しなければならない。この検討には、各生産地とされている地域で出土した在地の土器を今回と同様の方法により分析し、その結果を比較することが必要である。現時点では、各生産地における分析例は得られていないため、今後の課題としておきたい。

なお、生産地として示された地域の地質学的背景を考慮すれば、今回の胎土については、以下のように考

えることができる。まず、「京都系」について、中世の土師器皿の京都における生産地は、いわゆる洛外と呼ばれる近郊地域であったとされ、洛北の栗栖野、洛西の嵯峨、洛南の深草の3地域が確認されている(伊野, 1995)。これらの地域は、いずれも背後に山地縁辺部を構成する丘陵地が広がっているが、河田ほか(1986)などによる記載によれば、3地域ともに、丘陵地および山地を構成する地質は共通しており、丹波帯と呼ばれるチャート、砂岩、頁岩の堆積岩類を主体とした地質である。このような地質学的背景からは、京都で生産された土師器皿には、これら堆積岩類が含まれている可能性が高く、また、堆積岩類以外の岩石が混在する可能性は低いと考えられる。今回の分析で「京都系」に対応した胎土のI類の鉱物・岩石組成では、岩石片そのものが極めて微量であるが、微量認められている岩石片のなかに堆積岩類は認められず、凝灰岩や流紋岩・ディサイトあるいは花崗岩類など堆積岩類以外の岩石片ばかりである。この結果のみから考えれば、I類の示す地質学的背景と上述の京都における土師器皿生産地の地質学的背景とは一致しない。また、「京都系」とされた試料番号1の胎土であるIII類についても、頁岩を微量含むが、花崗岩類を多く含み、流紋岩・ディサイトも微量認められるなど、I類と事情は同じである。

「播磨系」については、その生産地が「播磨」のどの地域を指すのか不明であるため、上述の京都のような検討はできない。参考として、これまでに当社による分析例において、例えば加古川下流域で在地とされる弥生土器の分析例などでは、今回のII類と類似した鉱物・岩石組成が得られている。猪木(1981)や日本の地質「近畿地方」編集委員会編(1987)および尾崎ほか(1995)などによれば、加古川下流域から中流域においては、右岸側に相生層群と呼ばれる流紋岩質やディサイト質の溶岩および火碎岩(凝灰岩)からなる地質の山地が広がり、また、相生層群が広がる山地には白堊紀～古第三紀に貫入した播磨花崗岩類の岩体が点在する。さらに加古川の上流域の山地には、チャート、砂岩、頁岩などの堆積岩からなる丹波帯と呼ばれる地質が分布する。また、加古川中流域の主要な支流である美嚢川の上流域(志染川流域)には、流紋岩質やディサイト質の溶岩および火碎岩(凝灰岩)からなる有馬層群や六甲花崗岩が分布し、さらに丹波帯の堆積岩類もブロック状に点在している(藤田・笠間, 1983)。したがって、加古川下流域の堆積物中には、これらの地質に由来する岩石片や鉱物片が混在していると考えられ、その状況は、今回の分析におけるII類の鉱物・岩石組成とも整合する。

「和泉系」については、その旧国名が示す範囲である大阪平野南部に生産地があるのであろう。大阪平野南部の地質学的背景としては、大阪平野を取り巻く生駒山地、金剛山地、和泉山脈を構成する地質があげられる。その地質の中で、最も分布範囲が広いのは、領家帯の花崗岩類である。また、生駒山地には底レイ岩、金剛山地北部の二上山周辺では安山岩などの火山岩類も分布し、和泉山脈では和泉層群と呼ばれる砂岩泥岩からなる和泉層群という地質の分布もある。したがって、大阪平野南部の粘土や砂には、花崗岩類が多く含まれ、それに上述した各岩石類が地域によって混在するという状況が推定される。今回のIV類とした胎土では、多結晶石英とした岩石片が花崗岩類に由来する可能性はあるが、それよりも多くのチャートが含まれている。上述したように、大阪平野南部を取り巻く地質の中にチャートが広く分布することはないことから、IV類の胎土と大阪平野南部の地質学的背景とは整合しない。

以上、今回の胎土分類と推定産地分類との対応はほぼ一致したが、推定産地とされた地域の地質学的背景と必ずしも整合する鉱物・岩石組成は得られていない。形態や技法による解析では、地方では洛外產土師器皿はほとんど出土しておらず、認められるのは模倣型であるとする見解(伊野, 1995)もあるが、今回の分析結果は、そのような事情も窺えるとみることはできる。

いずれにしても、生産地の推定のためには、前述したように、まだ多くの分析例を得ることが必要であり、

今後の分析事例に期待される。

引用文献

- 藤田和夫・笠間太郎, 1983, 神戸地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1図幅), 地質調査所, 115p.
- 伊野近富, 1995, 土師器皿. 中世土器研究会編 概説 中世の土器・陶磁器. 真陽社, 225-244.
- 猪木幸男, 1981, 20万分の1地質図帳「姫路」. 地質調査所.
- 河田清雄・宮村 学・吉田史郎, 1986, 20万分の1地質図帳 京都及大阪 地質調査所.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂道路より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—. 日本国文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.
- 日本の地質「近畿地方」編集委員会, 1987, 日本の地質6 近畿地方. 共立出版, 297p.
- 太田陽子・成瀬敏郎・田中真吾・岡田篤正編, 2004, 日本の地形6 近畿・中国・四国. 東京大学出版会, 383p.
- 尾崎正紀・栗本史雄・原山 智, 1995, 北条地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1図幅), 地質調査所, 100p.

第3節 楠・荒田町遺跡出土木器の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1.はじめに

楠・荒田町遺跡は、台地北端の中央部に位置し、古墳時代末から近代に至るまで居住地であり、建物跡が検出されている。特に平安時代末期は平氏一門の邸宅跡があったと考えられている。

ここでは、時期の新しい近世かと思われる木器を中心に、礎板・柱根太・桶底板・建築材など計17点の樹種同定結果を報告する。

2.方法

木製品の一部破片から材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート(材組織標本)を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40~400倍に拡大し観察した。

材組織標本は、兵庫県立考古博物館に保管されている。

3.結果

同定結果の一覧を表8に示し、表9では時期・木器別に検出樹種を集計した。

表8 楠・荒田町遺跡出土木器の樹種

報告番号	番号	遺物名	出土遺構	樹種	時代
W18	1	柱座		トガサワラ	近代
W5	4	柱根太	P3	ネズコ	近世か
W3	5	礎板	P4	ネズコ	近世か
W1	6	礎板	P25	ネズコ	近世か
W2	7	礎板	P26	ネズコ	近世か
W8	8	柱根太	P23	ネズコ	近世か
W7	9	柱根太	P24	針葉樹	近世か
W10	10	桶底板	P65	ネズコ	近世
—	11	桶底板	P65	ネズコ	近世
—	12	桶底板	P65	ヒノキ科	近世
W6	14	柱根太	P7	ヒノキ科	中世か
W9	16	柱根太	P68	針葉樹	近世か
W16	17	板材	SK13	ヒノキ科	近世か
W17	26	楔	SE04	アカマツ	近世か
W12	30	建築部材	SK10	ネズコ	近世か
W11	31	建築部材	SK08	ツガ属	近世か
W13	32	建築部材	SK24	マツ属複維管束亞属	近世か

17点はすべて針葉樹材で、トガサワラ(1点)・ツガ属(1点)・アカマツ(1点)・マツ属複維管束亞属(1点)・ネズコ(8点)・ヒノキ科(3点)・針葉樹(2点)が検出された。

表9 時期・木器ごとの検出樹種集計表

樹種	木器	近世か						柱座	板材	合計
		柱根太	柱根太	礎板	桶底板	楔	建築部材			
トガサワラ								1		1
ツガ属							1			1
アカマツ						1				1
マツ属複維管束亞属							1			1
ネズコ		2	3	2			1			8
ヒノキ科	1			1					1	3
針葉樹		2								2
合計		1	4	3	3	1	3	1	1	17

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

(1) トガサワラ *Pseudotsuga japonica* (Shirasawa)Beisser マツ科 図8 1a-1c(W18 柱座)

垂直の樹脂道は試料破片が小さいこともあり未確認であるが、水平の樹脂道があり、仮道管・放射柔細胞・放射仮道管からなる針葉樹材。分野壁孔はトウヒ型、1分野に普通2個ある。仮道管に水平に走行するらせん肥厚がある。

トガサワラは、奈良県・和歌山県・高知県の暖帯から温帯下部の山中に分布する針葉樹である。

(2) ツガ属 *Tsuga* マツ科 図8 2a-2c(W11 建築部材)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞・放射仮道管からなる針葉樹材。放射柔細胞の壁は厚く放射断面において接線壁に数珠状肥厚がある。放射断面において放射柔組織の上下端や中間に放射仮道管がある。分野壁孔は小型で2~4個ある。

ツガ属には本州の福島県以南の暖帯から温帯下部の山地に普通のツガと、本州・四国・九州の温帯上部の深山に生育するコメツガがあるが、材組織からは2種を区別することはできない。

(3) アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図8 3a-3c(W17 楔)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端に放射仮道管がありその内壁には先の鋭く尖った鋸歯状肥厚が顕著である。

(4) マツ属複維管束亞属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

放射仮道管の内壁に鋸歯状肥厚があることからマツ属複維管束亞属のアカマツまたはクロマツである。内壁の肥厚の形態により、アカマツは銳利な鋸歯状をなすことで、クロマツは比較的ゆるやかな鋸歯状であることで区別される。しかし壁が不均しているため、判断できなかった。

マツ属複維管束亞属はアカマツとクロマツが属し、暖帯から温帯下部の山地から平地に生育する。

(5) ネズコ（クロベ） *Thuja standishii* Carr. ヒノキ科 図9 4a-4c(W12 建築部材) 5c(W5 柱根太) 6c(W3 础板) 7c(W2 础板) 8c(W8 柱根太) 9c(W10 桶底板) 10c(W16)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔の孔口はやや大きいヒノキ型や小型のスギ型、1分野に1~4個、配置は雜然としている。

ネズコ（クロベ）は本州・四国の温帯上部の山中に生育する常緑高木であり、特に中部地方以北に多く分布する。

(6) ヒノキ科 Cupressaceae 図9 10c(W16)

仮道管・放射組織・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量は少なく、樹脂細胞は晩材部に分布する。分野壁孔は1分野に2~4個あり、壁孔の外形は丸いことからヒノキ科の材であることがわかる。しかし細胞壁が不朽しており分野壁孔の型は確認できずこれ以上は分類群を絞ることができなかつた。

(7) 針葉樹 conifer

細胞の不朽が進み同定の根拠となる主に分野壁孔の形態が観察できなかった針葉樹材である。分野壁孔は小型で数も少ないようであり、ヒノキ科の可能性が高いと思われる。

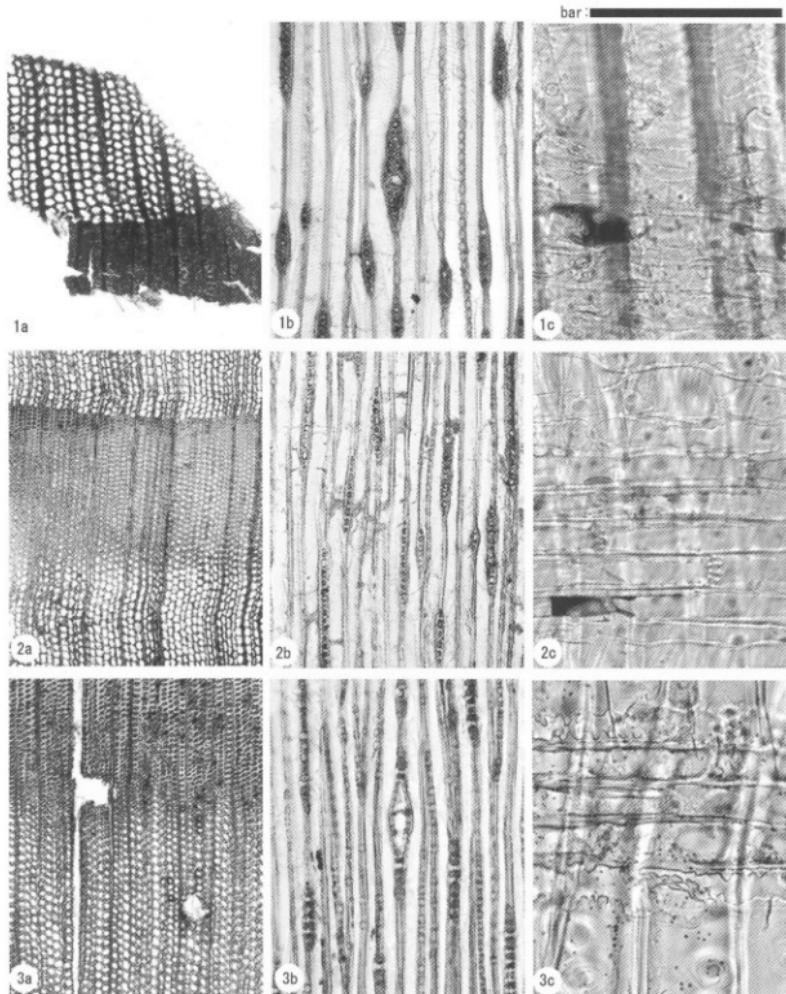
4. 考察

試料17点のうち、中世と思われるものと近代のものが各1点で、あとは近世または近世と思われるものが大半であった。樹種はすべて針葉樹材であり、ネズコが最も多く検出された。兵庫県を含む近畿地方一帯では、古代から中世の遺跡出土木製品はヒノキ属やスギが多く、特にヒノキが目立つ（山田、1993）。しかし、中世～近代を含み、近世と思われる当遺跡の木器の多くからは、ヒノキ科のネズコが多く検出された。これは、近世という時期の樹種利用の特徴であるのか、当遺跡での樹種利用の特徴であるのかは、近世の情報が少ないとともあり、今後の試料蓄積が必要と思われる。

また、近代の柱座は、奈良県・和歌山県・高知県に分布し、兵庫県には分布していないトガサワラであった。近代は遠距離からの木材流通も可能である事から、生育産地から搬入されたものと考えられる。

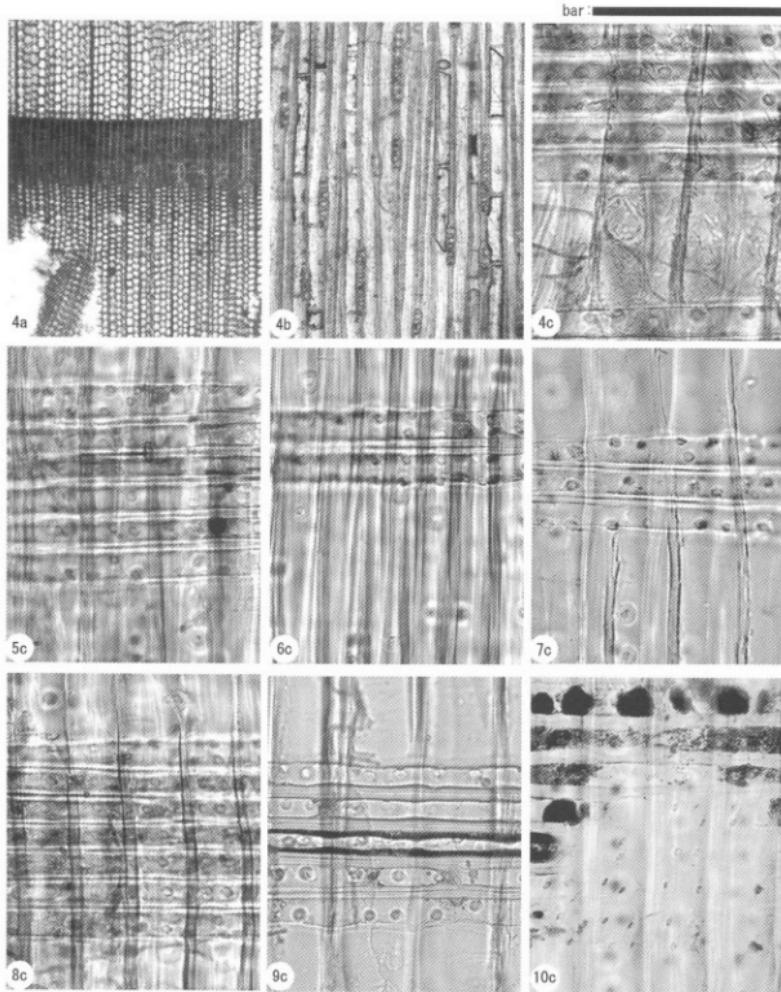
引用文献

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史。植生史研究 特別第1号、242.



1a-1c: トガサワラ (W18 柱座) 2a-2c: ツガ属 (W11 建築部材) 3a-3c: アカマツ (W17 横)
a:横断面 b:接線断面 c:放射断面 bar:a=1.0mm, b=0.4mm, c=0.1mm.

図8 楠・荒田町遺跡出土木器の材組織光学顕微鏡写真 (1)



4a-4c:ネズコ(W12 建築部材) 5c:ネズコ(W5 柱根太) 6c: ネズコ(W3 磁板)

7c:ネズコ(W2 磁板) 8c:ネズコ(W8 柱根太) 9c: ネズコ(W10 桶板底) 10c:ヒノキ科(W16)

a:横断面 b:接線断面 c:放射断面 bar:a=1.0mm, b=0.4mm, c=0.1mm.

図9 楠・荒田町遺跡出土木器の材組織光学顕微鏡写真 (2)

第11章 出土遺物の検討

第1節 出土土師器について

【三】

皿には、輪轂使用のもの（以下「輪轂土師器」と呼ぶ。）と輪轂未使用のもの（以下「非輪轂土師器」と呼ぶ。）がある。

輪轂土師器の皿は、いわゆる須恵器小皿の形態を模倣したもので、平底の底部から外傾気味に立ち上がる口縁部が外反するもの（I類）と直線的なもの（II類）がある。

外反する口縁部を持ち口縁端部がやや肥厚するI類は、底部切り離し技法がヘラ切り手法のIA類（125）と静止糸切り手法のIB類（36）に分けられる。

直線的な口縁部のII類には、口縁端部がやや外反し尖り気味のもの（98）や丸く收まるもの（97・308）があるが、いずれも底部切り離し技法は回転糸切り手法である。

これら輪轂土師器の存続期間は、IA類が11世紀末～12世紀前葉、IB類が12世紀代、II類が12世紀後半～13世紀前半の所産と考えられる。

一方非輪轂土師器の皿には、いわゆる「ての字状口縁」を持つもの（I類）といわゆる「コースターフォーム」を呈するもの（II類）、須恵器小皿を模倣した形態を呈するもの（III類）、直線的な口縁部を持つもの（IV類）、内湾気味の口縁部を持つもの（V類）、杯形のもの（VI類）、外反気味の口縁部を持つもの（VII類）がある。

いわゆる「ての字状口縁」を呈するI類（3）は、口縁端部は上方へ摘み上げられているものの、端部はやや肥厚気味の形状を呈する。

II類は、いわゆる「コースターフォーム」皿と呼称されている一群の皿で、口縁部が底部からの内方への強く折り曲げられるII A類（474）と底部からの内方への口縁部の折り曲げが弱いII B類がある。II B類は、斜め上内方に立ち上がる口縁部が直線的なII B 1類（307・409・553）と丸いII B 2類（235・475）に分けられる。

須恵器小皿を模倣した形態を呈するIII類（4）は、平底の底部から体部は外傾気味に立ち上がり、端部がやや肥厚気味の口縁部は外反する。

底部から体部が内湾気味に立ち上がり直線的な口縁部にいたるIV類には、体部に比べ口縁部の器厚が薄いもの（IV A類）とほぼ同じもの（IV B類）がある。

IV A類は、口縁部が体部から斜め上方にやや急に立ち上がるIV A 1類と体部から口縁部が短く鋭角に立ち上がるIV A 2類（159・208・292・316・319・377・489・501・506・556・619）に分けられる。

なおIV A 1類には、口縁部の端部が外反気味のIV A 1 a類（2）と直線または内湾気味の口縁端部のIV A 1 b類（53・56・63・144・148・204・421・431・444・452・453・486・490・494・495・509・511・

519・567・591) がある。

IV B 類には、体部から緩やかに立ち上がる口縁部の端部が丸く收まる IV B 1 類 (24・25・65・66・68・100・293・416・425・430・435・450・477・479・505・510・517・523・524・526・557・560・589・590) と体部から斜め上方に立ち上がる口縁部の端部が肥厚する IV B 2 類 (327・379・385・493・565)、体部から斜め上方にやや急に立ち上がる口縁部の端部が断面三角形を呈する IV B 3 類 (102・386・455・500・513・522・527・554・582・585) がある。

IV 類同様底部から体部が内湾気味に立ち上がるものの、体部からそのまま内湾気味の口縁部にいたる V 類には、口縁部の器厚が体部に比べて薄いもの (VA 類) とほぼ同じもの (VB 類) がある。

VA 類は、上方にのびる口縁部の端部が尖り気味の VA 1 類 (1・8・9・12・242・583) と斜め上方にのびる口縁部の端部が丸く收まる VA 2 類 (155・217・240・285・331・411・432・433・438・454・461・467・485・499・514・518・520・525・555・558・569・580) に分けられる。

VB 類には、口縁端部が丸く收まるもの (VB 1 類) と口縁端部を摘み上げるもの (VB 2 類)、口縁端部が断面三角形を呈するもの (VB 3 類)、口縁端部に外傾する端面を持つもの (IV B 4 類) がある。なお VB 1 類は、基本的には丸く收まる口縁端部を持つが、上方にのびる口縁端部がやや尖り気味の VB 1 a 類 (11) と口縁端部が上方にのびる VB 1 b 類 (238・240・287・428・434・439・440・481・487)、斜め上方にのびる口縁端部を持つ VB 1 c 類 (209・218・241・276・278・288・321・324~326・332・384・389・408・468・478・496・521・559・572) に分けられる。また、口縁端部が摘み上げられる VB 2 類には、丸く收まる口縁端部の VB 2 a 類 (10・18・70・71・101・173・174・202・203・329・236・277・315・378・388・415・419・420・422~424・426・427・443・445・451・476・480・492・515・528・568・570・571・576・581・584・587・588・592) と口縁端部が断面三角形の形状を呈する VB 2 b 類 (20・21・64・69・72・497・502・595) がある。VB 3 類は、断面三角形の口縁端部を持つが、断面形状が鋭い三角形形状を呈する VB 3 a 類 (17・19・103・130・143・237・239・280・281・286・294・330・412・414・417・418・429・437・441・447~449・463・464・482・483・503・508・516・562・563・579) と鈍い三角形形状を呈する VB 3 b 類 (99・219・279・282・289・290・328・380・382・387・413・436・442・484・488・498・504・512・561・573・575・578・586・593・594) に分けられる。なお VB 4 類 (26・57・67・73・145・243・383・446・462・491・564・566・574・614) は、口縁端部に外傾する端面を持ち、端面はほぼ平坦で明瞭である。

杯形の VI 類は、器高が比較的高いが、口縁端部が丸く收まる VIA 類 (410) と口縁端部の断面形状が鈍い三角形形状を呈する VIB 類 (96・291・507・577) がある。

外反気味の口縁部を持つ VII 類 (62) は、底部から体部が屈曲して立ち上がり、外反気味に斜め上方にのびる口縁部の端部がやや肥厚する。

これら非輪轉土師器は、いわゆる「京都系土師器」と一括して論じられることが多いが、胎土の精錬度や色調・製作技法などから、「京都産」の上師器をかなり忠実に模倣したと想定できるものも存在する。分類別では、いわゆる「ての字状口縁」を持つ I 類やいわゆる「コースター形」を呈する II 類に顕著に認められる。また遺構別では、IVA 1 b 類・IVB 1 類・IVB 3 類・VA 2 類・VB 1 b 類・VB 2 類・VB 3 類・VB 4 類などが出土した SK01 (2003061) を中心に一定量散見できる。これら

出土状況や共伴資料の編年観、とくに京都系土師器皿の編年観・年代観を勘案すると（伊野 1995、小森・上村 1996、同志社大学校地学術調査委員会 1978、百瀬・近江 1995）、非輪轆土師器の存続期間は I 類が 11 世紀後半、III 類・IVA 1 a 類・VA 1 類・VB 1 a 類が 12 世紀前半、II A 類・IVA 1 b 類・IVB 1 類・VA 2 類・VB 1 b 類・VB 2 a 類・VB 3 a 類・VIA 類が 12 世紀中葉～12 世紀後葉、II B 1 類・IVB 2 類・VB 4 類が 12 世紀後葉～13 世紀初頭、II B 2 類・IVA 2 類・IVB 3 類・VB 1 c 類・VB 2 b 類・VB 3 b 類・VIB 類が 12 世紀後葉～13 世紀前半、VII 類が 14 世紀代の所産と各々考えられる。

【土製煮炊具】

鍋・釜などの土製煮炊具には、金属製品の鍋を祖形とする鉄鍋形のものと鉄製羽釜を祖形とする羽釜形のもの、羽釜形から派生して成立した播磨型、播磨型から系譜関係の追える熔焰形のものなどがある。

鉄鍋形には、外反する口縁部を持つ I 類（128・197・295・336）と内湾気味に屈曲する口縁部の II 類（108）がある。

羽釜形には、西摂地域や播磨地域で通有にみられるもの（II 類）と通常認められないもの（I 類）がある。寸胴な体部に短く内傾する口縁部を持つ I 類（109～112・124）は、口縁部の外面にヨコナデ調整によってわずかな段が形成され、口縁部上半がより強く内傾している。一方 II 類（318）は、球形の体部に内湾・内傾する比較的長い口縁部がつく。なお体部外面の最終調整技法は、II 類の刷毛目調整に対して I 類はナデ調整である。

退化した鋸部を持つ播磨型には、断面三角形の短い鋸部の端部が丸味を持つ痕跡化する I 類（297・338）と段状の突帯に退化した鋸部がヨコナデ調整によって作り出される II 類（176）がある。また熔焰形（200）は、体部が比較的深く、底部型作り成形によって作られている。

なお、甕形土器は土製煮炊具と同様に煮炊きなどに使用したと想定されることから、土製煮炊具に含めて報告する。

甕形土器は、体部の形態が長胴形を呈するもの（I 類）と球形を呈するもの（II 類）に大別でき、I 類の口縁部の形状には外反するもの（105・177）やほぼ直線的に外傾するもの（146）、内湾気味に立ち上がる口縁端部を若干擠み上げるもの（466）があり、II 類にはほぼ直線的に外傾するもの（296・337）や内湾気味に立ち上がる口縁端部を内上方に擠み上げるもの（106）がある。

これら甕形土器を含めたいわゆる土製煮炊具の存続期間は、甕形土器から土製煮炊具への変遷・成立過程を分析した丹波地域の初田遺跡の事例や、楠・荒田町遺跡と指呼の先に位置する兵庫津遺跡の分析結果、隣接する播磨地域や畿内地域の編年観・年代観を勘案・準用すると（岡田・長谷川 2003、長谷川 2006・2007、兵庫県教育委員会 1992・2004、森島 2006）、甕形土器 I 類が 11 世紀末～12 世紀前半、甕形土器 II 類が 12 世紀後半、羽釜形 I 類が 12 世紀後葉～13 世紀前半、鉄鍋形 I 類が 13 世紀前半、鉄鍋形 II 類・羽釜形 II 類が 13 世紀後半、播磨型 I 類が 15 世紀後半～16 世紀初頭、播磨型 II 類が 16 世紀中葉～16 世紀後半、熔焰形が 17 世紀中葉～17 世紀後半の所産と各々考えられる。

なお羽釜形 I 類は、摂津地域・北河内地域から山城地域南部の淀川水系でも上流域、すなわち山城地

域南部をおもな分布範囲とする土製煮炊具とされている（森島 2006）。

【参考文献】

- 伊野近富 1995 「土師器Ⅲ」『概説 中世の土器・陶磁器』 p. p. 225～244
- 岡田章一・長谷川眞 2003 「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号 p. p. 33～64
- 小森俊寛・上村憲章 1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の縦年的研究」『財団法人京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第3号 p. p. 187～271
- 同志社大学校地学術調査委員会 1978 『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編II
- 長谷川眞 2006 「瀬戸内東部～播磨」『第25回中世土器研究会 土製煮炊具の諸様相』 p. p. 29～42
- 2007 「播磨の土製煮炊具」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と縦年～』補遺編 p. p. 285～296
- 兵庫県教育委員会 1992 『初田遺跡』兵庫県文化財調査報告 第116冊
- 2004 『兵庫津遺跡』II 兵庫県文化財調査報告 第270冊
- 百瀬正恒・近江俊秀 1995 「各地の土器様相 近畿」『概説 中世の土器・陶磁器』 p. p. 79～138
- 森島康雄 2006 「中世畿内の土器煮炊具」『中世の土製・陶器製鍋釜と鋳鉄鉄物製鍋釜の関係を探る』 p. p. 33～46

表 10 土器器皿分類表

		分 類 基 準 等		所 屬 時 期
輪轄 土師 器 器 非 輪 土 飾 器	I 類 外反する口縁部 II 類 直線的な口縁部 I 類 ての字状口縁部	IA 類 ヘラ切り IB 類 静止糸切り		11C.末～12C.前葉 12C.代 12C.後半～13C.前半
皿	II 類 底部からの内方への口縁部の折り曲げが強 II 類 底部からの内方への口 II 類 口縁部の折り曲げが弱	II A 類 底部からの内方への口 II B 類 底部からの内方への口 II B 類 口縁部を斜め上方に立てるもの		11C.後半 12C.中葉～後葉 12C.後葉～13C.初頭 12C.後葉～13C.前半
須器皿	皿	IV A 類 口縁部の器厚が体部に比べ、薄いもの IV B 類 口縁部の器厚が体部とほぼ同じものの V A 類 口縁部の器厚が体部に比べ、薄いもの	VA 1 類 体部から口縁部が斜め上方にやや急に立ち上がる VA 2 類 体部から口縁部が斜め上方に立ち上がり、丸く収まる VB 1 類 体部から口縁部が斜め上方に立ち上がり、丸く収まる VB 2 類 体部から口縁部が斜め上方に立ち上がり、口縁端部が肥厚するもの VB 3 類 体部から口縁部が斜め上方にやや急に立ち上がり、口縁端部が断面三角形	12C.前半 12C.中葉～後葉 12C.中葉～後葉 12C.後葉～13C.初頭 12C.後葉～13C.前半
IV 類	IV 類	V B 1 類 V B 2 類	VA 1 類 上方にのひる口縁部の端部は尖り気味 VA 2 類 上方にのひる口縁部の端部は丸く収まる	12C.前半 12C.中葉～後葉 12C.前半
V 類	V 類	V B 1 類 V B 2 類 V B 3 類 V B 4 類	VB 1 類 口縁端部が丸く収まるもの VB 2 類 口縁端部が折み上げられるもの VB 3 類 口縁端部が断面三角形 VB 4 類 口縁端部が外傾する器をもつもの	12C.前半 12C.後葉～13C.前半 12C.中葉～後葉 12C.前半
VI 類	VI 類	VIA 類 VIB 類	口縁端部が丸く収まるもの 口縁端部が屈曲して立ち上がり、外反氣味の口縁部の端部がやや肥厚するものの	12C.後葉～13C.前半
VII 類	VII 類		底部から体部が屈曲して立ち上がり、外反氣味の口縁部の端部がやや肥厚するものの	14C.代

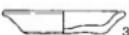
輪轂土器器

I A 類



125

I B 類



36

II 類



97

非輪轂土器器

I 類



3

II A 類



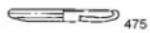
474

II B1 類



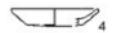
409

II B2 類



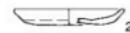
475

III 類



4

IV A1a 類



2

IV A1b 類



421



453

IV A2 類

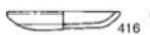


501

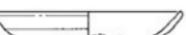


292

IV B1 類



416



450

IV B2 類



493

IV B3 類



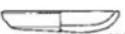
554

V A1 類



583

V A2 類



411



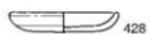
525

V B1a 類



11

V B1b 類



428

V B1c 類



572

V B2a 類



241

V B2a 類



420



528

V B2b 類



502

V B3a 類



503



449

V B3b 類



436

V B4 類



586

V B4 類



462



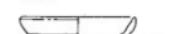
491

VIA 類



410

VIB 類



507

VII 類



62

図 10 土器皿分類図

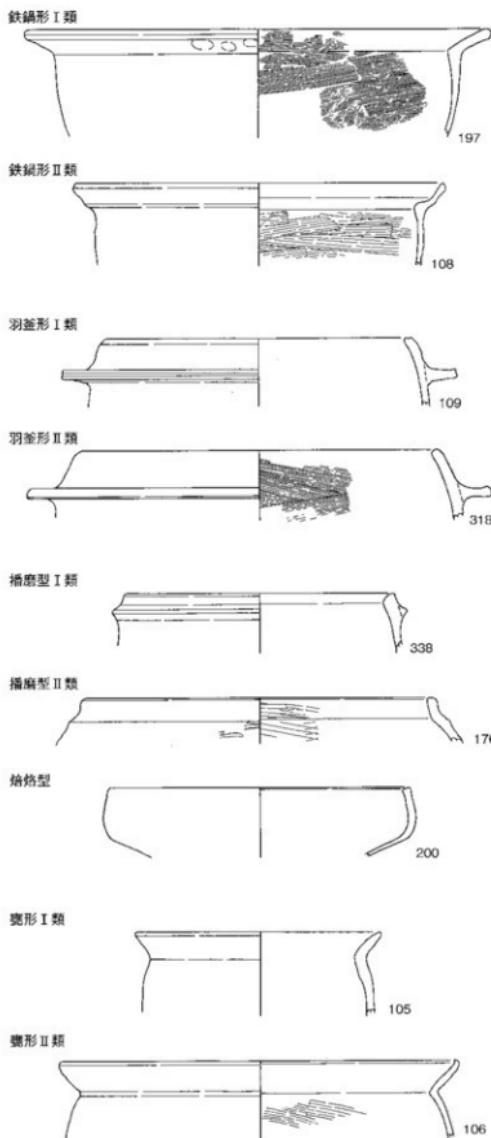


図 11 土製煮炊具分類図

第2節 出土瓦器について

ここでは、各調査区出土の瓦器について、その概要をまとめることにする。器種としては、椀・皿・鉢に分類できる。その比率は、椀が圧倒的に多く、次に皿が続き、椀と皿で大半を占めている。鉢は1点のみである。そこで、椀と皿を中心で検討していくことにする。

(1) 椭

報告する瓦器椀のほとんどが、和泉型瓦器椀である。唯一例外として、348は楠葉型に分類されるものである。よって、ここでは和泉型瓦器椀を中心に検討を加えていくことにする。

ちなみに、楠葉型の348については、①外間にヘラミガキが認められない、②内面のヘラミガキも密ではない、③体部から口縁部にかけて内湾傾向にある、などの特徴が認められる。以上から、橋本編年⁽¹⁾のⅢ-2期を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。

和泉型瓦器椀については、尾上 実の分類・編年⁽²⁾がある。以下、これを基準に分析を進めていくことにする。具体的には、これらの資料を、法量・高台断面形・ヘラミガキの特徴等をもとに分類し、その年代観を明らかにしていくことにしたい。なお、分類にあたっては、完形もしくは完形に復元できた個体を中心に進めていくことにする。

今回報告する和泉型瓦器椀は、椀A～椀Mの13タイプに分類することができる(図13・14)。

椀A 531の1個体である。口縁部から体部の一部のみの残存のため、法量的な検討は困難であるが、外面にヘラミガキが施されている点が特徴である。密に施されていないこと、さらに口径が13.8cmと復元されることから、尾上編年Ⅱ-3期に位置付けられるものと考えられる。

椀B 口径14.00cm～15.6cm、器高4.60cm～5.2cmと、深い椀形品である。径高指数は32.4～32.7、高台径指数⁽³⁾は27.2～37.1である。高台断面は逆台形をなすが、退化傾向にある。内面のヘラミガキは密ではなく、隙間が目立つ。見込みの暗文は、格子状のもの(597)と、螺旋状のもの(117)、平行するもの(344・533・596・615)が認められるが、平行するタイプが最も多く認められる。以上の特徴から、尾上編年Ⅲ-1期に位置付けられる。法量的には、一部Ⅱ-3期まで遡るものもあると考えられるが、外面にヘラミガキが全く認められないと、Ⅲ-1期と判断したものである。

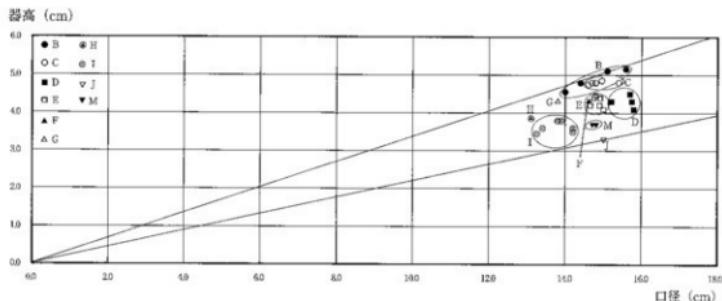


図12 和泉型瓦器椀の法量分布

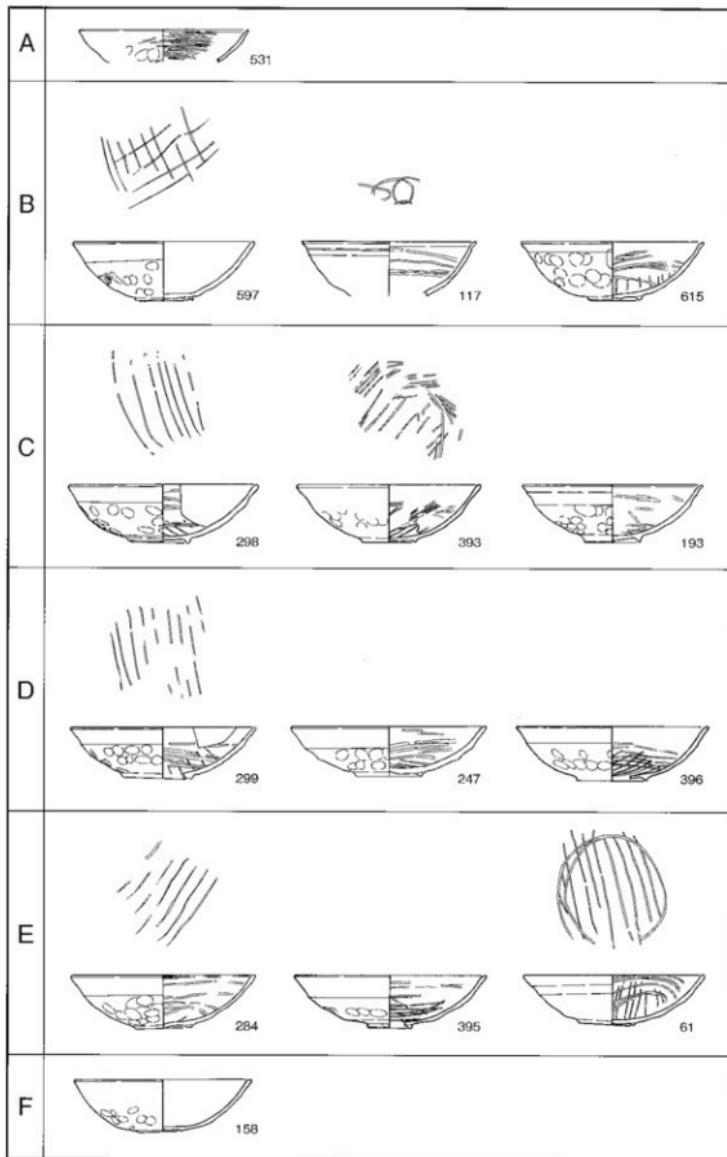


図 13 和泉型瓦器碗の分類(1)

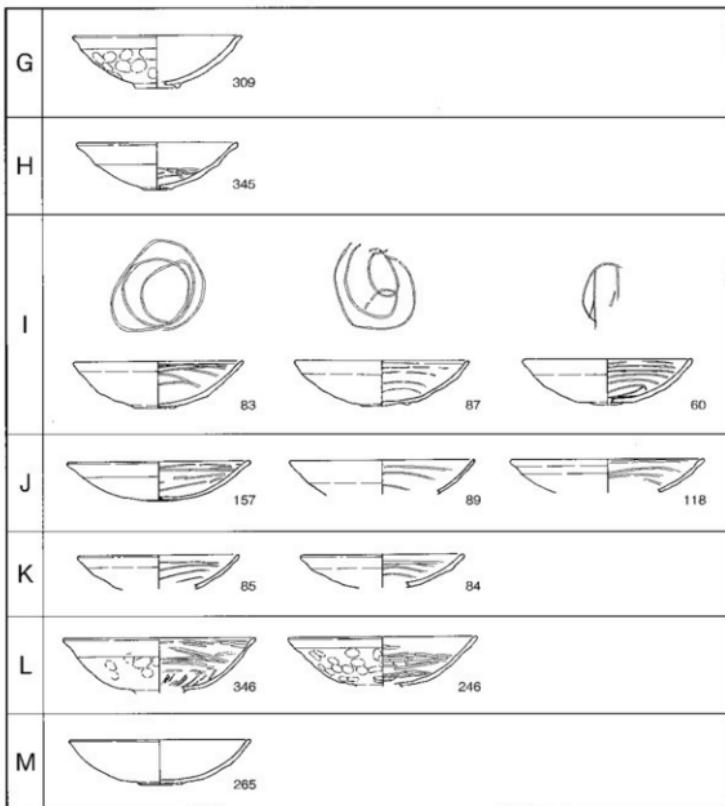


図 14 和泉型瓦器椀の分類(2)

椀C 口径 14.6~15.4 cm、器高 4.8 cm、径高指数 31.2~32.5 と、椀B と法量的な差は認められない。

高台径指数は 30.4~33.8 である。最も大きな相違点は、高台がより退化傾向にあり、断面形が逆三角形を呈することである。193・393・298 の 3 個体が該当する。以上の特徴から、尾上編年のIII-1 期に位置付けられると考えられるが、全体的な傾向として椀B よりは新しく位置付けられる。

椀D 口径 15.2~15.8 cm、器高 4.1~4.5 cm と、椀B 及び椀C と比較して、口径に変化はないが、器高が低いタイプである。径高指数は 25.9~28.7、高台径指数は 33.5~37.5 である。247・299・396 が該当する。内面のミガキは椀B より粗く、見込みの暗文も平行のものに限られる。高台断面は逆三角形であるが、椀B より退化傾向にある。以上の特徴から、尾上編年のIII-2 期に位置付けられる。

椀E 口径 14.3~15.8 cm と、椀D に対して口径に縮小化の傾向が認められる。器高は 4.0~4.5 cm、径高指数は 27.3~31.5、高台径指数は 23.5~31.4 である。高台断面は逆三角形をなすが、蒲鉾形に

近いものも認められる。また、高台高も低くなり、形骸化の傾向にある。内面のミガキも、榤Dより粗くなる傾向にある。以上の特徴から、尾上編年のIII-2期に位置付けられるが、榤Dより新しい傾向にあるものと考えられる。54・61・248・264・284・343・395・534が該当する。

榤F 口径 14.6 cm、器高 4.3 cm、径高指数 29.5 と、榤Eと法量的な差は認められないが、高台が著しく退化する。高台径指数は 23.6 である。158 の 1 個体のみである。ヘラミガキ等は不明である。

榤G 口径 13.80 cm、器高 4.3 cm と、榤Eより口径・器高の縮小化が認められる。径高指数は 31.2、高台径指数は 23.9 である。309 の 1 個体が該当する。高台は依然として断面逆三角形をなすが、口径と比べて高台径の縮小化が認められる。内面のヘラミガキは不明である。以上の特徴から、尾上編年のIII-2期とIV-1期の中間に位置付けられる。ただし、III-3期の特徴とは、法量的な特徴がやや異なる。

榤H 口径 13.1 cm、器高 3.90 cm、径高指数 29.4 と、榤Gより口径・器高ともに縮小する。ただし、榤I ほど器高は縮小しない。最大の特徴は、高台径がわずか 2.2 cm と極端に小さいことである。また、高台自体も、高台高 1 mm 程度とほとんど機能をなさないものである。高台径指数は 16.7 である。345 の 1 個体である。

榤I 口径 13.3~14.2 cm、器高 3.5~3.8 cm、径高指数 24.6~27.5 と、榤Eと比べて、器高・口径がともに退化する。器形が皿形に近くなる。また、高台径も顕著に小さくなり、高台径指数は 15.9~26.1 である。高台断面は、紐状のものを貼り付けた程度のもので、高台としての機能は失われている。底部の中心から大きくなされたものも認められる。内面のミガキも、数条の圓錐状のものになり、見込みの暗文もより簡略化された螺旋状のものに限られる。以上の特徴から、尾上編年のIV-1期に位置付けられる。87 が該当する。

榤J 口径 14.0~16.0 cm、器高 3.3 cm と、榤I と比べて器高がより低下する。径高指数は 22、高台径指数は 13.3 である。また、高台の退化が顕著で、その高さ数 mm とその機能を全くなさない。内面には数条のヘラミガキが施される程度で、見込みには螺旋状の暗文がわずかに認められる。以上の特徴から、尾上編年のIV-2期に位置付けられる。157 の 1 個体である。

榤K 口径 13.2 cm と、榤J より口径が縮小したもの。底部まで残存するものは認められないが、器高も大きく縮小するものと考えられる。また、高台が消滅している可能性が高い。

榤L 底部から体部にかけての部位が大きく張り、榤形より杯形に近い形態のもの。底部まで残存もしくは復元できるものは認められないが、比較的深い榤形を呈するものである。

榤M 口径に対して高台径が極端に小さいもの。比較的深い榤形を呈するが、高台が著しく退化している。265 が該当する。

(2) 皿

小皿 a ~ 小皿 i の 9 タイプに細分できる(図 15)。いずれも、外面にヘラミガキは施されていない。小皿 a 平底の底部から口縁部が斜方向に立ち上がり、ヨコナデ調整により仕上げられるタイプである。底部から口縁部にかけては緩やかである。器高 1.65 cm 以上と、口径に対して器高が高い点が特徴である。また、器壁が全体的に薄く仕上げられている。115 が該当する。

小皿 b 基本的な形態は a と同じである。ただし、全体的に器壁が厚く、口縁部の立ち上がりが短い点が異なる。456・342 が該当する。

小皿 c 基本的な形態は a に類似する。全体的に器壁が厚く仕上げられている点が大きな相違点である。また、器高が 1.6 cm 以下と、口径に対して器高が低くなっている。339～341 が該当する。内面にヘラミガキが施されている。

小皿 d 底部と口縁部の境が不明瞭なタイプである。最終的に、口縁部のみがヨコナデ調整により仕上げられている。249・585・598 が該当する。いずれも内面にヘラミガキが施されている。SD01 で碗 B・椀 E と、SD110 で碗 D と共に伴している。

小皿 e 小皿 d 同様、底部と口縁部の境が不明瞭なタイプである。小皿 d と異なり、口縁部のヨコナデの範囲がわずかで、しかも弱い特徴が認められる。59・75・116 が該当する。口径・器高ともに小型で、内面にヘラミガキは認められない。59 は碗 E と、75 は碗 I と共に伴している。

小皿 f 小皿 d・小皿 e 同様、底部と体部の境が不明瞭なタイプである。小皿 e と大きく異なる点は、口縁部に対するヨコナデがほとんど施されない点である。381 が該当する。内面にはヘラミガキが施されている。

小皿 g 底部と口縁部・体部の境が不明瞭で、口縁部を強いヨコナデ調整により仕上げる点を特徴とする。このため、口縁端部は薄く仕上げられている。また、体部外面の指頭痕が顕著である。77・79・113 の 3 個体が該当する。内面にヘラミガキは認められない。P178 で碗 I と共に伴している。

小皿 h 体部と口縁部の境が明瞭で、口縁部が強いヨコナデ調整により仕上げられている。また、底部から体部にかけての外面は、指頭痕が顕著である。74・78・114・599 が該当する。599 のみ、内面にヘラミガキが施されている。P178 で碗 I と共に伴している。

小皿 i 半底に対して口縁部が短く立ち上がるタイプである。ヨコナデ調整が強く施され、薄く仕上げられている。口径に対して器高が著しく低いタイプである。80 と 81 が該当する。内面にはヘラミガキは施されていない。P178 で碗 I と小皿 h・小皿 i と共に伴している。

小皿 j 口縁部をわずかに摘み上げる程度の、非常に浅いタイプである。磨滅のため、ヘラミガキ磨きの有無は確認できない。250 の 1 個体が該当する。

小皿 k 基本的形態は小皿 a と同じである。小皿 a より器壁が全体的に厚く仕上げられている。76・126・537・600 が該当する。内面にはヘラミガキが施されている。P178 で碗 I と小皿 h・小皿 i・小皿 j と共に伴している。

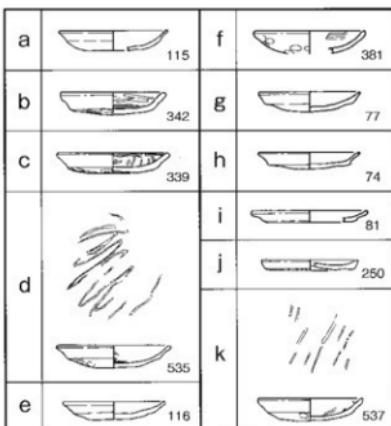


図 15 瓦器皿の分類

(3) 鉢

147 の 1 個体のみ出土している。鉢については、出土例の少ない器種で、編年観は確立していない。加えて、共伴する瓦器椀は認められない。時期を検討する材料として、①外面にヘラミガキが施されている、②高台が比較的しっかりとしている、の 2 点を指摘することができる。このような鉢の類例については多くは認められない。数少ない類例として、玉櫛遺跡（大阪府茨木市）¹⁴⁾ 例を指摘できる。当遺跡資料も、内外面にヘラミガキを施されているが、共伴する瓦器椀の外面にはヘラミガキは施されておらず、13 世紀代に位置付けられている。

以上から、147 についても、古く位置付けるのではなく、12 世紀～13 世紀前半に位置付けられるものと考えたい。

(4) 小結

以上の検討結果から、今回報告する瓦器椀については、I～X の 10 段階にその変化傾向をたどることができる（図 16・17）。また、瓦器椀との共伴例をもとに、小皿と鉢の位置付けを行っている。

I 期は、楠葉型瓦器椀の 348 のみで、対応する和泉型瓦器椀は認められない。柄本編年の III-2 期に位置付けられる。なお、当該期以後、楠葉型瓦器椀は認められない。

II 期は、和泉型瓦器椀が出現する時期で、柄 A が該当する。外面にヘラミガキを施す唯一の例である。尾上編年の II-3 期に位置付けられる。

III 期は、柄 B が該当する。法量的には尾上編年の II-3 期に位置付けられるものと考えられる。ただし、外面にヘラミガキが認められないことから、II 期より新しい傾向にあるものとして当該期を設定した。II 期とは明確な時期差はないものと考えられる。ただし、高台の特徴はやや新しい傾向にある。この他、小皿 d と鉢も当該期に位置付けられる。

IV 期は、椀 C が該当する。尾上編年の III-1 期に位置付けられる。

V 期は、椀 D が該当する。尾上編年の III-2 期に位置付けられる。このほか、高台まで残存していないため、法量的な検討ができなかったが、346 も当該期に位置付けられるものと考えられる。この他、小皿 d も当該期に認められる。

VI 期は、椀 E と椀 F が該当する。V 期同様、尾上編年の III-2 期に位置付けられる。時期的には顕著な差は認められないが、法量等の特徴から、V 期より新しい傾向にあるものと考えられる。この他、小皿 e も当該期に位置付けられる。

VII 期は、椀 G と椀 H が該当する。椀 G については、口径・高台径とともに縮小傾向にあることから、VI 期よりも新しい傾向にあるものと考え、尾上編年の III-3 期に位置付けたものである。この他、椀 H については、法量的に椀 G より新しい傾向にあるが、続く VIII 期の椀 I と同時期に位置付けるのに対しても抵抗がある。このため、当該期に位置付けたものである。

VIII 期は、椀 I と椀 M が該当する。椀 J については、尾上編年の IV-1 期に位置付けられるものと考えられる。椀 M については、径高指数からみると椀 I と同傾向もしくは新しい傾向にあるが、口径が 14.7 cm と大きいことから、当該期に位置付けたものである。この他、小皿 g・小皿 k・小皿 h・小皿 i も当該期に位置付けられる。

	楠葉型椀	和泉型椀
I		
II		
III		
IV		
V		
VI		
VII		
VIII		
IX		
X		

図 16 瓦器の変遷(1)

小皿	鉢			
		I		
		II		
		III		
		IV		
		V		
		VI		
		VII		
				VIII
		IX		
		X		

図17 瓦器の変遷(2)

IX期は、掩Jが該当する。尾上編年のIV－2期に位置付けられるものと考えられる。

X期は、掩Kが該当する。底部まで残存するものがないため、明確な位置付けは困難であるが、尾上編年のIV－3期に位置付けられるものと考えられる。

ところで、尾上編年に示された年代については、その後、森島康雄により、再検討が行われている⁽⁵⁾。これは、大和型瓦器碗との共伴資料をもとに、各段階の年代を再検討したものである。

本項では、この年代に関して云々することは困難である。そこで、当地域に一般的で、かつ編年およびその年代観がほぼ確立している東播系須恵器との共伴資料を検討し、瓦器の年代を再検討してみたい。ただし、今回報告する資料の中には、東播系須恵器との良好な一括資料は認められない。そこで、当該地域における他の遺跡での一括資料をもとに検討を加えたい。

東播系須恵器との良好な共伴資料としては、松野遺跡SK01（第19次調査）上層出土資料⁽⁶⁾、垂水・日向遺跡SK04出土資料⁽⁷⁾、二葉町遺跡SE312出土資料⁽⁸⁾で、尾上編年III－1期の瓦器碗と12末～13世紀初頭の須恵器碗が共伴している。大開遺跡第4次調査SE02出土資料⁽⁹⁾では、尾上編年II－2期～II－3期に位置付けられる瓦器碗が、12世紀後半の須恵器碗と共伴している。また、戎町遺跡第24次調査S X06出土資料⁽¹⁰⁾においては、尾上編年IV期前半の瓦器碗が14世紀後半に位置付けられる東播系捏鉢と共に伴っている。これら例は、尾上氏が示された年代観に近いものである。

以上から、I期が12世紀中頃、II期とIII期が12世紀中葉～後葉に、IV期が12世紀末～13世紀初頭に、V期とVI期が13世紀中葉に、VII期が13世紀後半に、VIII期が14世紀前半に、IX期とX期が14世紀中葉以降に、それぞれ位置付けられる。

〔註〕

- (1) 橋本久和 1980「高槻における中世土器の編年」『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
- (2) 尾上 実 1983「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古希記念古文化論叢』藤澤一夫先生古希記念論集刊行会
- (3) 高台径指數=高台径+口徑×100
- (4) 川瀬貴子 1998『玉造遺跡－大阪府當茨木玉櫛住宅建て替えに伴う発掘調査報告書－』財団法人 大阪府文化財調査研究センター
- (5) 森島康雄 1992『畿内産瓦器碗の併行關係と曆年代』『大和の中世土器II』大和古中近研究会
- (6) 関野 豊 2002『松野遺跡 第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- (7) 谷 正俊 1992『垂水・日向遺跡 第1・3・4次調査』神戸市教育委員会・財団法人 神戸市スポーツ教育公社
- (8) 川上厚志 2001『二葉町遺跡発掘調査報告書第3・5・7・8・9・12次調査』神戸市教育委員会
- (9) 富山直人 1995『大開遺跡 第4次調査』『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
富山直人 2000『祇園遺跡 第5次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- (10) 富山直人 1999『戎町遺跡 第24次調査』『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
富山直人 2000『祇園遺跡 第5次発掘調査報告書』神戸市教育委員会

第3節 その他の土器・陶磁器について

(1) はじめに

楠・荒田町遺跡の調査を通じて、中世の土器・陶磁器については、種別では、土師器、瓦器、須恵器、無釉陶器、施釉陶器、白磁、青白磁、青磁などの遺物が出土している。

しかし、量的に見ると、他の県下の中世遺跡と異なり、京都系を主体とする土師器皿が最も多く、それに次いで、瓦器碗が比較的まとまって出土しており、県下の中世遺跡、特に中世前期の遺跡から大量に出土する東播系を主体とする中世須恵器の出土は比較的小ない。

また、中世後期の遺跡から普遍的に出土する備前焼を中心とする無釉の焼縮陶器の出土も非常に少ない。さらに、白磁、青磁、青白磁などの貿易陶磁も、1998年度調査区、2003年度調査区を中心に少量出土しているものの、その量は他の県下の中世遺跡と比較しても、決して多いとは言えない。

今回の報告では、最も出土量の多い土師器皿と瓦器碗・皿については、本章の第1節・第2節でそれぞれ検討を加えた。

ここでは、土師器・瓦器以外の中世の土器・陶磁器について、中世須恵器、無釉陶器、施釉陶器、貿易陶磁の順に、その出土傾向について、若干触れておきたい。

(2) 土器・陶磁器の出土傾向

中世須恵器

中世須恵器には、器種別では碗、皿、鉢、壺、壺があり、中でも碗の出土量が最も多く、鉢がそれに次いで比較的多く出土している。皿、壺、壺の出土は極少量である。

碗

碗はその残存部分から、底部から口縁部まで残るもの（28・29・30・31・32・35・95・119・272・357）、体部から口縁部まで残るもの（33・34・36・38・153・191・195・198・312・320・358・359・397・623）、底部のみ残るもの（7・48・49・50・51・94・149・196・213・538・541・602・617・621）、口縁部のみ残るもの（6・16・39・40・41・42・43・44・45・46・47・93・137・616）に区分される。

底部から口縁部までが残存し、全体の器形がわかるものは、いずれも底部の形態は平底である。この内、28・29・30・31・32・35・95・119は森田編年のII-1段階相当と考えられ、12世紀中葉～後半代の時期が与えられる。272・357はII-2段階相当で、12世紀末葉～13世紀初頭の時期が考えられる。

底部のみ残存するものは、平高台が明瞭なもの（48・50・213・617）、平高台がやや不明瞭なもの（7・149）、平底のもの（49・51・94・538・602・621）とに分類される。48・50・213・617はI-1期相当で、11世紀後半代に、7・149はI-2段階相当で11世紀末～12世紀初頭にそれぞれ比定される。

鉢

鉢はその残存部分から、底部から口縁部まで残るもの（323・399）、体部から口縁部まで残るもの（22・127・179・201・220・252・271・301・313・314・359・360・603・604・606・620）、底部から体部まで残るもの（253・605）、底部のみ残るもの（14・52・150・539・540・542）、口縁部のみ残るもの（140）に区分される。

底部から口縁部まで残るもの内、323はII-2段階相当で12世紀末～13世紀初頭に、399はIII-1段階相当で13世紀前半～後半に比定される。また、体部から口縁部まで残るものは、口縁部の形態から、220・252・301・360がI-1段階相当で、11世紀後半に、22・271・359がI-2段階相当で11世紀末～12世紀前半に、323・127・179・201・313・314・323・603・604・606がII-2段階相当で12世紀末～13世紀初頭に、399がIII段階相当で13世紀前半～後半にそれぞれ比定される。

甕

甕は全体が残るものは無い。体部から口縁部まで残るもの（457・458・472・544）、口縁部のみ残るもの（398・459・543・607・608）とがある。

皿

皿はいずれも底部から口縁部まで残存し、体部が内側気味に延びるもの（251）と直線的に延びるもの（311・354）とがある。いずれも東播系須恵器で12世紀後半～13世紀前半の所産であろう。

壺

壺はいずれも破片で全体の器形は復元できない。178は口縁部、266は底部から体部の破片で、いずれも東播系の製品で12世紀後半に比定できる。361は時期がやや遅り、10世紀後半から11世紀代の製品と考えられる。

無釉陶器

桶・荒田町遺跡から出土した無釉陶器はごく少量である。種別では播鉢、鉢、甕、壺がある。

播鉢

播鉢はいずれも備前焼でIII期相当のもの（254・401）とIV期相当のもの（267・400・402・403）とがある。254・401は14世紀代に、267・400・402・403は15世紀代にそれぞれ比定される。

鉢

鉢には備前焼で口縁部の形態からIII期相当と考えられるもの（255）と丹波焼の可能性が高い口縁部片（190）がある。

甕

甕もいずれも細片である。丹波焼（273）と胴部にスタンプで施文する常滑焼（302・303）がある。いずれも、13世紀代の所産と考えられる。

施釉陶器

中世に属すると考えられる施釉陶器は16世紀代の瀬戸・美濃系灰釉皿（304）と華南三彩と考えら

れる綠釉盤（256）があるのみで、極めて出土量が乏しい。

貿易陶磁

白磁

白磁には碗、皿、壺がある。

碗

碗は完形のものが多く、いずれも破片である。残存部分から、底部のみ残るもの（120・131・199・214・224・269・365・404）、体部から口縁部まで残るもの（258・268・363・366・547・548・618）、底部から口縁部まで残るもの（362）、口縁部のみ残るもの（367・609・610・624・625）に区分される。これらの碗はその形態から、横田・森田分類の白磁碗II類（367・618）、IV類（214・258・268・269・362・363・365・609・624・625）、V類（120・366）、VII類（199・404）に分類される。

皿

皿は横田・森田分類白磁皿IV-1類（610）と華南産と考えられる364の2点が出土している。

青白磁

青白磁は碗と合子が出土している。

碗

549は器壁が非常に薄く、内面にヘラ描きで草花文を施文する。景德鎮窯産で12世紀代の所産であろう。

合子

合子は2点出土している。216は外面にヘラ描きの花卉文を施文する。12世紀代の景德鎮窯産の製品と考えられる。306は外面に型押しで花卉文を施文するもので、華南産の13世紀代の所産であろう。

青磁

青磁には碗と皿がある。

碗

いずれも破片で体部から口縁部まで残るもの（161・226・406）、底部のみ残るもの（183・405）がある。いずれも龍泉窯系青磁と考えられ、13世紀代の鍋連卉文碗（406）などが含まれる。

皿

皿は4点出土しているが、そのうち3点（369・550・612）は同安窯系青磁である。

（3）小結

以上見てきたように、1984年度から2005年度まで、継続して調査が行われてきた楠・荒田町遺跡全体を通して、最も多く出土した土師器皿は、11世紀後半に比定される非燒土師器I類から14世紀代に比定されるVII類までの皿が含まれるが、その主体をなしているのは、12世紀中葉から13世

紀前半代に比定されるII類からVI類の皿である。

2003年度調査区のSK01(2003061)・SD01(2003172)では、その全てが12世紀中葉から13世紀前半代までに時期比定される京都系の皿で占められている。

また、土師器皿に次いで、まとまって出土が見られる瓦器碗では、樟葉型が1点含まれる以外はほとんどが和泉型で占められ、所属時期は12世紀中葉～14世紀後葉にまで及んでいる。

中でも碗B・C・D・E類の出土が比較的多く見られ、12世紀中葉から13世紀中葉までに位置付けられるものが主体となっている。出土遺構別では03年度調査区のSD01では、12世紀中葉～後葉に位置付けられる碗A・B類が主体となって出土しており、共伴する土師器皿の年代観と大きな齟齬は見られない。

中世須恵器に関しては、碗が最も多く、鉢がそれに次ぎ、皿、甕、壺は極少量出土しているに過ぎない。

碗は森田編年のII段階相当すなわち12世紀中葉～13世紀初頭に比定されるものが最も多く出土している。また、底部のみの残存ではあるが、I段階すなわち11世紀後半～12世紀初頭に比定されるものも一定量含まれている。

鉢も碗同様、II期段階相当のものが最も多く、それに次いで、I段階相当のものが一定量含まれる。13世紀代以降に比定されるIII期段階のものは極少量見られるに過ぎない。

貿易陶磁は、種別で見ると最も多く出土しているのは、白磁である。白磁は器種別では碗が最も多い。さらに碗はIV類碗が10点、V類が2点、VII類が2点、II類が2点でIV類が最も多い。皿は極めて少なく、1点出土しているのみである。

青白磁には、合子と碗がある。碗は、器壁が非常に薄く、内面にヘラ描きの草花文を施文するもので、景德鎮窯産の優品である。

青磁は白磁に比べて、点数は少なく、龍泉窯系の鎬蓮弁文碗の他、同安窯系の皿が3点含まれている。

青磁に比べ、白磁の割合が高いこと、また、青磁も同安窯系の製品が目立つところから、総じて、碗・荒田町遺跡出土の貿易陶磁は12世紀代～13世紀初頭の組成を表している。

最も出土量の多い土師器、瓦器、比較的の出土量の多い須恵器碗・鉢、さらに出土量は少ないものの、中世遺跡から普遍的に出土する貿易陶磁の出土傾向から、今回報告する調査地点では、12世紀前半代から土器・陶磁器が出現し、12世紀中葉から後半代にかけて最盛期を迎え、13世紀前半以降、急速に減少するものの、その出土は14世紀代にまで継続することが窺がわれる。

さらに、14世紀以降も、土製煮炊具、備前焼掘鉢・瀬戸・美濃系灰釉皿などが出土しており、16世紀代にまで土器・陶磁器の出土は継続されるが、15世紀以降の遺物の出土は極少量で散発的である。

最後に、土器・陶磁器組成の変遷からこの調査地点の土地利用の変遷について若干触れて、まとめに変えたい。

この地点は從来から、平氏が遷都を強行したされるいわゆる福原京の推定地に擬せられている。また、遷都以前から平氏一門の別邸が置かれ、京都との関係が密接であったとされている。

このことは、周辺の中世遺跡の土器組成とは異なり、出土遺物の主体が京都系の土師器皿で占めら

れでいることからも首肯できる。

また、先に述べたように、遅くとも 12 世紀前半代には、土師器皿、貿易陶磁、須恵器碗・鉢などを中心に土器・陶磁器が出現し、平氏一門が保元・平治の乱を契機に勢力を拡大し、最盛期を迎える 12 世紀中葉～後半にかけて、土器・陶磁器の出土量も増加し、平氏一門が滅亡する 12 世紀末以降急速に減少に転じることは、土器・陶磁器の消長と平氏一門の盛衰とが大きくは一致しており、この地が平氏一門に関係する遺跡であることを強く示唆している。

平氏一門滅亡後の 13 世紀前半以降、14 世紀代にかけても、僅かではあるが土器・陶磁器の使用が継続されている点については、南に位置する兵庫津、あるいは湊川宿と関連が考えられるものの、宿の存在を窺がわせる程の遺構・遺物は認められなかった。

引用・参考文献

1. 森田 稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
2. 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器についてー形式分類と編年を中心としてー」『九州歴史資料館論集』4 九州歴史資料館

第12章　まとめと考察

第1節　調査および保存協議の経緯

1　調査に至る経過

神戸大学は、医学部附属病院の旧第一病棟の跡地に、立体駐車場の建設を計画した。同地は周知の埋蔵文化財包蔵地「楠・荒田町遺跡」の範囲内で、昭和56・57年に神戸大学の多澤敏樹教授（当時）の発掘調査によって、平安時代の遺構・遺物が見つかった地点も含まれている。ただし計画地のうち、旧第一病棟の範囲は、建設の際に地下深くまで搅乱されているため、それ以外の駐車場部分の2箇所について、平成14年度に確認調査を実施した（遺跡調査番号2002094・2002227）。

その結果、いずれの地点においても遺構面が遺存しており、遺構の存在が確認されたため、平成15年度に本発掘調査を実施することとなった（依頼文書平成15年4月8日付 神大施第6号）。

2　調査の実施

本発掘調査の対象は、旧回転コバルト施設跡地（I区）と、旧駐車場（II区）の2箇所に分かれており、工事の工程上、既存建物の解体・撤去と併行して進める必要があった。

まずI区については、旧回転コバルト施設の撤去後、旧第一病棟の解体工事と併行して、8月4日より調査に着手した（遺跡調査番号2003061）。その結果、平安時代末頃の土坑や大型掘立柱建物等が検出されたため、大学当局と保存の可能性について折衝を始めるとともに、兵庫県文化財保護審議委員・文化庁調査官の視察を受けた。9月10日には保存の可能性を前提として、砂を入れて埋め戻し、9月18日に記者発表を行った。

次いでII区については、旧第一病棟の解体後、10月20日より調査に着手した（遺跡調査番号2003172）。その結果、以前に神戸大学の多澤教授が検出した、平行する2本の塹の延長を検出した。

これらの遺構の年代が12世紀後半に属すると考えられたため、いわゆる福原京に関連する施設の発見として、関係機関の注目を集め、調査中から研究者の視察、報道機関の取材が相次いだ。調査成果については12月11日に記者発表し、12月14日に開催した現地説明会では、500名の参加者があった。12月16日には、I区同様、砂を入れて埋め戻した。

3　遺構の評価

I区の大型掘立柱建物については、東北芸術工科大学の宮本長二郎教授の見解を受け、武家館の構造の可能性が高いことを指摘した。

II区の2本の平行する塹については、いずれも12世紀の後半代に機能しており、その規模・計画性から見て、福原京など平家に関わる邸宅群に伴う施設の可能性が高いと考えられた。

4 保存への動き

12月から1月にかけて、神戸大学の学内から今回見つかった遺構の保存に対する動きがあり、神戸史学会など関西の6つの歴史学会からも、神戸大学などに対して保存要望書が提出された。さらに1月10日には、歴史資料ネットワークが主催する緊急シンポジウム「平家と福原京の時代」が開催された。

上記の動向と併行して県教育委員会は、大学当局と保存についての折衝を続けていた。ただし今回の立体駐車場建設がPFI事業（公共施設の建設・維持管理・運営を、民間の資金・ノウハウを活用して行う事業）であるため、具体的な協議は事業者の選定後に持ち越した。

12月末に事業者が前田建設工業に決まり、各学会からの保存要望も受けて、1月半ばから2月にかけて、大学当局と県教育委員会に文化庁も加えた協議を行い、大学側から、埋め戻した遺構を損傷しない工法による、変更設計案が提示された。県教育委員会は2月6日付けで楠・荒田町遺跡の取扱いについての協議文書（教理文第1486号）を神戸大学長宛に送付し、それに対し大学側から、変更設計の最終案の回答があった（平成16年2月24日付 神大施第130号）。県教育委員会は文化財保護審議会での報告を経て、変更設計案を承認する旨を回答した（平成16年2月26日付 教理文第1619号）。同日には、大学と文化財室同席で、遺跡保存に関する記者発表を行った。

5 保存後の措置

5月12日には、座標データを元に、保存箇所と施工箇所の位置関係について、施工前の現地立会を行った。さらに6月16日～21日にかけて、該当箇所の施工に立ち会い、保存箇所に掘削の影響が及ぼないことを確認した。

一方、II区で検出した2本の塹については、西側に延長部の存在が予想されたため、6月14日に現地でレーダー探査を行った。さらに11月15日～22日には、国庫補助事業による確認調査を実施したが、塹に関する新たなデータは得られなかった。

平成17年1月28日には、駐車場の完成を記念して、神戸大学高橋昌明教授の記念講演と、駐車場に設置されることとなった遺跡説明版の除幕式があった。同時に、2月10日までの会期で、医学部共通棟1階において、楠・荒田町遺跡出土品の記念展示会を行った。



シンポジウム「平家と福原京の時代」

表11 神戸大学医学部附属病院立体駐車場整備事業に伴う櫻・荒田由道跡調査の経過

年月日	件名	内 容	備考
昭和56年11月～57年	附属病院改築工事に先立つ発掘調査	神戸大学多摩歴史教員（当時）調査 「遺の宝」大規模な埋立付属物を検出	神戸大学学報No.315-338-340
平成28～12年	附属病院内発掘調査	社穴を検出、埋藏文化財ありの可能性 発掘調査報告書（平成3.3.26）	平成14年6月12日付 教職文第394号
平成14年6月4日	日本古墳調査（遺跡調査番号2002094）	社穴を検出、埋藏文化財ありの可能性	平成15年2月5日付 教職文第142号
平成14年12月19日	文化財保護法による通達（神戸大学令）	発掘調査報告書（平成3.3.26）	
平成15年1月28日	I区の施設調査（施設調査番号20020227）	社穴を検出、埋藏文化財ありの可能性	平成15年2月5日付 教職文第142号
平成16年8月4日～9月30日	I区の本免施設（施設調査番号2004061）	式庭園の構造と考えられる人型立柱付属物等を検出	
8月21日	大学側と協議	保存の可能性について行動	
9月10日	大学側と協議	連絡の配慮を申し入れ	
9月5日	歴文化財保護審議会石野・閑間・和田委員復席		
9月11日	文化財復旧調査監督会視察		
9月18日	記者発表		既存埋蔵物解体工事中のため現地説明なし
9月25日	大学側と協議	既存埋蔵物事業が円行事業であるため、保存は困難と の説明を受けた	
9月29日	懇め廻し	保存の可能性と判断に砂を入れ置換保証	
平成15年10月10日	大学側と協議	（大学）手業作業の運営に沿って事業を進め、その中で既存の部分については既存とする方針で了承でき た （文部省）豆籠用料も見て置いて現状踏まえ、了承はできないと回答	
平成15年10月29日～11月17日	卫区の本免施設（施設調査番号2003172）	多角形挖削が調査した。壁壇の延長を検出	平成15年6月8日付 神大施第6号
11月10日	NHK神戸放送局直前	福井京他源のアーチス遺産	
11月25日	利川郡三洋大学大学院名譽教授授賞		
11月26日	高橋利明神戸大学教授他2名祝賀	慶應保存を申し入れる意向の發言	
12月1日	サンマTV取材	東広島市報	12月13日放映
12月2日	高橋利明神戸大学教授来訪	高橋教授が大学園と御馳験をしたことについて説明を受 けける	12月8日に学長と保存要望の交渉
12月3日	文化財復旧と協議		
12月4日	多摩衛生研究所人手不足教授探偵	保存調査についての経過説明	
12月5日	大学側と協議	学会からの保存要望書を受けて協調 事業者意見提出。人手側に御詫びを求める	1月業者満意、監修者連絡、4月契約、詳細設計、6 月着工。
12月8日	兵庫県・流通科学大学教授・鷹野俊夫同志社大学 助教授来訪		
12月10日	元木泰司京都大学助教授他10名祝賀		
12月11日	記者発表		
12月14日	現場開通会		参加者500名
12月15日	花尾雅一・原氏復讐		
12月16日	復め原氏	保存の可能性と判断に砂を入れ置換保証	
平成15年12月24日	平野の更新をする会3名（玉川・青山・林）集会	遺跡の保存について	
平成15年12月末	IP1事業者決定	前田種雄工芸グループを優先交渉権者に選定	1月中にも協定書締結
平成16年1月18日	保存要望書	大阪府歴史科協議会名で、神戸大学に保存を要望	平成16年1月14日に大学からコピーをもらう
平成16年1月20日	保存要望書	日本史研究会名で、神戸大学に保存を要望	平成16年1月14日に大学からコピーをもらう
平成16年1月25日	保存要望書	京都府民歴史保存委員会名で、神戸大学に保存を要 望	平成16年1月15日にオーナーへ手渡す
平成15年12月27日	保存要望書	神戸史研究会名で、神戸大学に保存を要望	平成16年1月14日に大学からコピーをもらう
平成16年1月7日	保存要望書	大阪歴史学者会名で、次期史学者より8時間間に保存を 要望	平成16年1月8日受領
平成16年1月10日	豊島シンドウ「平家と播磨原の時代」	歴史教育ネットワーク主催（兵・神戸市教委後援）	兵・神戸大・瀬戸川記念館交説会
平成16年1月14日	人手不足と協議	事業者決定、保存調査監修部を受けて品論	文化財復旧請負監修同窓会
平成16年1月21日	NHRC「その歴史が動いた」	「平清益・衛王帝の夢・平家没後調生の生き」	サンマTVの復旧映像を使用
平成16年1月23日	大学側が文化庁に接觸	神戸大学建設部長が文化庁・瀬戸川講堂官と面談	変更設計案の提示
平成16年1月30日	保存要望書	西宮市文化財保存協議会名で、神戸大学に保存を要望	平成16年2月5日に大学からコピーをもらう
平成16年2月6日	大学側と協議	変更設計案の提示	文化財復旧請負監修同窓会
平成16年2月16日	文化財復旧審議会	横・北町遺跡の保存協議報告書	変更設計案の説明
平成16年2月25日	横・北町遺跡の意見取り（協議）	保存監査の文書提出	平成16年2月6日付 教職文第148号
平成16年2月26日	遺跡保存が記者発表	学芸補佐・建設課長・高橋教授出席	井守千尋調査専門員・文化財審査会下主査出席
平成16年3月11日	横・北町遺跡の意見取り（回答）	回答文書の受領	平成16年2月6日付 神大施第130号
平成16年3月18日	横・北町遺跡の保存（回答）	回答文書の送付	平成16年2月28日付 教職文第169号
平成16年5月12日	保存実施と施工箇所の位置関係確認	機械データをもとに、両者の位置関係を施工前に確認	
平成16年6月14日	定期検査	保存箇所の西延長部について、レーダー探査	西11号専用門口・桜小路電動駆動が設置実施
平成16年6月16日～6月21日	保存箇所と施工箇所の位置関係確認	施工の順序を立ち合う	保存箇所に影響が及ばないことを確認
平成16年11月16日～11月22日	保存箇所と西側の西延長部（遺跡調査番号2004133）	東教寺の因幡城跡事業として実施	平成16年1月26日付 教職文第308号
平成17年1月28日～2月10日	紀念展示会・遺跡説明板の設置	充満枠1階で実施	説明版除幕式、高橋教授記念講演

第2節 遺構・遺物について

今回報告する神戸大学医学部附属病院構内で検出された遺構・遺物について、以下に簡単に時代ごとにまとめ、最後に平安時代末前後の時期の遺構・遺物について概略する。

1 各時期の概略

前回の報告（兵庫県 1997）では、**縄紋時代**早期にまで遡る石器が出土しているが、今回は確認できなかった。数点出土しているサヌカイトも弥生時代のものであろう。岩屋産の礫も見られる。この他、緑色片岩が数点出土しており、石棒状のものは縄紋時代に遡る可能性がある。

弥生時代の遺構は前回も含めて確認されていない。わずかに土器片などが出土しているにすぎない。

古墳時代になると、2003061 調査区で後期の竪穴住居が検出され、その他の地区でもわずかではあるが遺物が出土している。傾向としては北半部に集中している。

奈良時代の遺物も今回少量ながら出土しているが、前回の報告書（兵庫県 1997）に掲載された 920172 調査区の SK02 のような奈良時代前半の土器を多量に出土する遺構は存在しなかった。ただし、この奈良時代から続く平安時代前半にかけての時期に、この周辺に何らかの施設が存在したことの意義は大きく、さらに続く時期の遺構群を考える上でも重要となる。^[注1]

平安時代の前半から中頃になると土師器・瓦器・須恵器や縄釉陶器などの遺物がいくつかの地区から出土しているが、やはり該当する時期の遺構は確認できなかった。

出土遺物の傾向では、12世紀中葉から13世紀初頭にかけての遺物が最も多く、13世紀後半に入ると少なくなる。但し、土師器皿や瓦器、石鍋などは14世紀まで出土しており、土師器煮炊具や無釉陶器・施釉陶器は16世紀後半まで出土している。

17世紀中葉以降の土器も出土しており、石組みを伴う溝や井戸などはこの時期のものである。

近代以降の遺物も一部取り上げた。明治時代の陸軍鎮台の時期を示す遺物は確認できなかつたが、礎盤を敷いた柱穴の掘立柱建物がこの時期のものと思われる。レンガ積の建物などは検出されていない。更に県立病院時代の食器類が出土している。タイル・ガラスや木製の柱座などもこの時期のものであろう。

2 平安時代末頃について

この遺跡で一番問題となる平家の福原別業の時代から福原遷都そして平家滅亡の時期については、出土遺物、特に考察で触れた土師器・瓦器を中心に12世紀末から13世紀初頭の時期のものを該当時期として捉え、遺構ごとに触れてみる。この時代、今回報告する地点は平清盛の異母弟、平賴盛邸のあした（荒田）の山荘があった場所と推定されているが、今回の調査ではそれを決定できる資料は見出せなかつた。しかしながら当時の屋敷の構造や貴族の生活の一端をうかがわせる建物跡や溝などの遺構や遺物が見つかっている。

掘立柱建物について

神戸大学医学部附属病院内の調査では、多瀬俊樹氏の1981・1982年度の調査以来、遺跡調査番号 840020、920172、980190、990132、2003061、2003172 の調査で掘立柱建物が検出された。

この中で、2003061 調査区の建物は前述の通り、新しい時期のものであることが判明した。また、990132・2003172 調査区で検出された建物は一部分のみの検出であり、柱穴の規模は比較的小さい。2003172 調査区の北側では多くの小規模な柱穴が検出され、多淵氏が鉢立てや、帳舎等と報告されている。また、2003061 調査区の南西では大型の建物も検出されている。(多淵 1984)

前回報告の 920172 調査区では複数棟の縦柱建物が復原された。柱穴は円形の掘り方ではあるが、直径約 50cm の規模をもつものである。平安時代～鎌倉時代の遺構として報告されているが、小結では第 5 期 鎌倉・室町時代(13世紀末～14世紀)のものとされている。(兵庫県 1997) 建物の主軸方向には差があるが、最も大きい SB07 では座標北から約 6° 西へ振っており、他の地区の建物とは異なる。

昭和 58 年度の調査(遺跡調査番号 840020)で検出された SB03 は一辺 0.6m 以上の隅丸方形の大型掘方をもつ柱穴で構成されており、時期的にも 12 世紀末から 13 世紀初頭のものである。座標北から約 16° 西に振れる主軸方位をもつ。この調査区の東隣の 850055 や 960416 調査区では地形的に高くなっているため、削平が著しかった。この周辺に建物群のひとつの中核があった可能性が考えられる。

平成 11 年度の調査(遺跡調査番号 980190)で検出された SB10～12 は大型の隅丸方形の掘方をもつ柱穴で構成された側柱建物である。なかでも SB12 は二から三面に庇を有すると思われる規模の大きな東西建物である。座標北から約 75° 東へ振る主軸方位をもち、840020 調査区の SB03 に近い。同時期の奥州平泉では四面廻掘立柱建物が中心施設となっており、(松本 1996) この建物が屋敷の中心施設と考えられる。

SB10 は SB12 の西側に「L」字状に配置された南北 6 間以上の建物である。座標北から約 13° 西へ振る主軸方位をもつ。この両建物は古代の官衙的な配置或いは、平安時代の寝殿造の主屋・対屋に対応する配置としてみることができる。確実な時期を決定できる資料が得られていないことから、12 世紀末から 13 世紀初頭のものと断定することはできないが、建物の方位が該当時期の溝とほぼ一致することや、この調査区からは奈良時代以前の遺物がほとんど出土していないことから、該当時期の平安時代末頃の建物と考えておきたい。

SB11・13・14 は建物規模も小さく、個々の柱穴の規模も小さくなる。SB13 は SB10 と重複しており、SB11 も SB10 と同時並存は難しい。これらの建物の柱穴からは該当時期の土器や瓦などの遺物が出土しているが、滑石製の石鏡の縦年鑑では新しくなる。

調査区内からは寝殿造建物に伴う園池は見つかっていない。南側約 30m で調査され、前回報告されている 870031 地区の第 3 面では、平安時代末～鎌倉時代の複雑な谷状の落ち込みが検出された。庭園の園池の可能性を考えたいが、この地点が平賴盛の屋敷だとしたら、流鏑馬などをおこなった武家の屋敷であることから、園池は伴わなかった可能性もある。

これらの建物で瓦葺きの屋根を伴ったものは認められないが、各地点から少量の瓦が出土している。

楠・荒田町遺跡、神戸大学医学部附属病院内から出土した平安時代後期の瓦類はきわめて少ない。今回報告できたものと、前回の報告分を合わせても、軒丸瓦 5 点、軒平瓦 7 点、丸瓦 4 点、平瓦 9 点、埠 1 点だけであり、図化できないものを含めてもわずかである。しかしながら、丸瓦・平瓦と軒瓦の比率がほぼ同じであり、屋根全体に瓦を葺いたものではなかろう。

これらの瓦はすべて須恵質に焼成されており、神出窯など東播系の諸窯産のものであろう。軒丸瓦では同紋のものが確認されており、軒平瓦では包み込み技法のものが認められる。祇園遺跡(神戸市 2000)から出土する瓦に一定量の京都産の瓦が含まれていることは対照的である。年代の手掛かりとなるものには久寿 2 年(1155)建立の鳥羽離宮金剛心院で用いられたものと同紋の軒丸瓦がある。(池田 1997)

土坑について

980190 調査区の SK09 はやや新しい要素はあるが、該当時期のものであるが、これは素掘りの井戸と考えられ、遺物量も少ない。

2003061 調査区で検出された SK01 には、該当時期の京都系土師器皿が大量に埋められていた。ここからは陶化できなかったが、非常に精緻な青白磁碗(659)や青白磁皿(660)も出土している。貴族の饗宴などに用いられたものを廃棄したのであろう。

同じように大量の京都系土師器皿が廃棄された状況は、2003172 調査区で検出された SD01 や、840020 調査区の P178 などでも認められる。範囲遺跡（神戸市 2000）の園池遺構からも大量の土師器が出土している。

溝・堀・塹について

平成 11 年度の調査（遺跡調査番号 980190）で検出された SD110・102 は、北側の遺跡調査番号 970420 で検出された SD102 や南側の遺跡調査番号 990132 でも統一して検出されており、約 60m の延長距離を測る。この溝は神戸大学医学部附属病院内に検出された大型の溝のなかで、唯一南北方向に走るものである。後世に改修されており、出土遺物中にも新しいものが含まれているが、該当時期に機能していたものと判断される。該当時期以降、現代までのこの地域の地割の基準となるものであろう。この SD110 は、座標北から $17^{\circ} 9' 26''$ 西へ振っている。^(注2)

同じく平成 11 年度の調査（遺跡調査番号 980190）で検出された SD112・113 は SD110 から東へとほぼ直角に派生した溝で、SD112 からは遺物がほとんど出土しなかったが、埋土の状況からほぼ同じ場所に作りかえられた溝と考えている。掘立柱建物 SB10 を切っていることから、時期的には新しいものであるが、該当時期に当たるものであろう。その SD110 と SD113 は厳密には直交せず、座標北から $74^{\circ} 12' 25''$ 東へ振っている。

平成 15 年度の調査（遺跡調査番号 2003172）で検出された二条の溝（塹）SD01・02 は、SD02 で測ると、座標北から 70 度東へ振れた角度で掘削されている。SD01 は形状が乱れているため不正確であるが、さらに数度東へ振れている。北側の薬研塹状の SD01 からは十郎師皿や瓦器が廃棄された状態で数多く出土しているのに対して、南側の箱塹状の SD02 からの出土遺物は少なく、一括して廃棄された状況は見られなかった。出土遺物から SD02 が先に掘削され、その後 SD01 が平行して掘削されたものと思われ、先述の 980190 調査区の SD112・113 とよく似た状況である。ただし SD02 が埋まつた後に SD01 を掘削したと判断される状況は見られなかった。

これらの大規模な溝の機能はそれぞれ異なるのかもしれないが、その堆積埋土から見て下層の一部には水が流れていた状況が認められるが、全体的に常時水流があったとは考えにくい。水路としての機能は、排水が主目的であったと考えられる。地形的には北から南へ、東から西へと低くなる。（図版 69）

大規模な溝として一定の防護機能は持っていたが、後の城郭や武士の館などの堀に比すると小さく、貧弱である。また、同時期の奥州平泉の館を囲む堀と比べても非常に小さい。（羽柴 2000）戦乱に備えて立て籠ることを考えて掘られたものではなかろう。

2003172 調査区の SD01・02 や、980190 調査区の SD112・113 は非常に近接した位置に平行して溝を構築している。これは屋敷の境界を示す溝をその屋敷の建て替えや主人公の交替により作り替えられたものではなかろうか。これらの溝が掘削された時期としては、①平清盛が摂津八部郡を私領化した応保 2 年

(1162) ころ以降の福原別業や山荘を設けた時期、②鹿ヶ谷事件以降、治承4年(1180)の以仁王・源頼政などの挙兵に備えた時期、③同年6月福原遷都により頼盛邸が内裏となった時期、④同年8月に「大路・小路を適宜開き、しかるべき庭匠には宅地を割り与える」とことが決まった時期、⑤同年10月新内裏が完成し、他の貴族たちも屋敷を福原へ移築した時期、⑥寿永2年(1183)平宗盛が都落ちに際して福原に火を放った直前の時期、⑦寿永3年(1184)一の谷他の合戦に備えた時期などが挙げられる。②⑥⑦は戦乱に備えた時期で、③④⑤は街割りや屋敷の改変が行われた時期である。これらの文献に見られる屋敷等の改変が予測される記事は、①をのぞくとわずか4～5年の間のことであり、考古学的な遺物の編年の上には変化が現れ得ない。また、今回1点のみ提出できた放射性炭素年代測定を用いても誤差範囲内である。唯一、検出された溝などの遺構の規模や形態、切り合い関係がこれらの世情を表しているのかもしれない。^(註4)

地割りについて

神戸大学医学部附属病院の安養寺山からの台地状には周辺の条里地割りと異なった地割りが存在することが指摘されている。また、安養寺山の東の丘陵末端に位置する下山手北遺跡で検出された飛鳥時代の掘立柱建物群の主軸は磁北に一致するとされており、図面で見ると座標北から約20°西へ振っている。(神戸市2005)

今回の神戸大学医学部附属病院構内で検出された溝や建物の方位は、3～5°の差はあるが、概ね座標北から13～17°の南北方向、同じく70～75°の東西方向に主軸を有している。^(註5)

比較的規模の大きい溝で囲まれた内部に大型の建物が検出された地点には、南東部に位置する地点、つまり西側を970420・980190・990132調査区で検出された南北溝SD110・102、南側を980190調査区で検出された東西溝SD113、北側を970420調査区で検出された東西溝SD101を東へ延長した範囲及び、東側を大倉山の山塊で囲まれた、南北約56m、東西約70mの範囲内にL字形配置をもつSB12・10が存在する。検出された建物群はこの区画内の南東部に偏在している。

また、2003172調査区で検出された東西溝SD01・02の北側には1981・82年に多淵氏が調査した大型掘方をもつ建物を含んだ建物群が存在している。この範囲には廃棄土坑である2003061調査区のSK01があり、SD01溝内にも京都系土器が廃棄されていた。大型の建物や土坑が検出された地点は地形的に見て東西溝から一段高くなり、さらに北側に統いた後、旧の宇治川と考えられる谷地形となる。

この他には先の970420・980190・990132調査区で検出された南北溝SD110・102により東側を、970420調査区で検出された東西溝SD101により北側を囲まれた範囲に、840020調査区で検出された建物群が存在しており、今回報告する範囲内に少なくとも3地点の屋敷が想定できる。

検出された東西溝、2003172調査区で検出されたSD01・02、970420調査区で検出されたSD101、980190調査区で検出されたSD113の距離は約56mとほぼ等しく、概目状に規則正しく地割りが行われていた可能性がある。神戸大学医学部附属病院構内では16区以上に区画されたことになる。ただし980190調査区で検出された東西溝SD113が西へとは延びないことや、調査区外や擾乱内にかかっていたにしても、南北溝が他に検出されていないことから、部分的なもの、或いは複数の区画を有する屋敷が存在したのかもしれない。調査では街路などは見つかっていない。

3 おわりに

平成 15 年度の調査では二重の塙や櫓かと言われた大型掘立柱建物が検出され、歴史学関係者のみならず、一般の人々の大きな関心を集め、シンポジウムや講演会など多数の参加者を集めた。そのことにより立体駐車場の設計の見直しにより遺構は地中に保存されることになったのは、大いなる成果ではあった。しかしながら調査担当者としてしっかりと検証を行う前にその見出しだけが一人歩きすることには大きな不安がつきまとっていた。ここにその正報告を刊行することは安堵とともにその反面、限られた時間内でおこなった検証・考察はまた、別の事実を突きつけられれば、もうくも崩れ去る可能性が含まれている。

この報告書では調査担当者の現状での見解を記述し、多くの意見・譴責を受けたいと考える。これまで数々の意見を発表し、文書にもなったが、本報告をもって正報告とし、訂正したいと考える。

たとえば第7章で述べたように、平成 15 年度の遺跡調査番号 2003061 調査区の大型掘立柱建物は当初、武家館の櫓ではないかとされていたが、柱穴底から検出された礎盤石が、その石材の産地の研究から平安時代まで遡りえないことがわかった。また、980190 調査区で検出された木材を礎盤とする近世以降の掘立柱建物の存在もこのことを補強している。

また、第 8 章では二重の塙が同時期に存在していた可能性は、両塙から出土した遺物の検討からかなり低いものと考えられるようになった。一定時期両塙が並存していたことは完全には比定できないまでも、両者は違う意図で掘削されたらしい。

この他、多くの事実誤認や解釈の誤りが未だにあるかもしれないが、様々な討議の素材となれば幸いである。

〔註〕

(1) 荒田の地名は、平成 3 年度に調査された須磨区大田町遺跡出土の円面鏡にヘラ描きされた「荒田郡中富里荒田直口口」の文字から、8 世紀の前半に荒田郡が存在したものと考えられている。(森内 1993)

荒田郡は雄伴郡と菟原郡に分割され、雄伴郡は八部郡と改称される。また、天平 3 年 (731) の『住吉大社神代記』に「菟原郡（中略）元名雄伴國」から荒田郡は雄伴国であった。(森岡 2001)

920172 調査区で検出された土坑 SK02 からは人為的に埋められたと思われる土師器杯・壺・皿・土鍤・甕・製塙土器、須恵器杯・短頭壺・甕等が出土している。(兵庫県 1997) これらは奈良時代前半の一括遺物と考えられる。

980190 の調査区で検出された掘立柱建物 SB10・12 の黒色土を含んだ埋土が、古墳時代後期の堅穴住居などのものと近いことから、当初、これらの建物は奈良時代のものではないかと考えた。その時期のものなら、「荒田郡衙」の中心建物である可能性も考えられたが、図版 69 の断面図に斜線で示したように、調査範囲内では黒色土は偏在して堆積していることがわかり、遺構の時期を決定できるものではないと判断された。

(2) 今回報告する範囲外ではあるが、平成 4 年度に神戸大学の南側の検察庁宿舎建設に伴った調査時 (遺跡調査番号 920283) に検出された溝も、南北方向のものであり、その下層の遺物は該当時期のものである。併し部分的な確認調査であり、溝の主軸方位は不明である。

(3) 一般に居館址を堀によって囲むようになるのは、西日本では 14 世紀ころといわれている。(鷹栖 2002)

兵庫県内では、たつの市所在の福田片岡遺跡では鎌倉時代初頭に屢敷を方形に区画する構が見られるようになり、14世紀から15世紀前半にかけて、宇治懶寺などの屋敷や寺院が方形区画によって囲まれる。15世紀後半から16世紀前半には幅約4.5m、深さ約1mの堀で屋敷群を囲むようになる。(兵庫県 1990)

(4) 犬塚遺跡で検出された圓泡跡では数度にわたる改修の状況が見られた。(神戸市 2000) これも屋敷の主の交替や上皇・法皇を迎える際に度々改修されたことが想像される。

(5) 座標北は真北から0度5分東に振れている。また、磁北は真北から7度0分西に振れている。

[参考文献]

- 上原真人 1987「平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった」『歴史学と考古学』高井柳三郎先生喜寿記念事業会
池田征弘 1997「瓦について」『神出窯跡群』兵庫県文化財調査報告第171号 兵庫県教育委員会
鷹野俊夫 2002「市と館一館の成立とその背景ー」長野県考古学会誌90・100号
須藤 宏 2005「本多居・新内裏の位置と抵觸跡」『平家と福原京の時代』歴史資料ネットワーク編
高橋昌明 2005「福原の平家邸宅について」『平家と福原京の時代』歴史資料ネットワーク編
高橋昌明 2006「抵觸遷都をめぐる政治—治承2年(1178)から同4年8月末まで—」『歴史学研究』816 歴史学研究会編
多澤敬樹 1984「医学部附属病院遺跡を調査して—福原京の発掘ー」『神戸大学学報』N.340
富山直人 2002「福原と和田新京—行宮から離宮へー」『歴史と地理』第562号 山川出版社
神戸市 1988「新修神戸市史 歴史編I 自然考古」
神戸市教育委員会 2000「抵觸遺跡」
神戸市教育委員会 2005「下山手北遺跡第2次調査現地公開のおしらせ」
羽柴直人 2000「柳之御所遺跡内部地区の中心建物群について」『紀要XX 平成12年度』
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
兵庫県教育委員会 1997「楠・荒田町遺跡」兵庫県文化財調査報告第162号
兵庫県教育委員会 1990「福田・片岡遺跡」兵庫県文化財調査報告第94号
松本健速 1996「12世紀平泉の四面庵据立柱建物」『紀要XVII 平成8年度』(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
-
- 真野 修 1993「楠・荒田町遺跡発掘調査概報—第5次—」神戸市教育委員会
元木泰雄 2001「福原遷都の周辺」『兵庫のしおり』第4号 兵庫県
森内秀造 1993「荒田郡」銘鏡と大田町遺跡について『大田町遺跡』兵庫県文化財調査報告第128号 兵庫県教育委員会
森岡秀人 2001「摂津・八十塚古墳群と菟原郡慈姫郷・賀美郡周辺の古代史」『八十塚古墳群の研究』芦屋市文化財調査報告
第33集 関西大学文学部考古学研究第7号 関西大学文学部考古学研究室
山田邦和 2005「福原京の都市構造」『古代文化』第54卷第4号 財団法人古代学協会

表11 出土土器・陶磁器観察表

440020

器物No.	出土場所	種別	基盤	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	特徴	文様・装飾形式の特徴	備考
1P19		土師器	三	9.2	1.6		非凸口成形。平底。底部と体部の差は不規則で、体部は直線やくに斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	器形は全体に歪む。内外面とも口縁部調整。	色調 黄褐色。V81類 12世紀前半。
2区P19		土師器	三	(9.2)	1.3		非凸口成形。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 ヨコナ子調整。体部外側 ナデ 調整。底部内外面 指標による押圧調整。底部内側 ナデ調整。	色調 黄褐色。作り 粗い。V81類 12世紀前半。
3区P46		土師器	三	(7.6)	(1.4)		非凸口成形。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	器形はやや曲がる。口縫部内外面 ヨコナ子調整。底部内外面 ナデ調整。	色調 黄褐色。底部 内外面不規則。V81類 12世紀後半。
4区P46		土師器	三	(7.0)	1.4		赤い口成形。底部の差は大きい。体部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 ヨコナ子調整。底部内外面 ヨコナ子調整。	色調 黄褐色。茶類 12世紀前半。
5区P46		瓦器	板	(13.2)	(2.4)		口縁部は浅くに外反。口縁部には圓形鉢状の縫合跡がある。	口縫部内外面 ヨコナ子調整。底部内外面 ハラナ子調整。	色調 黄褐色。
6区P46		瓦器	板	(14.1)	(2.6)		口縁部は丸みをもつ。	底部内外面 ヨコナ子調整。底部内外面 ハラナ子調整。	色調 黄褐色。
7区P46		瓦器	板		(3.75)	(0.2)	平面台を作り出す。底部内面は若干歪む。	底部内面と底面 ヨコナ子調整。底部外側面 指標による押圧調整。底部外側 不規則。底切痕 有る。	色調 黄褐色。底部 内外面不規則。
8-3区P72		土師器	三	9.0	1.7		平底。底部と体部の差は不規則で、体部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部と体部内外面 ヨコナ子調整。口縫部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	色調 刻花黄褐色。No.9 より濃い。V81類 12世紀前半。
9-3区P72		土師器	三	8.8	1.35		非凸口成形。全体に歪みは緩く、平底。体部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 ヨコナ子調整(段ナ子)。体部内外面 ヨコナ子調整。底部内外面 ナデ調整。底部外側 不規則。	色調 細密模様。V81類 12世紀前半。
10-3区P72		土師器	三	(8.8)	1.3		非凸口成形。底部と体部の差は不規則で、体部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部と体部内外面 強いヨコナ子調整。	色調 刻花黄褐色。V82類 12世紀中葉～後葉。
11-3-4区P72		土師器	三	(7.4)	1.3		非凸口成形。全体に歪みは緩く、平底。体部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 ヨコナ子調整(段ナ子)。体部内外面 ナデ調整。底部外側面 指標による押圧調整。	色調 刻花黄褐色。VR1類 12世紀前半。
12区P72		土師器	三	8.3	1.75		非凸口成形。底部と体部の差は緩く、平底。体部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 ヨコナ子調整。底部内外面 ヨコナ子調整。底部外側面 指標による変形、調整。	色調 刻花模様。V81類 12世紀前半。
13-3-4区P72		瓦器	板	(2.8)	(0.8)		円錐形台形の比較的しつらった高台を貼り付ける。	底部内面 平行セギキ。	色調 淡灰褐色。
14-3-4区P72		瓦器	板	(2.1)	(15.0)		平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内外面とも口縁部ナデ調整。底部外側 不規則。底切痕が残る(無鉛水系)。	色調 青灰色。底面系 漆黒。
15P6		瓦器	板		(1.45)	(4.4)	非凸口成形。底部と体部の差は緩く、平底。体部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	底部内面 平行セギキ。	底面の苔は苔類に近い。色調 淡灰褐色。
16-1区P11		漆底器	板		(2.65)		口縁部は丸み気味。	内外面とも口縁部ナデ調整。	色調 淡青色。
17区P20		土師器	三	(6.7)	1.4		非凸口成形。平底。体部は緩やかに斜め上方に傾む。	口縫部内外面 ヨコナ子調整(段ナ子)。体部内外面 ヨコナ子調整。底部外側面 指標による押圧調整。	口縫部外側面 平行セギキ。色調 淡青褐色。
18区P20		土師器	三	(7.7)	1.35		非凸口成形。全体に歪みは緩く、平底。体部と体部の差は不規則で、体部は直線的に斜め上方に傾む。	口縫部内外面 ヨコナ子調整。体部～底面外側面 指標による押圧調整。底部内面 ナデ調整。	色調 淡青色。V80類 12世紀中葉～後葉。
19区P20		土師器	三	(9.3)	1.3		非凸口成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸み気味。	口縫部内外面 ヨコナ子調整。体部外側面 ナデ調整。底部外側面 指標による押圧調整。底部内面 ナデ調整。	色調 淡青褐色。他の 壁面は薄茶色。底面 丸みが残る。V85類 12世紀後葉～13世紀前半。
20区P20		土師器	三	14.1	2.4		非凸口成形。平底。体部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸み気味に見える。	口縫部内外面 強いヨコナ子調整。体部外側面 ナデ調整。底部外側面 指標による押圧調整。底部内面 不規則。	色調 淡青褐色。V82類 12世紀後葉～13世紀前半。
21区P20		土師器	三	14.0	3.0		非凸口成形。平底。体部と底面との差は直線的に斜めで、体部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 強いヨコナ子調整。体部外側面 ナデ調整。底部外側面 指標による押圧調整。底部内面 不規則。	色調 淡青褐色。V81類 12世紀後葉～13世紀前半。
22区P20		漆底器	こね鉢	(19.0)	(4.25)		体部は内側に強めに斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 強いヨコナ子調整。体部外側面 ナデ調整。底部外側面 指標による押圧調整。底部内面 不規則。	色調 淡青褐色。漆底系 漆黒。
23区P20		施釉陶器	三	(9.45)	2.15		赤いは折衷台形形状の高い。体部は緩やかに斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 ヨコナ子調整。底面外側面 指標による押圧調整。底部内面 ナデ調整。	底面系施釉。10世紀前半。
24区P43		土師器	三	9.2	1.9		平底。体部と底面の差は不規則で、体部は緩やかに斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 ヨコナ子調整。底面外側面 指標による押圧調整。底部内面 ナデ調整。	色調 淡青褐色。V81類 12世紀中葉～後葉。
25区P43		土師器	三	9.8	1.5		赤いは折衷台形形状の高い。体部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 ヨコナ子調整。底面外側面 指標による押圧調整。底部内面 ナデ調整。	色調 淡青褐色。V81類 12世紀後葉～13世紀前半。
26区P43		土師器	三	(8.6)	1.3		赤いは折衷台形形状の高い。体部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 ヨコナ子調整。底面外側面 指標による押圧調整。底部内面 ナデ調整。	色調 淡青褐色。V84類 12世紀後葉～13世紀前半。
27区P43		土師器	板	(14.3)	3.5	(7.3)	非凸口成形。平底。体部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 傷い紅鉄子調整。体部外側面 ナデ調整。底部外側面 不規則。底切痕が残る(鉛)未切削。	底面内側一面縫合外側面 变形ヨコナ子調整。体部外側 不規則。切削痕が残る。
28区P43		漆底器	板	(15.6)	5.6	(5.1)	平底。体部は直線的に斜め上方に傾む。口縁部は丸みをもつ。	底部内側一面縫合外側面 变形ヨコナ子調整。体部外側 不規則。切削痕が残る。	色調 灰白色。

考古No	出土場所	種別	留傳	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	形態・変形状況の特徴		文様:調査技法の特徴	備考
							内面	外面		
283区P43	須恵器	瓶	(15.4)	5.1	(3.7)	平底。僅かに平高台の痕跡を認める。体部は僅かに内需気泡に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部の内面 強い凹輪ナガ調整。底部内面 不調整。底部外面 不調整。み切端が残る。	浅皮 变化的模様。色調 暗灰色。		
303区P43	須恵器	瓶	(15.4)	5.1	(3.8)	平底。僅かに平高台の痕跡を認める。体部は僅かに内需気泡に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部の内面 強い凹輪ナガ調整。底部外面 不調整。底部外端 不調整。み切端が残る。	色調 暗灰色。		
313区P43	須恵器	瓶		(4.15)	(3.1)	平底。僅かに平高台の痕跡を認める。体部は僅かに内需気泡に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	内外面とも凹輪ナガ調整。底部外面 不調整。み切端が残る(凹輪外切)。	色調 暗灰色。		
323区P43	須恵器	瓶		15.0	5.6	8.4	平底。僅かに平高台の痕跡を認める。体部は僅かに内需気泡に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	内外面とも凹輪ナガ調整。底部外面 不調整。み切端が残る。	浅皮 变化的模様とやわらかな。色調 青灰白色。	
333区P43	須恵器	瓶	(15.6)	(4.6)		体部は僅かに内需気泡に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	内外面とも強い凹輪ナガ調整。	色調 暗白色。		
343区P43	須恵器	瓶	(16.2)	(3.35)		体部は僅かに内需気泡に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	内外面とも凹輪ナガ調整。	色調 暗灰色。		
353区P47	須恵器	瓶	16.4	5.3		平底。僅かに平高台の痕跡を認める。体部は僅かに内需気泡に斜め上方に延びる。	口縁部の内面 強い凹輪ナガ調整。底部内面 不調整。底部外端 不調整。底部内面 不調整。み切端が残る(凹輪外切)。	浅皮 变皮白色。束縛 簡易装飾。12世紀後半。		
363区P48	土師器	三	9.8	1.9		口沿成形。平底。底盤部・体部は削開部で、体部は僅かに内需気泡に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部の内面 強い凹輪ナガ調整。底部外端 不調整。底部内面 不調整。み切端が残る(凹輪外切)。	台湾 传统装飾。浅皮。束縛 三段式底盤。10世纪-12世纪。		
373区P48	須恵器	瓶	(16.1)	(4.50)		体部は僅かに内需気泡に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部の内面 強い凹輪ナガ調整。底部内面 不調整。外端 不調整。	色調 反白色。束縛 扇形。11世纪-12世纪。		
383区P48	須恵器	瓶	(16.3)	(3.6)		体部は僅かに内需気泡に斜め上方に延びる。	口縁部の内面 強い凹輪ナガ調整。底部内面 不調整。底部外端 不調整。	色調 暗白色。		
393区P48	須恵器	瓶	(18.5)	(2.5)		口縁部は丸みをもつ。薄い口縁部を粘土で蓋し、口縫部を形成している。	内外面とも凹輪ナガ調整。	色調 暗灰白色。		
403区P48	須恵器	瓶	(18.6)	(2.5)		体部は斜め上方に延びる。	内外面とも凹輪ナガ調整。	色調 反白色。		
413区P48	須恵器	瓶	(14.2)	(2.25)		口縁部はやや外反弧線。口縫部の内壁はあまり傾斜を見ない。	口縫部の内面 強いコナガ調整。	色調 黄灰白色。		
423区P48	須恵器	瓶	(13.8)	(1.8)		口縫部は丸みをもつ。	口縫部の内面 強い凹輪ナガ調整。	色調 黄灰色。		
433区P48	須恵器	瓶	(16.4)	(2.15)		口縫部は丸みをもつ。	内外面とも強い凹輪ナガ調整。口縫部内面に僅かに凹窓がある。	色調 反白色。		
443区P48	須恵器	瓶	(17.2)	(2.6)		体部は僅かに内需。	口縫部の内面は2段に亘る凹輪ナガ調整。2段目の下には凹窓。	色調 黄青褐色。		
453区P48	須恵器	瓶	(19.8)	(2.6)		口縫部は丸みをもつ。	器口は三点状に削離する。口縫部内外面 四凹輪ナガ調整。	色調 青灰白色。		
463区P48	須恵器	瓶	(19.6)	(2.3)		口縫部は丸みをもつ。	口縫部は内面を抉むように強い凹輪ナガ調整。	色調 暗白色。		
473区P48	須恵器	瓶	(21.7)	(2.3)		口縫部内面は粘土を削ぎ落し先で修復成形一段状になる。底盤が輕度な。	口縫部の内面 強い凹輪ナガ調整。	色調 暗灰色。		
483区P48	須恵器	瓶		(1.85)	(6.2)	僅かに平高台を示り出す。底部内面はやや底盤。体部は僅かに斜め上方に立ち上がる。	内外面とも凹輪ナガ調整。底部外端 不調整。底部内面 不調整。	色調 反白色。		
493区P48	須恵器	瓶		(1.5)	(4.2)	平底。僅かに斜め上方に立ち上がる。	内外面とも凹輪ナガ調整。底部外端 不調整。み切端が残る(凹輪外切)。	色調 反白色。		
503区P48	須恵器	こね鉢		(3.2)	(8.0)	平底。形体は僅かに斜め上方に立ち上がる。	内外面とも凹輪ナガ調整。底部外端 不調整。み切端が残る。	浅皮 星印。色調 淡青色。		
534区P48	土師器	皿		7.0	1.3	素口クロ成形。底盤の堅膜は非常に薄い。平底。器全体の形は不明瞭で、体部は僅かに内需気泡に斜め上方に延びる。口縫部は丸みをもつ。	口縫部の内面 ヨコナガ調整(段ナガ)。体部内面 ヨコナガ調整。底部外端 指壓による平行成形・説明。	色調 黄青褐色。IVA1b期 12世紀中葉-後葉。		
544区P48	瓦器	板		14.9	4.4	退化した新鋭三角形形状の高台を楕円形に貼り付ける。体部は内需気泡に斜め上方に延びる。口縫部は丸みをもつ。	口縫部の内面 ヨコナガ調整。体部外端 体縫付による平行成形。指壓三段法が残る。口縫部、底部内面 相應する基準線三段法のヨコナガ調整。底部外端 平行成形。	全体に底面の堅膜は不十分。色調 黄灰白色。		
555区P103	瓦器	板	(12.1)	(1.85)		素口クロ成形。器形は全体に大きくな。平底。器全体と底盤の齐は不明瞭で、体部は僅かに内需気泡に斜め上方に延びる。口縫部は丸みをもつ。	口縫部の内面 ヨコナガ調整。体部内面 やや窓なみナガ調整。外端 えがきなし。	色調 波黒灰色。		
555区P117	土師器	皿		2.8	1.7	素口クロ成形。器形は全体に大きくな。平底。器全体と底盤の齐は不明瞭で、体部は僅かに内需気泡に斜め上方に延びる。口縫部は丸みをもつ。	口縫部の内面 ヨコナガ調整。器口-底部外端 頂部にによる押縫成形。底部内面 ナガ調整。	色調 黄褐色。		

登録番号	出土場所	種類	部構	口径(cm)	溝深(cm)	底径(cm)	形状・特徴(柱状の特徴)		文様・装飾技術の特徴		備考
							横口	縦口	内面	外側	
67 6区P156	土師器	壺		(12.3)	1.9		平底。直筒と体部の界面は不規則。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。口縁部は外側面に突出をもつ。		口縁部内外面 強いコナデ調整。体部内外面 口ナデ調整。		色斑 銀黄褐色。骨灰 黑褐色。V3世紀後半~13世紀前半。
68 6区P159	瓦器	壺		(1.1)	(4.6)		直筒合形状の高台を吊り付ける。		内外面ともナデ調整。底部内面 平行ギザギザ。		表面はほんのり墨書きせず。色斑 黄褐色。
59 6区P181	瓦器	壺		(9.7)	1.4		平底。直筒と体部の界面は不規則。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。口縁部は丸みをもつ。		口縁部 内外面 ヨコナデ調整。底部外側面 指輪による押正調整。底部内面 ナデ調整。ナガ見られない。		表面の垂糸は不十分。重い透徹感あり。色斑 浅黒褐色。
60 6区P191	瓦器	壺		(13.6)	3.8		断面三角形の道溝した高台を吊り付ける。体部は直筒と斜面に斜め上方に傾びる。口縁部は丸みをもつ。		口縁部 内外面 ヨコナデ調整。体部外側面 直筒による押正調整。口部然~体部内面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ジグザグ状ギザギザ。		表面の垂糸は不十分。色斑 四川灰。
61 7区P170	瓦器	壺		14.65	4.2		断面三角形の道溝した高台を吊り付ける。体部は直筒と斜面に斜め上方に傾びる。口縁部は丸みをもつ。		口縁部 内外面 ヨコナデ調整。体部外側面 弧形による押正調整。口部然~体部内面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ジグザグ状ギザギザ。		表面の垂糸は不十分。色斑 白灰色。
62 4区P175	土師器	壺		(10.2)	2.1		平底。直筒と体部の界面は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。口縁部は尖り気味。		口縁部 内外面 ヨコナデ調整。体部外側面 弧形による押正調整。底部内面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ヨコナデ調整。		色斑 青褐色。V14世紀前半。
63 4区P176	土師器	壺		8.2	1.5		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。口縁部は尖り気味。		口縁部内外面 ヨコナデ調整(2段ナダ)。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		色斑 銀黄褐色。他の2式と胎土が異なる。V16世紀前半~12世紀中葉~後半。
64 4区P178	土師器	壺		(8.6)	1.65		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 ヨコナデ調整(2段ナダ)。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		表裏の2式は一定しない。色斑 黄褐色。V16世紀前半~12世紀中葉~後半。
65 4区P178	土師器	壺		(8.6)	1.4		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 ヨコナデ調整(2段ナダ)。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		色斑 表裏褐紅。V16世紀前半~12世紀中葉~後半。
66 4区P178	土師器	壺		7.8	1.15		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 ヨコナデ調整(2段ナダ)。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。底部外側面 ナガ見られない。		色斑 黄褐色。V16世紀前半~12世紀中葉~後半。
67 4区P178	土師器	壺		(7.2)	1.1		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 ヨコナデ調整(2段ナダ)。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。底部外側面 ヨコナデ調整(2段ナダ)。		色斑 黄褐色。2段ナダは尖り気味。1段目部分のナダは圓い。2段目部分の一帯は渾然としている。
68 4区P178	土師器	壺		(8.6)	1.3		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 ヨコナデ調整(2段ナダ)。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		2段目のナダで窓といふ。窓地が確認できない。色斑 明黄褐色。V16世紀前半~12世紀中葉~後半。
69 4区P178	土師器	壺		8.3	1.3		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 ヨコナデ調整(2段ナダ)。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		色斑 黄褐色。V16世紀前半~12世紀後半~13世紀前半。
70 4区P178	土師器	壺		(7.4)	1.4		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 ヨコナデ調整(2段ナダ)。底部外側面 ナデ調整。		色斑 表裏褐紅。V16世紀前半~12世紀中葉~後半。
71 4区P178	土師器	壺		(9.4)	1.4		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 ヨコナデ調整(2段ナダ)。底部外側面 ヨコナデ調整。		口縁部のヨコナデは外側面のみ。内面ではナダはない。色斑 明黄褐色。V16世紀前半~12世紀中葉~後半。
72 4区P178	土師器	壺		(13.3)	(2.5)		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 ヨコナデ調整(2段ナダ)。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		色斑 黄褐色。V16世紀前半~12世紀後半~13世紀前半。
73 4区P178	土師器	壺		(14.2)	1.8		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 別口ナデ調整。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		色斑 黄褐色。V16世紀前半~12世紀後半~13世紀前半。
74 4区P178	瓦器	壺		(9.3)	1.4		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 強いコナデ調整。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		色斑 黑炭色。
75 4区P179	瓦器	壺		7.5	1.4		器形全体が大きいため、平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 強いコナデ調整(2段ナダ)。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		表面の垂糸は不十分。器形の形状は一定ではない。色斑 深灰黒色。
76 4区P179	瓦器	壺		(8.6)	1.2		器形全体が大きいため、平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 強いコナデ調整。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		表面の垂糸は十分とは言えない。色斑 深灰黒色。
77 4区P178	瓦器	壺		(8.2)	1.65		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 強いコナデ調整。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		表面の垂糸は全般的に不十分。色斑 黑炭色。
78 4区P178	瓦器	壺		(7.7)	1.1		器形全体が大きいため、平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 強いコナデ調整。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		表面は黄褐色。
79 4区P178	瓦器	壺		(8.0)	1.4		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 強いコナデ調整。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		色斑 深灰黒色。
80 4区P178	瓦器	壺		(8.0)	1.0		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 強いコナデ調整。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		表面は全く後退していない。色斑 深灰黒色。
81 4区P178	瓦器	壺		(8.4)	0.9		平底。直筒と体部の界面は尖り気味。底部内面の垂糸は明瞭。体部は緩やかに傾め上方に弧びる。		口縁部 内外面 強いコナデ調整。底部外側面 透徹透徹感抜がり。底部内面 ナデ調整。		表面の垂糸は全般的な良さ。色斑 黑炭色。

番号	出土地所	種類	保護	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	特徴・成形法の特徴	文部・機械法の特徴	備考	
82-4区P176	瓦器	瓶	(16.0)	(3.5)			体部は内腹気球に星やかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いコナデ調整。内部から凹入部によって段階的に段階的に内凹する。斜面による押圧調整。内部外周部に凹みをもつ。	裏面の凹凸は不十分。色調 淡灰白色。	
83-4区P176	瓦器	瓶	(13.9)	(3.8)	2.9		前後半円形の柔軟した高台を貼り付ける。粘土のつなぎは初期。体部は星やかに内腹気球に斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いコナデ調整。体部へ連続する斜面による押圧調整。内部不規則の傾きがある。	片側の高さは異なる。内腹 傾きに優れ。色調 黄褐色。	
84-4区P176	瓦器	瓶	(12.2)	(2.7)			体部は僅かに内腹気球に星やかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いコナデ調整。体部外周部に凹みによる押圧調整。体部内面 弧面形成力が弱い。	裏面の凹凸は不十分。色調 淡灰白色。	
85-4区P176	瓦器	瓶	(12.2)	(2.6)			体部は僅かに内腹気球に星やかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いコナデ調整。体部外周部に凹みによる押圧調整。体部内面 弧面形成力が弱い。丁寧なナデ調整。	裏面の凹凸は不十分。色調 淡灰白色。	
86-4区P176	瓦器	瓶		(2.2)	3.0		前後半円形の柔軟した高台を貼り付ける。体部は前後上方に立ち上る。	全体に成形・調整が難しく。内外面ともテグ整。内腹 傾きが調整。	色調 黑灰色。	
87-4区P176	瓦器	瓶	(14.2)	(3.6)	3.7		前後半円形の柔軟した高台を貼り付ける。体部は前後上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いコナデ調整。体部へ連続する斜面による押圧調整。内腹 不規則の傾きがある。	体部外周に黒斑の発生。外部表面が崩壊し易く、朱緋色が剥落し易い。	
88-4区P176	瓦器	瓶	(14.9)	(3.25)			裏面は僅かに内腹気球に斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いコナデ調整。体部外周部に凹みによる押圧調整。体部内面 モガキ調整(裏面)の後、ナデ調整。	裏面 淡灰白色。	
89-4区P176	瓦器	瓶	(15.1)	(2.85)			体部は僅かに内腹気球に斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いコナデ調整。ナデ調整。体部内面 重複模様(2ヶ所)、ナデ調整。	色調 黑灰黑色。	
90-4区P176	瓦器	瓶	(14.0)	(3.0)			体部は僅かに内腹気球に星やかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いコナデ調整。体部外周部に凹みによる押圧調整。体部内面 弧面形成力が弱い。	裏面の凹凸は比較的良い。色調 淡灰白色。	
91-4区P176	瓦器	瓶	(15.0)	(2.35)			裏面は比較的僅か。体部は星やかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いコナデ調整。体部外周部に凹みによる押圧調整。体部内面 下部に凹みがある。	色調 黑灰黑色。	
92-4区P176	瓦器	瓶	(13.0)	(3.1)			体部は僅かに内腹気球に星やかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いコナデ調整。体部外周部に凹みによる押圧調整。体部内面 下部に凹みがあるが、凹み部まで延びてない。	裏面の凹凸は比較的良い。色調 淡灰白色。	
93-4区P176	淡色器	瓶	(14.1)	(2.35)			口縁部は上端に端面をもつ。僅かに弧状のくぼみがある。	口縁部内外面 強いコナデ調整。端面外周部 相対的な凹みによる押圧調整。体部内面 弧面形成力の底部分が見られる。	内腹面と相対するナデ調整。	色調 白灰色。
94-4区P176	淡色器	瓶		(2.0)	(8.2)		平底。体部は星やかに斜め上方に立ち上がる。	口縁部内外面 強いコナデ調整。本部外周部 平底。ナデ調整。ナデ調整。体部内面下部に凹みがある。口縁端部は丸みをもつ。	裏面 淡灰白色。	
95-2区P187	土師器	瓶		(8.2)	3.15		平底。僅かに高台を設けた。体部は直筒形に斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部へ体部内外面 西方式ナデ調整。底部内面 平底。ナデ調整。本部で丸みがある。	色調 淡灰灰白色。東端部に黒斑がある。	
96-4区P210	土師器	瓶		(3.4)	2.3		口の広い平底。底部へ体部へ接続する界は不規則。体部はややゆるかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	体部内面 弧面形成力が弱い。底部内面 平底。ナデ調整。本部へ心臓部へ連続する斜面による押圧調整。ナデ調整。	色調 前黄褐色。12世紀後半～13世紀前半。	
97-4区黑褐色土層下層	土師器	瓶		(7.1)	1.4		口の広い平底。底部へ体部へ接続する界は不規則。体部はややゆるかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口の広い平底。底部へ体部へ接続する界は不規則。体部はややゆるかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	色調 黑褐色。12世紀後半～13世紀前半。	
98-黑褐色土層下層	土師器	瓶		(9.0)	1.6		口の広い平底。底部へ体部へ接続する界は不規則。体部はややゆるかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口の広い平底。底部へ体部へ接続する界は不規則。体部はややゆるかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	色調 黑褐色。12世紀後半～13世紀前半。	
99-黑褐色土層下層	土師器	瓶		(10.0)	1.4		口の広い平底。平底。底部へ体部へ接続する界は不規則。体部はややゆるかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口の広い平底。底部へ体部へ接続する界は不規則。体部はややゆるかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	色調 黑褐色。V83a期 12世紀後半～13世紀前半。	
100-黑褐色土層下層	土師器	瓶		(3.2)	1.4		口の広い平底。底部へ体部へ接続する界は不規則。体部はややゆるかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口の広い平底。底部へ体部へ接続する界は不規則。体部はややゆるかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	色調 黑褐色。V83b期 12世紀後半～13世紀前半。	
101-黑褐色土層下層	土師器	瓶		(9.3)	1.5		口の広い平底。全周部に断面は星やか。平底。体部は星やかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	口の広い平底。全周部に断面は星やか。平底。体部は星やかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	色調 初期黒褐色。V82a期 12世紀中葉～後半。	
102-黑褐色土層	土師器	瓶		(8.7)	1.8		非クロク成形。断面は比較的僅か。平底。体部は星やかに斜め上方に立ち上る。	口の広い平底。底部へ体部へ接続する界は不規則。体部はややゆるかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸みをもつ。	色調 黑褐色。V83d期 12世紀後半～13世紀前半。	
103-黑褐色土層	土師器	瓶		(9.3)	1.7		非クロク成形。断面は比較的僅か。平底。体部は星やかに斜め上方に立ち上る。	内腹面に窪みがある。内腹面 弧面形成力が弱い。	内腹面に窪みがある。色調 淡灰褐色。V83c期 12世紀後半～13世紀前半。	
104-黑褐色土層	土師器	杯		(12.0)	3.05		口の広い平底。底部へ体部へ接続する界は不規則。口縁端部は丸みをもつ。	内腹面と周囲ナデ調整。底部外周部 ナデ調整。	色調 初期黒褐色。	
105-黑褐色土層	土師器	瓶		(20.0)	(6.30)		底上部巻上成形。体部は僅かに内腹して底面上に立ち上る。口縁端部はくぼみ状に大きく外方にひく。口縁端部はほぼ直立。	口縁部内外面 強いコナデ調整。体部外周部 タリ方のハケ目調整の後、ナデ調整。体部内面 ハケ目調整。	内腹面に窪みがある。色調 淡灰褐色。地形 I 期 11世紀末～12世紀前半。	
106-黑褐色土層	土師器	瓶		(22.4)	(6.6)		体部は内腹に張り出る。口縁部外周に断面三角形状の凹部を貼り付ける。	口縁部内外面 強いコナデ調整。体部外周部 ナデ調整。体部内面 ハケ目調整が僅かに認められる。	内腹面に窪みがある。色調 淡灰褐色。地形 II 期 12世紀後半。	
107-黑褐色土層	土師器	羽量		(23.2)	(3.8)		体部はほぼ直立する。口縁部は大きいくし字状に膨らむ。口縁端部は上面に端面をもつ。	口縁部内外面 ミコナデ調整。体部外周部 仰角によるナデ調整。体部内面 ハケ目調整。	外腹 ミコナデ調整。内腹 ナデ調整。	色調 暗褐褐色。
108-黑褐色土層	土師器	瓶		(30.4)	(6.75)		体部はほぼ直立する。口縁部は大きいくし字状に膨らむ。口縁端部は上面に端面をもつ。	口縁部内外面 ミコナデ調整。体部外周部 仰角によるナデ調整。体部内面 ハケ目調整。	鼓動形II型 12世紀後半	

標名No.	出土場所	種類	説明	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	形態・成層法の特徴	文様・調査法の特徴	備考
109	黒褐色土下層	土師器	灰青	(24.0)	(3.6)		口縁部は僅かに内傾。口縁部外周に比較的幅の広い斬断台形状の脚を配り付ける。	内外面ともコナデ調査。	色調 黄褐色、河原形 1種 12世紀後葉～13世紀前半。
110	黒褐色土下層	土師器	灰青	(22.2)	(3.1)		体部は僅かに内傾する。口縁部上面に斬断台形状の脚を配り付ける。	外面 コナデ調査、内面 横方向の軽いハケ目調査。	内外面とも底面、色調 番荔枝色、茎葉形 1種 12世紀後葉～13世紀前半。
111	黒褐色土下層	土師器	灰青	(26.2)	(4.2)		口縁部は僅かに内傾する。口縁部上面に水平に脚をもつ、口縁部外周に斬断台形状の脚を配り付ける。	外面 コナデ調査、内面 ナデ調査。	色調 黄褐色、河原形 1種 12世紀後葉～13世紀前半。
112	黒褐色土下層	土師器	灰青	(30.0)	(4.8)		口縁部は僅かに内傾する。口縁部外周に斬断台形状の脚を配り付ける。	内外面ともコナデ調査。	色調 黄褐色、河原形 1種 12世紀後葉～13世紀前半。
113	黒褐色土層 最下層	瓦器	灰	(9.1)	1.7		平底。体部は直線的に斜め上方に弧びる。口縁部は丸みをもつ。	体部内面～口縁部外周 コナデ調査、体部外周部による伴住調査、底部内外面 ナデ調査。	色調 黑褐色。
114	黒褐色土層 最下層	瓦器	灰	(8.4)	1.5		平底。体部は短く、直線的に斜め上方に弧びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内面 素 コナデ調査、体部内面 ナデ調査。	表面の収着は不十分。色調 黑褐色。
115	黒褐色土層 最下層	瓦器	灰	8.8	1.6		平底。体部は僅やかに斜め上方に弧びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内面 素 コナデ調査、底部外周部による伴住調査。	表面の収着が一定ではない。色調 深灰色。
116	黒褐色土層 最下層	瓦器	灰	8.2	1.5		直底。口縁部は直線的に斜め上方に弧びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内面 素 コナデ調査、体部外周部による伴住調査、体部内面 ナデ調査、縦文なし。	色調 深灰色。
117	黒褐色土層 最下層	瓦器	灰	(14.2)	(4.5)		体部は内壁面に斜め上方に弧びる。口縁部は僅かに内反する。	口縁部内面 弧形 コナデ調査、底部外周部による伴住調査、体部内面 素面擦毛が見られ、底部外周部 縦目調査。	色調 黑褐色。
118	黒褐色土層 最下層	瓦器	灰	(15.6)	(2.75)		体部は僅かに内壁面に斜め上方に弧びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内面 素 コナデ調査、体部外周 鋼鉄錆跡、体部内面 重織目丸印。	表面の後者は社祭の良い。色調 黑褐色。
119	5区黒褐色 土下層	須恵器	灰	16.3	5.2		平底。体部は僅やかに直線的に斜め上方に弧びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内面 素 前部外周 ナデ調査、底部内外面 ナデ調査、底部外周 不規則、尖角部 素面擦毛が見られる。底部外周に某状の斑紋が残る。	表面全體に2次焼成痕あり。色調 灰白色。
120	2区黒褐色 土	白磁	灰		(3.4)	(5.0)	底盤の唇部は非常に厚い。高台は比較的頗る高い。	内面 透明隙施塗。青灰灰中に光沢。外表面 陰刻文。	模様・森田分類 白磁W類。12世紀後半。

標名No.	出土場所	種類	説明	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	形態・成層法の特徴	文様・調査法の特徴	備考
121	SD101	瓦器	灰		(3.6)	(4.0)	斬断台形状の比較的低い高台を配り付ける。体部は緩やかに、僅く斜め上方に立ち上がる。	体部外周 高さ約3.6cmの高台、ナデ調査、指擦法がある。底部外周 ナデ調査。体部内面 ナデ調査の後、ナガ調査。	色調 灰色。
122	SD102	土師器	灰		(4.8)		口縁部は僅かに内傾。口縁部上面に複数をもつ。	口縁部内面 強いコナデ調査、口縁部下面 下部 横方向のハケ目調査。	色調 に近い黄褐色。
123	SD102	土師器	調査		(4.0)		斬断台形状の比較的低い高台を配り付ける。	外面 ナデ調査、内面 体部内面のハケ目調査。	外版 模擬物、色調 泥質灰色。
124	SD102	土師器	調査		(5.25)		口縁部は若干内傾。外底 斬断長方形状の比較的低い高台を配り付ける。	外底 口コナデ調査。内面 後方側のハケ目調査。	色調 に近い黄褐色。
125	後金舟中	土師器	灰	7.95	1.7	5.1	口コロ成型、平底。体部と底盤の界は明瞭で、体部は短く、直線的に斜め上方に弧びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部～体部内面 弧形 口コナデ調査、底部内面 ナデ調査。底盤外周 不規則。ヘラ切り痕がある。	色調 に近い黄褐色、1.1kg。12世紀後葉～12世紀初頭。
126	2区第1層	土師器	調査	(17.8)	(3.05)		体部はほぼ直立。口縁部外周に台形状の比較的低い脚を配り付ける。	口縁部内面 弧形 口コナデ調査。体部外周 口コロ成型、底盤外周 ナデ調査でハサ開拓を主とし、底部内面 縦方向のヘラ切り調査の後、ナガ調査。	色調 似緑～に近い黄褐色。

番号No.	出土地所	種別	標徴	口徑(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	形態・成形技術の特徴		文様・調整法の特徴	備考	
							内面	外面			
127P7-P13	須恵器	片口鋤		(27.0)	(4.56)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は上方に引き出す。	口縁部内外面 深いV字ナデ調整。体部内外面 陶土ナデ調整。口縁部外面には細い溝。	色調 茶色、東播系須恵器。12世紀後葉~13世紀前半。		
128P18	土師器	鋤		(29.0)	(8.8)		体部は僅かに内側に傾め上方に延びる。口縁端部はV字の字状に傾斜して、大きく外方にひらく。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。口縁部内外面 ナデ調整の後、V字の字状のハケナダ調整。底部外側にV字の字状のハケナダ調整。体部外側にV字の字状のハケナダ調整。	色調 茶色須恵器。鐵綱1種。12世紀前半。		
129P18	瓦器	鋤		(15.9)	(4.92)		体部は内側気泡に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気泡に收める。	表面は僅かに内側に傾め上方に延びる。口縁端部はV字の字状に傾斜して、大きく外方にひらく。	色調 緑灰色。		
130P16	土師器	鋤		(7.60)	1.08		鉢身V字成形。平面。体部と底部の界は不規整。体部は弧く、底やかに傾め上方に延びる。口縁端部は尖り気泡に收める。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。口縁部内外面 ナデ調整の後、V字の字状のハケナダ調整。底部外側にV字の字状のハケナダ調整。体部外側にV字の字状のハケナダ調整。	色調 茶色須恵器。V字1種。12世紀後葉~13世紀前半。		
131P20	白磁	碗			(1.15)	(3.6)	高台は低く、細い。		器底の底座が重い。		
132P21	瓦器	鋤		(14.4)	(3.75)		体部は僅かに内側する。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。体部外側 指扣きの後、V字ナデ調整。底部外側が残る。体部 内側 ナデ調整の後、V字ナデ調整。	色調 灰色。		
133P25	瓦器	鋤		(13.8)	(2.78)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 深いV字ナデ調整。体部外側 指扣きの後、V字ナデ調整。体部外側に指扣き底座が残る。底部内面 ナデ調整の後、V字ナデ調整。	色調 灰白色。		
134P26	須恵器	皿?		(7.6)	(1.9)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	内外面とも回転ナデ調整。	色調 灰色。		
135P27	須恵器	鋤			(2.95)		平高台、高台の裏側は不規整。直線的に斜め上方に延びる。底部内面は丸みをもつ。	内面裏とも回転ナデ調整。高台外側 不規整。系切目が残る。	色調 灰色、東播系須恵器。12世紀前半。		
136P25	瓦器	鋤		(14.6)	(4.15)		器壁は比較的高い。体部は内側気泡に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。体部外側 指扣きの後、ナデ調整。体部外側に指扣き底座が残る。底部内面 ナデ調整の後、V字ナデ調整。	色調 灰色。		
137P23	須恵器	鋤			(2.56)		口縁端部は丸みをもつ。	内外面とも回転ナデ調整。	東播系須恵器。		
138P28	瓦器	鋤		(13.7)	(3.11)		体部は僅かに内側気泡に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。体部外側 指扣きの後、ナデ調整。底部外側に指扣き底座が残る。体部内面 ナデ調整の後、V字ナデ調整。	色調 灰白色。		
139P60	無跡器	皿?		(3.7)	(1.8)		口縁部は水平に外方にひく。	口縁部内外面 深いV字ナデ調整。体部外側 指扣きの後、ナデ調整。体部内側面に指扣き底座が残る。	色調 灰色、質感不明。近世の品か?		
140SB10_P1	須恵器	鋤		(29.0)	(1.80)		口縁端部を上方に引き出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部外面に重ね焼痕がある。	東播系須恵器。12世紀後葉~後代。		
141SB12_P15	土師器	甕			(18.8)	(4.5)	口縁部はほぼ直立。口縁部上部に水平に罐底をもつ。	口縁部内外面 ヨコナデ調整の後、外側はV字方向に内側は直線方向の複数V字調整を施す。口縁部にV字1箇所。	色調 灰白色。		
142SB13_P130	瓦	野丸瓦		(5.15)	厚2.0		複数箇所草文瓦	四面 2方向のナデ調整。	色調 灰褐色。		
143P106	土師器	皿		(9.4)	(1.40)		口縁端部は上方に丸み上げる。	器底は僅く摩擦。外側面ともヨコナデ調整。	色調 に似た青色。V字1箇所。12世紀後葉~13世紀前半。		
144SB14_P127	土師器	皿		(3.7)	1.5	(3.4)	非クロロ成形。平底。体部は緩やかに傾め上方に延びる。口縁端部は尖り気泡に收める。	口縁部内外面 ヨコナデ調整の後、底部外側に指扣きの後、ナデ調整。	色調 に似た青色。V字1箇所。12世紀中葉~後葉。		
145SB14_P127	土師器	皿		(16.1)	(2.6)		非クロロ成形。体部は緩やかに内側気泡に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気泡に收める。	器底の底座が重い。内外面ともヨコナデ調整。	色調 浅黄褐色。V字4箇所。12世紀後葉~13世紀前半。		
146SB14_P127	土師器	鋤		(24.00)	(6.75)		体部はほぼ直立。口縁部はV字の字状に傾斜して、大きめ外方にひらく。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。体部内面 斜め前方に傾斜した方向のハケナダ調整。体部外側 尖れの後、ナデ調整。	色調 黒灰褐色。彫形1種。11世紀末~12世紀前半。		
147SB14_P127	瓦器	片口鋤		(26.2)	8.2		高台は断面台形状(?)の形状に外方にひく。体部は内側に傾め上方に立ち込む。口縁部は丸みをもつ。口縁部外面に片口を作り出す。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。体部外側 指扣きの後、ナデ調整。一部はギヤ調整。底部内面 ナデ調整の後、ナデ調整。底部外側 ナデ調整の後、ナデ調整。	色調 鎌形灰色。		
148P128	土師器	皿		(9.8)	1.2		非クロロ成形。平底。底盤は僅かに内側気泡に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気泡に收める。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。底部外側 指扣きの後、V字の字状のナデ調整。	色調 に似た青色。V字1箇所。12世紀中葉~後葉。		
149P128	須恵器	鋤			(1.60)	(3.4)	底盤は緩やかに傾め上方に立ち上がる。底盤の下面は少し窪む。	底盤は緩やかに傾め上方に立ち上がる。底盤の下面は少し窪む。	色調 黑灰褐色。底盤が残る。		
150P12	須恵器	皿?			(2.8)	(13.9)	平高台。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ調整。底部外側 不規整。底盤が残る。	色調 灰色。東播系須恵器。		
151P12	須恵器	杯		(22.0)	(2.36)		口縁端部を上方に引き出す。	内外面とも回転ナデ調整。	色調 灰色。東播系須恵器。		
152P63	須恵器	杯蓋		(11.0)	(1.40)		口縁端部を僅かに下方にまわし出す。	内外面とも回転ナデ調整。体部上部 ヘラケズの後、V字ナデ調整。	色調 灰色。9世紀代。		
153P102	須恵器	鋤		(12.8)	(4.0)		口縁端部は僅かに外方にひらく。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。体部外側 指扣きの後、ナデ調整。底盤が残る。	色調 灰色。		
154P107	瓦器	皿		(15.6)	(1.85)		体部は斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。体部内面 ナデ調整の後、V字ナデ調整。	色調 灰白色。		

朝号	出土場所	種別	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	形・状・寸法技術の特徴		文様・装飾技術の特徴	参考文献
							内径	外径		
155P119	土師器	皿	直	(13.0)	2.15	(7.70)	非クロコ形、平底。体部は縦やかに斜め上方に延びる。口縁部は柔らか氣味に見える。	口縁部内面 強いコナデ調査。体部内外面 ハラカニテ調査。	色調 黄褐色。VA2種 12世紀中～後。	
156P118	瓦器	唐	直	(13.0)	3.65		体部は僅かに内側気味に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。		色調 緑褐色。	
157P129	瓦器	唐	直	(15.0)	3.3	(2.00)	膨乳化した断面三角形状の小さい高台を貼り付ける。体部は縦やかに斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内面、体部外面上部 ヨコナデ調査。体部外面上部 接ぎ目のある後、ナジ調整。体部内面 不定方向のナジ調査。体部外面上部に接ぎ目がある。	色調 黄白色。瓦器。14世紀中。	
158P144	瓦器	板	直	14.8	4.30	3.45	膨乳化した断面三角形状の小さい高台を貼り付ける。体部は縦やかに斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内面 ヨコナデ調査。体部外面上部 接ぎ目のある後、ナジ調整。体部内面 不定方向のナジ調査。後、ヨコナデ調査。	色調 黄褐色。	
159P151	土師器	皿	直	(8.20)	1.5		非クロコ形。体部は縦やかに斜め上方に延びる。	口縫部の摩耗が大きい。内外面ともヨコナデ調査。	色調 黄褐色。12世紀後半～13世紀前半。	
160P160	瓦器	板	直	(12.5)	3.15		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内面～体部外面上部 ヨコナデ調査。体部外面上部 接ぎ目のある後、ナジ調整。体部内面 不定方向のナジ調査。ヨガナデ調査。体部外面上部に接ぎ目がある。	色調 黄褐色。	
161P161	青磁	碗	直	(15.0)	3.45		口縫部外面 備かに窪む。	外面 磁性で墨書き文？墨文。内面 沈金2層。内面裏と青磁施釉。オーバー灰褐色。	龍泉系青磁か？	
162P169	無輪陶器	火入	直	(10.2)	6.50	(3.4)	平底。体部は直立。	体内外壁 面粘ナジ調査。底部外縁 ハラカニテ調査。	色調 赤灰色。遼世の素焼窯。	
163SE01	無輪陶器	壺鉢	直	(32.5)	6.45		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上部に弧状して葉巻を形成する。口縁部外縁に凹凸がある。	内面裏と側面 ヨガナデ調査。体部内面にヨガナデ調査。側面 接ぎ目のある後、ナジ調整。	色調 鞍馬灰。遼・明左右。12世紀後半。	
164SE01	無輪陶器	瓶	直	(20.0)	3.55		口縫部は正三角形に肥厚する。	内外面とも灰粘指輪。灰オリーブ色に発色。	奈良系の玉瓶。10世紀代。	
165SE01	施錆陶器	蓋	直	(19.5)	2.6	(14.0)	平底。体部は直立する。口縫部は上面に水平に溝道をもつ。	内面裏と側面 ヨガナデ調査。内面 一部外縁 面粘指輪の跡。一部 ヨガナデ調査。体部外縁 下端～底部外縁に露窓。	产地不明。埴土から見、越後系。	
166SE01	染付容器	碗	直	(3.15)	4.25		洗面の墨書きは薄い。高台は比較的締く。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内面裏は墨書きと白墨書き。外面 墨書き文と白墨書き。高台中央に白墨書き。	肥後系。淡墨書きのくわんか手。13世紀代。	
167SE01	染付容器	碗	直	(3.0)	4.5		高台に墨書きの墨書き。体部は内側気味に斜め上方に立ち上がる。	内面裏 墨書き文。外面 墨書き文。源氏風。	肥前系。12世紀代。	
168SE01	白磁	伝呂碗	直	(5.0)	4.05		平底。底盤外縁に洗面。周辺部は直立。腹部は縦やかに斜め上方に延びる。	内外面とも透明白磁。灰白色に発色。底部外縁に露窓。	肥前系。12世紀代。	
169SE01	無輪陶器	手二丁焼	直	(2.9)	0.8	(1.85)	手二ねじ目調査。平底(上口彫)。口縁部を花卉状に施す。平底部は梅花をかたどる。	手二ねじ目調査。底部外縁～底盤部を施す。底部外縁は露窓。	ニミニチャ焼。	
170SE01	無輪陶器	皿子	長2.05	幅2.75	厚1.1		ほぼ円形。	無輪陶器指輪を円形に打ち欠いて作製。	直底は傳・吉百石御林か？	
171SE01	土製品	ミニチュア	高(1.8)	幅(1.5)	厚さ1.6		模型作り。両製作。鉈形、彫影、彫影を欠く。体部外縁に露窓2箇。		右は全く不規則。用途不詳。	
172SE01	土製品	ミニチュア	長(3.2)	幅(2.7)	厚1.55					
173SE03	土縫器	皿	直	(8.5)	1.7		非クロコ形。平底。体部は僅かに内側気味に斜め上方に延びる。	手づくね痕形。上部の内面に青海波文をへらすで施す。	色調に応じ黄褐色。更迭子の可能性か？	
174SE03	土縫器	皿	直	(13.0)	2.25		非クロコ形。平底。体部は縦やかに、直線的に斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味。	口縫部内面 強いコナデ調査。底部外縁 ヨガナデ調査。底部外縁に接ぎ目がある。	色調に応じ黄褐色。V02種 12世紀中～後。	
175SE03	土縫器	皿	直	(13.4)	3.15		非クロコ形。体部は縦やかに斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味。	口縫部内面 ヨコナデ調査。体部外縁 接ぎ目がある後、ナジ調査。	色調に応じ黄褐色。	
176SE03	土縫器	皿	直	(28.0)	3.6		口縫部外縁に、側の痕跡の段差もつ。	粘土巻き上げ成形。口縫部内面 ヨコナデ調査。体部外縁 ヨガナデ調査。底部外縁 ヨガナデ調査。底部外縁に接ぎ目がある。	色調 淡黄褐色。傳田中 12世紀末～室町。	
177SE03	土縫器	皿	直	(26.6)	3.6		口縫部はほぼ水平に外方に引け曲げる。	口縫部内面 ヨガナデ調査。底部外縁 ヨガナデ調査。底部外縁 接ぎ目ある後、ナジ調査。	色調 黄褐色。麗形 12世紀末～12世紀半。	
178SE03	摸索器	皿	直	(16.6)	7.0		体部は内窓。口縁部は「J」の字状に落す。外方にひらく。	粘土巻き上げ成形。口縫部外縁 ヨガナデ調査。底部外縁 ヨガナデ調査。体部外縁に平行な凹凸がある。体部内面 口窓の後、各方向のナジ調査。一部に却角がある。	色調 灰色。東京系灰。	
179SE03	摸索器	こね餅	直	(4.0)			口縫部は斜め方向に切る。	内外面とも透明白磁。	口縫部外縁に落す痕。東京系灰。13世紀初。	
180SE03	無輪陶器	鉢	直	(13.8)	5.95	(13.5)	平底。や上げ底気味。体部は直立。口縁部上縁に水平に溝道をもつ。	口縫部～体部内面 口縫部アダ調査。底部内面 口窓の後、ナジ調整。底部外縁 ハラカニテ調査。体部～底盤部外縁 ヨガナデ調査。底部外縁 ヨガナデ調査。	色調 内面 に応じ青磁。外縁 反轉輪調。傳田中 12世紀後半～13世紀初。	
181SE03	無輪陶器	板	直	(2.8)	4.6		高台は比較的締く。低い。体部は縦やかに斜め上方に延びる。	内面裏と反轉輪調。灰オリーブ色に発色。底部外縁 ヨガナデ調査。外縁は露窓。	色調 灰色。12世紀後半～13世紀初。	
182SE03	無輪陶器	皿	直	(2.75)	4.65		高台は広がる(比較的締く)。体部は縦やかに斜め上方に立ち上がる。	内面裏と反轉輪調。灰オリーブ色に発色。底部外縁 ヨガナデ調査。外縁は露窓。	色調 灰色。12世紀後半～13世紀初。	

報告番号	出土場所	種類	器種	口径(cm)	縦高(cm)	横径(cm)	形態・成形技術の特徴	文様・調整技術の特徴	参考
183 SK02から 出土する小皿	青磁	碗		(3.1)	(7.2)		底面の唇部は非常に深い。高台は幅が広く、低い。体部は底やかに斜め上方に張り出る。	内外面とも背面施釉。底オーバー色に発色。	龍泉系青磁器。13世紀代。
184 SK03	白磁	盘		(2.15)	(4.1)		底面の唇部は非常に深い。高台は断面形状が底面に近く傾げたす。	内外面とも透明白釉。底白色に朱色、底部内面の柱状彫りハギ。外縁の高台部以下露胎。	龍泉系 白瓷異具の複製の白磁。16世紀前半。
185 SK03	染付磁器	盒		(7.35)	(4.6)		底面の唇部は比較的厚い。体部は底やかに斜め上方に張り出る。	外縁 施絵2条。内面 调整。	朝鮮系 油塗。16世紀代。
186 SE03	染付磁器	碗		(11.4)	(6.3)	(4.3)	底面の唇部は比較的高い。高い。体部は下位で直筒、直筒的に斜め上方に張り出る。	体部外腹にコンニャク印刷で、垂花に変形文。	肥前系 通常作風。66 cmとかす。14世紀前半。
187 SE03	染付磁器	皿		(1.3)	(6.0)		底面の唇部は高い。高台は底が広く、浅く傾げたす。体部は底やかに斜め上方に立上がり。	内外面とも直筒施釉。底白色に朱色。	肥前系 染付磁器 初 期の良品。17世紀前半。
188 SE03	土製品	匣子		長2.95	幅2.9	厚0.5	蓋作り模様。円形。	上面に押出しで「桃」模文。下面 用おきえ。	赤褐色 にぶい橙色。
189 SK01	無釉陶器	壺		(11.3)	(3.3)		縦部は直立。口縁部は笠状に膨らむ。	内外面とも即ちナデ調整。	赤褐色 壁面削り。16 世紀代か?
190 SK03	無釉陶器	鉢			(3.2)		口縁部は断面三角形状。僅かに底って、口を斜めに突出す。口縁部と底上部に下縁を向方にそぞぞれさせています。	内外面とも即ちナデ調整。	赤褐色 にぶい褐色。丹波窯か?
191 SK08	度量器	瓶		(13.5)	(3.0)		体部は直筒に内側気泡に斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。口縁部に僅かに斜め上方に張り出る。	内外面とも即ちナデ調整。	火入くれの底跡あり。東 洋系須恵器。
192 SK09	瓦器	瓶			(1.0)		(3.6) 斜面凹凸舟形部の追加した蓋合を貼り付ける。	外縁 ナデ調整。内面 ミコナデの後、ミガヒ調整。壁面が残る。	赤褐色 色調。
193 SK09	瓦器	瓶		(14.4)	4.75	(4.0)	瓶底に舟形部の底面に斜め上方に張り出る。体部は直筒に内側気泡に斜め上方に張り出る。口縁部は僅かに外反。	瓶底は直立する。口縁部の外腹 ミコナデ調整。体部外腹、底おきえの後、ミガヒ調整。瓶底が残る。体部内腹 ミガヒ調整。	赤褐色 灰色、丹 波窯か?
194 SK09	瓦器	瓶		(13.6)	(4.2)		底面の摩擦が著しい。底部は直筒に内側気泡に斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内腹、底口ナデ調整。体部外腹に押出し模様。底おきえの後、ナデ調整。底部直筒が残る。体部内腹 ミガヒ調整。	赤褐色 反色。
195 SK09	度量器	瓶		(16.6)	(4.9)		体部は直筒に内側気泡に斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	内外面とも即ちナデ調整。	口縁部外腹に重ね直 板、赤褐色 反色。東洋 系須恵器。
196 SK09	度量器	瓶			(2.65)		(8.1) 斜面適合部のしかけられた底面を貼り付ける。体部は直筒に斜め上方に張り出る。	内面と舟形部 ナデ調整。底部外腹 回転ヘア 引の底。ナデ調整。	赤褐色 黄褐色。
197 SK12	土器皿	鍋		(37.4)	(8.85)		体部は内側して斜め上方に張り出る。口縁部は「く」の字形に屈曲して、大口向外にひらく。	口縁部外腹 ミコナデ調整の後、底おきえ、ナデ 調整。体部外腹 ナデ調整。口縁部内腹 ミコ ナデ調整の後、後方向ハケナデ調整。体部内 腹 縦横4種方向のナデ調整。	赤褐色 鎌形印 章 13世紀前半。
198 SK12	度量器	瓶		(19.5)	(4.65)		体部は直筒に内側気泡に斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	内面と舟形部 ナデ調整。	口縁部外腹に重ね直 板、赤褐色 反色。東洋 系須恵器。
199 SK12	台磁	瓶		(4.25)			底面の唇部は非常に深い。高台は比較的高い。 低い。体部は内側気泡に斜め上方に立ち上がる。	内面の体部は直筒の底に低い底をもつ。内面 底部の摩擦が著しい。外腹 高台部まで 施釉。底台面は上部に残る。	横手・舟形印 章 12世紀後半。
200 SK13	土器皿	培根		(24.4)	(5.7)	(24.4)	底面は直筒。蓋作り模様(模塑型)。体部は内 腹。口縁部は上部に残る。	内外面ともミコナデ調整。	赤褐色 壁面削り。17世 紀中葉~後半。
201 SK13	度量器	体		(28.2)	(4.25)		底面は直筒に斜め上方に張り出る。口縁部は丸 みをもつ。	口縁部内腹面 ミコナデ調整。口縁部外 腹 ナデ調整。底部内腹 ミコナデ調整の後、 横方向4種方向のナデ調整。	赤褐色 灰色。東洋系 須恵器。
202 SK15	土器皿	皿		(6.8)	(1.6)	(3.7)	盤面は全体に摩擦。非ロコロ形。器底は比較的 高い。	口縁部内腹面 ミコナデ調整。口縁部外 腹 ナデ調整。底部内腹 ナデ調整。	赤褐色 にぶい黄褐色。 V字切削 12世紀中葉~後 半。
203 SK15	土器皿	皿		(6.8)	1.4		底面にクロロ底紋。器底の摩擦が著しい。器底は不規則的。 底部は直筒の底の界は非常に浅い。体部は直 筒で、底やかに斜め上方に張り出る。	口縁部内腹面 ミコナデ調整。底部外腹 ナ デ調整の後、ナデ調整。底部内腹 指さげの底。 底やかに斜め上方に張り出る。	赤褐色 黄褐色。V字 切削 12世紀後半。
204 SK15	土器皿	皿		(9.8)	1.35	(4.1)	底面にクロロ底紋。体部外腹(底面)に斜め上方に 張り出る。口縁部は少しだけ気泡。	口縁部内腹面 ミコナデ調整。底部外腹 ナデ調整の後、ナデ調整。底部内腹 不定方向 のナデ調整。	赤褐色 にぶい黄褐色。 VA16横 12世紀中葉~後 半。
205 SK15	瓦器	柄		(14.8)	(3.7)	(6.0)	底面。高台は一部欠けたもの。底面は不規 則で、底やかに内側気泡に斜め上方に張り出る。	口縁部内腹面 ミコナデ調整。底部外腹 ナデ調整の後、ナデ調整。底部内腹 指さげの底。 底やかに内側気泡に斜め上方に張り出る。	赤褐色 黄褐色。底 部内腹 指さげの底。
206 SK15	瓦器	柄		(14.4)	(3.95)		器底は全体的に摩擦する。体部は内側気泡に 斜め上方に張り出る。口縁部は突り気泡。	口縁部内腹面 ミコナデ調整。底部外腹 ナデ調整の後、ナデ調整。底部内腹 体 部内腹 指さげの底。	赤褐色 黄褐色。
207 SK23	土製品	器口		長(7.85)	幅(6.3)	厚(3.55)	全體に摩擦は確認する。	外縁 ナデ調整。	赤褐色 桜色。
208 SD102	土器皿	皿		(7.3)	1.6	(8.3)	底面にクロロ底紋。底面、体部は直筒で、底や かに内側気泡に斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをも つ。	口縁部内腹面 強いミコナデ調整。底部外腹 指さげの底の後、ナデ調整。底部内腹 上げナ デ調整。	赤褐色 にぶい黄褐色。 VA12横 12世紀後半~13世 紀前半。
209 SD102	土器皿	皿		(14.7)	2.45	(7.75)	底面にクロロ底紋。平底。体部と底の界は明確 で、体部は直筒的に斜め上方に張り出る。	器底部外腹 ハクナデ調整の後、指さげ、ナ デ調整。底部内腹 指さげの底。底部外腹 ナデ調整。体部内腹 横方向4種方向のナデ調整。	赤褐色 滑潤器皿。VS16 横 12世紀後半~13世 紀前半。
210 SD102	土器皿	皿		(5.6)			体部は直筒で、外腹に断面形状が舟形部の比較的 高い。底面に内側気泡を貼り付ける。	口縁部内腹面 ミコナデ調整。底部外腹 ナデ調整の後、指さげの底。底部内腹 指さ げの底。	赤褐色 滑潤器皿。指さ げ にぶい黄褐色。
211 SD102	瓦器	柄		(14.6)	(3.6)		器底は完全に無い。体部は直筒に内側気泡に 斜め上方に張り出る。口縁部は突り気泡。	口縁部内腹面 ミコナデ調整。底部外腹 ナデ調整の後、指さげの底。底部内腹 指さ げの底。	赤褐色 黄褐色。
212 SD102上部	瓦器土器	火鉢		(9.85)	(0.16)		平底形状は長方形。四隅に脚を貼り付ける。	器底部外腹 ハクナデ調整の後、ナデ調整。	灰世。

報告No.	出土場所	器種	器形	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	形態・装飾法の外観	文様・装飾法の特徴	備考
213 SD102	須恵器	壺		(1.58)	(5.4)		高台は低い高台。体部は縦やかに斜め上方に立ち上がる。内部内面に斜め壁をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。高台の側壁は不規整。底毎に内面・外側面を削り抜いた。	色調 深灰。茎葉系須恵器。12世紀前半。
214 SD102上巻	白磁	碗		(2.70)	(6.70)		幅が広く低い高台を漸く削りだす。	底盤内面・北縁1条。内面 透明釉施脂。例才リーブ状に舟形。外底 青磁。	須恵 壺三分割 白磁
215 SD102上巻 のSD103	瓦	丸瓦	轍(10.1)	幅(6.25)	厚1.75		高台 口二方向のナデ調整。凹面 布目底面・コジを保。		色調 深灰色。
216 SD104	青白磁	合子		(5.8)	(2.10)		体部は僅かに内腹気泡に傾む直上に昇る。口縁部上巻は水平に輪郭をもつ。	体部内面に二階きの花文が施文。内外面とも青磁難然。	蓋付鉢系青白磁。13世紀代。
217 SD105	土師器	壺		9.06	1.5	5.25	高口成形。平底。体部は僅かに斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 傾いコナデ調整。底部外面 おさえ込み。ナデ調整。底部内面 ナデ調整。	色調 に深い黄褐色。V字縫 付け脚中腹へ接続。
218 SD106	土師器	壺		(4.8)	1.5	5.25	非口口成形。底平。体部は僅かに内腹気泡に斜め上方に昇る。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 傾いコナデ調整。底部外面 おさえ込み。ナデ調整。底部内面 が僅かに残る。底盤内面 仕上げナデ調整。	口縫部内外面 傾いコナデ調整。底部外面 おさえ込み。ナデ調整。底部内面 が僅かに残る。底盤内面 仕上げナデ調整。
219 SD107	土師器	壺		14.75	2.62	9.75	非口口成形。平底。体部は漸次に傾む上方に昇る。口縁部は直に二段に上る。	口縫部内外面 傾いコナデ調整。外部の脚部 おさえ込み。ナデ調整。底部内面 ナデ調整。	口縫部内外面 傾いコナデ調整。外部の脚部 おさえ込み。ナデ調整。底部内面 ナデ調整。
220 SD108	須恵器	ごね鉢		(27.2)	(4.05)		体部は僅かに内腹気泡に斜め上方に昇る。口縁部はほぼ水平に輪郭をもつ。	軸上部をよく成形。内外面とも回転ナデ調整。軸下部をよく成形。内外面とも回転ナデ調整。	底盤 硬質。白色。底盤 透明底足。12世紀前半。
SD105 1+2	須恵器セクション	須恵器	壺		(3.05)		幅の広い高台を浅く削りだす。体部は縦やかに斜め上方に立ち上がる。軸部内面に浅い窪みをもつ。	内外面とも反弧施脂。底オリーブに黄色。軸付部付近下端點。内面に日浦2型器。	蓋付鉢系須恵器。17世紀前半。
222 SD105	須恵器	瓶			(3.9)		高台と比較的縦く高い。体部は内腹気泡に斜め上方に昇る。	内軸部と底筋跡の後、ナデ調整。指捺底部が残る。底盤内面 亂ねさせた後、ナデ調整。	須恵 瓶。川越型。17世紀前半～18世紀前半。
223 SD106	施排水器	壺			(2.15)	3.2	平底。底盤の器壁は高い。体部は内腹して斜め上方に立ち上がる。	口縫部内外面 傾いコナデ調整。外部の脚部 おさえ込み。軸部内面 亂ねさせた後、ナデ調整。	近世。底面不規。
224 SD106	白磁	瓶			(2.5)		底盤の器壁は非常に高い。	内軸部と底筋跡跡。明暦黃色に黄色。外軸部の底盤内面に点状痕が残る。	肥前系の白磁。17世紀前半。
225 SD105	青磁	瓶			(2.4)		新正方形足の瓶が広く低い。体部は縦やかに斜め上方に立ち上がる。	内軸部と底筋跡跡。明暦黃色に黄色。底盤内面の餘は白の目状に膨らむ。軸筋跡を残す。	肥前系の青磁。18世紀前半。
226 SD105	青磁	瓶		(17.3)	(4.55)		体部は僅かに内腹する。口縫部は浅縫状に肥厚する。	内外面とも青磁難然。柄オリーブ灰中に黒帯。	豊後青磁系。18世紀代。
227 SD105	染付磁器	瓶			(3.05)	3.25	底盤の器壁は高い。底盤は注釈的縦く低い。体部は縦やかに斜め上方に昇る。	外腹 口ニャック年付で施された草花文落款。	肥前系 色見焼のくわん手。18世紀前半。
228 SD105南端 染付磁器	瓶	瓶		(5.6)	4.7		高台は幅が広く比較的高い。裏蓋をトサ付に削り残す。体部は直に斜め上方に昇る。口縫部は外方にひかる。	外腹に草花文落款。高台付付 南高麗製。	近世系朝鮮伊万里。17世紀前半。
229 SD106	土師器	壺			(7.45)		形状は半球形。器壁は非常に高い。	印成底部。外腹 根付状の印き台が残る。底盤内面おさえの朱。ナデ調整。	色調 外腹 橙色。内面 黑色。
230 SD106	瓦	斜平瓦	長(7.1)	幅(6.5)	厚1.9		瓦当頭は剥離。	高面 口二方向・タテ方向のナデ調整。底面 タテ方向のナデ調整。	色調 深灰色。
231 SD105	瓦	平瓦	長(8.5)	幅(6.6)	厚1.8		高面 平瓦の後、タテ方向のナデ調整。底面 オコゼ方向のナデ調整。一括にナデ正規がある。		色調 灰色。
232 SD105(底か れ)瓦	瓦	平瓦	長(11.75)	幅(7.15)	厚1.75			高面 タテ方向のナデ調整。底面 布目底頭が残る。	色調 底灰白色。
233 SD106	須恵器	壺			(4.7)	7.05	高台は「ハ」の字状に外方に立ち込める。底盤の器壁は比較的厚く、体部は僅かに内腹して斜め上方に立ち上がる。	体部外腹 回転ヘアヨリの後、ナデ調整。底盤外腹 回転ヘアヨリの後、ナデ調整。体部内面 回転ナデ調整。	色調 深灰白色。施脂 硬質。
234 SD106	土師器	土拂	長2.8	幅1.0	厚0.95		平底状は網脚形。棒状のものに黏土を巻きつけて成る。	外腹 ナデ調整。	色調 に深い黄褐色。
235 SD110	土師器	壺		(9.1)	1.0	(9.4)	非口口成形。平底。体部は縦く内縮する。	底盤内面～体部外腹 ヨコナデ調整。底盤外腹 多方向のナデ調整。	色調 に深い黄褐色。米原系、ゴーストアート。V字縫 12世紀後葉～13世紀前半。
236 SD110	土師器	壺		(8.8)	1.4	(4.2)	非口口成形。平底。や上げ底気泡。体部と底盤の器壁は平行線。体部は縦やかに斜め上方に昇る。	口縫部～体部外腹 ヨコナデ調整。底盤外腹 斜め内腹 ヨコナデ調整。底盤内面 1方向のナデ調整。	色調 に深い黄褐色。
237 SD110	土師器	壺		8.95	1.6	5.0	非口口成形。平底。体部は縦やかに内腹気泡に斜め上方に昇る。口縫部は丸みをもつ。	口縫部内面 平底に広げた状態。背部の外腹 ヨコナデ調整。底盤外腹 清酌内腹 おさえ込み。多方の向のナデ調整。底盤内面 ナデ調整。	色調 に深い黄褐色。米原系、ゴーストアート。V字縫 12世紀後葉～13世紀前半。
238 SD110	土師器	壺		8.2	1.5	4.9	非口口成形。平底。体部は縦やかに内腹気泡に斜め上方に昇る。口縫部は丸みをもつ。	口縫部～体部内面 ヨコナデ調整。底部内面 ナデ調整。	内腹に保護層。色調 に深い黄褐色。V字縫 12世紀後葉～13世紀前半。
239 SD110	土師器	壺		13.95	2.9		平底。底盤と器壁の厚は比較的薄く体部と底盤は直角に斜め上方に昇る。	青口口成形。口縫部内外腹 深いコナデ調整。外腹の底部へ落部 手捺きの後、ナデ調整。底盤外腹 倒伏する。底盤内面 ナデ調整。	表面は若干薄溝する。色調 に浅い黄褐色。V字縫 12世紀後葉～13世紀前半。
240 SD110	土師器	壺		13.7	2.75	8.15	非口口成形。平底。体部は直角的に斜め上方に昇る。口縫部は丸みをもつ。	器壁の厚さが薄いため、調整技法はほとんど実現できない。口縫部内外面 ヨコナデ調整。	表面に保護層。色調 に浅い黄褐色。V字縫 12世紀後葉～13世紀前半。
241 SD110	土師器	壺		(14.4)	(2.6)	(16.9)	器壁は全体に厚度。非口口成形。平底。体部は直角的に斜め上方に昇る。	口縫部～体部内外面 ヨコナデ調整。底盤内面 多方向のナデ調整。	表面に保護層。色調 に浅い黄褐色。V字縫 12世紀後葉～13世紀前半。

番号	出土場所	種別	器種	高さ(cm)	基部(cm)	底径(cm)	特征-波打技法の特徴	文様-模様技法の特徴		備考
								内面	外面	
242	SD110	土器器	皿	(14.8)	2.4	(6.8)	直底。体部は僅かに内腹気味に斜め上方に盛る。口縁部は尖り気味。	口縁部内外面 強いココナラ模様。底部外表面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。底部内面1方の内側にナガニテ模様。	青緑 暗褐色。VIA 1世紀後半。	
243	SD110	土器器	皿	(11.0)	(2.45)	(7.8)	平底。体部は直線的に斜め上方に盛る。口縁部は尖り気味。	口縁部内外面 強いココナラ模様。体部外表面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。指さされると底部内面指さされると下方に向む。	青緑 暗褐色。VIA 1世紀後半~10世紀初頭。	
244	SD110	土器器	皿	(25.8)	(7.1)	(7.1)	体部は丸太(内窓)。底部は直立。口縁部は外方にひらく。	口縁部内外面 強いココナラ模様。底部外表面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。指さされると底部内面指さされると下方に向む。	色調 暗灰色。影的には強烈な器蓋に似る。	
245	SD110	土器器	皿	(23.6)	(8.45)	(8.45)	体部は直線気味に斜め上方に盛る。口縁部は斜め上方に盛る。比較的横の深い凹みを残す。	口縁部内外面 強いココナラ模様。体部外表面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。	青緑 暗褐色。VIA 1世紀後半~10世紀初頭。	
246	SD110	瓦器	唐	(16.4)	(4.1)	(4.1)	体部は僅かに内腹気味に斜め上方に盛る。口縁部は丸をもつ。	口縁部内外面 強いココナラ模様。底部外表面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。	色調 暗灰色。	
247	SD110	瓦器	柄	(15.3)	4.1	(5.2)	直底。背面三角形状の低い台高を貼り付ける。体部は内腹気味に斜め上方に盛る。	口縁部内外面 強いココナラ模様。体部外表面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。	色調 暗灰色。	
248	SD110	瓦器	柄	(15.0)	4.1	(4.0)	直底。背面三角形状の低い台高を貼り付ける。体部は内腹気味に斜め上方に盛る。	口縁部内外面 強いココナラ模様。体部外表面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。	色調 暗灰色。	
249	SD110	瓦器	柄	(8.2)	2.6	(3.8)	平底(九度変形)。体部と底部の内面は不規則で、底部は横やく(直め)の上方に盛る。	口縁部内外面 強いココナラ模様。体部外表面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。	色調 暗灰色。	
250	SD110	瓦器	柄	(7.8)	1.85	(5.8)	平底。体部は直線的に斜め上方に盛る。底部の盛りは厚い。	口縁部内外面 強いココナラ模様。底部内面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。底部内面へらが生む。	色調 暗灰色。	
251	SD110	漆器器	皿	(7.8)	2.1	(5.4)	平底。体部は内腹気味に斜め上方に盛る。口縁部は丸をもつ。	口縁部内外面 強いココナラ模様。体部外表面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。	色調 暗灰色。	
252	SD110	漆器器	鉢	(27.8)	(4.2)	(4.2)	体部は直線的に斜め上方に盛る。口縁部は丸をもつ。	内腹面にも強烈なナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。	青緑 暗灰色。	
253	SD110- SD105	漆器器	こね鉢	(8.5)	(3.8)	(3.8)	直底(平底)。体部は僅かに内腹気味に斜め上方に盛る。	内腹面にも強烈なナガニテ模様。高台の側面は不規則で、底部内面指さされると下方に向む。	青緑 暗灰色。	
254	SD110	無軸陶器	輪鉢	(32.0)	(8.45)	(8.45)	体部は直線的に斜め上方に盛る。口縁部は直線的に斜め下方へもつ。口縁部を蛇口式に仕切る。	内腹面とも強烈なナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。	青緑 暗灰色。	
255	SD110	無軸陶器	輪鉢	(32.0)	(8.45)	(8.45)	体部は直線的に斜め上方に盛る。口縁部は直線的に斜め下方へもつ。口縁部を蛇口式に仕切る。	底部内面上げ成形。内腹面とも強烈なナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。	青緑 暗灰色。	
256	SD110	最下層	無軸陶器	(5.25)	(15.2)	(15.2)	平底。体部は直線的に斜め上方に盛る。	底部内面にへらが生む。内腹面とも強烈なナガニテ模様。内腹面の鈎はほとんど消滅。	東南の典型的な模様。 か?14世紀代。	
257	SD110	最下層	無軸陶器	(1.8)	4.0	4.0	高台は鈎が直ぐ比較的高い。高台面をトサ状に盛る。	内腹面とも強烈なナガニテ模様。高台面の鈎をきたる。	研究系譜? 14世紀前半。	
258	SD110	最下層	器	(16.30)	(3.8)	(3.8)	体部は僅かに内腹気味に斜め上方に盛る。	内腹面とも強烈なナガニテ模様。底面はナガニテ模様。	織田・森田分類 白羅 IV層。12世紀後半~13世紀前半。	
259	SD110	最下層	瓦	平瓦	長(3.1)	幅(2.16)	型作り成形。	唐草文瓦。凸凹面ともナガニテ模様。	色調 暗灰色。	
260	SD110	最下層	瓦	平瓦	長(7.9)	幅(6.35)	厚1.10	凸面 斜め方向のナガニテ模様。筋葉 布引圧成、中央部解剖面。	色調 暗灰色。	
261	SD110	最下層	瓦	平瓦	長(9.25)	幅(6.55)	厚1.9	凸面 番号自ら吹きが残る。凹面 布引圧成。	色調 暗灰色。	
262	SD110	最下層	瓦	丸瓦	長(11.6)	幅(8.4)	厚1.6	凸面 番号自ら吹きが残る。凹面 布引圧成。	色調 暗灰色。	
263	SD110	最下層	瓦	丸瓦	長(9.5)	幅(6.2)	厚1.85	凸面 斜めびびりナガニテ模様。凹面 布引圧成が残る。	色調 暗灰色。	
264	SD110-111- 文多集石	瓦器	唐	(14.8)	4.2	4.15	直底。体部は僅かに内腹気味に斜め上方に盛る。	口縁部内外面 強いココナラ模様。底部外表面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。底部内面へらが生む。	青緑 暗灰色。	
265	SD110-111- 文多集石	瓦器	唐	(14.7)	3.7	3.7	直底。直しきした半円形を盛る裏面を貼り付ける。体部は内腹気味に斜め上方に盛る。	裏面は薄く削減して、調整は不明。口縁部内外面 強いココナラ模様。	青緑 暗白色。	
266	SD110-111- 文多集石	度器器	皿	(8.8)	(8.8)	(8.8)	平底。体部は直線的に斜め上方に盛る。	内腹面とも強烈なナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。	青緑 暗灰色。東南系譜。	
267	SD110-111- 文多集石	無軸陶器	輪鉢	(29.3)	(8.6)	(8.6)	体部は直線的に斜め上方に盛る。口縁部は直線的に斜め下方へもつ。	内腹面とも強烈なナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。	青緑 暗灰色。西向。	
268	SD110-111- 文多集石	白磁	碗	(18.5)	(4.2)	(4.2)	直底。内腹気味に斜め上方に盛る。	内腹面とも強烈なナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。	織田・森田分類 台場 IV層。12世紀後半~13世紀前半。	
269	SD110-111- 文多集石	白磁	碗	(2.8)	(8.80)	(8.80)	直底。内腹気味に斜め上方に盛る。	内腹面へ刻まれた後、ナガニテ模様。高台面にへらが生む。内腹面強烈なナガニテ模様。	織田・森田分類 台場 IV層。12世紀後半~13世紀前半。	
270	SD111	土器器	皿	(9.5)	1.4	(5.8)	平口クロ成形。平底。やや上方度気味。体部は直線的に斜め上方に盛る。	口縁部内外面 強いココナラ模様。底部内面指さされると下方に向む。ナガニテ模様。底部内面指さされると下方に向む。	青緑 暗黄色。	

被呑名	出土場所	種類	高さ(cm)	口径(cm)	基部(cm)	底面(cm)	形態・成形法の特徴	文様・模様法の特徴	備考
271 SD111	須恵器	鉢	(29.2)	(6.2)			体部は直線的に斜め上方に傾き、口縁部は上方につまみ上げる。	底部基部上げ成形。外部と内側とも網目ナガ調整、体部内側につら拂で横目状に丸文?。	色調 灰色、美濃系須恵器、12世紀後半。
272 SD111(石 室)	須恵器	鉢	(19.0)	8.65	(3.0)		平底。体部は直線的に斜め上方に傾きる。口縁部は上面に瘤状物をつむ。	内外面とも横目ナガ調整、造形上面 余計な面 条切がれ模様。 (残端余切)。	色調 灰色、美濃系須恵器。
273 SD111 3区	無鉢陶器	壺		(5.15)			口縁部は大きく外方にひらく。	口縁部内外面 強い凹凸ナガ調整。体部内面 ヘラケツの後、ナガ調整。	口縫部内面 弧状に凹張り、体部外面 弧状 肌触感が一寸口筋で解消。 内底面 12世紀前半。
274 SD111	瓦	軒平瓦	長3.95		厚2.1		製作成形。	唐草文瓦。凸凹面ともナガ調整。	
275 SD111	瓦	軒平瓦	長3.85		厚1.8~ (1.8)		製作成形。	唐草文瓦。凸凹面ともナガ調整。	色調 灰色。
276 SD113-110 文点	土師器	皿		8.8	1.00		解剖は全体に覆む。平底。底部と体部の界は不規則で体部は内側から斜め上方に傾きる。	口クロロ成形。口縁部内外面 強いコナガ調整。体部内外面 ヨコナガ調整。	表面の凹凸が強いため、底部外側に斜め上方に傾き、底面もつぶ。色調 ないし褐色。 V35に記 12世紀後半-13世紀前半。
277 SD113-110 文点	土師器	皿		8.75	1.8		平底。体部と底部の界は不明瞭で、体部は緩やかに斜め上方に傾きる。口縁部は尖り気味で内側に凹む。	口クロロ成形。口縁部内外面 強いコナガ調整。体部内外面 ヨコナガ調整。	表面の凹凸が強いため、底部外側に斜め上方に傾き、底面もつぶ。色調 ないし褐色。 V35に記 12世紀後半-13世紀前半。
278 SD113-110 文点	土師器	皿		8.85	1.65		解剖は全体に大きく盛る。平底。底部と体部の界は不規則で体部は緩やかに斜め上方に傾きる。	口クロロ成形。口縁部内外面 強いコナガ調整。体部内外面 ヨコナガ調整。	表面の凹凸が強いため、底部外側に斜め上方に傾き、底面もつぶ。色調 ないし褐色。 V35に記 12世紀前半。
279 SD112-110 文点	土師器	皿		13.20	3.05		平底。底部の解剖は比較的深い。底部と体部の界は直角で体部は緩やかに斜め上方に傾きる。	口クロロ成形。口縁部内外面 強いコナガ調整。体部内外面 ヨコナガ調整。	表面の凹凸が強いため、底部外側に斜め上方に傾き、底面もつぶ。色調 ないし褐色。 V35に記 12世紀後半-13世紀前半。
280 SD110-113 文点地	土師器	皿		(13.4)	2.4		解剖口成形。平底。体部はやや内側へ斜める。	口縁部内外面 強いコナガ調整。体部と底部外側 お出しえの後、ナガ調整。底面底が残る。底部内面 不定方向のナガ調整。	表面の凹凸が強いため、底部外側に斜め上方に傾き、底面もつぶ。色調 ないし褐色。 V35に記 12世紀後半-13世紀前半。
281 SD112-110 文点	土師器	皿		14.8	2.4		解剖は全体に覆む。平底。体部は緩やかに斜め上方に傾きる。口縁部は尖り気味に凸む。	口クロロ成形。口縁部内外面 強いコナガ調整。体部内外面 ヨコナガ調整。	表面の凹凸が強いため、底部外側に斜め上方に傾き、底面もつぶ。色調 ないし褐色。 V35に記 12世紀後半-13世紀前半。
282 SD113-110 文点	土師器	皿		14.35	2.90		平底。器壁は全体に比較的深い。底部と体部の界は直角で体部は直線的に斜め上方に傾きる。	口クロロ成形。口縁部内外面 強いコナガ調整。体部内外面 ヨコナガ調整。	表面の凹凸が強いため、底部外側に斜め上方に傾き、底面もつぶ。色調 ないし褐色。 V35に記 12世紀後半-13世紀前半。
283 SD110-113 文点	須恵器	鉢	(30.1)	8.45	(2.2)		平底。体部は直線的に斜め上方に傾きる。口縁部は上方につまみ上げる。	口縫部内外面 強いヨコナガ調整。体部内外面 強いコナガ調整。底部外側に斜め上方に傾き、底面もつぶ。ナガ調整。底面外側 お出しえの後、ナガ調整。	色調 灰色、美濃系須恵器。
284 SD110- 112-113	瓦	窓	窓	14.8	4.45		解剖窓の直線化した高台状に付けける。底部と内側灰釉に施すもの上方に残る。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外面 強いヨコナガ調整。体部内外面 強いコナガ調整。	表面の凹凸が強いため、窓部外側 お出しえの後、ナガ調整。底部外側 お出しえの後、ナガ調整。
285 SD113 1区	土師器	皿		6.75	1.50		平底。体部と底部の界は不明瞭で、体部は緩かに斜め上方に傾く。	口クロロ成形。口縫部内外面 強いコナガ調整。底部内面 不定方向のナガ調整。	表面の凹凸が強いため、窓部外側 お出しえの後、ナガ調整。
286 SD113	土師器	皿		(3.4)	1.4		解剖口成形。平底。体部は緩やかに斜め上方に傾きる。口縁部は尖り気味。	口縫部内外面 強いヨコナガ調整。底部内面 不定方向のナガ調整。	表面の凹凸が強いため、窓部外側 お出しえの後、ナガ調整。
287 SD113 1区	土師器	皿		8.15	1.65		解剖口成形。平底。体部は直線的に斜め上方に傾きる。口縁部は丸みをもつ。	口クロロ成形。口縫部内外面 強いコナガ調整。底部内面 ヨコナガ調整。	表面の凹凸が強いため、口縫部内外面 強いコナガ調整。底部外側 お出しえの後、ナガ調整。
288 SD113	土師器	皿		8.15	1.4		解剖口成形。平底。体部は直線的に斜め上方に傾きる。口縁部は丸みをもつ。	口クロロ成形。口縫部内外面 強いコナガ調整。底部内面 ヨコナガ調整。	表面の凹凸が強いため、口縫部内外面 強いコナガ調整。底部外側 お出しえの後、ナガ調整。
289 SD113	土師器	皿		8.75	1.6		解剖口成形。平底。体部は直線的に斜め上方に傾きる。口縁部は尖り気味。	口縫部内外面 強いヨコナガ調整。底部内面 不定方向のナガ調整。	表面の凹凸が強いため、口縫部内外面 強いコナガ調整。底部外側 お出しえの後、ナガ調整。
290 SD113	土師器	皿		(3.4)	1.4		解剖口成形。やや上傾気味。体部は緩やかに斜め上方に傾く。	体部内面-口縫部外側面 強いヨコナガ調整。体部下面 に丸く設けた。体部外側 面お出しえの後、ナガ調整。底部内面 不定方向のナガ調整。	表面の凹凸が強いため、口縫部内外面 強いヨコナガ調整。底部外側 お出しえの後、ナガ調整。
291 SD113	土師器	皿		2.15			解剖口成形。平底。体部はほぼ直線的に斜め上方に傾く。	解剖は底面も丸みをもつ。口縫部内外面 強いヨコナガ調整。底部内面 不定方向のナガ調整。	表面の凹凸が強いため、口縫部内外面 強いヨコナガ調整。底部外側 お出しえの後、ナガ調整。
292 SD113	土師器	皿		(12.6)	3.05		解剖口成形。平底。体部はほぼ直線的に斜め上方に傾く。	解剖は底面も丸みをもつ。口縫部内外面 強いヨコナガ調整。底部内面 不定方向のナガ調整。	表面の凹凸が強いため、口縫部内外面 強いヨコナガ調整。底部外側 お出しえの後、ナガ調整。
293 SD113	土師器	皿		(12.2)	(2.95)		解剖口成形。平底。体部は直線的に斜め上方に傾く。	全体に表面は底面も丸みをもつ。口縫部内外面 強いヨコナガ調整。外側の口縫部の裏面の左側に丸みをもつ。底部外側 お出しえの後、ナガ調整。底部内面 不定方向のナガ調整。	表面の凹凸が強いため、口縫部内外面 強いヨコナガ調整。底部外側 お出しえの後、ナガ調整。
294 SD113	土師器	皿		14.15	2.25		解剖口成形。平底。体部は直線的に斜め上方に傾く。	口縫部内外面 強いヨコナガ調整。底部内面 不定方向のナガ調整。	表面の凹凸が強いため、口縫部内外面 強いヨコナガ調整。底部外側 お出しえの後、ナガ調整。

割合番号	出土場所	種類	基盤	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	参考・成形法の特徴	文様・調査法の特徴	備考
								内面	
295 SD113	土師器	鍋	口縁	0.33.0	(3.7)	(20.4)	体部は僅かに内側気泡にぼくぼく上に張る。口縁部は大きいくじの字状に凹凸、外方にひらく。	口縁部外側面、ヨコナギテ調査、体部外側ハバ日調査の後、ナマ調査。底面にハバ日が認められる。ヨコ筋部内面、ヨコナギテ調査の後、横方向のハバ日調査、体部内面、横方向のハバ日調査。	内面全面に埋め留め、色濃こい青褐色。輪郭正規、納瓶1期、12世紀後半。
296 SD113	土師器	鍋	口縁	0.33.1	(6.1)		口縁部は「く」の字状に隆起、外方にひらく。	器底特に内面の厚底が美しい。口縁部内面、腰い方向肉のハバ日調査、体部内面、比較的かいざき2方向のハバ日調査、外側の体部へ口縫合、テ調査。	器底二つぶり窓様、色濃こい青褐色。輪郭正規、納瓶1期、12世紀後半。
297 SD113 2-3	瓦器セクション	土師器	鉢	0.23.7	(4.0)		口縁部外側に断面三角形状の変化した綻を貼り付ける。	口縁部外側面、強いヨコナギテ調査。体部外側壁平仰付け窓様が残る。	輪郭型1型、15世紀後半~16世紀初頭。
298 SD113	瓦器	鉢	口縁	15.4	4.8		断面三角形状の変化した綻を貼り付ける。体部は僅かに内側気泡にぼくぼく上に張る。	口縁部外側面、強いヨコナギテ調査。体部外側壁平仰付け窓様が残る。	色譜、暗灰色。
299 SD113	瓦器	鉢	口縁	(15.5)	4.3	5.8	断面三角形状の変化した綻を貼り付ける。高台の平均断面形状は楕円形。体部は僅かに内側気泡にぼくぼく上に張る。口縫合部は丸みをもつ。	口縁部外側面、強いヨコナギテ調査。体部外側壁平仰付け窓様が残る。体部内面、口縫合部底張が残る。底張内面、口縫合部へ向かう半額調、底張内面、タラカ向のハバ日調査。	色譜、淡灰色。
300 SD113	瓦器	鉢	口縁	13.25	3.45	3.45	底面は2段以上で構成。僅かに口縫合部をはさんで高台と斜面の厚底が残る。口縫合部は僅かに内側気泡にぼくぼく上に張る。	底面は2段以上で構成。僅かに口縫合部をはさんで高台と斜面の厚底が残る。口縫合部は僅かに内側気泡にぼくぼく上に張る。底張内面、口縫合部へ向かう半額調、体部外側壁平おさえの後、ナマ調査。	色譜、黑色。
301 SD113	瓦器	鉢	口縁	(39.0)	(5.8)		体部は直線的に斜め上方に張る。口縫合部は斜め方向に切る。	底面粘着巻き上げ成形。内外面とも底張ナマ調査。	口縫合部外側に直ね拂痕、内面、反被毛、色濃こい青褐色。外側に輪郭正規、裏面底張、12世紀前半。
302 SD113 3回無縫接合	瓦器	鉢	口縁	(10.65)			体面は内面。	底面粘着巻き上げ成形。外側にスタンプで墨文、自然地模様がある。	青滑清11世紀代。
SD113 2-3	瓦器セクション	無縫陶器	鉢	(13.30)			体面は内面。	軽土粘着巻き上げ成形。外側にスタンプで墨文、自然地模様がある。	色譜、灰オリーブ色。
SD113 2-3	瓦器セクション	無縫陶器	皿	(36.0)	(2.00)		口縫合部は花状に成形。	底面内面、ヘビで花文調査。体部外壁、接縫まで花文調査。内外面とも灰暗地模様、底面は底張。	外側に反被毛、厚脚、黄系底張、18世紀代。
SD113 黒	白磁	皿	口縁	(2.40)	5.0		底面の厚底は非常に厚い。高台は幅が広く、比較的運動軌跡、灰白色に発色。外面、器底。	厚脚底張から。	厚脚底張から。
SD113 2回	青白磁	合子	口縁	(5.7)	1.95	(4.2)	手足、底盤は内側に張りぼり上面に張る。器のひきりはなく直立。	体部外側面に開拓して花文調査。内外面とも底張。	東南産青白磁。13世紀代。
SD113 中央	土師器	皿	口縁	7.8	1.1	2.65	器口クロ成形。平底。体部は旋じ内傾する。	口縫合部内面、ヨコナギテ調査、底面外側、輪郭内面、ナマ調査。底面内面、不特定方向のナマ調査。	色譜、にごい青色。底面、ニースターペル。12世紀前半。
SD115等厚壁出	土師器	皿	口縁	(7.0)	1.1	(5.5)	クロ底形、平底。体部は短く斜め上方に張る。	底面の厚底が残る。内面と外囲に凹凸ナマ調査。底面外壁、自然地模様がある。	色譜、綠色、近赤。
SD115等厚壁出	瓦器	鉢	口縁	(31.8)	4.3	(3.3)	断面三角形状の低い底面を貼り付ける。体部は僅かに内側気泡にぼくぼく上に張る。口縫合部は僅かに内側に張る。	底面は完全に埋め尽す。口縫合部外側、強いヨコナギテ調査。口縫合部内面および外側の体部半下以下は底張。	東南産青白磁。13世紀代。
SD115	瓦器	皿	口縁	(2.0)	(6.1)		底面台形の高い高台と斜面で構成する。体部は少しあわせ方に立ち上がる。	口縫合部内面、ヨコナギテ調査、底面外側、輪郭内面、ナマ調査。底面内面、不特定方向のナマ調査。	東南産青白磁。13世紀代。
SD115等厚壁出	土師器	皿	口縁	(7.4)	1.5	(5.6)	底面、体部は直線的に斜め上方に張る。口縫合部は丸みをもつ。	底面の厚底が残る。内面と外囲に凹凸ナマ調査。底面外壁、自然地模様がある。	色譜、青色、東南産青白磁。13世紀代。
SD115等厚壁出	土師器	皿	口縁	(18.5)	3.65		体部は直線的に斜め上方に張る。口縫合部は丸みをもつ。	口縫合部内面、ヨコナギテ調査。底面外側、輪郭内面、ナマ調査。底面内面、不特定方向のナマ調査。	口縫合部外側に直ね拂痕、口縫合上部に被毛、底張、灰白色。
SD115等厚壁出	土師器	皿	口縁	(30.5)	6.95		底面相手上げ成形。体部は直線的に斜め上方に張る。	口縫合部内面、強いヨコナギテ調査。底面内面、ヨコナギテ調査。	東南産青白磁。13世紀代。
SD115等厚壁出	土師器	皿	口縁	(29.6)	9.95	(9.4)	軽土粘着巻き上げ成形。体部は直線的に斜め上方に張る。口縫合部は斜め方向に切る。	口縫合部内面、強いヨコナギテ調査。底面内面、ヨコナギテ調査。	口縫合部外側に直ね拂痕、口縫合上部に被毛、底張、灰白色。
SD115等厚壁出	土師器	皿	口縁	(13.4)	2.6	(3.3)	高台はほとんど剥離化する。僅かに高台の土縁部を剥離する。体部は僅かに内側気泡にぼくぼく上に張る。口縫合部は丸みをもつ。	口縫合部の縁が日が明瞭に観察される。口縫合部内面、強いヨコナギテ調査。底面内面、ヨコナギテ調査。	口縫合部外側に直ね拂痕、口縫合上部に被毛、底張、灰白色。
SD115等厚壁出	土師器	皿	口縁	(9.2)	3.65		器口クロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に張る。	器底は深く埋め尽す。口縫合部内面、ヨコナギテ調査。	色譜、にごい青色、V10B2期。12世紀中葉~後半。
SD115等厚壁出	土師器	皿	口縁	(7.5)	1.4	3.5	器口クロ成形。器底は全くない。平底。体部は僅かに内側に張る。口縫合部は丸みをもつ。	口縫合部内面、強いヨコナギテ調査。底面内面、ヨコナギテ調査。	色譜、にごい青色、V10A2期。12世紀後半~13世紀前半。
SD115等厚壁出	土師器	皿	口縁	(13.4)	1.6		高台はほとんど剥離化する。僅かに高台の土縁部を剥離する。体部は僅かに内側気泡にぼくぼく上に張る。口縫合部は丸みをもつ。	器底は完全に埋め尽す。口縫合部内面、ヨコナギテ調査。	器底に半分埋没する。口縫合部内面、強いヨコナギテ調査。底面内面、ヨコナギテ調査。
SD115等厚壁出	土師器	皿	口縁	(29.2)	5.85		口縫合部内側をもつ。口縫合部は丸みをもつ。	器底は深く埋め尽す。口縫合部内面、ヨコナギテ調査。	色譜、浅青色。V10B2期。12世紀後半~13世紀前半。
SD115等厚壁出	土師器	皿	口縁	(7.5)	1.4	3.5	器口クロ成形。器底は全くない。平底。体部は僅かに内側に張る。口縫合部は丸みをもつ。	口縫合部内面、強いヨコナギテ調査。底面内面、ヨコナギテ調査。	色譜、にごい青色、V10A2期。12世紀後半~13世紀前半。
SD115等厚壁出	土師器	皿	口縁	(13.2)	3.05		体部は直線的に斜め上方に張る。口縫合部は僅かに外方にひらく。口縫合部は丸みをもつ。	口縫合部内面、強いヨコナギテ調査。底面内面、ヨコナギテ調査。	色譜、灰白色。

編番No.	出土場所	種別	面積	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	剖面・断面後法の特徴		文様・装飾様式の特徴	備考	
							内壁	外壁			
321	SD125	土師器	瓶	(9.2)	1.4	(3.8)	内口の底付、底付、体部は幅く、垂れに内壁 全体に斜め上方に延びる。口縁部は尖り乳 頭状。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り、底部外 面おろしの後、ナガ彫り。底部内面 不定方 向のナガ彫り。	色調 にじや青色。 V101器 12世紀後半～ 13世紀前半。		
322	SD125	瓦器	瓶	(14.2)	3.5	(3.2)	高台の點付けが底付で認められる。体部は幅く なじみ、底縁部は斜め上方に延びる。口縁部は丸 みをもつ。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り、底部外 面おろしの後、ナガ彺。指延底が残る。体 部内面 くわきガキ彫刻。	色調はほとんど變化せ ず。色調 葵色。和風 器。		
323	SD125	須高等	こね跡	(28.7)	9.3	(12.0)	粘土器上付痕。形体は直線的で斜め上方 に延びる。口縁部形を下方にまつみ上げる。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。指延底が残る。体 部内面 くわきガキ彫刻。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。指延底が残る。体 部内面 くわきガキ彫刻。	色調 にじや青色。 V111器 12世紀後半～ 13世紀前半。	
324	南区 梅屋	土師器	皿	(8.32)	1.3	(4.4)	平底。やや広い底盤、体部と底盤の接部は不明確 で、体部は幅くやかに斜め上方に延びる。口 縁部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。指延底が残る。体 部内面 くわきガキ彫刻。	色調 にじや青色。 V111器 12世紀後半～ 13世紀前半。		
325	東屋	土師器	皿	(6.4)	1.7	(5.1)	直口の底付、底付、体部と底盤の接部は不明確 で、体部は幅くやかに斜め上方に延びる。口 縁部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。指延底が残る。体 部内面 くわきガキ彫刻。	色調 にじや青色。 V111器 12世紀後半～ 13世紀前半。		
326	南半中央	土師器	皿	(8.2)	1.5	(5.2)	平底。底盤と体部の接部は不明確で、体部は延 びて上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。指延底が残る。体 部内面 くわきガキ彫刻。	色調 にじや青色。 V111器 12世紀後半～ 13世紀前半。		
327	南区 砂屋	土師器	皿	(9.3)	1.85	(6.4)	直口の底付、底付、体部と底盤の接部は不明 確で、体部は幅くやかに斜め上方に延びる。口 縁部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。指延底が残る。体 部内面 くわきガキ彫刻。	色調 にじや青色。 V102器 12世紀後半～ 13世紀初頭。		
328	南東部	土師器	皿	(9.6)	2.0	(4.6)	直口の底付、平底。体部は幅くやかに斜め上方 に延びる。口縁部は灰火焼成に収める。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。指延底が残る。体 部内面 くわきガキ彫刻。	色調 にじや青色。 V111器 12世紀後半～ 13世紀前半。		
329	西南部	土師器	皿	(13.4)	2.65		平底。体部は幅やかに斜め上方に延びる。口 縁部は上方につまみ出す。	断面に厚底ある。口縁部内外面 強いV字ナガ 彫り。底部外面 ナガ彫刻。底部内面 不定方 向のナガ彫刻。	色調 連続色。V111器 12世紀後半～13世紀前半。		
330	北半 漆上 面	土師器	皿	14.35	3.2	8.58	直口の底付、底付と底盤の接部は直面。 体部は斜め上方に傾め方に延びる。口縁部 は直ににつまみ出す。	断面の厚底が激しい。内外面ともナガ彫り。 指延底は斜めに傾め方に延びる。	色調 にじや青色。 V102器 12世紀後半～ 13世紀前半。		
331	南区 秋屋	土師器	皿	(14.5)	2.7		直口の底付。平底。体部は内腹側面に斜め上 方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。指延底が残る。表面の厚 底が激しい。	色調 にじや青色。 V111器 12世紀中葉～ 後半。		
332	東南部	土師器	皿	(16.8)	2.6	(9.5)	直口の底付。平底。体部は内腹側面に斜め上 方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	断面の厚底が激しい。内外面ともナガ彫り。 指延底は斜めに傾め方に延びる。	色調 連続色。V111器 12世紀後半～13世 紀前半。		
333	南東部	土師器	皿	(2.93)		(5.4)	断面: 角形状の凸出した底面を貼り付ける。体 部は内腹側面に斜め上方に延びる。	断面の厚底が激しい。内外面ともナガ彫り。 指延底は斜めに傾め方に延びる。	瓦器の横継け。色調 明褐色。		
334	南半	土師器	鍋	(16.6)	3.45		体部はほぼ直立。口縁部上面に水平に残面を もつ。	内外面ともコナゴ彫り。体部外面 ナガ彫 刻。体部内面 不定方向のナガ彫刻。	色調 連続色。V111器 12世紀中葉～後半。		
335	南半	土師器	鍋	(22.7)	8.50		体部はほぼ直立。口縁部上面に水平に残面を もつ。	内外面ともコナゴ彫り。ナガ彫刻の後、ナ ガ方向のナガ彫刻。	色調 にじや青色。		
336	南半	土師器	鍋	(26.6)	7.35	(24.6)	体部は内腹側面にほぼ直立。口縁部上面に 水平に残面をもつ。	内外面ともコナゴ彫り。体部外面 ナガ彫 刻の後、ナガ方向のナガ彫刻。体部内面 不定 方向のナガ彫刻。	色調 連続色。新 羅跡 E1器 15世紀後 半～16世紀初期。		
337	南端 石垣 下段	土師器	鍋	(30.2)	5.4		体部は内腹。口縁部は大きくV字の字形に 開口。外方にひらく。	口縁部内外面 コナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彫刻。底部内面 コナガ 彫刻の後、ナガ方向のナガ彫刻。体部内面 ワコ 方向のナガ彫刻。	色調 灰褐色。豐 後12世紀後半。		
338	南半	土師器	鍋	(22.6)	4.65		断面は比較的低い。口縁部外側に断面三角形 の底面を貼り付ける。体部は内腹側面に斜め上 方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。指延底が残る。	色調 にじや青色。 後羅跡 E1器 15世紀後 半～16世紀初期。		
339	南半中央	瓦器	皿	(9.2)	1.65	(4.0)	平底。体部は斜め上方に延びる。口縁部は 丸みをもつ。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。指延底が残る。内面 不定方向のナガ彫刻。	色調 磁灰色。		
340	南区 砂屋	瓦器	皿	(8.8)	1.60	(5.1)	平底。体部は斜め上方に延びる。口縁部は 丸みをもつ。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。内面 ナガ彫刻の後、 ナガ方向のナガ彫刻。	色調 灰色。		
341	南西地区	瓦器	皿	(8.7)	1.85	(5.6)	平底。体部は斜め上方に延びる。口縁部は 丸みをもつ。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。内面 ナガ彫刻の後、 ナガ方向のナガ彫刻。	色調 磁灰色。 足利朝。		
342	南区 砂屋	瓦器	皿	8.45	1.9	6.6	平底。体部は斜め上方に延びる。口縁部は 丸みをもつ。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。内面 ナガ彫刻の後、 ナガ方向のナガ彫刻。	色調 灰色。		
343	南区 秋屋	瓦器	碗	14.30	4.0	4.50	断面円柱形の低い底台を貼り付ける。体部は 内腹側面に斜め上方に延びる。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。内面 ナガ彫刻の後、 ナガ方向のナガ彫刻。	色調 磁灰色。和風型瓦 器。		
344	南半中央	瓦器	碗	(15.0)	5.15	(4.5)	断面は全体的に低い。断面円形の比較的低い 高台を貼り付ける。体部は内腹側面に斜め上方 に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ彺。内面 ナガ彫刻の後、 ナガ方向のナガ彫刻。	色調 磁灰色。和風型瓦 器。	和風瓦器、14世紀代。	
345	瓦器	碗	(13.1)	3.85		(2.2)	断面は全体的に低い。断面円形の比較的低い 高台を貼り付ける。体部は内腹側面に斜め上方 に延びる。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ方向のナガ彫刻。底部内面 不定方向のナガ彫刻。	色調 灰褐色。		
346	南区 砂屋	瓦器	碗	(15.8)	4.05		断面は全体的に低い。断面円形の比較的低い 高台を貼り付ける。体部は内腹側面に斜め上方 に延びる。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ方向のナガ彫刻。底部内面 不定方向のナガ彫刻。	色調 灰褐色。		
347	東南部	瓦器	碗	(16.8)	3.7		断面は全体的に低い。体部は幅かに内腹側面 に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いV字ナガ彫り。底部外 面おろしの後、ナガ方向のナガ彫刻。底部内面 不定方向のナガ彫刻。	色調 磁灰色。		

発行番号	出土場所	種類	器種	口径(cm)	深さ(cm)	底径(cm)	形状・成形法の特徴	文様・模様技法の特徴	備考
346	南半中央	直器	舟	(14.7)	(4.6)		体部は内壁気泡に斜め上方に延びる。口縁部 内に丸みをもつ。	口縁部内面 弧ナデ調整、体部外側 斜ねきの後、二方に丸のナデ調整。底部底面 丸みの後、体部内側 二方に丸のナデ調整の後、へらき 千手調。	色調 反色。桜葉型。12世紀中頃。
348	南北区	移器	瓦器	(15.4)	(4.15)		体部は内壁気泡に斜め上方に延びる。口縁部 内に丸みをもつ。	口縁部内面 弧ナデ調整。体部外側 斜ねきの後、二方に丸のナデ調整。体部内面 ナデ調整の後、へらき 千手調。	色調 異色化。色調 異色化。
350	東南那	直器	碗	(14.0)	(3.95)		体部は比較的薄い。体部は骨か内骨気泡に 斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内面 弧ナデ調整。体部外側 斜ねきの後、ナデ調整。体部内面 ナデ調整の後、へらき 千手調。	色調 異色化。
351	南北区	移器	瓦器	(15.0)	(3.9)		体部は僅かに内骨気泡に斜め上方に延びる。 口縁部は丸みをもつ。	口縁部内面 弧ナデ調整。器部は削 剥・端部が削り落す。	色調 異色化。
352	東東那	瓦質土器	羽皿	(16.5)	(6.15)	(21.0)	体部は内骨気泡にぼぼと上に残る。口縁部 外側に細胞台状部の弱肉を残す。	体部内面一回横ねき 斜ナデ調整。体部外 面 斜ねきの後、ナデ調整。体部外側 ナデ調整の後、へらき 千手調。	色調 異色化。
353	南北区	瓦質土器	火鉢	長4.2	幅8.75		火鉢の唇部部分、製作成形。斷面をかたど たもの。	前部に穿孔。	色調 異色化。近世。
354	東南那	供進器	皿	(3.0)	(1.45)	(5.0)	平底。底部は短く直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	内面底と土団粒ナデ調整。底部外側 不調整。裏面底部有窓。12世紀 前半代。	
355		供進器	杯		(1.75)	(3.0)	僅かに外方にひらく唇部を貼り付ける。	唇部の摩滅が著しい。内外面とも圓粒ナデ調整。	色調 暗オーバー灰黑色。3世紀代。
356	東半	供進器	碗	(16.0)	4.95	(5.2)	平底。体部は僅かに内骨気泡に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内面 弧ナデ調整。体部内面 斜ねき ナデ調整。底部外底 不調整。余切削 が残る。	口縁部外側に黒ねき 残す。色調 反白色。東那 12世紀後半代。
357	東東那・南東 那	供進器	舟	(17.2)	(5.10)	(7.0)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。 口縁部は丸みをもつ。	口縁部内面 弧ナデ調整。体部外側 斜ねき ナデ調整。底部外底 不調整。余切削 が残る。	口縁部外側に黒ねき 残す。色調 反白色。東那 12世紀後半代。
358	東東那	供進器	舟	(16.5)	(3.85)		体部は僅かに内骨気泡に斜め上方に延びる。 口縁部は丸みをもつ。	口縁部外側と底部外側に斜ナデ調整。唇部の摩滅が著 しい。	色調 反白色。
359	南北区	移器	舟	(24.0)	(4.35)		体部は僅かに内側する。口縁部は若干外方 に引き出す。	内面底と土団粒ナデ調整。底部外側 不調整。底切削が残る。	東那系底切削。12世紀 前半代。
360	東東那	供進器	鉢	(29.0)	(8.75)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部 は上面にぼぼ水平に施すをもつ。	内面底と圓粒ナデ調整。	色調 反色。東那系底 切削。12世紀前半代。
361	南北区	供進器	皿		(5.35)		体部外側に凸腰三条と縦筋を貼り付ける。	内面底 圓粒ナデ調整。	京耳皿? 11世紀代。
362	東半	白磁	碗	(14.5)	6.5	(8.5)	瓶形の唇部は非常に厚い。裏面は薄く角だら けで内壁実質に斜め上方に延びる。口縁部は 扇状状態で内側に凹むように施す。	内面内一絞れ外腹上半まで施す。反白色に免 え。体部下半下底抹殺。	稲田・森田分頭 白磁 振押。12世紀後半代。
363	東半	白磁	皿	(13.8)	(3.3)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は 扇状状態で肥厚する。	内面底と透明釉遮蔽。反白色に免色。	稲田・森田分頭 白磁 振押。12世紀後半代。
364	東半	白磁	皿	(2.40)			体部は内側、口縁部は外反。	内面底と透明釉遮蔽。反白色に免色。	東那底白磁。
365	東半	白磁	碗	(2.55)		(7.0)	頗る広い深い洗を有する。底部は斜ら かに斜め上方に立ち上がる。	高音部底にノゾ目。底部内面に沈鉢(朶)、内 面底 透明釉指輪。反白色に免色。	稲田・森田分頭 白磁 振押。12世紀後半代。
366	東半	白磁	碗	(16.0)	(3.25)		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部 (は水平に外方に引き出す)。	内面底と透明釉遮蔽。反白色に免色。	稲田・森田分頭 白磁 振押。12世紀後半代。
367	南東	白磁	碗		(1.15)		口縁部は小さい玉縁状に肥厚する。	内面底と透明釉遮蔽。淡黄色に免色。	稲田・森田分頭 白磁 振押。12世紀前半代。
368	東半	青磁	皿	(12.2)	(1.35)		体部は僅かに外反。	内面底とも青磁釉施加。明オーバー灰白色に免 色。	越東京系青磁。
369	南西中央	青磁	皿	(8.7)	1.70	(4.5)	平底。体部は下位で屈曲して緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	底部内面に掻き跡施す。内面底とも青磁釉施 加。明緑灰色に免色。底部外側の面かたまと く。	安房系青磁。12世紀 後半-13世紀前半。
370	南西	土製品	土盤	長 3.3	幅 9.9	厚 0.85	一方の唇部は欠損。	外腹 圓粒ナデ調整。	色調 ぶい型。
371	渡汎	陶器	タイル	長 25.0	幅 25.8	厚 5.4	粉作り成形。乾式タイル。	上面に磨擦コバルトで、豪・唐草文・蓮弁文など をプリント。	少なくとも、大正時代 以前の製品。漆器で固定する。
372	渡汎	陶器	タイル	長 24.35	幅 24.35	厚 2.05	粉作り成形。乾式タイル。	上面に磨擦コバルトで、豪・唐草文・蓮弁文など をプリント。	少なくとも、大正時代 以前の製品。漆器で固定する。
373	渡汎	陶器	タイル	長 24.1	幅 24.1	厚 2.4	粉作り成形。乾式タイル。	上面に磨擦コバルトで、豪・唐草文・蓮弁文など をプリント。	少なくとも、大正時代 以前の製品。漆器で固定する。
374	石下舟掛 柄中	瓦	平瓦	長(5.2)	幅(9.1)	厚 1.9		側面 帆ナデ調整。画面 布目直頭が残る。	色調 淡白色。
375	南北	瓦	軒丸瓦	高(2.8)		厚 1.25		縫合部で開裂が不明。	色調 やや濃い緑色。裏紙。
376	渡汎	ガラス製品	瓶		1.5	9.0	底部の平底形状は円錐。底部に鋸歯のネジ溝 を残す。	製作修理。2分割して作成したものを中央部で 縫合せさせる。体部正面に「大通直」印と舟底に「舟底直立」印。	

報告No.	出土地所	種類	基積	口径(cm)	基高(cm)	底径(cm)	器形・模様の特徴	文様・調査法の特徴	備考	
G2	擾乱	ガラス製品	瓶	1.4	9.05	3.4	底部の平面形状は楕円形。腹部に運用のネジ溝を刻む。	製作成形、2分割して作成したものを中央部で繋ぎ合わせる。	色調 暗褐色	
G3	擾乱	ガラス製品	瓶	1.25	11.14	7.3	0	底部の平面形状は楕円形。体部は直立。腹部は斜め上方向に傾く直立。	製作成形、2分割して作成したものを中央部で繋ぎ合わせる。左側面の底壁に凹りがある。	色調 透明。水滴の春緑。
G4	擾乱	ガラス製品	瓶	2.0	18.85	4.0	底部の平面形状は円形。体部はほぼ直立して、腹部と上へ口縁部に向かって内傾する。口縁部は玉筋状に肥す。	内窓全面に浮き目紋が施され、正面に「サクラヤ 並葉和室」庭あり。	色調 青緑色。	

報告No.	出土地所	種類	基積	口径(cm)	基高(cm)	底径(cm)	器形・模様の特徴	文様・調査法の特徴	備考
376 SP01	瓦器	瓶	(14.65)	(3.9)			体部は縦かに内傾して斜め上方に傾ける。口縁部は僅かに外反。	口縫部の外周 縫合口子ナテ調整。体部外表面 手ぬぐいえの後、ナテ調査。右側面底が残る。体部内部ナテ調査。	赤唐はほとんど無寄せ。色調 淡白。
377 SP02	土師器	瓶	(12.6)	2.0	(7.7)		両口の成形。平底。体部は縦やかに斜め上方に傾く。口縫部は丸をもつ。	底部は全体的に下落感ある。口縫部内外面 強い口子ナテ調整。体部外表面 ナテ調査。	内面にない黄褐色。DF2a期。12世紀後葉～13世纪初半。
378 SP03	土師器	瓶	9.1	1.65			両口の成形。器形は全体に大く(重く)、平底。直筒部と体部の界は不規則で、体部は僅かに内傾気味に斜め上方に傾ける。	口縫部の外周 強い口子ナテ調整。体部一走柵 強い口子ナテ調整。口縫部内外面 強い口子ナテ調整。底部内面 強い口子ナテ調整。	内面にない黄褐色。也國。V82a期。12世紀後葉～13世纪初半。
379 SP04	土師器	瓶	(7.4)	1.3	(4.7)		両口の成形。平底。体部は縦やかに斜め上方に傾く。口縫部は丸をもつ。	口縫部の外周 強い口子ナテ調整。体部外表面 手ぬぐいえの後、ナテ調査。右側面底が残る。体部内部ナテ調査。	色調 にない黄褐色。V83b期。12世紀後葉～13世纪初半。
380 SP04	土師器	瓶	(11.95)	2.35	(5.45)		両口の成形。平底。体部は直線的に斜め上方に傾く。	口縫部の外周 強い口子ナテ調整。体部外表面 手ぬぐいえの後、ナテ調査。右側面底が残る。体部内部ナテ調査。	内面にない黄褐色。V83b期。12世紀後葉～13世纪初半。
381 SP05	瓦器	瓶	(8.8)	(1.9)			平底。体部は縦やかに斜め上方に傾ける。	口縫部の外周 強い口子ナテ調整。体部一走柵 強い口子ナテ調整。右側面底が残る。体部内部ナテ調査。	色調 淡灰斑。
382 SD110	土師器	瓶	(8.8)	1.3	(8.4)		両口の成形。器形は全体に斜め上方に傾く。口縫部は丸をもつ。	底部の底が壊いたため、調整は不良。内外面にモルタル調査。	色調 淡黄褐色。V83b期。12世紀後葉～13世纪初半。
383 SD110	土師器	瓶	(8.95)	1.5			両口の成形。平底。体部と体部の界は比較的直線的で、体部は僅かに内傾気味に斜め上方に傾く。	口縫部の外周 強い口子ナテ調整。底部外表面 手ぬぐいえの後、ナテ調査。右側面底が残る。底部内部ナテ調査。	色調 にない黄褐色。V83c期。12世紀後葉～13世纪初半。
384 SD110	土師器	瓶	8.6	1.75			両口の成形。器形は全体に斜め上方に傾く。口縫部は丸をもつ。	底部の底が壊いたため、口縫部～体部内外面 強い口子ナテ調整。底部内部ナテ調査。	色調 淡黄褐色。V83c期。12世紀後葉～13世纪初半。
385 SD110	土師器	瓶	9.2	1.3	(8.4)		両口の成形。器形は全体に斜め上方に傾く。口縫部は丸をもつ。	口縫部の外周 強い口子ナテ調整。底部外表面 手ぬぐいえの後、ナテ調査。右側面底が残る。底部内部ナテ調査。	色調 にない黄褐色。V83c期。12世紀後葉～13世纪初半。
386 SD110	土師器	瓶	(8.1)	1.4	(4.6)		両口の成形。平底。体部と体部の界は直線的で、体部は僅かに内傾気味に斜め上方に傾く。	底部の底が壊いたため、口縫部～体部内外面 強い口子ナテ調整。底部内部ナテ調査。	色調 にない黄褐色。V83c期。12世紀後葉～13世纪初半。
387 SD110	土師器	瓶	7.9	2.95	8.7		両口の成形。平底。体部と体部の界は直線的で、体部は僅かに内傾気味に斜め上方に傾く。	口縫部の外周 強い口子ナテ調整。底部外表面 手ぬぐいえの後、ナテ調査。右側面底が残る。底部内部ナテ調査。	色調 にない黄褐色。V83c期。12世紀後葉～13世纪初半。
388 SD110	土師器	瓶	(14.5)	(2.95)	(13.1)		両口の成形。平底。体部は僅かに内傾気味に斜め上方に傾く。	底部の底が壊いたため、口縫部～体部内外面 強い口子ナテ調整。底部内部ナテ調査。	色調 にない黄褐色。V83d期。12世紀中葉～後半。
389 SD110	土師器	瓶	(10.8)	2.8	厚 2.35		足輪の三脚。平面形状は切跡円錐状。	外周 指さしえの後、ナテ調査。強頭底が残る。	色調 にない黄褐色。V83d期。12世紀中葉～後半。
390 SD110	土師器	足輪	長 11.3	幅 4.6	厚 4.5		足輪の三脚。平面形状は切跡円錐状。	手縫 ナテ調査。	色調 淡黄褐色。
393 SD110	瓦器	瓶	(14.8)	4.6	4.5		瓶形(?)手縫の進化した低い台座を切り付ける。体部は内傾気味に斜め上方に傾く。口縫部は丸をもつ。	口縫部内外面 強い口子ナテ調整。口縫部外表面 が僅かに埋む。体部外表面 指さしえの後、ナテ調査。底部内部ナテ調査の後、指さしえ。	色調 暗灰色。
394 SD110	瓦器	瓶	14.0	4.65	(5.3)		瓶形(?)全体に歪む。瓶蓋台脚の低い底盤を起り付ける。体部は僅かに内傾気味に斜め上方に傾く。	口縫部内外面 強い口子ナテ調整。底部外表面 手ぬぐいえの後、ナテ調査。右側面底が残る。底部内部ナテ調査。	色調 灰色。
395 SD110	瓦器	瓶	(15.75)	4.3			瓶形(?)全体に歪む。瓶蓋台脚の低い底盤を起り付ける。体部は僅かに内傾気味に斜め上方に傾く。	口縫部内外面 強い口子ナテ調整。底部外表面 手ぬぐいえの後、ナテ調査。右側面底が残る。底部内部ナテ調査。	色調 淡灰色。
396 SD110	瓦器	瓶	(18.7)	4.5			瓶蓋台脚の低い底盤を起り付ける。体部は内傾気味に斜め上方に傾く。	口縫部内外面 強い口子ナテ調整。底部外表面 手ぬぐいえの後、ナテ調査。右側面底が残る。底部内部ナテ調査。	色調 淡灰色。
397 SD110-113	須恵器	瓶	(16.2)	(4.4)	(5.45)		体部は縦やかに斜め上方に傾く。口縫部は丸をもつ。	口縫部内外面 強い口子ナテ調整。底部外表面 手ぬぐいえの後、ナテ調査。	色調 淡灰。東張瓦須恵器。12世紀。

番号	出土場所	種類	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	形態・装飾法の特徴		文部・調査法の特徴	備考
							内面	外側		
366 SD110	須恵器	壺		(18.3)	(4.2)		口縁部が下の平底に絞りをして、外方にひらく。 底部は直線形。	底部は上上げ成形。口縁部外縁、横方向の引き目が残る。外面部とも直脚ナデ調整。	外周 立突り、全周 外縁部に凹凸、内面 黄褐色、外面部とも直脚ナデ調整。	外周 立突り、全周 外縁部に凹凸、内面 黄褐色、外面部とも直脚ナデ調整。13世紀代。
369 SD110	須恵器	こね鉢		(28.0)	(11.25)	(10.5)	斜土台巻上げ形。平底。体部は直線的に斜土台に成り立ち。直脚部は上方につまみ上げる。	斜土台巻上げ成形。口縁部内外面、強い面起ナデ調整。体部内面、底面 四角ナデ調整。	口縁部内外面、強い面起ナデ調整。体部内面、底面 四角ナデ調整。	口縁部内外面、強い面起ナデ調整。体部内面、底面 四角ナデ調整。13世紀代。
400 SD110	無釉陶器	度鉢			(3.8)		口縁部は上下に膨張して、錐葉を形成する。口縁部を上方につまみ上げる。	内面裏にも直脚ナデ調整。体部内面、斜脚部内面に直脚ナデ調整。	内面 にぶい漆褐色。體脚部厚脚。13世紀代。	内面 にぶい漆褐色。體脚部厚脚。13世紀代。
401 SD110	無釉陶器	度鉢			(3.1)		口縁部は始め方に少し膨らむ形。口縁部の上端と下端をそれぞれ上下に引き出す。	内面裏とも直脚ナデ調整。	内面 漆黒、底面 漆黒褐色。漆脚部厚脚。14世紀代。	内面 漆黒、底面 漆黒褐色。漆脚部厚脚。14世紀代。
402 SD110	無釉陶器	度鉢			(5.2)		口縁部は上下に膨張して錐葉を形成する。口縁部を上方につまみ上げる。	内面裏とも直脚ナデ調整。口縁部内面に直脚ナデ調整。	内面 にぶい漆褐色。體脚部厚脚。13世紀代。	内面 にぶい漆褐色。體脚部厚脚。13世紀代。
403 SD110	無釉陶器	度鉢		(32.15)	(5.75)		口縁部は上下に強張して錐葉を作り出す。口縁部を括って小さい穴口を作り出す。	内面裏とも直脚ナデ調整。体部内面に斜脚部を6条1単位の直口を擴大する。	内面 漆黒、底面 漆黒褐色。漆脚部厚脚。13世紀代。	内面 漆黒、底面 漆黒褐色。漆脚部厚脚。13世紀代。
404 SD110	白磁	碗		(2.5)	(8.8)		高台は比喩的縁が広く深い。底部の器壁は比喩的深く。	内面 進脚部施釉、灰白色に発色。底面内面の縁部及び底部に漆打い手がある。外底 薄底。	底盤・森田分類 白磁吸水底。12世纪後半。	底盤・森田分類 白磁吸水底。12世纪後半。
405 SD110	青磁	碗			(1.75)	(8.4)	高台は比較的縁が広く低い。底部の器壁は比喩的深く。	内面～外底の高台は漆打い手、青磁施釉地。反オーブ白に発色。高台墨書き以下 露底。	底盤・森田分類 青磁 13世纪代。	底盤・森田分類 青磁 13世纪代。
406 SD110	青磁	碗		(13.2)	(4.35)		体部は僅かに内側して、斜め上方に延びる。口縁部はより気泡に保護する。	外底に内側に延びて漆打い手を施す。内面裏とち青磁施釉地。オーブ灰色に発色。底はやわらかい。	やや良質の青磁。粗糲青磁施釉井文模。13世紀代。	やや良質の青磁。粗糲青磁施釉井文模。13世紀代。
407 SD110	染付磁器	碗		(0.10)	4.1		高台は比喩的縁が広く深い。底部は漆打い手に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく(端反ぞ)。	外周 やや浅い直底で扇花文を描く。内面 底盤内面に施釉化された扇花文を描く。	細脚部内外面、強い面起ナデ調整。外周の窓孔は斜め上方に延びる。内面裏も直脚ナデ調整。指紋？19世纪前半以降。	細脚部内外面、強い面起ナデ調整。外周の窓孔は斜め上方に延びる。内面裏も直脚ナデ調整。指紋？19世纪前半以降。
408 SD107	土器	皿		9.35	1.85	5.6	直口クロ成形。平底。体部は僅かに内側に斜め上方に延びる。	口縁部内外面、強い面起ナデ調整。外周の窓孔は斜め上方に延びる。内面裏も直脚ナデ調整。指紋？19世纪前半以降。	色調 淡黄褐色。V形 12世纪後半～13世纪初頭。	色調 淡黄褐色。V形 12世纪後半～13世纪初頭。

番号No	出土地所	種別	西性	口徑(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	形態・模様接法の特徴		文様・模様接法の特徴	参考文献	
							器形	底面			
437 SK01	土葬器	■		8.8	1.88	4.5	器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度に收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 圓三方子調整。底部外面 1 方向のナナゲ調整。底面外縁 接おさえの後、不完全方向のナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 圓三方子調整。底部外面 1 方向のナナゲ調整。底面外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 褐色地。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
438 SK01	土葬器	■	(8.8)	1.88	(8.1)		器壁は比較的薄い。平底。今上げて弧度が、体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度に收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外面 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外面 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 褐色地。V82類 12世紀中葉～後漢。	
439 SK01	土葬器	■		9.25	1.4	4.6	器壁は比較的薄い。平底。今上げて弧度が、体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度に收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外面 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外面 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。色調 にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
440 SK01	土葬器	■	(8.5)	1.3	(3.0)		器壁は比較的薄い。平底。今上げて弧度が、体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度に收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外面 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外面 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 褐色地。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
441 SK01	土葬器	■	(8.8)	1.88	4.75		内面は黒く、くぼ減る。平底。体部と体形の両方とも直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度に收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外面 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外面 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
442 SK01	土葬器	■		14.25	2.68	8.8	器壁は全面に墨、器底は墨岸する。平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度に收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部内面 接おさえの後、不完全方向ナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部内面 接おさえの後、不完全方向ナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部内面 接おさえの後、不完全方向ナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。
443 SK01	土葬器	■		13.85	2.8	9.3	器壁は全面に墨く、静物は墨むし。平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度に收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
444 SK01	土葬器	■		13.95	2.65	10.0	器壁は全面に墨く。平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度に收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
445 SK01	土葬器	■		13.7	2.85	6.6	器壁は全面に墨く。器底は墨岸する。器底は比較的高い。平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度に收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
446 SK01	土葬器	■		13.8	2.7	8.95	平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は角張る。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底面 内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
447 SK01	土葬器	■		13.7	2.7	9.1	器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度に收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
448 SK01	土葬器	■		14.25	2.85	9.85	平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は角張る。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
449 SK01	土葬器	■	(13.1)	9.25	(7.2)		器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
450 SK01	土葬器	■	(15.3)	2.8	(8.0)		器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲをもつ。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
451 SK01	土葬器	■		14.25	2.8	7.7	器壁は比較的薄く、通透感ある。平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度を收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
452 SK01	土葬器	■		14.5	3.05	9.7	器壁は全体に墨く。平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	外の体部下半分に黒斑状で斑紋がある。色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
453 SK01	土葬器	■		14.05	2.7	9.6	器壁は全面に墨く。平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度に收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	外の体部下半分に黒斑状で斑紋がある。色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
454 SK01	土葬器	■		14.0	2.9	9.8	平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度に收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
455 SK01	土葬器	■		15.2	2.4	(10.1)	器壁は全体に墨く。平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	外の体部下半分に黒斑状で斑紋がある。色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
456 SK01	瓦器	■		13.6	1.7	(3.3)	平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は少し弧度を收める。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
457 SK01	陶器	■		22.0	(7.7)		口縁部は大きめ(外方にひらく)。口縁部は外方に丸みをもつ。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。外側の体部一帯 平坦口沿が目立つ。	外側の体部下半分 平坦口沿が目立つ。色調にない褐色。	黒化焼成のため、色斑地。V83a類 12世紀中葉～後漢。	
458 P2	陶器	■		24.5	(9.16)		体部は内側する。口縁部は外方にひらく。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	体部内面に粗粒底が残る。色調にない褐色。V83a類 12世紀後半～13世紀初頭。	
459 P11	陶器	■		27.6	(7.48)		口縁部は狭やかに外方にひらく。口縁部は上部につぶみ上る。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。底部外縁 接おさえの後、ナナゲ調整。	色斑 赤褐色。	
460 P11	陶器	横軸		(22.65)	(36.6)		器壁は後退。平底。体部は大きめ(外方にひらく)。口縁部は丸みをもつ。	体部の側面底を削りして、底部 砂巣とよび成る。体部の側面底を削り、底部の砂巣が見られる。体部内面 青苔状の底で風化が進む。一部ナナゲ。	体部の側面底を削りして、底部 砂巣とよび成る。体部の側面底を削り、底部の砂巣が見られる。体部内面 青苔状の底で風化が進む。一部ナナゲ。	色斑 白色。	
461 P12	土葬器	■		8.95	1.7	3.46	器壁は比較的薄い。平底。体部は狭やかに斜め上方に伸びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。	口縁部内外面 強いヨコナゲ調整。底部内面 不完全方向のナナゲ調整。	色斑 色調にない褐色。V83a類 12世紀中葉～後漢。	

形態名	出土場所	種類	修理	口径(cm)	等高(cm)	底径(cm)	形状・底特徴		文様・装飾技法の特徴	参考文献
							縦型	横型		
487P12	土師器	皿		8.45	1.4	3.30	縦型は口沿が低い、平底。体部と底部の唇は不規則な縫合で、体部は縫合から斜め上方に延びる。口縁部は方角を呈する。	口縁部内外面 縫い目コナデ調整、底部内面 不定方向のナデ調整、底部外縁 四辺ささえの後、ナデ調整。	色調 透明白色。V94種 12世紀後葉～13世紀初頭。	
488P12	土師器	皿		8.0	1.5	3.0	平底。体部は縫合やくに斜め上方に延びる。口縁部は丸く弧形に收める。	口縁部内外面 縫い目コナデ調整、底部内面 方向のナデ調整、底部外縁 四辺ささえの後、ナデ調整。	1 色調 透明白色。V95a種 12世紀中葉～後葉。	
489P29	土師器	皿		(8.4)	1.25	(4.1)	縦型の、縫合部が美しい。平底。体部と底部の唇は不規則で、体部は縫合から斜め上方に延びる。口縁部は丸く弧形に收める。	口縁部内外面 縫い目コナデ調整、底部内面 不定方向のナデ調整。	色調 にらい黄白色。V93a種 12世紀中葉～後葉。	
490SH01	須恵器	杯身		12.2	3.95		丸底。体部は内側に斜め上方に延びる。丸底部には内傾する。口縁部は丸く弧形に收める。	内底へ口縁部外縁 四辺ナデ調整。体部へ底部外縁 斜面へへ取りの後、ナデ調整。	色調 青灰色。9世紀代。	
496名古屋	土師器	皿		(25.4)	(10.95)		体部は内側する。口縁部は大きく外方にひらく。口縁部は丸く弧形に收める。	口縁部外縁 ミナチナデ調整。体部内面 を缺める方向のナデ調整。体部内面 一部右側の方唇への凹み(内傾)。粗土器のつなぎ合が体部に體現される。	色調 にらい黄褐色。色調 日本式 12世紀後葉。	
497土器集中地	土師器	皿		8.95	1.1	5.0	縫合部は低い、平底。底部と体部の唇は不規則。体部は縫合やくに斜め上方に延びる。口縁部は丸く弧形をもつ。	口縁部内外面 縫い目コナデ調整、底部内面 四辺状にナデ調整。底部外縁 斜方さきの後、不定方向のナデ調整。	色調 淡色。VA2種 12世紀第一後葉。	
498第2面包含	土師器	皿		10.15	1.7		縫合部に裏し草履型。底部と体部の唇は不規則。体部は縫合から斜め上方に延びる。口縁部は丸く弧形に收める。	口縁部内外面 縫い目コナデ調整、底部内面 方向のナデ調整、底部外縁 四辺ナデ調整。	1 色調 にらい黄褐色。V91c種 12世紀後葉～13世紀初頭。	
499東京坑内	須恵器	杯身		(10.4)	2.45		丸底。体部は内側に斜め上方に延びる。丸底部には丸く内傾する。口縁部は丸く弧形に收める。	内底へ口縁部外縁 四辺ナデ調整。	色調 淡白色。	
476東半黒楕	須恵器	皿		(9.6)	(3.4)		縫合部は比較的高い。体部は直線的に内傾する。口縁部は丸く弧形に收める。	内底へ口縁部外縁 四辺ナデ調整。体部へ底部外縁 斜面へへ取りの後、ナデ調整。	色調 灰色。	
477上層面上及び被丘	須恵器	杯身		(15.0)	(4.8)		体部は内側する。口縁部は丸く弧形をもつ。内底へ口縁部外縁 斜面ナデ調整。体部内面 口縁部へ底部外縁へ取りの後、ナデ調整。	内底へ口縁部外縁 四辺ナデ調整。体部外縁 斜面へへ取りの後、ナデ調整。	色調 灰色。	
478委報	須恵器	皿		(31.7)	(10.2)		体部は内側する。口縁部は大きく外方にひらく。口縁部は斜め内側に切る。	口縁部外縁 斜面ナデ調整。体部内面 用掛さえの後、ナデ調整。鏡部外縁 引きの後、ヨコナデ調整。体部外縁に平行切き目が残る。	内外面とも灰褐色。色調 淡色。	
479名古屋	須恵器	高杯				(8.15)	縫合部に反して斜め上方に延びる。遮かしが施される。	内底部と周転ナデ調整。	焼成 坪版。色調 灰色。	

報告番号	出土場所	種類	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	形状・成形法などの特徴		次種・調査法の特徴	備考
							底面	側面		
474	SD01 4区 堆土最下層	土器器	皿	8.5	1.1	8.7	平底。体部は大口径内側する。口縁部は斜めに傾く。	口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底面内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、不定方向のナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
475	SD01 4区 堆土最下層	土器器	皿	(1.0)	0.85	(8.0)	平底。体部は軽く内側に傾く。口縁部	口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底面内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、不定方向のナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
476	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	9.05	1.8	4.5	器壁は比較的高い。器底は完全に削り落す。手縫い。底部は斜めに傾く。口縁部は斜めに傾く。	器壁の厚さが薄い。口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
477	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	(8.6)	(1.45)		平底。体部は比較的高い。上部に盛る。口縁部は丸をもつ。底部は斜めに傾く。口縁部の内側をつまんで、斜めに傾く。	口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
478	SD01 3区 堆土②	土器器	皿	8.75	1.5		器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。底部は斜めに傾く。口縁部は丸をもつ。	器壁の厚さが薄い。口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
479	SD01 理土 堆土最下層	土器器	皿	9.55	1.4	5.05	器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。底部は斜めに傾く。口縁部は丸をもつ。	器壁の厚さが薄い。口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
480	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	8.7	1.4	3.6	平底。底部は外側に盛る。手縫い。底部は丸をもつ。底部は斜めに傾く。口縁部は丸をもつ。	口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 1方角のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
481	SD01 3区 理土堆土下層	土器器	皿	8.85	1.85	6.85	器壁はやや厚い。器底は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。	口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
482	SD01 4区 堆土最下層	土器器	皿	9.15	1.5	5.35	器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。	口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
483	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	8.65	1.55	4.25	器壁はやや厚い。手縫い。底部は丸をもつ。底部は斜めに傾く。	口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
484	SD01 4区 堆土最下層	土器器	皿	8.9	1.85	8.1	器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。	口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
485	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	8.85	1.8	4.35	器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。底部は斜めに傾く。	口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
486	SD01 4区 堆土最下層	土器器	皿	8.9	1.85	8.1	器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。	口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
487	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	8.5	1.7		器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。	口縁部から心部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
488	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	9.25	1.45	4.45	器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。	器壁の厚さが薄い。口縁部と底部内面 弧いヨコナデ調整。底部外縁 指おさえの後、ヨココナデ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
489	SD01 4区 堆土最下層	土器器	皿	9.0	1.6	6.35	器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。	器壁は完全に削り落す。口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部外縁 指おさえの後、ヨココナデ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
490	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	(8.7)	1.55	(4.9)	器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。	口縁部から心部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
491	SD01 4区 堆土最下層	土器器	皿	8.7	1.85		器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。底部は斜めに傾く。	口縁部と底部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
492	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	9.15	1.7	5.45	器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。	口縁部から心部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
493	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	(8.0)	1.8	5.6	器壁は完全に削り落す。丸をもつ。手縫い。底部は丸をもつ。	口縁部と底部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
494	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	9.2	1.5	4.55	器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。	口縁部と底部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
495	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	(8.9)	1.5	(5.1)	器壁はやや厚い。手縫い。底部は丸をもつ。	口縁部と底部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
496	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	9.15	1.8	4.7	器壁はやや厚い。手縫い。底部は丸をもつ。	器壁の厚さが薄い。口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
497	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	9.3	1.8	5.6	器壁は完全に削り落す。手縫い。底部は丸をもつ。	器壁の厚さが薄い。口縁部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	
498	SD01 3区 堆土最下層	土器器	皿	(8.2)	1.5	5.2	器壁はやや厚い。手縫い。底部は丸をもつ。	口縁部と底部内面 弧いヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナラテ調整。底部外縁 指おさえの後、ナラテ調整。	色斑 透黄褐色。V102 12世紀後葉～13世紀前半。	

番号	出土場所	種類	基積	口径(cm)	着高(cm)	残高(cm)	形態・成層法の特徴		文様・調節法の特徴	時代
							内面	外面		
49	SD01 3区 堆土最下層	土師器	皿	8.75	1.5	4.50	器形は比較的深い。平底。体部は盤やかに斜め上方に張り、口縁端部は少し尖錐形に収める。	口縁部・全体の外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色にいぶし銀色。V-A2組 12世紀中葉～後半。	
50	SD01 3区 堆土最下層	土師器	皿	8.7	1.55	4.6	器形は全体に大きくなじむ。平底。体部は直錐形に斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部・全体の外周面 強いコナ子調節。外周の底端部と体部の肩 相手袋もつ。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。IV-VI組 12世紀後葉～13世紀前半。	
50	SD01 4区 堆土最下層	土師器	皿	9.35	1.55	3.7	平底。体部は緩く、底は直立。	口縁部の外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、不定方向のナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-A2組 12世紀後葉～13世紀前半。	
50	SD01 3区 堆土最下層	土師器	皿	9.45	1.45	5.55	器形は比較的深い。平底。体部は盤やかに斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部の外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、不定方向のナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀後葉～13世紀前半。	
50	SD01 4区 堆土最下層	土師器	皿	9.2	1.5	5.45	器形は全体に深く。平底。体部は盤やかに斜め上方に張り。口縁端部は尖り気味。	口縁部の外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀中葉～後半。	
50	SD01 4区 堆土最下層	土師器	皿	9.2	1.3	4.25	平底。体部は盤やかに斜め上方に張り。口縁端部は尖り気味。	口縁部の外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀中葉～後半。	
50	SD01 4区 堆土最下層	土師器	皿	9.1	1.15	6.1	器形は全体に深く。平底。体部は盤やかに斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部の外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀中葉～後半。	
50	SD01 4区 堆土最下層	土師器	皿	9.2	1.45	6.1	器形は全体に大きくなじむ。平底。体部は盤やかに斜め上方に張り。	口縁部の外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀中葉～後半。	
50	SD01 3区 堆土最下層	土師器	皿	9.3	2.4	3.9	平底。体部は直錐形に斜め上方に張り。口縁端部は尖り気味に収める。	口縁部から体部外周面 強いコナ子調節。底部内面 2.3cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀後葉～13世紀前半。	
50	SD01 4区 堆土最下層	土師器	皿	14.4	2.0	9.45	器形は全体に大きくなじむ。平底。体部は直錐形に斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部の外周面 強いコナ子調節。底部内面 2.3cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀中葉～後半。	
50	SD01 3区 堆土最下層	土師器	皿	(13.6)	2.7	9.15	平底。体部は直錐形に斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部の外周面 強いコナ子調節。底部内面 2.3cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀中葉～後半。	
51	SD01 4区 堆土最下層	土師器	皿	14.7	2.8	10.0	器形は全体に大きくなじむ。平底。体部は直錐形に斜め上方に張り。口縁端部は尖り気味。	口縁部の外周面 強いコナ子調節。体部外周面 ナガ子調節。底部内面 2.3cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀中葉～後半。	
51	SD01 4区 堆土最下層 S	土師器	皿	12.6	2.8	7.7	器形は全体に深く。平底。体部は盤やかに内凹気味に斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内面外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀中葉～後半。	
51	SD01 4区 堆土最下層	土師器	皿	14.5	2.6	9.5	器形は全体に深く。平底。体部は盤やかに内凹気味に斜め上方に張り。口縁端部は尖り気味に収める。	口縁部内面外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀中葉～後半。	
51	SD01 4区 堆土最下層	土師器	皿	(14.1)	2.7	(10.2)	器形は比較的深い。平底。体部は直錐形に斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内面外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 半分が鋸歯状に削る。底部内面外周面 強いコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	
51	SD01 3区 堆土最下層	土師器	皿	13.4	2.6	9.45	器形は比較的深い。平底。体部は直錐形に斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内面外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 半分が鋸歯状に削る。底部内面外周面 強いコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	
51	SD01 4区 堆土最下層	土師器	皿	13.6	2.95	10.0	器形は全体に深く。平底。体部は盤やかに内凹気味に斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内面外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 半分が鋸歯状に削る。底部内面外周面 強いコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	
51	SD01 3区 堆土最下層	土師器	皿	(17.7)	2.8	(10.2)	器形は全体に深く。平底。体部は直錐形に斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内面外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 半分が鋸歯状に削る。底部内面外周面 強いコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	
51	SD01 3区 堆土最下層	土師器	皿	13.95	3.1	7.7	器形は比較的深い。平底。体部は直錐形に斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内面外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 半分が鋸歯状に削る。底部内面外周面 強いコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	
51	SD01 3区 堆土最下層	土師器	皿	14.0	3.0	8.1	器形は全体に深く。平底。体部は盤やかに斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内面外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀中葉～後半。	
51	SD01 3区 堆土最下層	土師器	皿	12.8	2.75	8.2	器形は比較的深い。平底。体部は盤やかに内凹気味に斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内面外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 半分が鋸歯状に削る。底部内面外周面 強いコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	
52	SD01 3区 堆土最下層	土師器	皿	14.85	2.65	9.2	器形は比較的深い。平底。体部は直錐形に斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内面外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀中葉～後半。	
52	SD01 3区 堆土最下層	土師器	皿	14.0	2.85	9.5	器形は全体に深く。平底。体部は盤やかに内凹気味に斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内面外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀中葉～後半。	
52	SD01 3区 堆土最下層	土師器	皿	14.25	2.7	7.85	器形は全体に深く。平底。体部は直錐形に斜め上方に張り。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内面外周面 強いコナ子調節。底部内面 1.5cmのコナ子調節。底部外周 指おさえの後、ナガ子調節。	赤褐色 褐色。V-B1組 12世紀中葉～後半。	

報告番号	出土場所	種類	西暦	口径(cm)	容積(cm)	底径(cm)	形态・渡り状況の特徴		文様・調査方法の特徴		参考文献	
							器形	内面	外側	調査法		
521	4区 埋土④	土器部	■	13.8	2.6	6.5	平底。体部は縦やかに斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	器形は比較的高い。器底はかなり斜め。平底。体部は縦やかに斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	口部裏面内側 強いコナデ調整。体部内外面 コナデ調整。体部外表面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 洋紫褐色。N71 斜 12世紀中葉～後 期。		
524	5区 埋土底下層	土器部	■	14.25	2.4	8.0	平底。体部は縦やかに斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	器形は比較的高い。器底はかなり斜め。平底。体部は縦やかに斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	器形は茎形が深い。口縁部内外面 強いコナ デ調整。底部外表面 ナデ調整。	色調 洋紫褐色。N71 斜 12世紀中葉～後 期。		
526	5区 埋土底下層	土器部	■	14.35	2.55	8.1	平底。体部は縦やかに斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	器形は全体的に茎形が高い。平底。体部は直線的 に斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	口部裏面内側 強いコナデ調整。底部内面 コナデ調整。底部外表面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 洋紫褐色。V 12世紀中葉～後 期。		
529	5区 埋土底下層	土器部	■	14.6	3.15	9.15	器形は全体的に茎形が高い。平底。体部は直線的 に斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	器形は全体的に茎形が高い。平底。体部は直線的 に斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	口部裏面内側 強いコナデ調整。底部内面 コナデ調整。底部外表面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 洋紫褐色。V 12世紀中葉～後 期。		
527	5区 埋土底下層⑤	土器部	■	(14.1)	3.0		器形は全体的に茎形が高い。平底。体部は直線的 に斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	器形は全体的に茎形が高い。平底。体部は直線的 に斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	口部裏面外側 強いコナデ調整。底部内面 コナデ調整。底部外表面 指おさえの後、ナデ調整。 底部内面 強いコナデ調整。外側の直線的 な体部の内側を丸みをつける。底部外表面 不定方 向のナデ調整。底部外表面 指おさえの後、ナデ調整。	外因の底付下部から左端 底付左端が残る。 色調 洋紫褐色。V 12世紀中葉～13 世纪前半。		
528	5区 埋土底下層	土器部	■	14.2	2.6	8.0	器形は全体的に茎形が高い。平底。体部は直線的 に斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	器形は全体的に茎形が高い。平底。体部は直線的 に斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	口部裏面内側 強いコナデ調整。底部内面 コナデ調整。底部外表面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 洋紫褐色。V 12世紀中葉～後 期。		
529	5区 埋土底下層	土器部	板		(1.19)		土器部板の高台跡か?		底部外表面に切痕が残る。			
530	5区 埋土底下層	土器部	板		(1.39)	(8.0)	平底。内面は凹凸をもつ。		内外面とともにナデ調整。底部外表面 へら切痕。			
531	5区 埋土底下層	瓦器	焼	(13.8)	(2.7)		体部は僅かに内腹気味に斜め上方に張り出る。 口縁部は丸みをもつ。	口部裏面外側 強いコナデ調整。底部外表面 コナデ調整。底付の後、ナデ調整。器形的に丸みが残 る。体部内面 ナデ調整の跡の、直線的な方向の 丸みが残る。	体部外表面に隔壁痕が残る。 色調 底色と、底 部外表面に隔壁痕が 残る。			
532	5区 埋土底下層	瓦器	焼	(13.4)	(2.1)		体部は直線的に斜め上方に張り出る。口縁部 は丸みをもつ。	口部裏面外側 強いコナデ調整。底部外表面 コナデ調整。底付の後、ナデ調整。	色調 淡青色。			
533	5区 埋土底下層	瓦器	焼	(15.1)	5.5	(4.17)	高台は画面右側形状の比較的低い高台。 体部は直線的に斜め上方に張り出る。口縁部 は丸みをもつ。	高台は画面右側形状の比較的低い高台。 体部は直線的に斜め上方に張り出る。口縁部 は丸みをもつ。	口部裏面内側 強いコナデ調整。体部裏面 コナデ調整。底付の後、前方のナデ調整。 体部外表面 指おさえの後、後方のナデ調整。 底部外表面に隔壁痕が残る。	色調 淡青色。 瓦器瓦屋 12世紀中葉～後 期。		
534	5区 埋土⑥	瓦器	板	14.75	4.4	4.3	高台は断面台形状の低い貼り付け高台。体部 は縦やかに斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	高台は断面台形状の低い貼り付け高台。体部 は縦やかに斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	口部裏面内側 強いコナデ調整。底付外表面 コナデ調整。底付の後、ナデ調整。器形的に丸みが残 る。体部内面 横横筋の丸ぎ跡調整。背面が丸ら れる。体部外表面 指おさえの後、中央方向のナデ 調整。底部外表面 指おさえの後、横筋痕が残る。	体部外表面に隔壁痕が残る。 色調 底色と、底 部外表面に隔壁痕が 残る。		
535	5区 埋土底下層	瓦器	■	9.15	1.85		丸底。底盤と器身の界は不明瞭で体部は縦や かに斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	丸底。底盤と器身の界は不明瞭で体部は縦や かに斜め上方に張り出る。口縁部は丸みをもつ。	口部裏面内側 強いコナデ調整。底付内面 コナデ調整。底付外表面 指おさえの後、ナデ調整。 底部外表面 指おさえの後、ナデ調整。	底付外表面 重ね縫合痕 あり、色調 底色。瓦器 12世紀中葉～後 半。		
536	5区 埋土底下層	瓦器	■	8.6	1.6	3.55	平底。体部は直線的に斜め上方に張り出る。口縁 部は丸みをもつ。	平底。体部は直線的に斜め上方に張り出る。口縁 部は丸みをもつ。	口部裏面から体部外表面 強いコナデ調整。底付内面 コナデ調整。底付外表面 指おさえの後、ナデ調整。 底部外表面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 淡青色。緑縫合 を多く残す。		
537	5区 埋土④	瓦器	■	8.5	1.85		平底。体部は縦やかに斜め上方に張り出る。口縁 部は丸みをもつ。	平底。体部は縦やかに斜め上方に張り出る。口縁 部は丸みをもつ。	口部裏面内側 強いコナデ調整。底付外表面 コナデ調整。底付の後、ナデ調整。底付外表面 指おさえの後。	色調 絹灰色。 底付外表面 指お せき痕がある。		
538	5区 底下層	底盤器	板		(1.85)	(4.6)	平底。体部は縦やかに斜め上方に立ち上がる。		内外面とも底盤ナデ調整。底付外表面 不 調整。底付内面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 白灰色。東播 系底盤。		
539	5区 埋土底下層	底盤器	錆		(1.8)	(8.1)	平底。体部は縦やかに斜め上方に立ち上がる。		体部裏面から底盤外表面 強いコナデ調整。底付外 表面 指おさえの後、ナデ調整。底付外表面 指おさえの後。	色調 黄白色。東播 系底盤。		
540	5区 埋土底下層	底盤器	錆		(2.35)	(12.1)	平底。体部は縦やかに斜め上方に立ち上がる。		内外面とも底盤ナデ調整。底付外表面 不 調整。底付内面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 白灰色。東播 系底盤。		
541	5区 埋土底下層	底盤器	錆		(2.4)	(8.8)	高台は「ハ」の字状にひらく貼り付け高台。		底盤裏へうつ切痕あり。内外面とも底盤ナデ調 整。	色調 反色。		
542	5区 埋土底下層	底盤器	錆		(4.8)	(11.6)	高台は「ハ」の字状ひらく貼り付け高台。体部 は縦やかに斜め上方に立ち上がる。		内外面とも底盤ナデ調整。底付外表面 指お せき痕がある。	色調 反色。自然底盤 から、東播系底盤。		
543	5区 埋土底下層	底盤器	錆		(4.7)		口縁部は大きく外方にひらく。口縁部は丸みを もつ。		内外面とも底盤ナデ調整。底付外表面 不 調整。底付内面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 反色。東播系 底盤。		
544	5区 埋土底下層	底盤器	錆		(8.6)	(5.82)	体部は大きめ外方にひらく。口縁部は丸みを もつ。		内外面とも底盤ナデ調整。底付外表面 不 調整。底付内面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 反色。東播系 底盤。		
545	5区 埋土④	底盤器	錆		(2.45)		体部は縦やかに斜め上方に張り出る。口縁部 は丸みをもつ。		内外面とも底盤ナデ調整。底付外表面 コナデ調整。	色調 反色。5世紀後半		
546	5区 埋土底下層	底盤器	錆		(12.8)	(1.85)	体部は縦やかに斜め上方に張り出る。口縁部 は丸みをもつ。		内外面とも底盤ナデ調整。底付外表面 不 調整。底付内面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 反色。5世紀後半		
547	5区 埋土④	底盤器	錆		(17.8)	(2.75)	体部は縦やかに斜め上方に張り出る。口縁部 は丸みをもつ。		内外面とも底盤ナデ調整。底付外表面 コナデ調整。	色調 反色。底盤白 壁V-15。12世紀後 半。		
548	5区 埋土底下層	底盤器	錆		(14.6)	(3.55)	体部は直線的に斜め上方に張り出る。口縁部 は丸みをもつ。		内外面とも底盤ナデ調整。底付外表面 不 調整。底付内面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 反色。底盤白 壁V-15。12世紀後 半。		
549	5区 埋土底下層	青白磁	錆		(16.9)	(4.25)	器底は非常に深い。器底は丸みをもつ。		内外面とも底盤ナデ調整。底付外表面 不 調整。底付内面 指おさえの後、ナデ調整。	色調 反色。12世紀代。		

登録No.	出土場所	種類	形態	口徑(cm)	高等(cm)	深度(cm)	測量法・断面法の特徴	文様・模様法の特徴	説明
5501 3区 埋土最下層	青磁	瓶	高	10.2	2.2	4.1	縦縫の絞部はない。底部は斜めで、体部は直線的に斜め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	底部内面、ハラモミの餘量的な草花文。縦縫引き音 文式。体部は直線的に斜め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	同安青磁。12世紀後半～13世紀前半。
55 SD01 3区 埋土最下層	土器品	カマドの土 ニシアコ	高	4.1	(6.7)		縦縫はほとんどない。縦の深い斜めから斜め上方に盛り上がる。縦の深い斜めから斜め上方に盛り上がる。縦縫は丸みをもつ。	縦縫はほとんどない。縦の深い斜めから斜め上方に盛り上がる。縦縫は丸みをもつ。	手作成。内外面とも青磁特徴。灰オリーブ色に着色。縦縫部は丸みをもつ。
58 SD01 3区 埋土最下層	瓦	丸瓦	長(6.0)	幅(7.7)	厚1.7		表面に布目焼。		手作成。内外面とも青磁特徴。ナデ調整。
55 SD01 3区 埋土③	土師器	瓶	高	7.95	1.0		縦縫は全体に沿って安心。平底。体部は大きく斜め下方に傾する。口縁部は丸みをもつ。	口縫部から体部内面裏。強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 微ねじれの後、不定方向のナデ調整。	青磁 にいじ模様。コ スター形。V1 段階 12世紀後半～13世紀初 頭。
58 SD01 2-2 埋土セグメント 埋土③	土師器	瓶	高	8.1	1.4		平底。体部は緩やかに斜め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 微ねじれの後、不定方向のナデ調整。	青磁 細身。V1 段階 12世紀後半～13世紀初 頭。
55 SD01 3区 埋土③	土師器	瓶	高	8.95	1.4	5.95	平底。体部は緩やかに斜め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 微ねじれの後、不定方向のナデ調整。	青磁 内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 微ねじれの後、ナデ調整。
55 SD01 3区 埋土③	土師器	瓶	高	9.5	1.4	5.45	平底でやや上揚気味。体部は緩やかに斜め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 不正方向のナデ調整。 底部外裏 西泊水の後、ナデ調整。	青磁 内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。
55 SD01 4区 埋土③	土師器	瓶	高	8.9	1.4	7.1	器形が全体大きめ。平底。体部は緩やかに斜め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。外裏 働か せた後、西泊水の後、不正方向のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	青磁 にいじ模様。V1 段階 12世紀中葉～後 半。
55 SD01 3区 埋土③	土師器	瓶	高	8.1	1.45	5.05	平底でやや上揚気味。体部は緩やかに斜め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	青磁 滑黄模様。VA2 段階 12世紀中葉～後 半。
55 SD01 3区 埋土③	土師器	瓶	高	9.2	1.4	4.95	平底でやや上揚気味。体部は緩やかに斜め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	青磁 にいじ模様。V 1段階 12世紀中葉～後 半。
55 SD01 4区 埋土③	土師器	瓶	高	9.15	1.4	5.7	器形が全体大きめ。平底。体部は緩やかに斜め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 不正方向のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	青磁 にいじ模様。V1 段階 12世紀中葉～後 半。
55 SD01 2区 埋土	土師器	瓶	高	9.3	1.7	6.0	器形が全体大きめ。平底。体部は直線的 に斜め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 微ねじれの後、不定 方向のナデ調整。	青磁 にいじ模様。V 1段階 12世紀後半～13世 紀初。
54 SD01 3区 埋土③	土器器	瓶	高	8.95	1.5	4.95	平底。体部は緩やかに斜め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	器形は複数ある。口縫部内外裏 強いコナデ調整。 底部内面 1.5cm のナデ調整。底部外裏 微ねじ れの後、ナデ調整。	青磁 にいじ模様。V 1段階 12世紀中葉～後 半。
55 SD01 3-4 区	土師器	瓶	高	9.9	1.5	4.78	平底。底部と体部の界は不明確で体部は底 部に沿って安心。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	青磁 にいじ模様。V 1段階 12世紀半葉～後 半。
54 SD01 2-3 埋土セグメント 埋土①	土師器	瓶	高	9.2	1.4	(4.9)	平底。体部は緩やかに斜め上方に盛り上がる。口縁 部は丸みをもつ。	器形は複数ある。口縫部内外裏 強いコナデ調整。 底部内面 1.5cm のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	体部～底部内面 強いコナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。
54 SD01 3区 埋土熱土層	土師器	瓶	高	8.5	1.6	4.65	器形が全体小さめ。底部、体部は緩やかに斜 め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	底部外裏 強いコナデ調整。底部内面 指おさえの後、V1 段階 12世紀後半～13世 紀初。
55 SD01 3区 埋土中層③	土師器	瓶	高	9.4	1.7	5.9	器形は全体に安心。平底。体部は緩やかに斜 め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 微ねじれの後、不定 方向のナデ調整。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 微ねじれの後、ナデ調整。
54 SD01 3区 埋土中層③	土器器	瓶	高	8.75	1.9	4.3	器形は大きめ。平底。底部と体部の界は不明 確で体部は緩やかに斜め上方に盛り上がる。口縁 部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	青磁 にいじ模様。V 1段階 12世紀中葉～後 半。
55 SD01 3区 埋土中層③	土師器	瓶	高	9.15	1.75		器形は比較的薄い。器形は全体に安心。平底。 底部、底部と体部の界は不明確。体部は緩 やかに斜め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをも つ。	器形の座感が著しい。内外裏ともコナデ調整。	青磁 にいじ模様。V 1段階 12世紀中葉～後 半。
54 SD01 3区 埋土③	土師器	瓶	高	9.1	1.5		平底。体部は緩やかに斜め上方に盛り上がる。体部は緩やかに斜 め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	青磁 にいじ模様。V2 段階 12世紀半葉～後 半。
57 SD01 3区 埋土中層③	土師器	瓶	高	9.25	1.55	4.85	器形は全体に安心。体部は緩やかに斜 め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	器形の座感が著しい。内外裏ともコナデ調整。	青磁 にいじ模様。V 1段階 12世紀中葉～後 半。
57 SD01 3区 埋土中層③	土師器	瓶	高	9.1	1.2	4.6	体部が緩やかに斜め上方に盛り上がる。口縁部は 丸みをもつ。	器形の座感が著しい。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	青磁 にいじ模様。V 1段階 12世紀半葉～後 半。
57 SD01 3区 埋土中層③	土師器	瓶	高	8.85	1.3	4.75	器形は緩やかに斜め上方に盛り上がる。口縁部は 丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	青磁 にいじ模様。V 1段階 12世紀後半～13世 紀初。
57 SD01 3区 埋土中層③	土師器	瓶	高	8.6	1.7	5.35	平底。器形は比較的薄い。器形は全体に安心。平底。 底部から緩やかに斜め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	青磁 強い模様。V 1段階 12世紀後半～13世 紀初。
57 SD01 3区 埋土中層③	土師器	瓶	高	9.8	1.5	5.6	器形は全体に安心。平底。体部は緩やかに斜 め上方に盛り上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	青磁 にいじ模様。V 1段階 12世紀後半～13世 紀初。
57 SD01 3区 埋土中層③	土師器	瓶	高	9.55	1.6	5.3	器形は全体に安心。平底。底部と体部の界は不 明確で体部は緩やかに斜め上方に盛り上がる。口 縁部は丸みをもつ。	口縫部内外裏 強いコナデ調整。底部内面 裏と上方のナデ調整。底部外裏 指おさえの後、ナデ調整。	青磁 にいじ模様。V 1段階 12世紀中葉～後 半。

報告番号	立地場所	種類	基盤	日付(cm)	高さ(cm)	直径(cm)	形態・成形技術の特徴		文様・装飾技法の特徴		備考	
							特徴	成形法	特徴	文様・装飾技法の特徴		
577	SD01 4区 堆土③	土壌器	皿		9.4	2.1	9.0	比較的堅苦しい。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部・底盤内面裏 強いVコナデ調整。外表面の傾斜と底部の直線に斜め上方をもつ。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 露おさえの後、ナデ調整。	色斑 当黄褐色。V10a型 12世紀後葉～13世紀前半。		
578	SD01 3区 堆土中層③	土壌器	皿	(13.6)	(2.25)			体部は僅かに内側気泡に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部・強いVコナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	底盤外周に塵丸1個所。色斑 当黄褐色。V10a型 12世紀後葉～13世紀前半。		
579	SD01 3区 堆土中層③	土壌器	皿	(13.8)	(2.85)	(8.8)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味に收める。	口縁部 内外裏 強いVコナデ調整。外表面に僅かな凹をもつ。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	体部外周に塵丸1個所。色斑 当黄褐色。V10a型 12世紀後葉～13世紀前半。			
580	SD01 3区 堆土中層③	土壌器	皿	14.2	2.4	9.35	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味に收める。	口縁部 内外裏 強いVコナデ調整。外表面に僅かな凹をもつ。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	色斑 当黄褐色。V12a型 12世紀末葉～13世紀前半。			
581	SD01 4区 堆土③	土壌器	皿	13.7	2.6	8.1	平底。体部は僅かに内側気泡に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部 内外裏 強いVコナデ調整。体部外側面 Vコナデ調整。底盤内面 指おさえの後、ナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	体部下部から底盤内面 外側面に塵丸1個所。色斑 当黄褐色。V12a型 12世紀後葉～13世紀前半。			
582	SD01 3-4 堆土中層③	土壌器	皿	13.7	2.6	9.0	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部・体部外側面 強いVコナデ調整。外表面に僅かな凹をもつ。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	色斑 当黄褐色。V12a型 12世紀中葉～後葉。			
583	SD01 3区 堆土上層③	土壌器	皿	(13.7)	2.6	(8.0)	器底は全体的に厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部・体部内面裏 強いVコナデ調整。外表面に僅かな凹をもつ。底盤内面 指おさえの後、ナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	体部下部に塵丸1個所。色斑 当黄褐色。V12a型 12世紀後葉～13世紀前半。			
584	SD01 3区 堆土中層③	土壌器	皿	14.2	2.8	10.8	器底は薄く変形。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	器底は完全に変形する。口縁部内外裏 強いVコナデ調整。体部・底盤内面裏 Vコナデ調整。	色斑 当黄褐色。V10a型 12世紀中葉～後葉。			
585	SD01 3区 堆土下層	土壌器	皿	(14.05)	2.8	8.9	器底は全体的に薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	器底は完全に変形する。口縁部内外裏 強いVコナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	色斑 当黄褐色。V12a型 12世紀後葉～13世紀前半。			
586	SD01 3区 堆土中層③	土壌器	皿	(14.0)	2.79	(7.5)	器底は全体的に厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	器底は完全に変形する。口縁部内外裏 強いVコナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	色斑 当黄褐色。V12a型 12世紀中葉～後葉。			
587	SD01 4区 堆土③	土壌器	皿	13.8	2.8	8.05	器底は比較的堅い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部 内外裏 強いVコナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 露おさえの後、不完全方向のナデ調整。	体部下部から底盤内面 外側面に塵丸1個所。色斑 当黄褐色。V12a型 12世紀中葉～後葉。			
588	SD01 4区 堆土③	土壌器	皿	14.6	2.8	9.5	底盤の器底は薄い。体部は僅かに内側気泡に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部 内外裏 強いVコナデ調整。体部から底盤部へ向かって僅かな凹をもつ。底盤内面 不完全方向のナデ調整。	体部下部から底盤内面 外側面に塵丸1個所。色斑 当黄褐色。V12a型 12世紀中葉～後葉。			
589	SD01 3区 堆土中層③	土壌器	皿	14.0	2.8	7.95	器底は全体的に薄く変形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	器底は薄く変形する。口縁部内外裏 強いVコナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	色斑 当黄褐色。V12a型 12世紀中葉～後葉。			
590	SD01 3区 堆土中層③	土壌器	皿	14.15	2.8	8.7	器底は薄く変形。器底は比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	器底は完全に変形する。口縁部内外裏 強いVコナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	色斑 当黄褐色。V12a型 12世紀中葉～後葉。			
591	SD01 4区 堆土③	土壌器	皿	14.15	2.8	9.75	器底は薄く変形。器底は比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	器底は完全に変形する。口縁部内外裏 強いVコナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	外観の体部下位から底盤 付近に塵丸が見られる。色斑 当黄褐色。V10a型 12世紀後葉～13世紀前半。			
592	SD01 4区 堆土③	土壌器	皿	13.85	3.0	9.3	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	器底は完全に変形する。口縁部内外裏 強いVコナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	外観の体部下位から底盤 付近に塵丸が見られる。色斑 当黄褐色。V10a型 12世紀後葉～13世紀前半。			
593	SD01 3区 堆土中層③	土壌器	皿	14.2	2.8	9.95	器底は薄く変形。器底と体部の差は不平滑。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	器底は薄く変形する。口縁部内外裏 強いVコナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	色斑 当黄褐色。V10a型 12世紀後葉～13世紀前半。			
594	SD01 3区 堆土中層③	土壌器	皿	12.6	2.85	8.85	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	器底は完全に変形する。強いVコナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	器底は薄く変形する。口縁部内外裏 強いVコナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。	色斑 当黄褐色。V10a型 12世紀後葉～13世紀前半。		
595	SD01 3区 堆土中層③	土壌器	皿	13.75	2.7	9.25	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部 内外裏 強いVコナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 露おさえの後、ナデ調整。	器底は薄く変形する。口縁部内外裏 強いVコナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 露おさえの後、ナデ調整。	器底の突起が薄い。外観の底盤内面付近に塵丸が見られる。色斑 当黄褐色。V12a型 12世紀後葉～13世紀前半。		
596	SD01 3区 堆土中層③	瓦器	碗	04.95	4.85	(4.8)	高台は幅の広い圓筒形台状の低い高台。体部は僅かに内側気泡に斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内外裏 強いVコナデ調整。体部内面 不完全方向の後、横方のミガキ調整。露おさえの後、ナデ調整。底盤外周に底盤凹凸が残る。	高台は幅の広い圓筒形台状の低い高台。底盤内面 不完全方向の後、横方のミガキ調整。露おさえの後、ナデ調整。底盤外周に底盤凹凸が残る。	色斑 灰色。和型瓦器。V12a型 12世紀中葉～後葉。		
597	SD01 3区 堆土③	瓦器	碗	14.7	4.8	(4.8)	平底。断面は直角形の低い高台を盛りつけるが、1/2は刃の具で盛り込んでいる。体部は僅かに内側で斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内外裏 強いVコナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 露おさえの後、ナデ調整。	底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 露おさえの後、ナデ調整。	底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 露おさえの後、ナデ調整。	底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 露おさえの後、ナデ調整。	
598	SD01 3区 堆土③	瓦器	皿	6.9	1.8		丸底。底部と体部の差はなく、腰やかに斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内外裏 強いVコナデ調整。体部内面 不完全方向の後、横方のミガキ調整。露おさえの後、ナデ調整。底盤外周に底盤凹凸が残る。	口縁部内外裏 強いVコナデ調整。体部内面 不完全方向の後、横方のミガキ調整。露おさえの後、ナデ調整。底盤外周に底盤凹凸が残る。	色斑 灰色。腰やかをぐく少し歪む。		
599	SD01 堆土 中層③	瓦器	皿	(3.4)	1.8	(4.4)	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は丸みをもつ。	口縁部内外裏 強いVコナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 露おさえの後、ナデ調整。	口縁部内外裏 強いVコナデ調整。底盤外周 指おさえの後、ナデ調整。底盤内面 不完全方向のナデ調整。底盤外周 露おさえの後、ナデ調整。	色斑 灰色。灰褐色。		

種類No.	出土場所	種別	特徴	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	部屋-調整技術の特徴	文様-調整技術の特徴	参考
600	S001 3区 埋土中腰③	直器	直	(7.7)	(1.4)		平底。体部は縦やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸みをもつ。	口縫部-体部と外縫部 備:「印子」ナデ調整。外縫部の体部と外縫部の内縫に斜め上から、底部内縫部 不定方向のナデ調整。一型・二型文が混在する。底部外縫部 指定の後、ナデ調整。	色調 黄褐色。
601	S001 2-3 横セクション 埴土①	直器	直	(2.85)	(3.0)		平底。高台。高台の側面は不規則。体部は縦やかに斜め上方に立ち上がる。底部内縫部は埋む。	底部内縫部 同社-「ナデ調整。底部内縫部 回転ナデ調整。底部外縫部 不定型。各部底部 不規整。各部外縫部 不規整。各部内縫部 不規整。各部底部 指定の後、ナデ調整。	色調 黄白色。束縛系須恵器。
602	S001 2-3 横セクション 埴土②	直器	直	(2.1)	(3.0)		平底。体部は縦やかに斜め上方に立ち上がる。底部内縫部は埋む。	体部内縫部 同社-「ナデ調整。底部内縫部 ナデ調整。底部外縫部 不規整。各部底部が埋む。	色調 黄色。束縛系須恵器。
603	S001 墓土 小腰③	直器	直	(20.7)	3.4		体部は直線的に斜め上方に斜げる。口縁部は内側に斜め上につまみ出す。底部三脚状形成部をもつ。	口縫部内縫部 強い回転ナデ調整。体部内縫部 回転ナデ調整。	口縫部外縫部 重ね捻糸文。色調 黄色。束縛系須恵器。
604	S001 3区 埴土③	直器	直	(33.4)	(4.3)		体部は直線的に斜め上方に斜げる。口縁部は斜め上につまみ出す。底部三脚状形成部をもつ。	口縫部内縫部 強い回転ナデ調整。外縫部 内縫部と回転ナデ調整。	口縫部-直線的外縫部 備:「印子」ナデ調整。各部外縫部 不規整。各部内縫部 不規整。各部底部 不規整。各部外縫部 不規整。各部内縫部 不規整。各部底部 不規整。
605	S001 3区 埴土③	直器	直	(3.35)	(12.0)		平底。体部は直線的に斜め上方に斜げる。	体部内縫部 回転ナデ調整。底部内縫部 極端。	色調 黄白色。束縛系須恵器。
606	S001 3区 埴土③	直器	直	(28.7)	(5.25)		体部は直線的に斜め上方に斜げる。口縁部は斜め上につまみ出す。口縫部を始めて片口を作る。	口縫部内縫部 強い回転ナデ調整。底部内縫部 極端。	口縫部外縫部 重ね捻糸文。色調 黄色。束縛系須恵器。
607	S001 3区 埴土②中腰	直器	直	(23.6)	(4.85)		口縫部は外方にひらく。口縫部は上方につまみ上げ、外気孔地に収める。	口縫部強め 強い回転ナデ調整。口縫部の外縫部 回転ナデ調整。	色調 黄白色。
608	S001 3区 埴土③	直器	直	(3.85)			口縫部は大きく外方にひらく。	口縫部内縫部 強い回転ナデ調整。体部内縫部 手格子押引きが残る。口縫部内縫部 多方向のナデ調整。	色調 黄色。
609	S001 3-4 空窓附 上 蓋	直	直	(16.3)	(2.0)		口縫部は直角状に斜め上方に斜げる。	内外面とも透明難施釉。灰白色に発色。	種類-直角分類 直縫渡り型。12世紀後半。
610	S001 墓土③	直器	直	(13.8)	(2.0)		体部は直線的に斜め上方に斜げる。口縫部は斜め上につまみ出す。口縫部は斜め上につまみ出る。底部内縫部 空窓附で分割する。	口縫部外縫部 沈線1条。内外縫部 透明難施釉。青味が帯びた白色に発色。	種類-春田分類 古墳(57-1型。12世紀後半)。
611	S001 3区 埴土③	直器	直	(2.6)				内外面とも透明難施釉。灰白色に発色。	種類-直角分類。
612	S001 3区 埴土③	直器	直	(10.5)	(1.25)		口縫部は丸みをもつ。	内外面とも青磁施釉。灰オーバー色に発色。同窓蓋系青。	
613	S001 3区 埴土③	瓦	直	(3.75)				全表面に自然難附着。	東洋系-中山山城内支那瓦と同様。
614	S002 墓土 ③	土師器	直	(9.3)	1.15		器形は比較動軽い。平底。体部は縦やかに斜め上方に斜げる。口縫部は失失失氣に収める。	口縫部内縫部 強い回転ナデ調整。底部内縫部 ヨコナデ調整。底部外縫部 手オボえの後、手子調整。	色調 在い黄白色。Y字型。12世紀後半~13世紀前半。
615	S002 3-4 区窓附	直器	直	(4.6)	4.45		高台は断面直角形状の低-弧-斜め分け型高台。口縫部は斜め上方に斜げる。口縫部は斜め上につまみ出る。口縫部は斜め上につまみ出る。底部内縫部は丸みをもつ。	口縫部外縫部 強い回転ナデ調整。体部内縫部 手格子押引きが残る。口縫部外縫部 手格子押引きが残る。底部内縫部 手格子押引きが残る。	色調 在い黄白色。丸型瓦。12世紀中期~後半。
616	S002 3区 埴土下腰	直器	直	(17.5)	(2.1)		体部は直線的に斜め上方に斜げる。口縫部は斜め上につまみ出る。	口縫部内縫部 強い回転ナデ調整。	口縫部外縫部 重ね捻糸文。色調 黄白色。
617	S002 3区 埴土下腰	直器	直	(5.1)			平底台。高台の側面は不規則。体部は直線的に斜め上方に斜める。底部内縫部は埋む。	体部外縫部 底部内縫部 回転ナデ調整。底部外縫部 手格子押引きが残る。	色調 黄白色。束縛系須恵器。
618	S002 墓土 ③	直器	直	(16.1)	(2.75)		器形は全体として薄い。底盤は内側斜め上につまみ出る。口縫部は小ぶり。口縫部は斜め上につまみ出る。	内外面とも透視物施釉。點は、はせて刺繡する。	種類-森田分類 自縫 玉器。11世紀後半。
619	東地区 P1 土師器	直	直	(12.1)	(1.8)		器形は厚底で薄い。底盤は縦やかに斜め上方に斜げる。口縫部は丸みをもつ。	内外面とも回転ナデ調整。	色調 黄白色。厚器。12世紀後半~13世紀前半。
620	東地区 P4 直器	直器	直	(23.9)	8.5		体部は直線的に斜め上方に斜げる。口縫部は斜め下方に切る。	口縫部内縫部 強い回転ナデ調整。口縫部の外縫部が若干蓮く。底部内縫部 ヨコナデ調整。	口縫部外縫部 に裏な焼き底。束縛系須恵器。12世紀後半。
621	東地区 P1 直器	直器	直	(1.95)	5.2		平底。体部は縦やかに斜め上方に斜める。僅かに平高底を作り出す。	内外面とも回転ナデ調整。底部外縫部 不規整。余初痕がある。	束縛系須恵器。
622	東地区 中 世会合腰付	直器	直	(16.8)	4.85	(1.1)	体部は直線的に斜め上方に斜げる。口縫部は丸みをもつ。	口縫部内縫部 強い回転ナデ調整。口縫部の外縫部は透視物施釉。點は、はせて刺繡する。	内外面全般-直角分類。色 調:黄白色。点:桔梗文。12世紀後半~13世紀前半。束縛系須恵器。
623	東地区 中 世会合腰付	直器	直	(16.4)	(3.35)		体部は直線的に斜め上方に斜げる。口縫部は丸みをもつ。	口縫部内縫部 強い回転ナデ調整。体部内縫部 回転ナデ調整。	色調 黄色。束縛系須恵器。
624	東地区 造 模様出當	直器	直	(17.2)	(2.35)		体部は直線的に斜め上方に斜げる。口縫部は玉筋状に肥厚する。	内外面とも透明難施釉。灰白色に発色。	種類-直角分類。自縫 器。12世紀後半。
625	東地区 造 模様出當	直器	直	(18.9)	(2.35)		体部は直線的に斜め上方に斜げる。口縫部は玉筋状に肥厚する。	内外面とも透明難施釉。灰白色に発色。	種類-直角分類。自縫 器。12世紀後半。
626	東地区 造 模様出當	直器	直	(10.4)	(4.45)		体部は底盤ながら、紙やかに斜め上方に斜げる。器形は圓筒状に肥厚する。	底部外縫部 下半 山形ヘラ解ナデ調整。体部内縫部 回転ナデ調整。底部外縫部 1方向のナデ調整。	色調 黄白色。4世紀後半。
627	S002直器 古時代到 直器	直器	直	(13.2)	8.8		丸底。体部は大きく内側厚する。口縫部は大ぶり。外方にひらく。	底部-体部外縫部 下半 山形ヘラ解ナデ調整。体部内縫部 回転ナデ調整。底部中央に穿孔-直孔。	色調 青緑色。

報告No.	出土場所	種類	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	形態・装飾様式の特徴	文様・模様技術の特徴	傷害
629	佐野市東 古河時代 古墳	直筒器	壺	(8.0)	(6.0)	腹径 13.1	直筒は比較的高い。体部は中央で大きくなる形に延びる。体部と口部は大きく内傾する。口縁部は直立。口總端部は水平方向につまみ出します。	口縁部内外面 強い輪郭線調査。体部外側に輪郭線調査。体部外側にカキ味が見られます。	色調 黄白色。
630	近地区 墓 後生土器	直筒器	壺	(4.0)		5.95			
630	2-5区間セ クション 墓 後生土器・中 身黄色・中 身	上製品	土器	径(4.0)	幅 1.8	厚 1.35	横状、下半部 欠損。肩部 1箇所。	全面にナデ調整。	色調 黄黄色。

写真のみ参考

報告No.	出土場所	種類	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	形態・装飾様式の特徴	文様・模様技術の特徴	傷害
631	600415 鹿嶋原	色絵磁器	壺				体形は円錐状、肩の受けは直立。	内外面とも滑らか施釉。白色に朱色。外縁端刃部に輪郭線調査。外縁端刃部2箇。「兵庫県立醫科大学附属病院大前原歯科」紋スタンプ。	632-634の裏。
632	600415 鹿嶋原	色絵磁器	鉢				基部濃。体部は直立。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面とも滑らか施釉。白色に朱色。口縁部外側に輪郭線調査。外縁端刃部2箇。「兵庫県立醫科大学附属病院大前原歯科」紋スタンプ。	赤褐色の食器。
633	600415 1区側面	色絵磁器	鉢				基部濃。体部は直立。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面とも滑らか施釉。白色に朱色。口縁部外側に輪郭線調査。外縁端刃部2箇。「兵庫県立醫科大学附属病院大前原歯科」紋スタンプ。	赤褐色の食器。
634	600415 2区SK104	色絵磁器	鉢				基部濃。体部は直立。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面とも滑らか施釉。白色に朱色。口縁部外側に輪郭線調査。外縁端刃部2箇。「兵庫県立醫科大学附属病院大前原歯科」紋スタンプ。	赤褐色の食器。
635	600415 2区側面	色絵磁器	壺				高台は比較的高い。体部はほぼ直立。	口縁部内外面とも滑らか施釉。白色に朱色。口縁部外側に輪郭線調査。	赤褐色の食器。
636	600415 鹿嶋原	色絵磁器	壺				体形はほぼ直立。	内外面とも滑らか施釉。白色に朱色。口縁部外側に輪郭線調査。	636-2より小型の裏。
637	600415 1区側面	色絵磁器	鉢				体形は短く、ほぼ直立する。	内外面とも滑らか施釉。白色に朱色。口縁部外側に輪郭線調査。外縁端刃部2箇。	高台裏に、「兵庫県立醫科大学附属病院大前原歯科」紋スタンプ。
638	600415 鹿嶋原	色絵磁器	鉢				体形は短く、ほぼ直立する。	内外面とも滑らか施釉。白色に朱色。口縁部外側に輪郭線調査。	高台裏に、「兵庫県立醫科大学附属病院大前原歯科」紋スタンプ。
639	600415 鹿嶋原	色絵磁器	鉢				体形は短く、ほぼ直立する。	内外面とも滑らか施釉。白色に朱色。口縁部外側に輪郭線調査。	高台裏に、「兵庫県立醫科大学附属病院大前原歯科」紋スタンプ。
640	600415 1区側面	色絵磁器	鉢				高台は比較的高い。	内外面とも滑らか施釉。白色に朱色。口縁部外側に輪郭線調査。	赤褐色の裏に、「兵庫県立醫科大学附属病院大前原歯科」紋スタンプ。
641	600415 1区側面 底	色絵磁器	碗片				高台裏に輪郭で「□□1.056」筋スタンプ。	内外面とも透明強度低。白色に朱色。口縁部外側に輪郭線調査。	高台裏に輪郭で「□□1.056」筋スタンプ。
642	600415 1区側面	象付磁器	碗片					内外面とも透明強度低。白色に朱色。内面 槌平状に凹陥。外側 銀化コバルト藍色「大」字記入。	高台裏に輪郭で「□□1.056」筋スタンプ。
643	600415 2区側面	色絵磁器	鉢				高台は比較的高い。体部は僅かに内傾す。	内外面とも透明強度低。白色に朱色。	高台裏に輪郭で「□□1.056」筋スタンプ。
644	600415 1区側面	色絵磁器	鉢				高台は比較的幅が広く低い。	内外面とも透明強度低。白色に朱色。	高台裏に輪郭で「□□1.056」筋スタンプ。
645	600415 2区SK106	色絵磁器	鉢				高台は比較的幅が広く低い。体部は短くほぼ直立。	内外面とも透明強度低。白色に朱色。口縁部外側に輪郭線調査。	高台裏に輪郭で「□□1.056」筋スタンプ。
646	670318 1トレンチ	黒釉陶器	壺				高台は低い形の盲高台。	内外面とも棘刺施釉。淡黄緑色に朱色。	黒釉陶器の裏。
647	670318 2トレンチ	青磁	壺or皿				高台は比較的低い。	内外面とも青磁施釉。	鹿屋窯系青磁 16世紀代。
648	680190	土師器	鉢				足部の割裂。	外側 テテ割裂。	色調 淡黄褐色。
649	680190-111 文政集石	土師器	鉢				足部の割裂。	外側 テテ割裂。	色調 黄褐色。
650	680190 SK12	漆器器	板				体部は内側気泡。	内外面とも回転ナデ調査。	東洋漆器底器。
651	680190-111 文政集石	直筒器	鉢				比較的高い貼り付け高台をもつ。	外側 ハラ削ぎ、内面 回転ナデ調査。	色調 灰色
652	680190 SK26	漆器陶器	鉢or皿					内外面 陰線と棘刺施釉。	裏地 不明
653	680190 SK26	青磁	壺				器壁は比較的厚い。	内面 ハラ削ぎで施文。内外面とも青磁施釉。	鹿屋窯系青磁。
654	680190 SH111	青磁	壺				高台は断面長方形で比較的低い。底部の器壁は非常に厚い。	内外面とも青磁施釉。暗オリーブ灰色に朱色。底面付帯+高台裏は露胎。	鹿屋窯系青磁。16世紀代。

新規No.	出土場所	縁形	縁幅	D径(㎝)	轍車(㎝)	底径(㎝)	形勢・底面形状の特徴	文様・模様技法の特徴	備考
655	吉良郡御土 中	白磁	水注				白磁水注の注口部分。	外面 透明白施釉。灰白色に発色。	華南高台岳の水注、12世紀後半。
656	600160 SD112	瓦	斜平瓦				製作り成形。瓦當に唐草文施文。	外面 ナデ調整。	焼成 あまり、色調 灰白色。
657	600132 SD110	瓦器	板				口縁部はやや外反する。口縁部は尖り気味。	口縁部内外面 強い凹コナデ調整。	色調 灰白色。
658	600132 SD110	瓦器	板				体部は内壁気味に斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内外面ともヨコナデ調整。	色調 黄色。
659	2003061 SK01	青白磁	板				腹壁は非常に高い。口縁部は低く尖る。	外面 へつ書き施文。内外面とも透明釉施釉。青磁を帯びた白色に発色。	華南高台岳青白磁、12世紀。
660	2003061 SK01	青白磁	圓				腹壁は比較的高い。	内外面とも透明釉施釉。青磁を帯びた白色に発色。外面の体部下半以下露胎。	華南高台岳青白磁、12世紀。
661	2003061 SK01	須志器	伴產	(12.1)	(2.8)		体部は大きく膨らむ。口縁部は尖り気味に収める。	口縁部～体部内外面 三輪ナデ調整。一部、圓転へう削りの後、ナデ調整。	色調 灰白色。
662	2003172 西半	白磁	板				口縁部は外方に水平に折り曲げる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	腹面に乳突が現れる。横印・舟型分型。白磁鏡V字型、12世紀後半。
663	2003172 SD02	白磁	板				口縁部は玉ね状に肥厚する。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	腹面に乳突が現れる。横印・舟型分型。白磁鏡V字型、12世紀後半。
664-2-3-2星せ クシン	2003172 SD02	白磁	板				口縁部は玉ね状に肥厚する。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	腹面に星が見られる。横印・舟型分型。白磁鏡V字型、12世紀後半。
665	2003172 SD01	白磁	板				高台は浅く削りだす。	外面 透明白施釉。灰白色に発色。外面 落款。	横印・舟型分型。白磁鏡V字型、12世紀後半。
666	2003172 SD01	青磁	板or皿					内面 へつ書きで施文。内外面とも青磁施釉。暗オーラップ灰色に発色。	横印・舟型分型。
667	2003172 SD01	青磁	板					内面 へつ書きで施文。内面深とも青磁施釉。暗オーラップ灰色に発色。	横印・舟型分型、12世紀後半。
668	2003172 SD01	青白磁	碟or皿				腹壁は非常に高い。	内外面とも透明釉施釉。青磁を帯びた白色に発色。	華南高台岳青白磁、12世紀。
669	2003172 SD01	青白磁	碟or皿				腹壁は比較的高い。	内面 へつ書き施文。内外面とも透明釉施釉。青磁を帯びた白色に発色。	華南高台岳青白磁、12世紀。
670	600259 No.14	無柄鉢器	板				裏の剥離。	外面 ステンプで施文。外面に自然剥離。内面 回転ナデ調整。	非傳承。

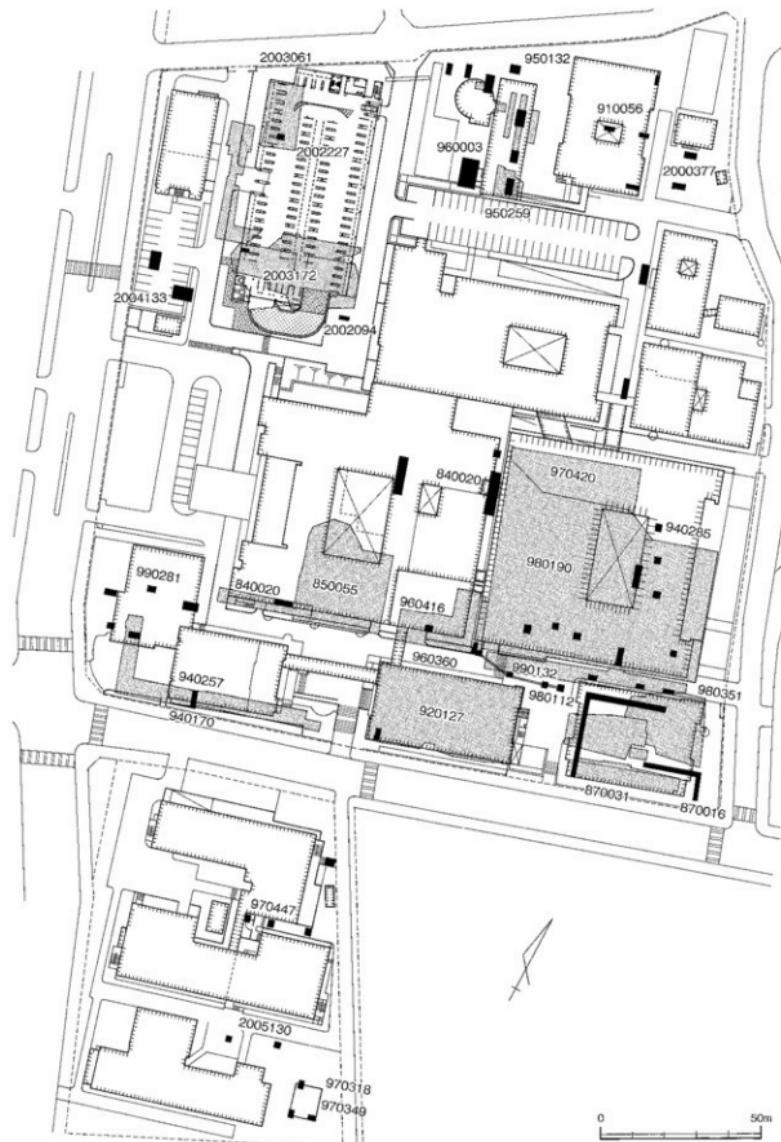
報告No.	工事場所	種別	直径	口径(cm)	断面(cm)	底径(cm)	形状・成形方法の特徴		文種・調査方法の特徴	備考
							形状	底径		
671	トレンチ13 ピット	土耕器	皿		8.1	2.1	口凹クロ成形、器物は全体に大きめで、平底、外側と底盤の界は不規則で、体部は緩やかに傾め上方に盛りむ。口縁部部は尖り軸線に収まる。		器皿の厚さは薄い。口縁部内面は強いココナデ調節、底部へ底面が斜めに傾む。底面おさえの後、ナード調整、底面内面 ナード調整。	色調 淡黄褐色。
672	トレンチ13+ 14	土耕器	皿		8.8	1.95	口凹クロ成形、器物は全体に大きめで、平底、外側と底盤の界は不規則で、体部は緩やかに傾め上方に盛りむ。		口縁部内面は強いココナデ調節、口縁部外表面をもつ。底面内面 ナード調整。	色調 淡褐色。
674	トレンチ14	兼用雨器	皿	高(8.25)	幅(6.15)	厚(1.15)	器の全体		内外裏とも回転ナード調節、外面 スタブで強化し、裏面に自然難が盛り、底オーバーパークに角化する。	色調 淡褐色。 底面 淡褐色。 厚さ 12~13mm 代引OK

報告No.	工事場所	種別	直径	口径(cm)	断面(cm)	底径(cm)	形状・成形方法の特徴		文種・調査方法の特徴	備考
							形状	底径		
673	トレンチ2 ピット	土耕器	皿		9.8	1.45	7.8	口凹クロ成形、平底、体部と底盤の界は漸縮で、体部は強く、直線的に傾め上方に盛りむ。	口縁部内面は強いココナデ調節、底面外表面をもつ。底面内面 ナード調整。	色調 ぶい 底色。

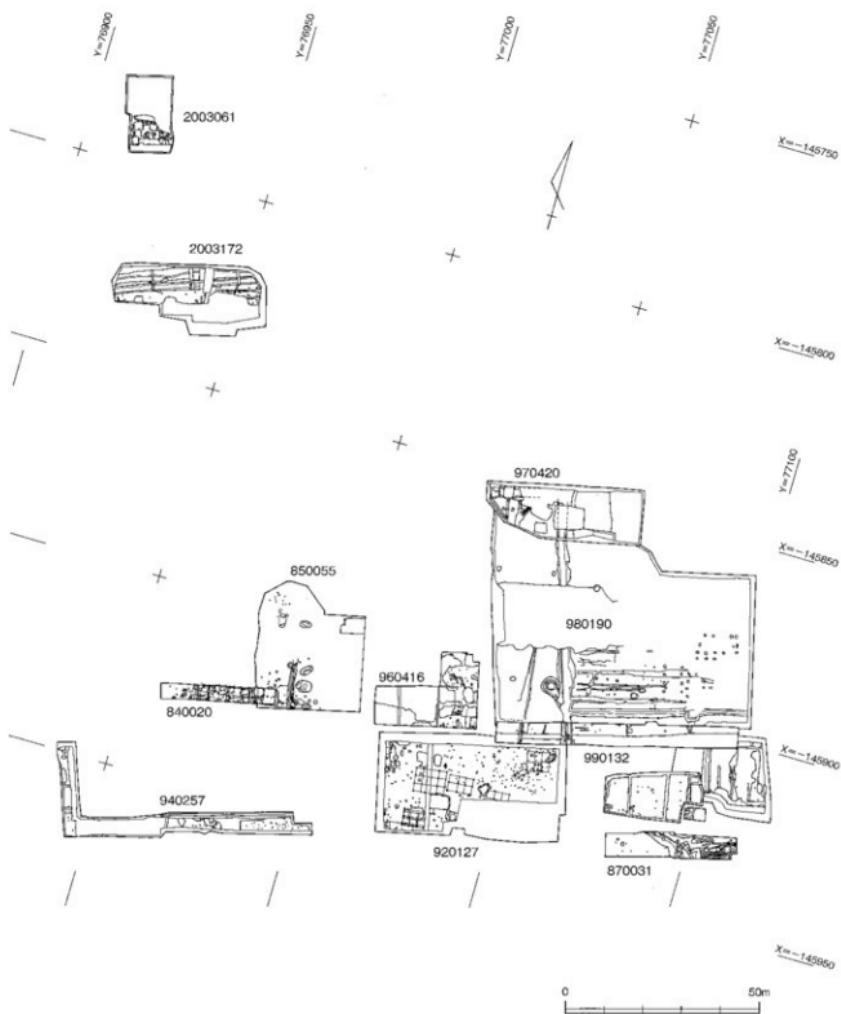
報告No.	工事場所	種別	直径	口径(cm)	断面(cm)	底径(cm)	形状・成形方法の特徴		文種・調査方法の特徴	備考
							形状	底径		
675	ピット内 瓦器	皿		(8.5)	1.6	(4.7)	器物は底は緩やかに傾め上方に盛りむ。口縁部は底盤に丸みをもつ。	口縁部内外面は強いココナデ調節、口縁部外表面をもつ。底面内面をもつ。ナード調整、底面内面 ナード調整。	色調 灰色。	

報告No.	工事場所	種別	直径	口径(cm)	断面(cm)	底径(cm)	形状・成形方法の特徴		文種・調査方法の特徴	備考
							形状	底径		
646	トレンチ 青磁陶器	底盤陶器 皿?			1.45	0.85	高台は幅が広く、低い。他の目立たない。体部は緩やかに傾め上方に立ち上がる。	底土は灰白色。内外壁とも和輪施跡、オリーブ黄色に異色。	手取出代 の鏡面調。	
647	トレンチ 青磁	碗?			(1.25)	(3.0)	高台は比較的幅が広く、低い。底部の器壁は底盤内側に内深い。	内外裏とも青磁施跡。オリーブ灰色に異色。輪状に胎ハギ。外面 黄白蓋付以下 は鐵。	坂井窯系青 磁。出代 の鏡面調。	

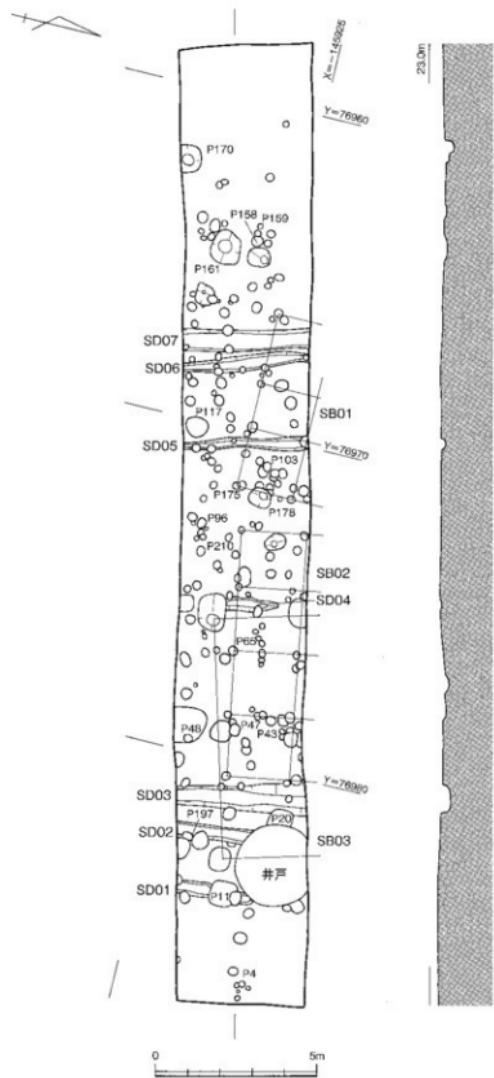
図 版



神戸大学医学部附属病院構内調査位置図

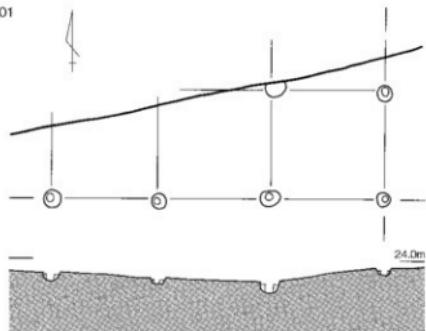


本発掘調査位置図

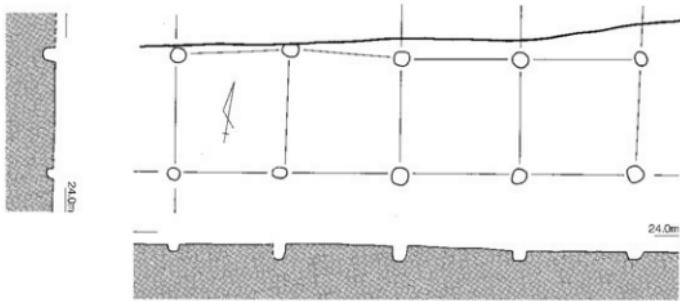


造構配図

SB01

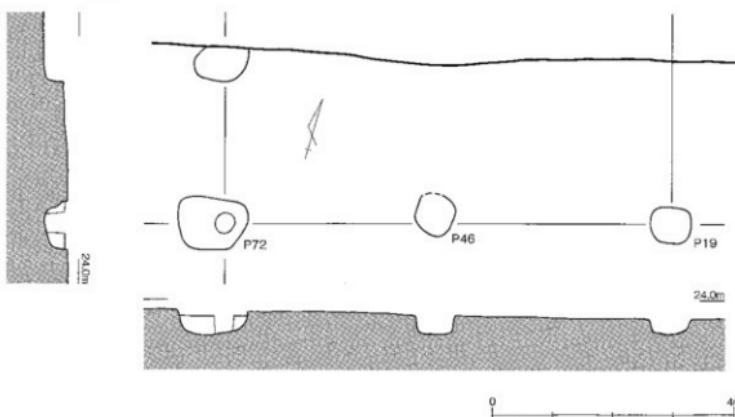


SB02



24.0m

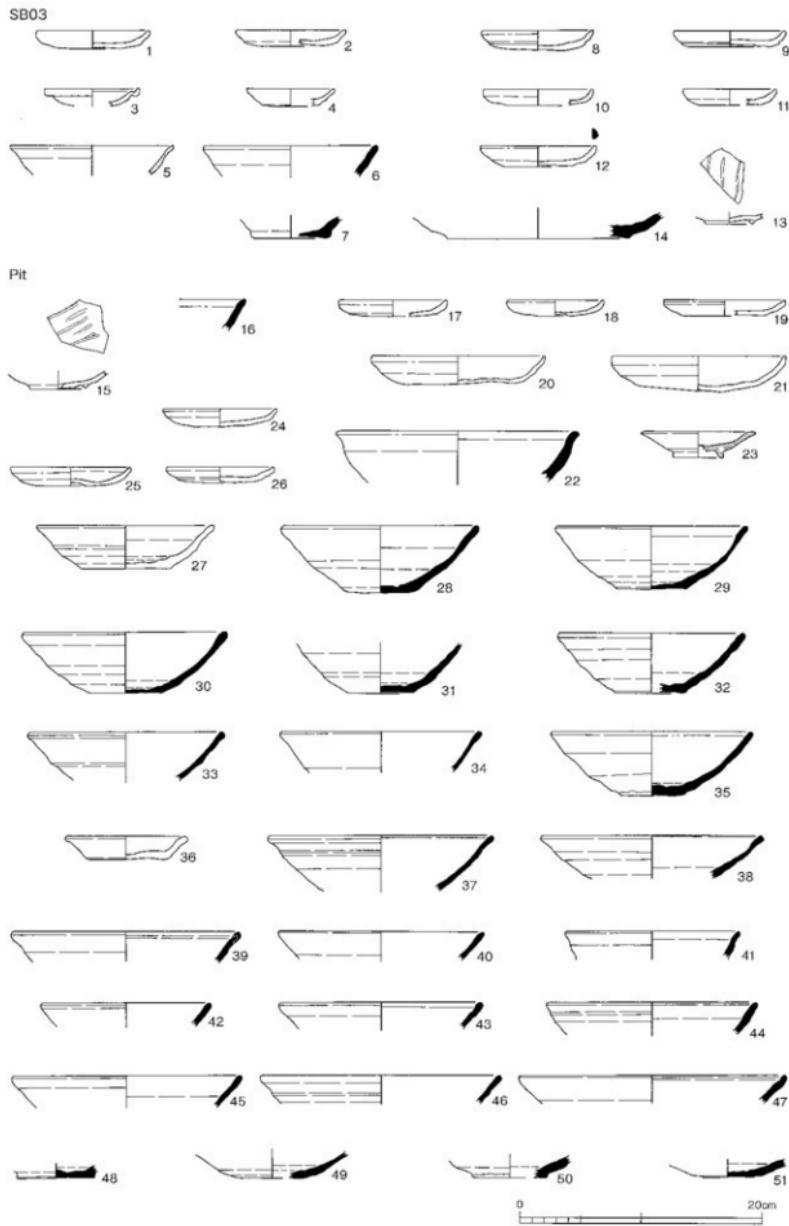
SB03



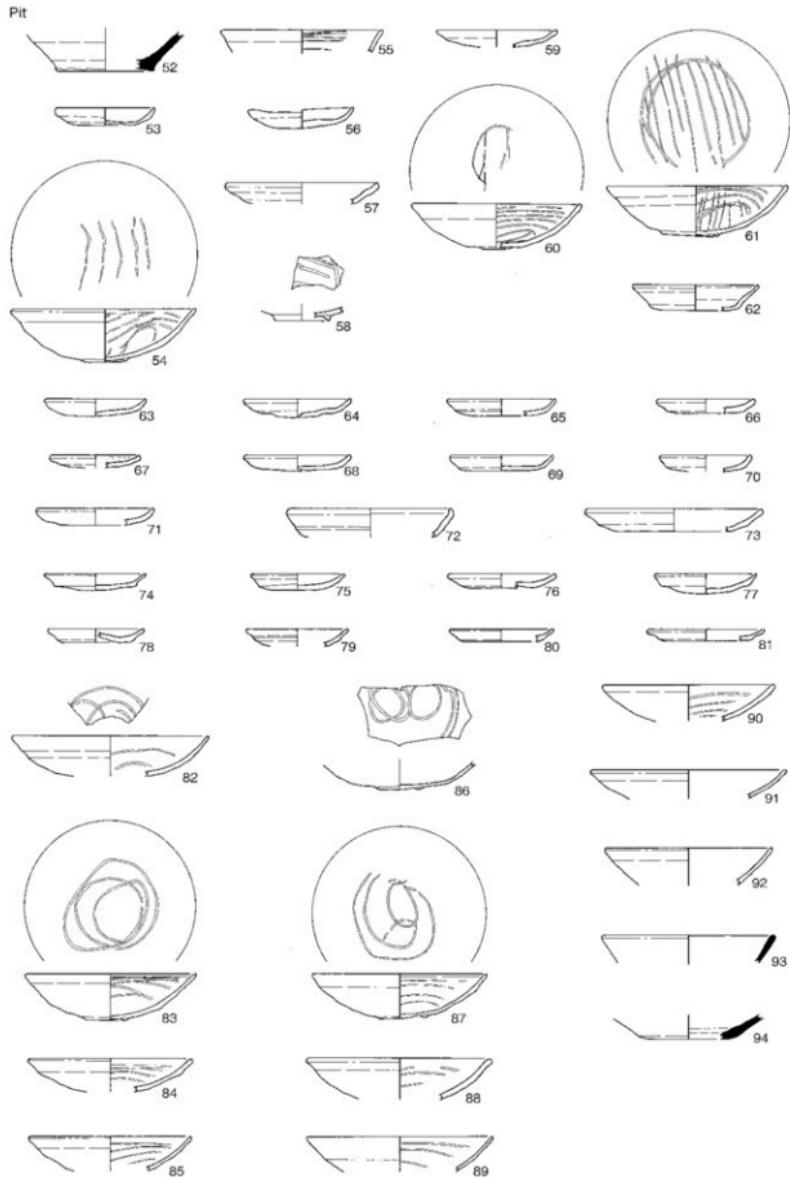
0 4m

掘立柱建物

8400020



出土遺物 1



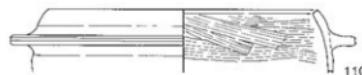
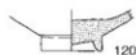
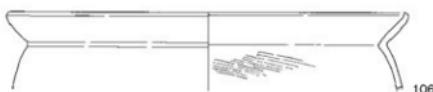
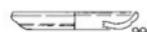
出土遺物 2

840020

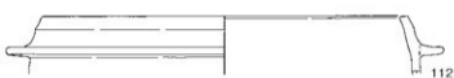
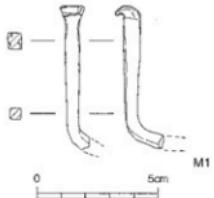
Pit



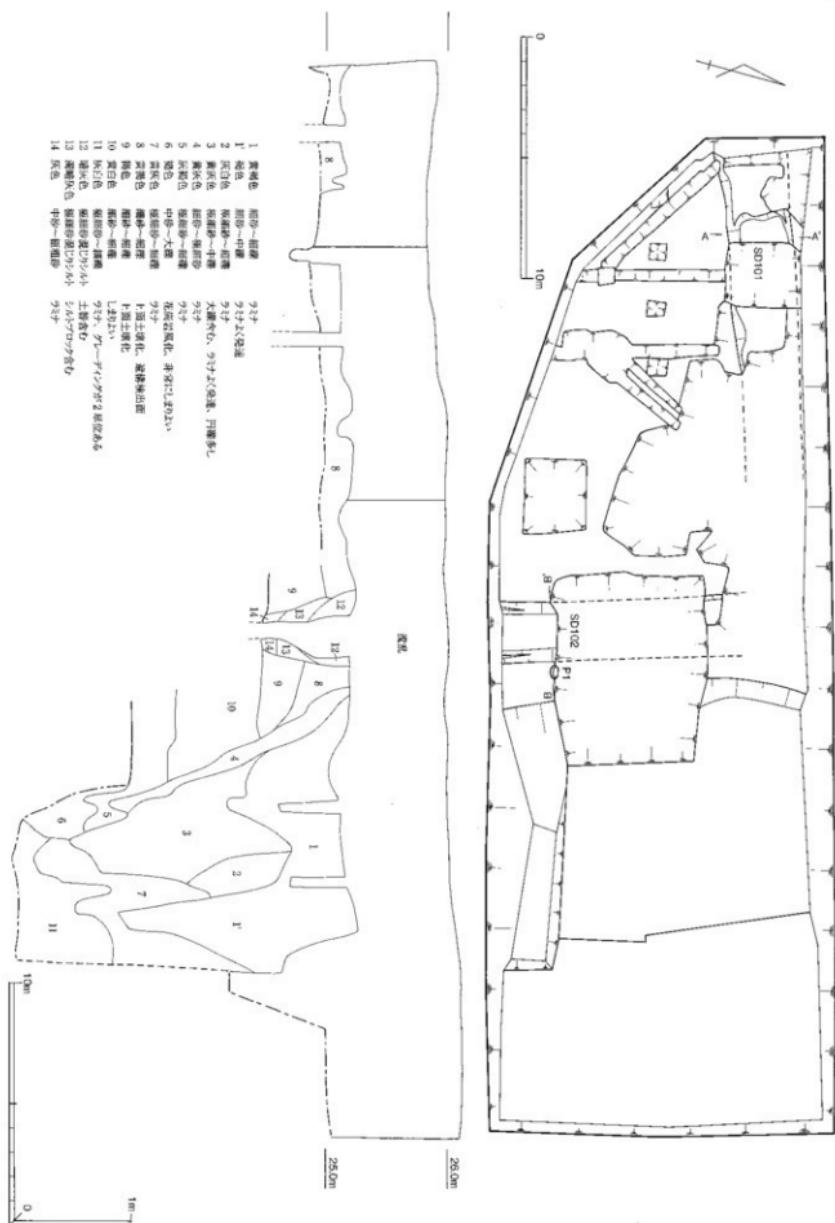
包含層



金屬器



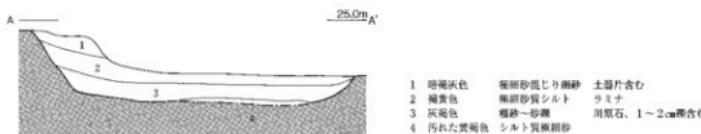
出土遺物 3



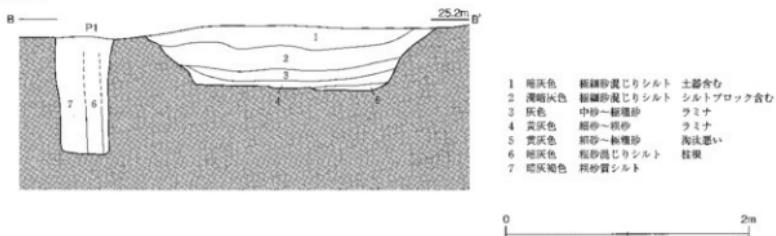
遺構配置図・土層図

970420

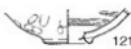
SD101



SD102



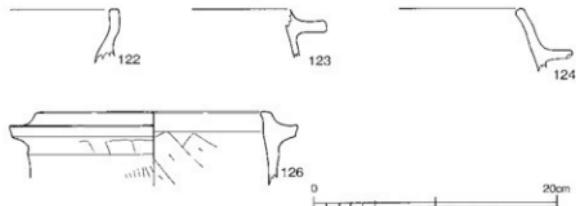
SD101



包含層



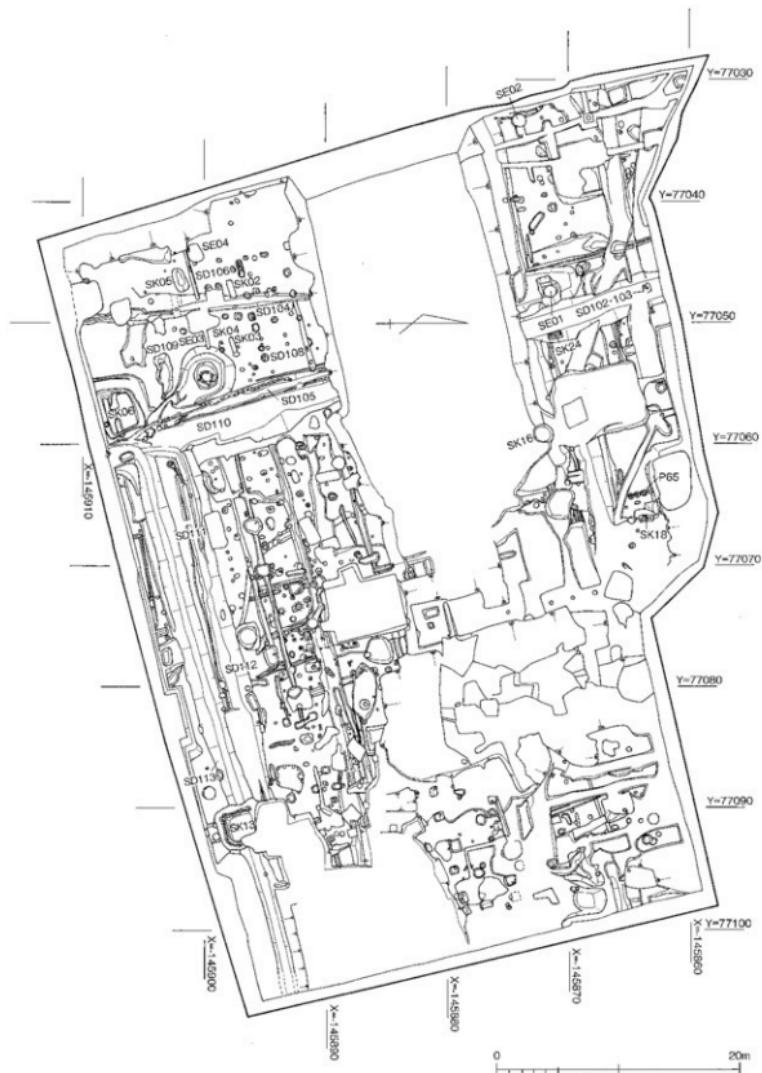
SD102



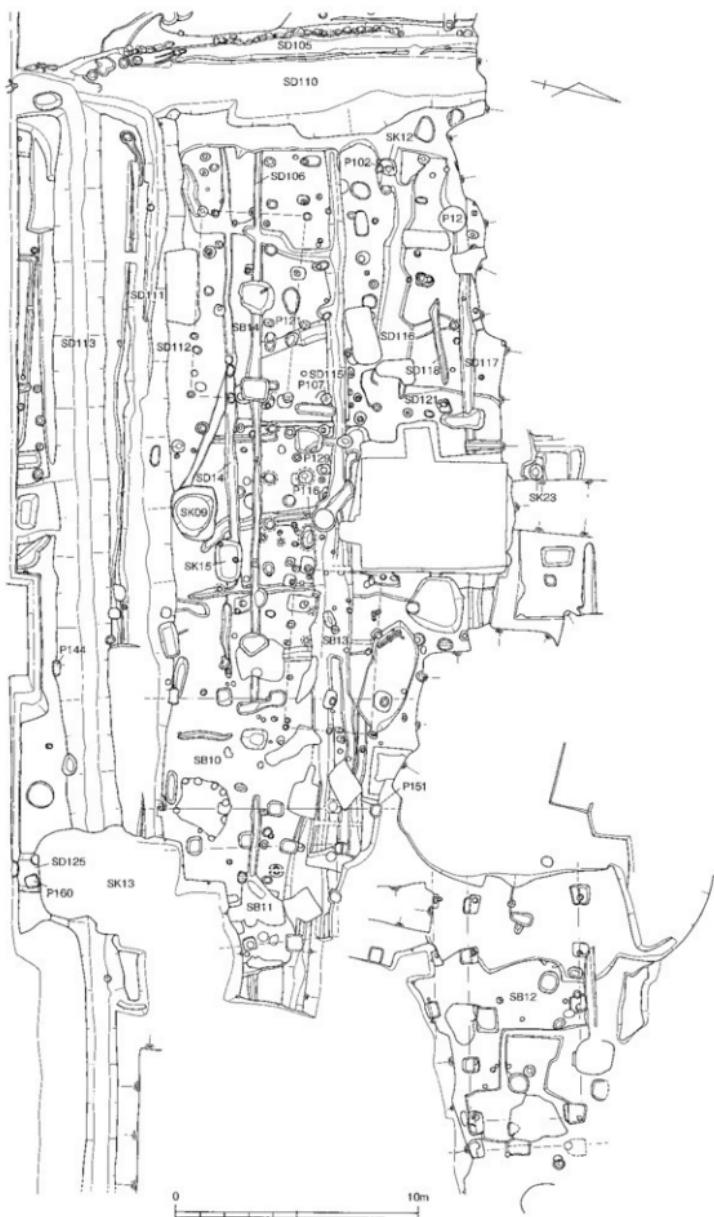
SD101・SD102・P1 土層断面図、出土遺物



調査区全図、土層図



造構配置図

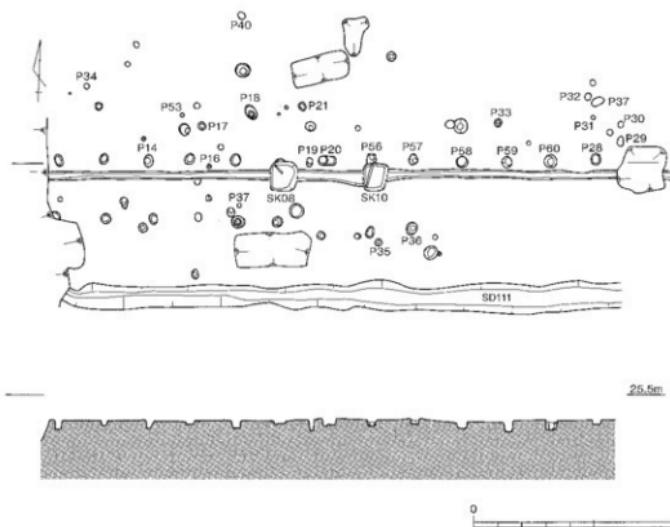
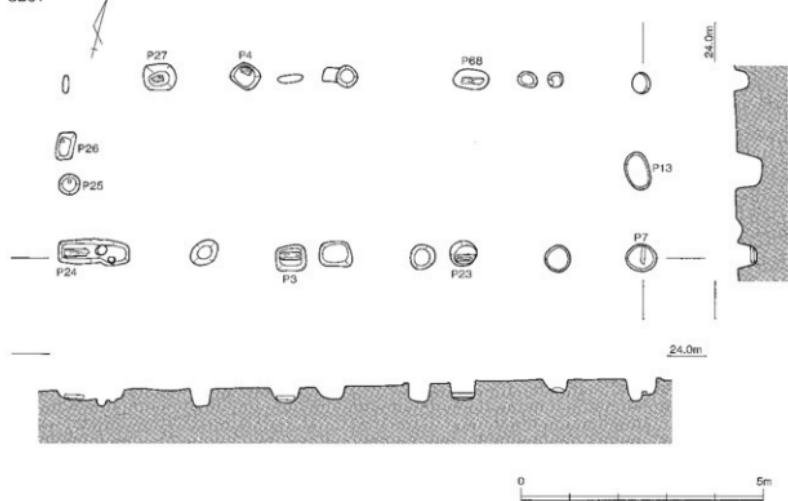


調査区南西部

980190

図版
13

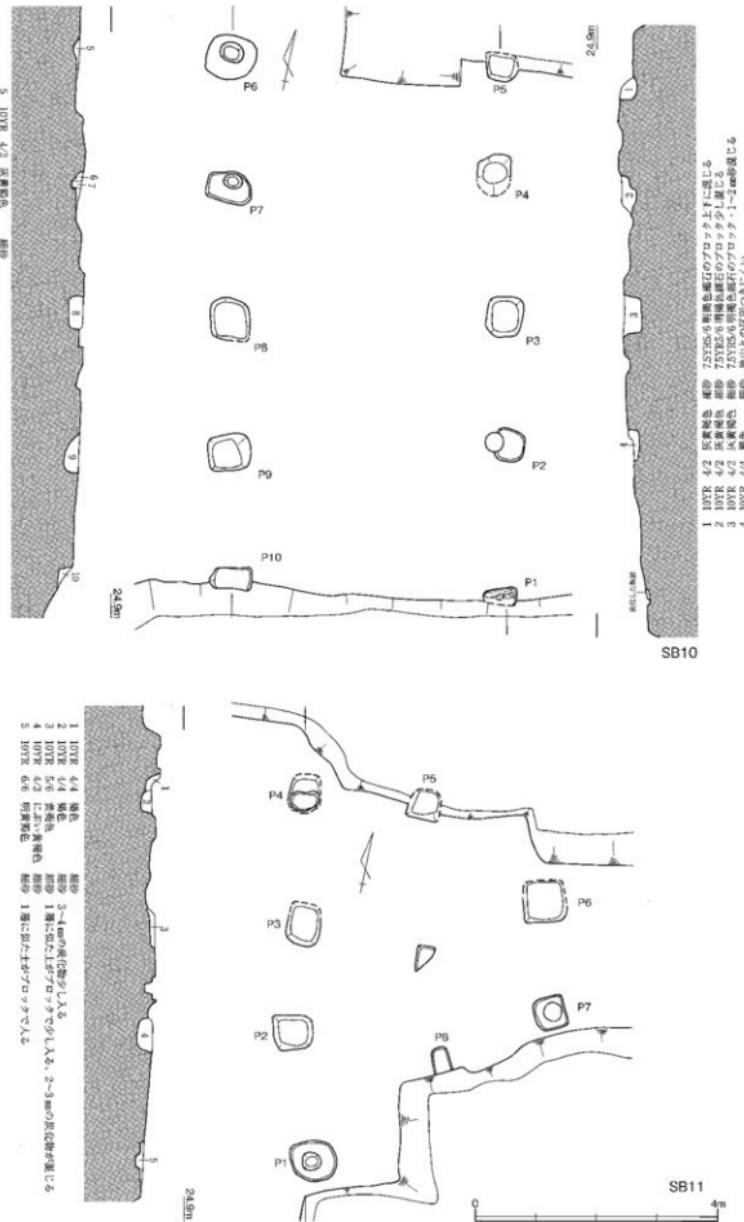
SB01



SB01・上面の遺構

5 UTR 4.2 水質褐色
6 UTR 5.4 水質褐色
7 UTR 4.2 水質褐色
8 UTR 4.2 水質褐色
9 UTR 4.2 水質褐色
10 UTR 4.2 水質褐色

柱状圖の実測地質を示す。75YS5から75YS6までの薄褐色のブロックを除じる部分は、75YS5から75YS6までの薄褐色のブロックを除じる部分を示す。



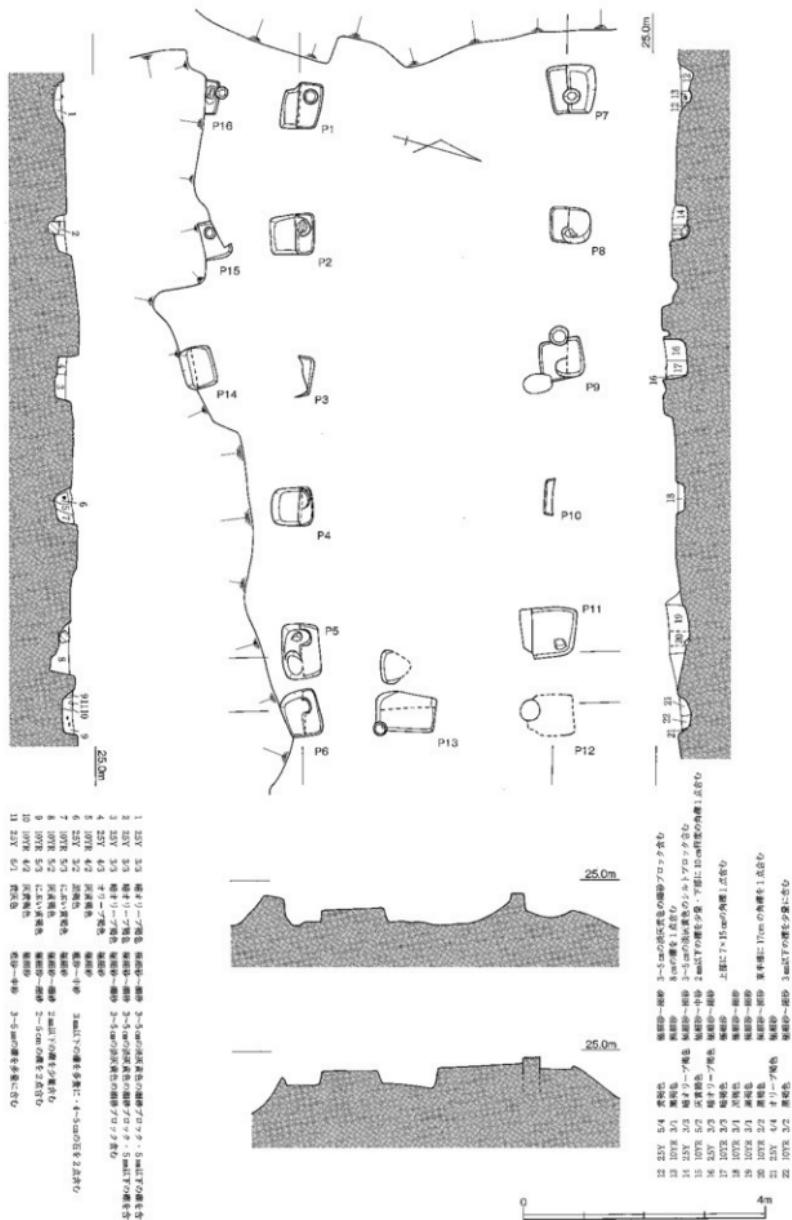
SB10・SB11

1 UTR 4.2 水質褐色
2 UTR 4.2 水質褐色
3 UTR 4.2 水質褐色
4 UTR 4.4 黄褐色

柱状圖

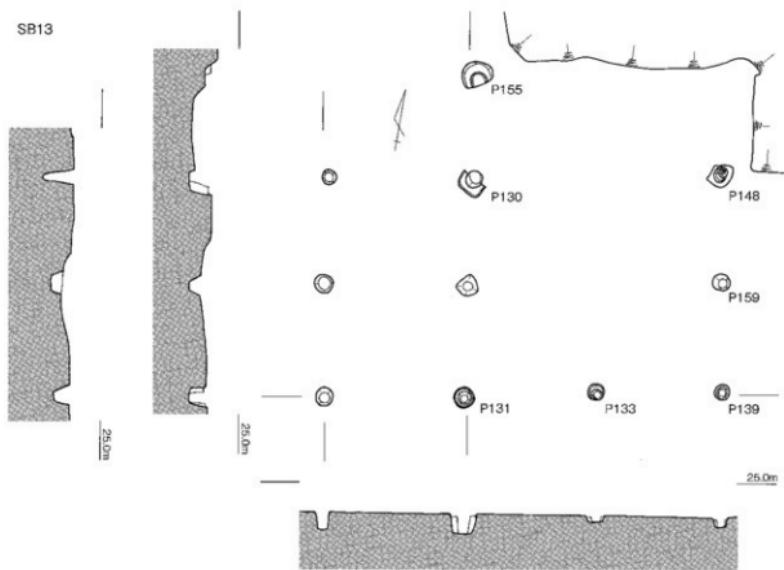
1-2

地山の位置

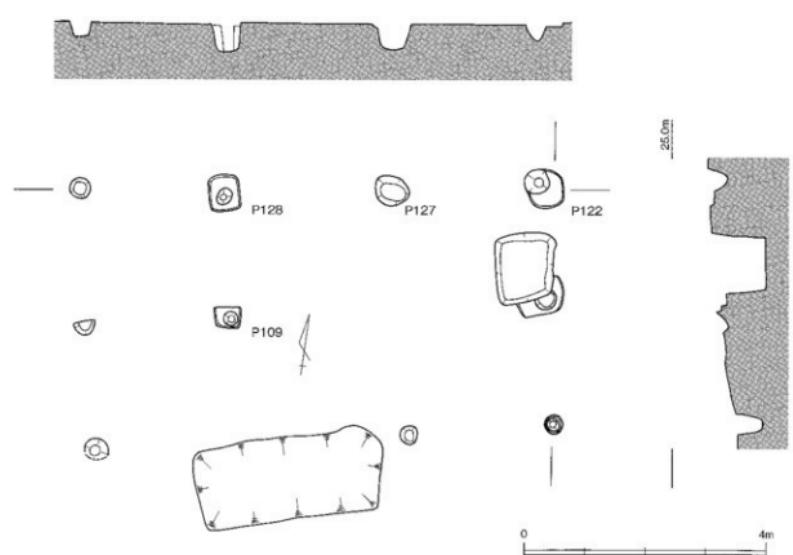


SB12

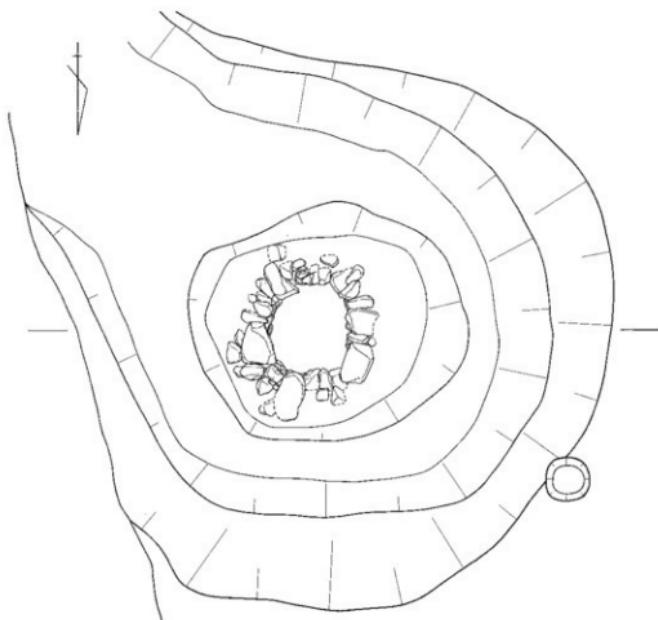
SB13



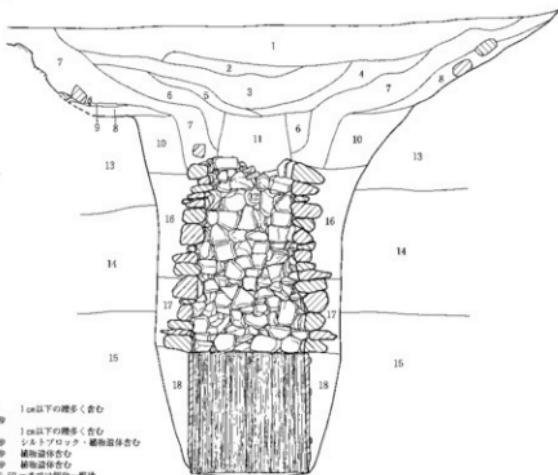
SB14



SB13 · SB14



24.4m

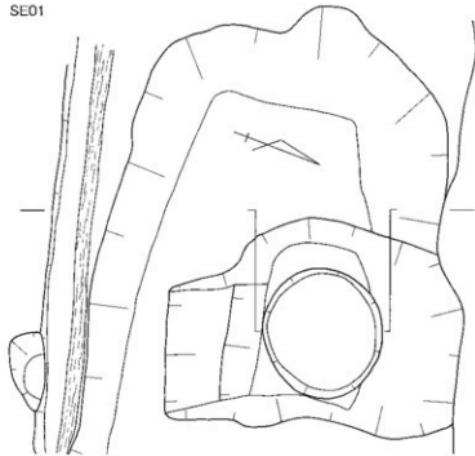


0 2m

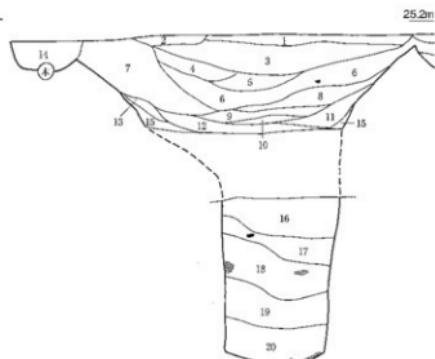
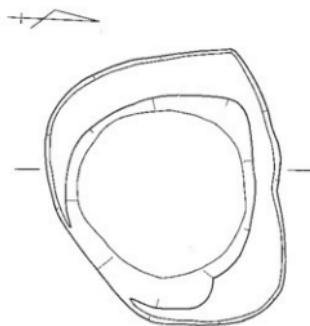
- | | | | | |
|----|----------|--------|-----------------|--|
| 1 | ZDT 4/6 | オリーブ褐色 | 細粒～粗粒
礁岩～一般岩 | 1 cm以下の礁多く含む |
| 2 | ZDT 4/7 | 赤褐色 | 礁岩～一般岩 | 礁岩～一般岩 |
| 3 | ZDT 4/3 | オリーブ褐色 | 礁岩～粗粒 | 1 cm以下の礁多く含む |
| 4 | 10YR 4/2 | 灰青褐色 | 礁岩～一般岩 | 礁岩～一般岩 |
| 5 | 10YR 4/3 | に赤い黄褐色 | 礁岩～一般岩 | 礁岩～一般岩 |
| 6 | 10YR 4/3 | に赤い黄褐色 | 礁岩～一般岩 | 礁岩～一般岩 |
| 7 | 7.5Y 3/7 | オリーブ褐色 | 礁岩～一般岩 | 礁岩～一般岩 |
| 8 | ZDT 4/2 | オリーブ褐色 | 礁岩～一般岩 | 礁岩～一般岩 |
| 9 | ZDT 4/2 | 切削灰黑色 | 細粒～粗粒 | 礁岩～一般岩 |
| 10 | 10YR 4/3 | に赤い黄褐色 | 礁岩～一般岩 | 1 cm以下の礁多く・礁岩・碎屑物・灰化物含む |
| 11 | 10YR 4/4 | 褐色 | 礁岩～一般岩 | 3 mm以下の礁少々・シートブロック含む |
| 12 | 10GY 5/1 | 褐色 | 礁岩～一般岩 | 礁岩～粗粒 |
| 13 | | 褐色 | 礁岩 | 礁岩 |
| 14 | | 褐色 | 細粒～粗粒 | 細粒～粗粒 |
| 15 | | 明灰褐色 | 細粒 | 1 cm以下の礁多く・礁岩・碎屑物・灰化物含む |
| 16 | | 暗褐色 | 細粒～礁土 | 礁岩 |
| 17 | | 褐色 | 細粒～礁土 | 10~25 cmの花崗岩塊ばら入る (地山) |
| 18 | | 褐色 | 細粒 | 2~25 cmの砂漠化り・5~6 cmの小石多く入る
粘性なし・砂層・花崗岩の既じり少ない |

SE03

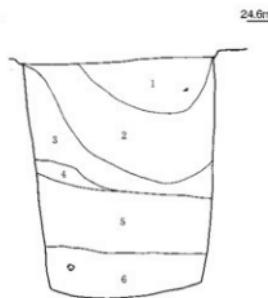
SE01



SK09



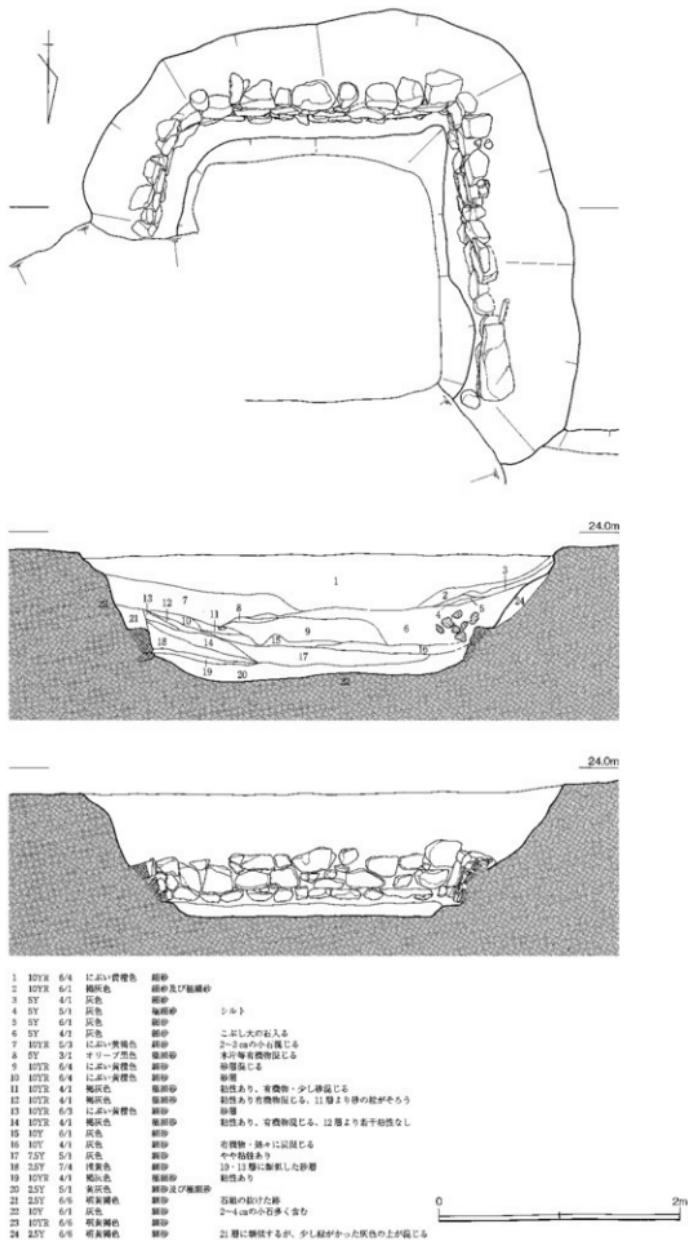
- | | | | |
|-------------|--------|--------|----------------|
| 1 10YR 6/3 | にごい黄褐色 | 細砂 | 1~2mmの小石含む |
| 2 25Y 5/2 | 暗灰褐色 | 細砂 | 1~2mmの小石含む |
| 3 10YR 6/2 | 灰黒褐色 | 細砂 | 1~2mmの小石多く・灰含む |
| 4 10YR 5/1 | 褐色 | 細砂 | |
| 5 10YR 5/2 | 灰黄褐色 | 細砂 | 灰含む |
| 6 10YR 4/2 | 灰黄褐色 | 微細砂-細砂 | 瓦片含む |
| 7 25Y 5/1 | 灰灰褐色 | 細砂 | |
| 8 10YR 6/4 | にごい黄褐色 | 砂 | |
| 9 10YR 4/1 | 褐灰褐色 | 細砂 | 砂含む |
| 10 25Y 6/3 | にごい黄褐色 | 砂 | |
| 11 25Y 5/3 | にごい黄褐色 | 細砂 | |
| 12 25Y 4/1 | 褐灰褐色 | 極細砂-細砂 | 砂含む |
| 13 10YR 6/4 | にごい黄褐色 | 砂 | |
| 14 10YR 5/3 | にごい黄褐色 | 細砂 | 小石含む |
| 15 10YR 5/1 | 褐灰褐色 | 細砂 | |
| 16 10YR 5/3 | にごい黄褐色 | 細砂 | |
| 17 10YR 4/1 | 褐灰褐色 | 細砂 | 瓦片含む |
| 18 10YR 4/2 | 灰灰褐色 | 細砂 | 灰・砂多く含む |
| 19 10YR 4/3 | にごい黄褐色 | 細砂 | |
| 20 25Y 4/2 | 暗灰褐色 | 細砂 | 1mmの小石・灰含む |

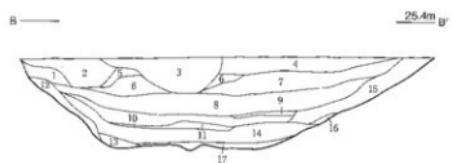
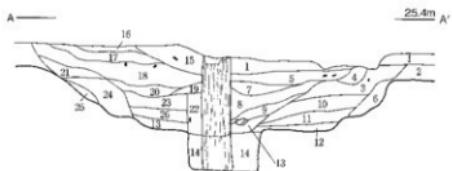
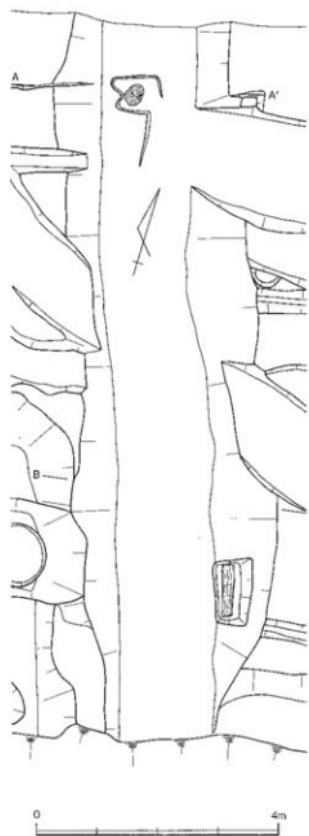


- | | | | |
|------------|--------|----|----------------|
| 1 25Y 5/2 | 暗灰褐色 | 細砂 | 土器片含む |
| 2 25Y 4/3 | オリーブ褐色 | 細砂 | 1mmの小石含む |
| 3 10YR 4/1 | 暗灰褐色 | 細砂 | 砂含む |
| 4 10YR 4/3 | にごい黄褐色 | 細砂 | 砂含む |
| 5 10YR 4/4 | 褐色 | 細砂 | 1~2mmの小石・土器片含む |
| 6 10YR 3/2 | 黒褐色 | 細砂 | 1~2mmの小石含む |

0 2m

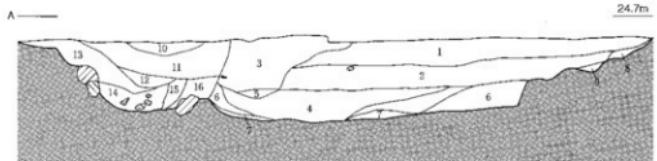
SE01・SK09





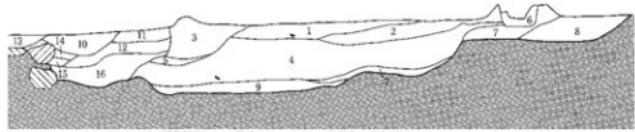


SD105・110 平面図、SD105 立面図



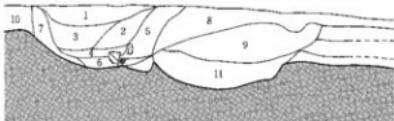
1	10YR	4/2	淡黃褐色	細粉	土器片・炭含む
2	10YR	4/3	淡褐色	細粉	1~2mmの小石含む
3	3YR	5/1	褐色	細粉	赤褐色土色含む
4	10YR	4/1	褐色	細粉	1~2mmの小石・土器片・炭含む
5	75YR	5/1	褐色	細粉	
6	10YR	5/3	淡褐色	細粉	
7	10YR	5/1	淡褐色	粗粒砂～細砂	砂多く含む
8	10YR	5/3	淡褐色	細粉	
9	10YR	4/1	淡褐色	細粉	
10	75YR	5/2	淡褐色	細粉	
11	25Y	5/2	褐色	細粉	小石含む
12	25Y	5/2	褐色	細粉	5cmの石・砂含む
13	25Y	5/2	褐色	細粉	
14	25Y	4/2	褐色	細粉	5~7cmの石含む
15	10YR	4/2	褐色	細粉	砂含む
16	10YR	4/1	褐色	細粉	砂含む

B ————— 24.5m B'



1	10YR	4/2	淡褐色含む に点状の褐色	細粉	土器片・炭含む
2	75YR	4/1	褐色	細粉	1~2mmの小石含む
3	10YR	4/1	褐色	細粉	赤褐色土色含む
4	10YR	4/1	褐色	細粉	1~2mmの石・土器片・炭含む
5	25Y	4/1	褐色	細粉	
6	10YR	4/1	褐色	細粉	
7	10YR	4/3	淡褐色	細粉	
8	75YR	4/1	褐色	細粉	6cm含む
9	10YR	5/1	褐色	細粉	砂多く含む
10	75YR	4/1	褐色	細粉	
11	25Y	5/2	褐色	細粉	小石含む
12	25Y	5/2	褐色	細粉	5cmの石・砂含む (SEG3重土)
13	25Y	3/2	褐色	細粉	
14	25YR	4/1	褐色	細粉	
15	25Y	4/1	褐色	細粉	
16	4/1	褐色	細粉	粘性砂～粗砂	

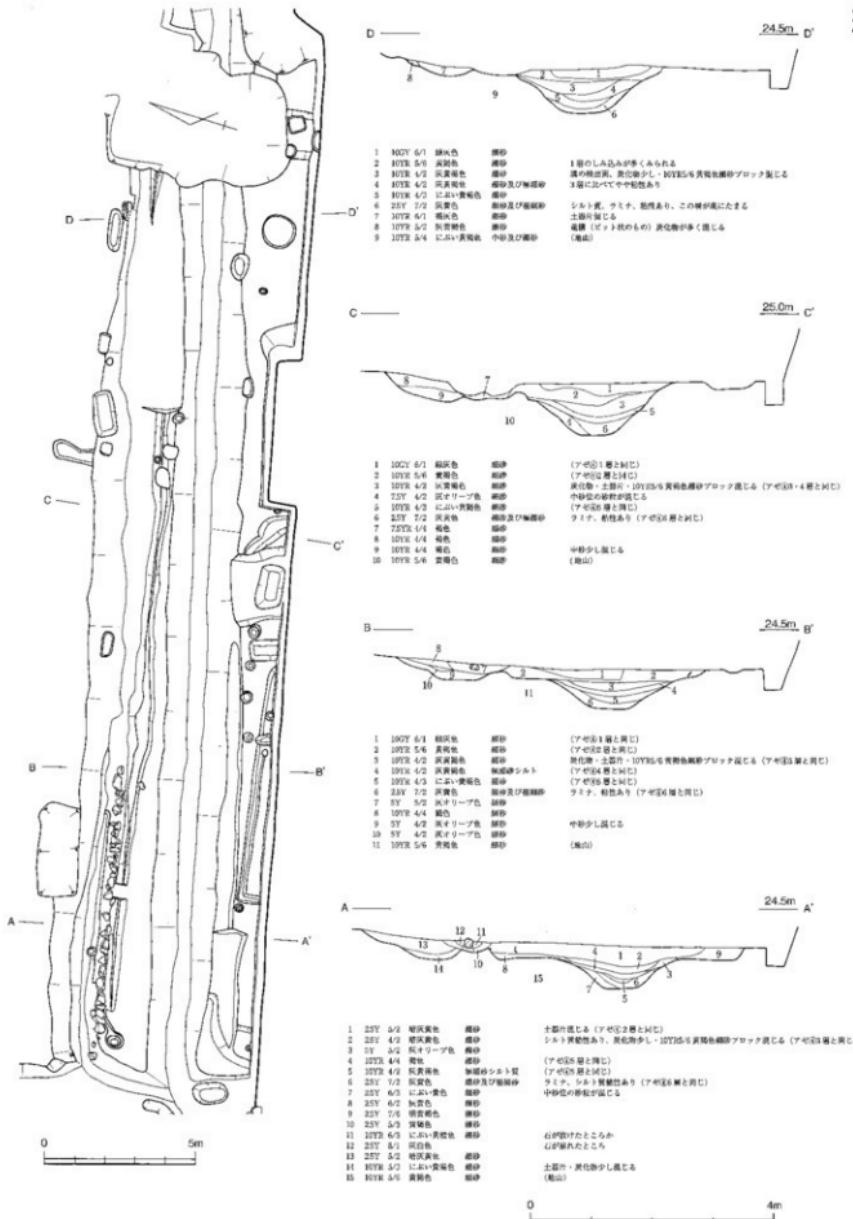
24.2m C'

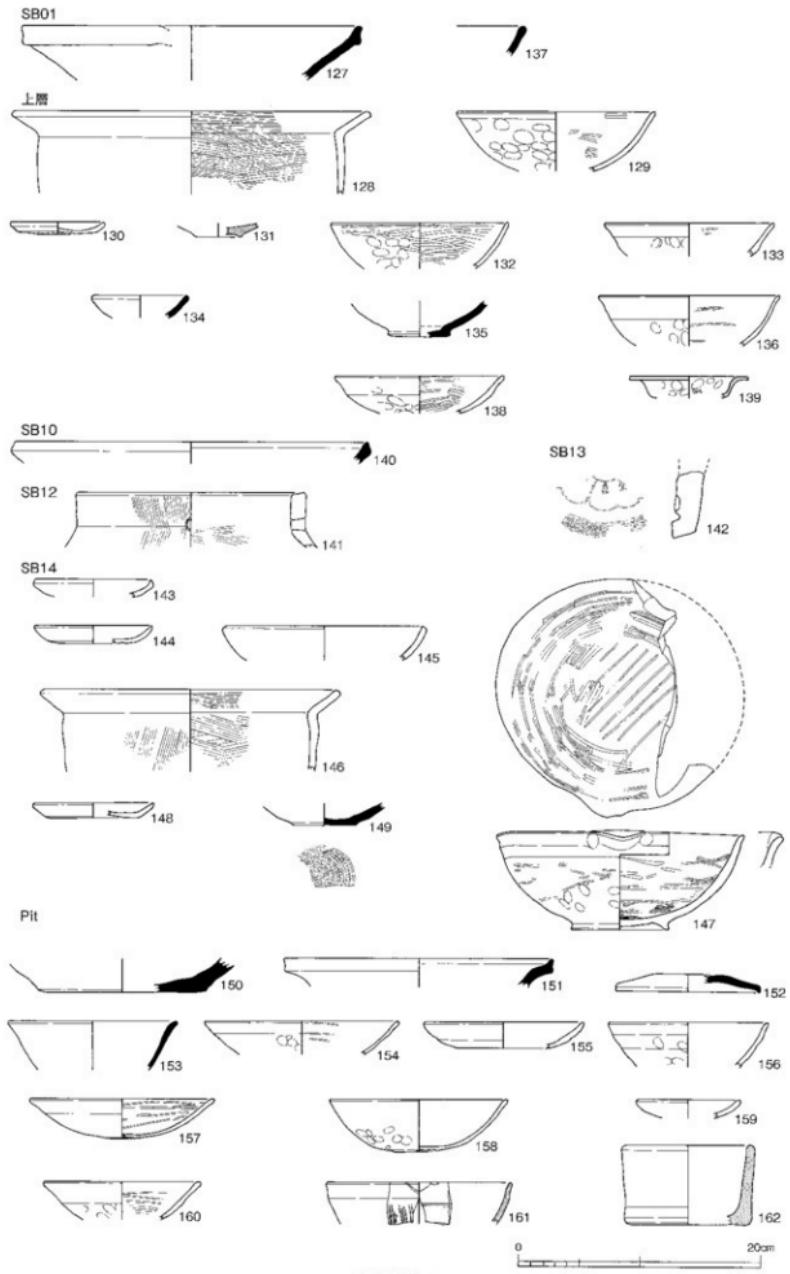


1	10YR	5/2	淡黃褐色	細粉	1~5mmの小石含む
2	10YR	4/6	褐色	細粉	5~10mmの小石含む
3	75YR	4/4	褐色	細粉	
4	75YR	4/4	褐色	細粉	砂・瓦片含む
5	10YR	5/4	褐色	細粉	5~10mmの小石含む
6	10YR	4/2	淡褐色	細粉	砂を多く含む
7	10YR	4/2	淡褐色	細粉	灰白色土色含む
8	75YR	4/4	褐色	細粉	灰白色土・土器片含む
9	10YR	4/6	褐色	細粉	
10	10YR	5/1	褐色	細粉	
11	10YR	5/1	褐色	細粉	砂含む

0 2m

SD105・110 土層断面図





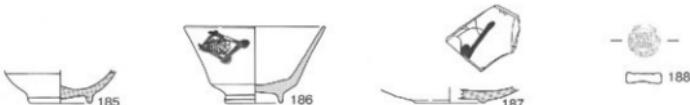
出土遺物 1

980190

SE01



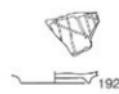
SE03



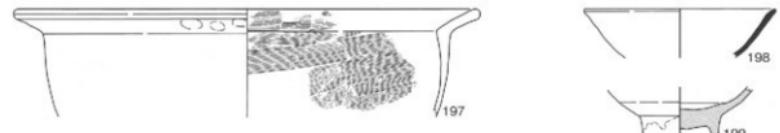
SK01



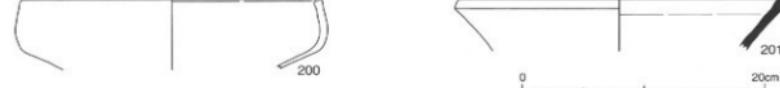
SK09



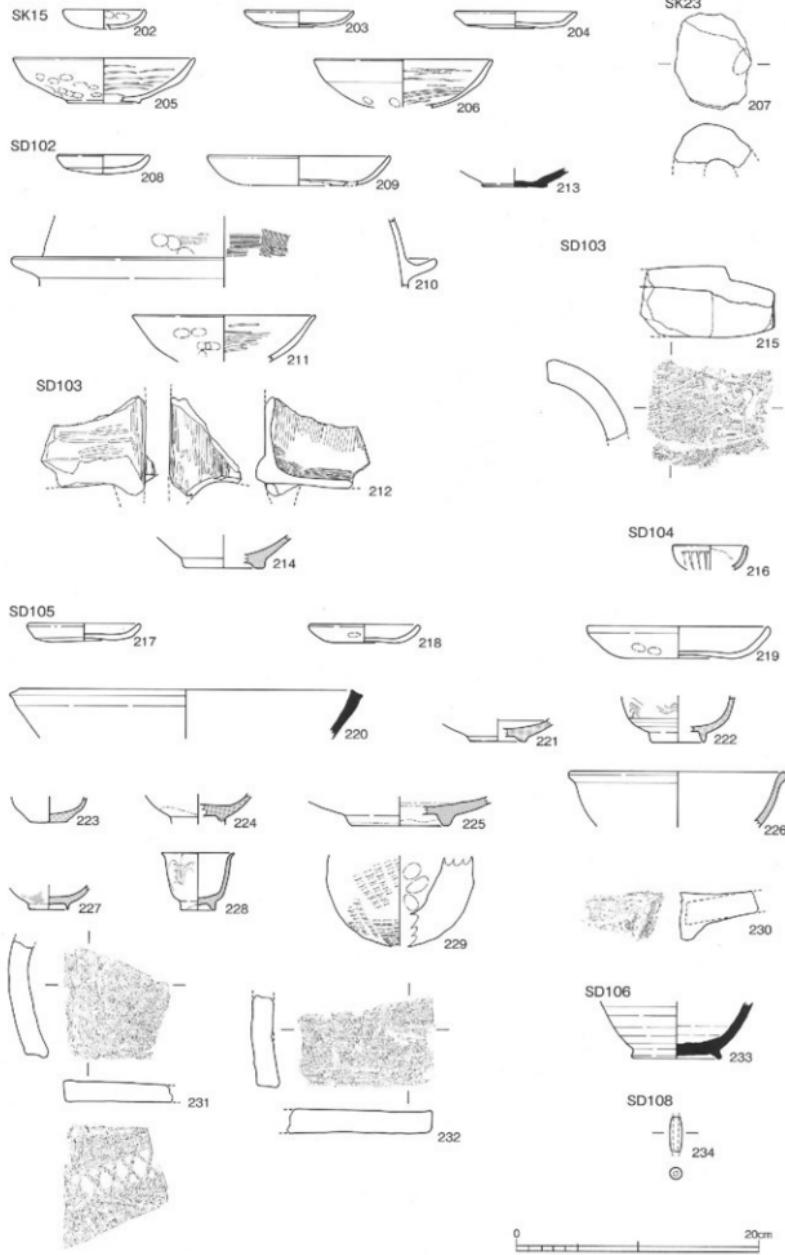
SK12



SK13



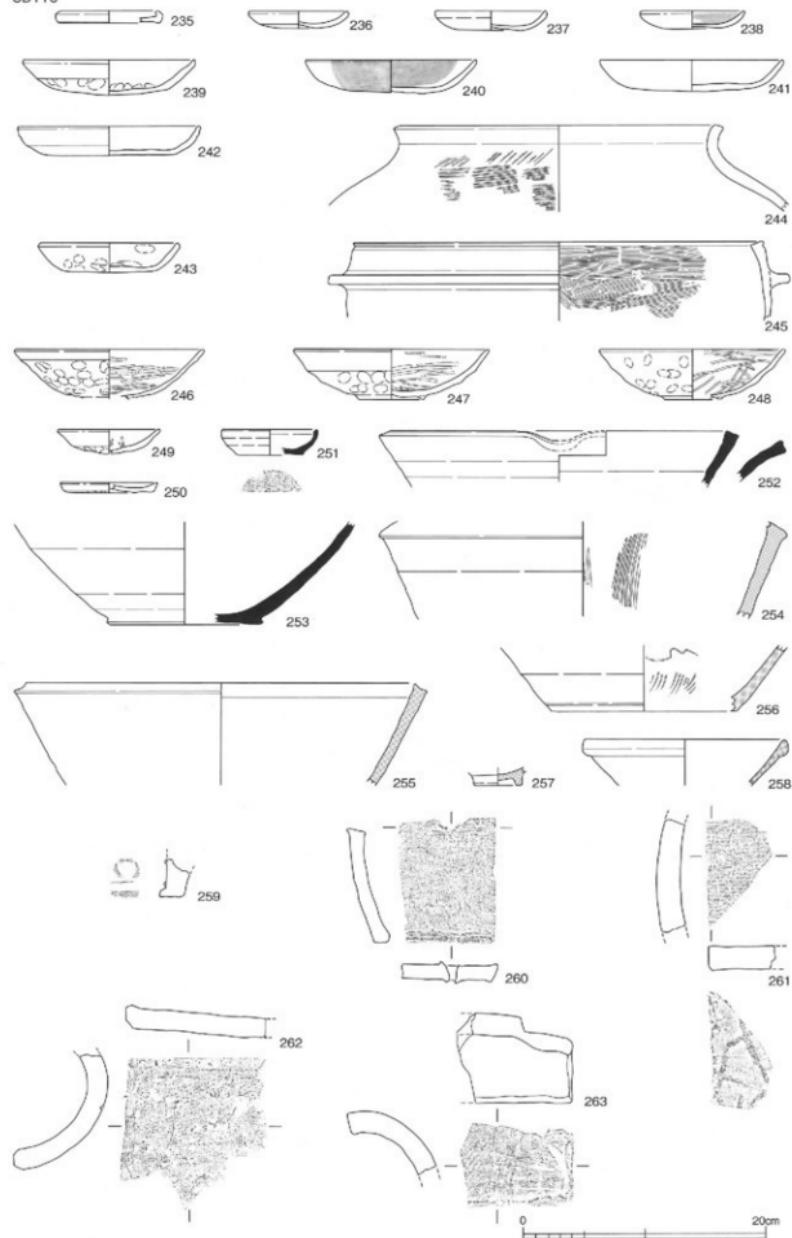
0 20cm



出土遺物 3

980190

SD110

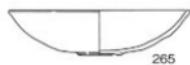


出土遺物 4

SD110・111交点



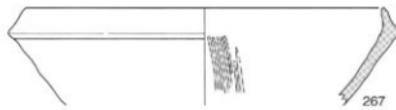
264



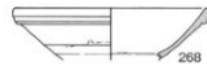
265



266



267



268

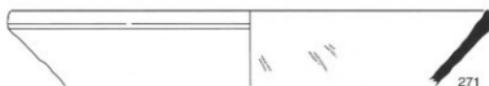


269

SD111



270



271



272



273

274

275

SD110・113交点



276



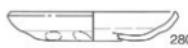
277



278



279



280



281



282



283

SD111・112・113



284

SD113



285



286



287



288



289



290



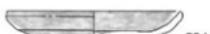
291



292



293



294



295

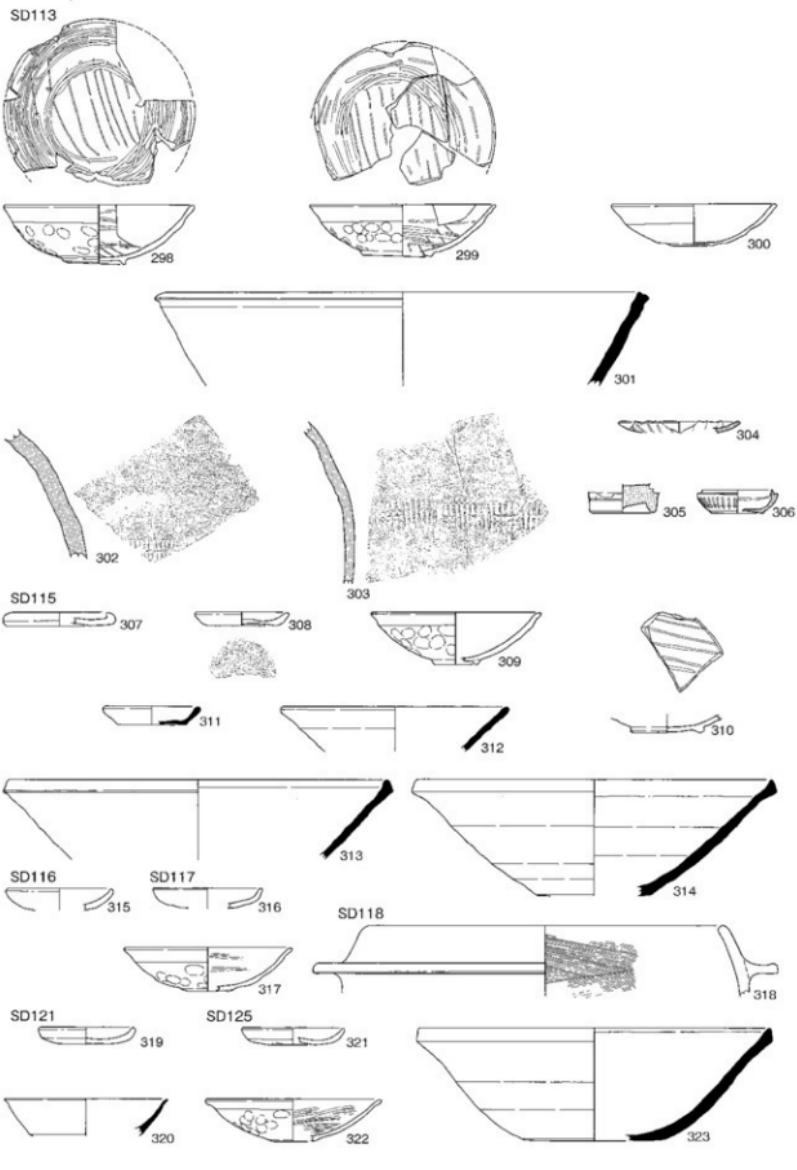


296

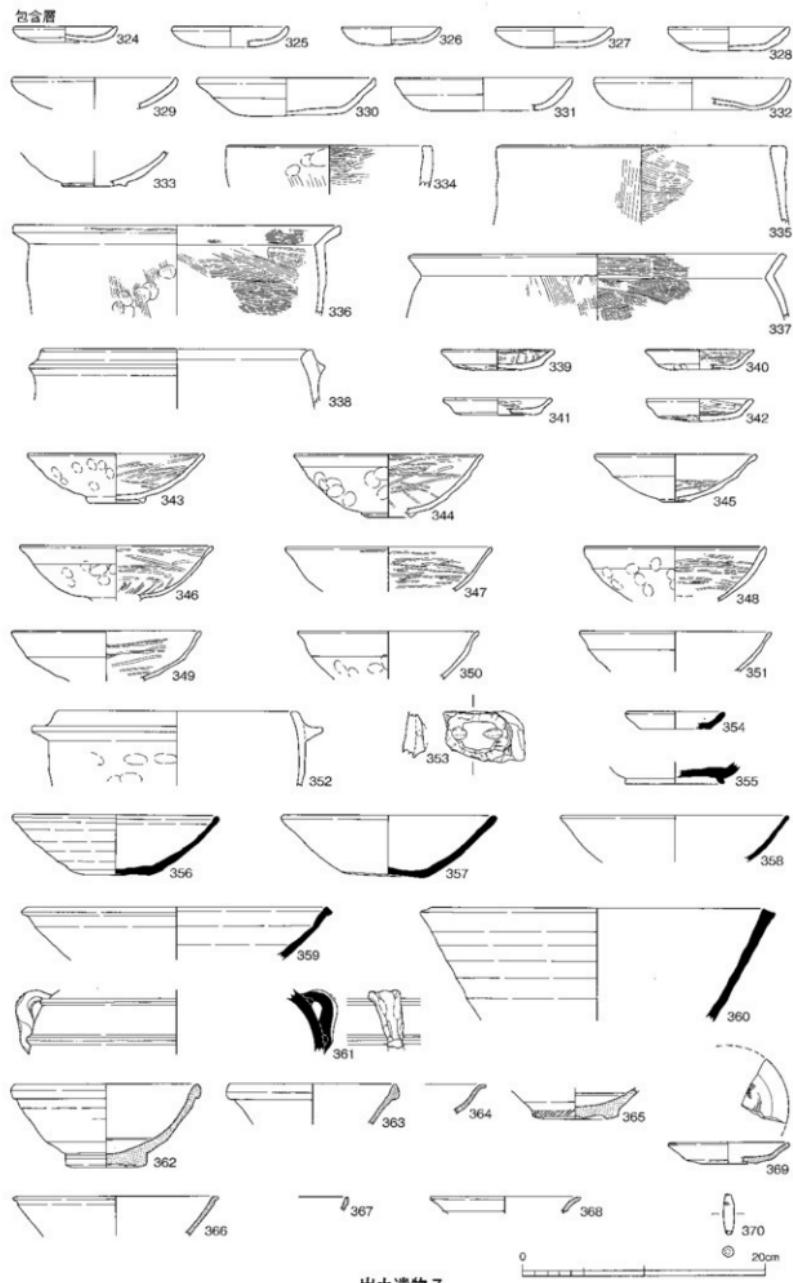


297





0 20cm



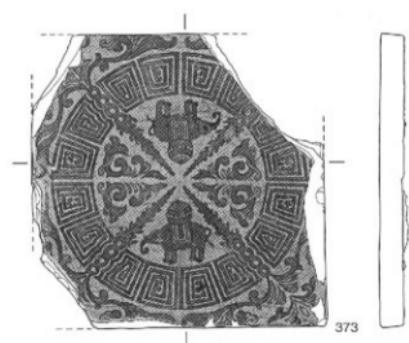
出土遺物 7



371

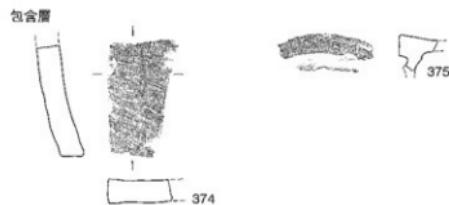


372



373

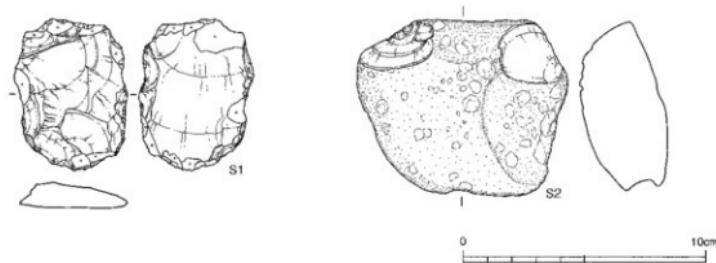


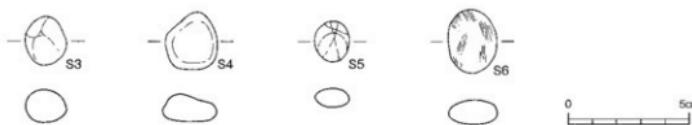


ガラス



石器





金屬器



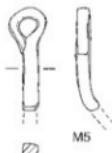
M2



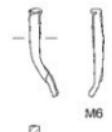
M3



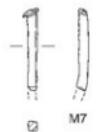
o



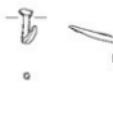
M5



M6



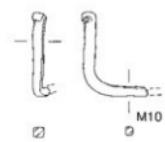
M7



o

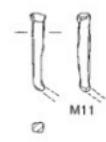


M9



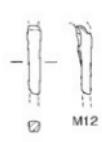
o

M10



o

M11



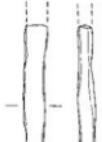
o

M12



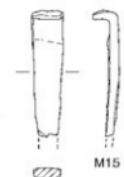
o

M13



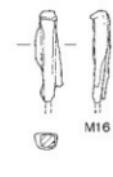
o

M14



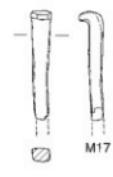
o

M15



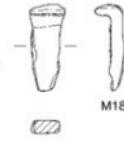
o

M16



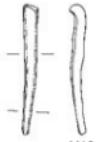
o

M17



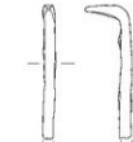
o

M18



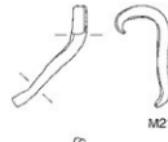
o

M19



o

M20



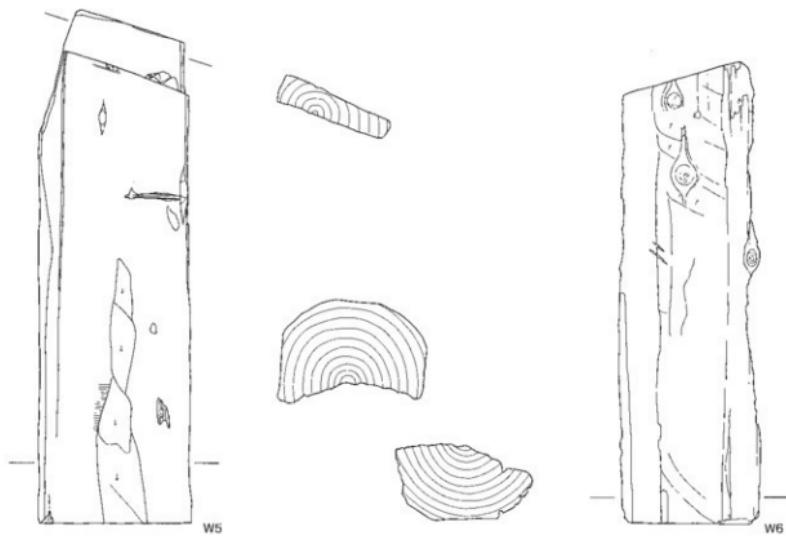
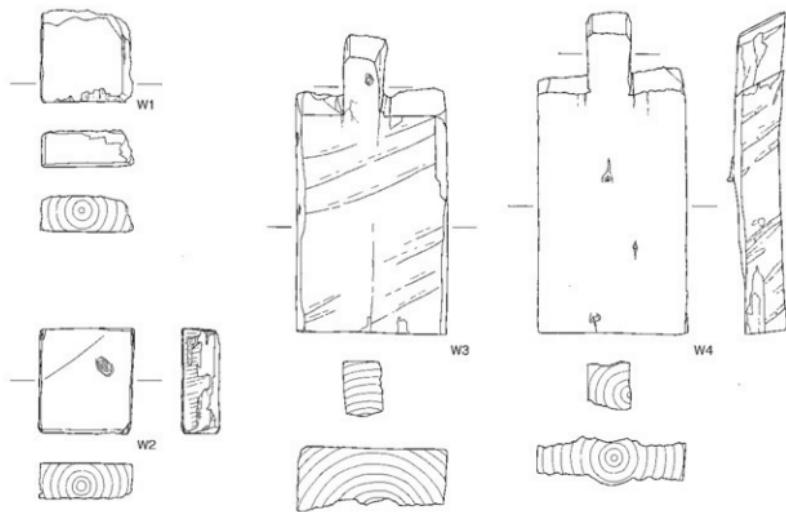
o

M21



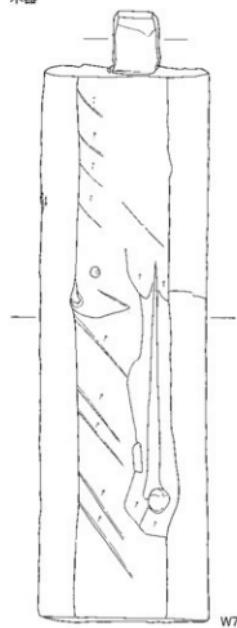
980190

木器

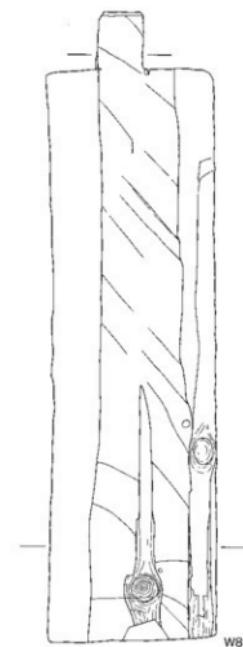
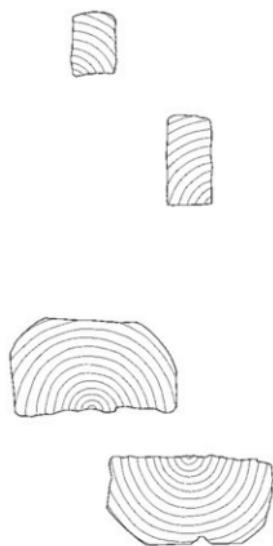
図版
35

出土遺物 12

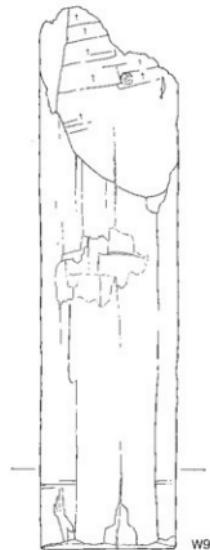
木器



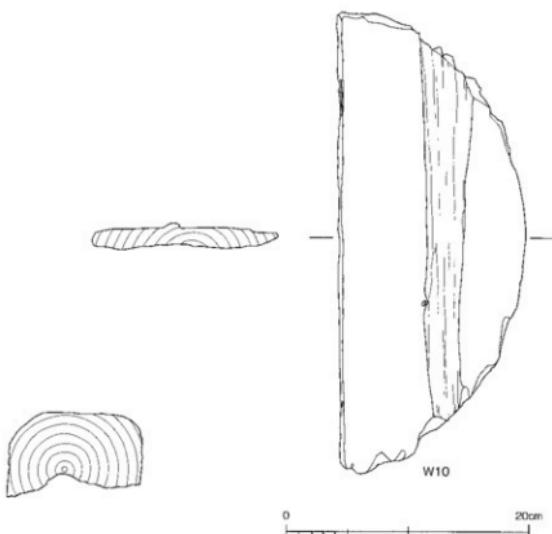
W7



W8



W9

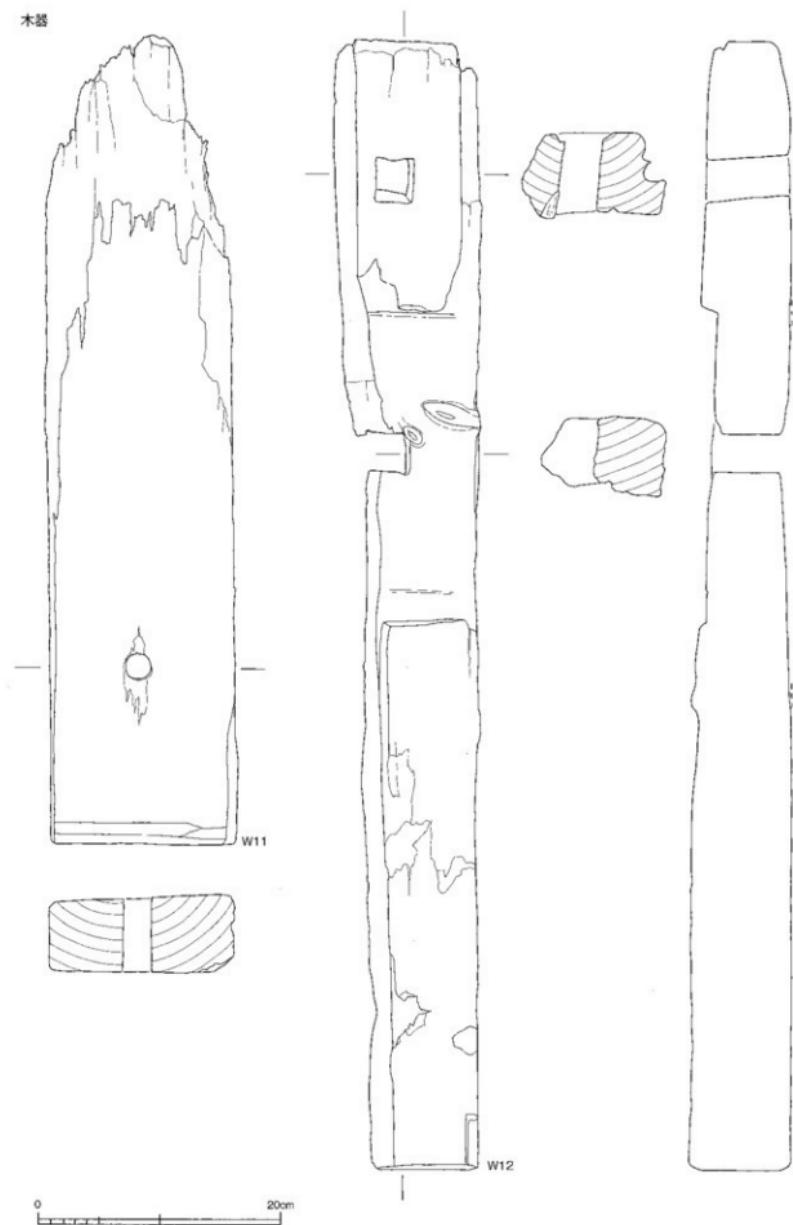


W10



980190

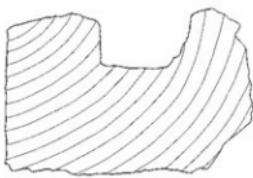
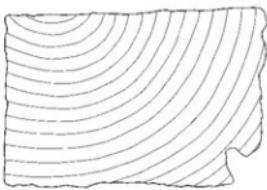
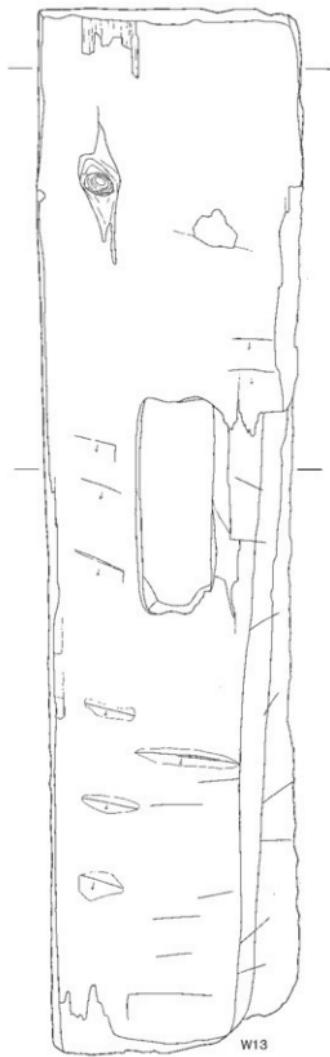
木器



図版
37

出土遺物 14

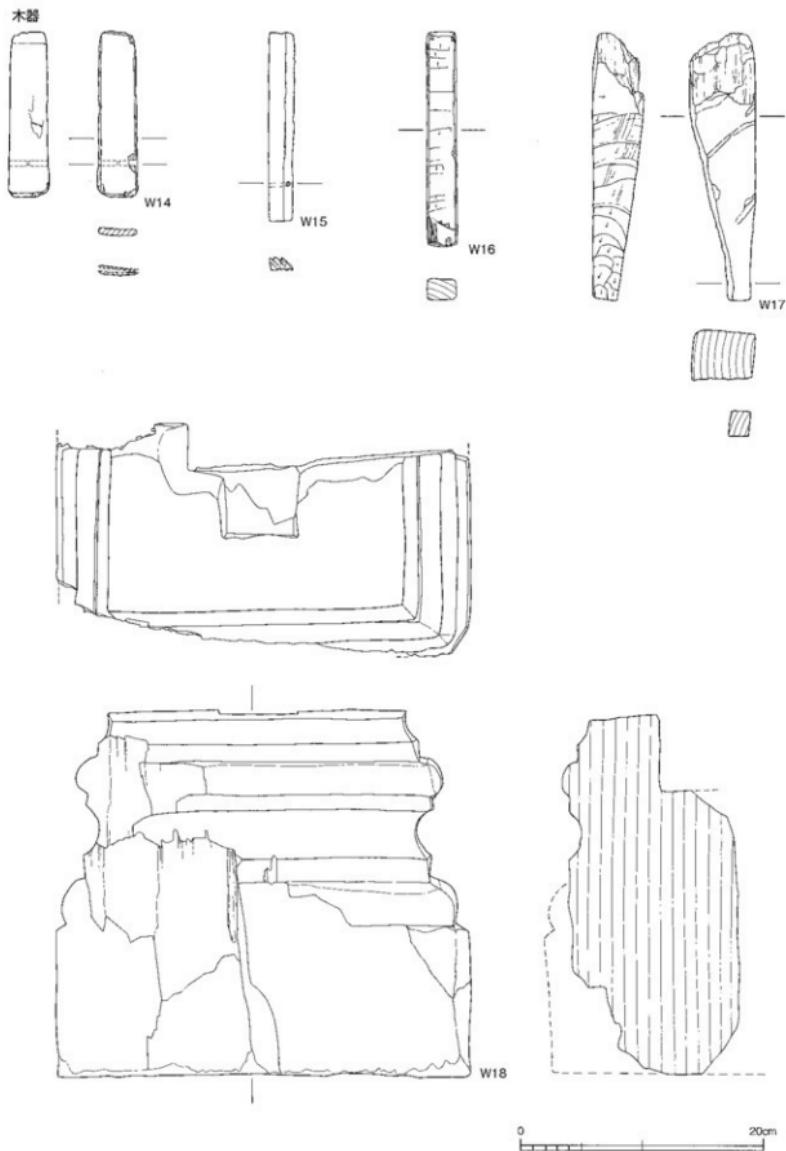
木器



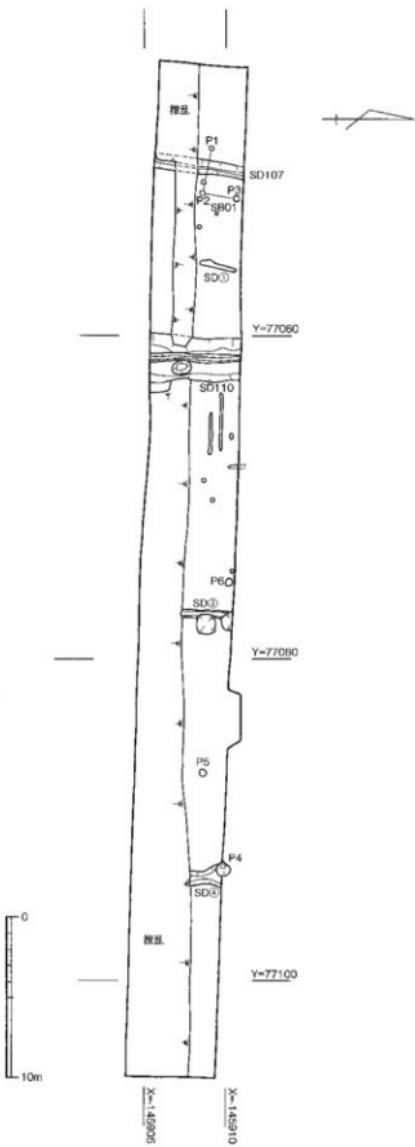
出土遺物 15

980190

図版
39



出土遺物 16

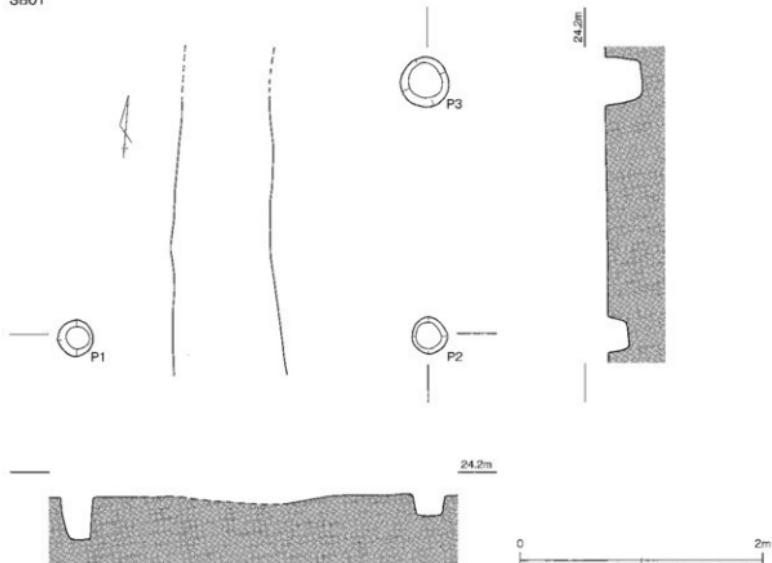


調査区平面図

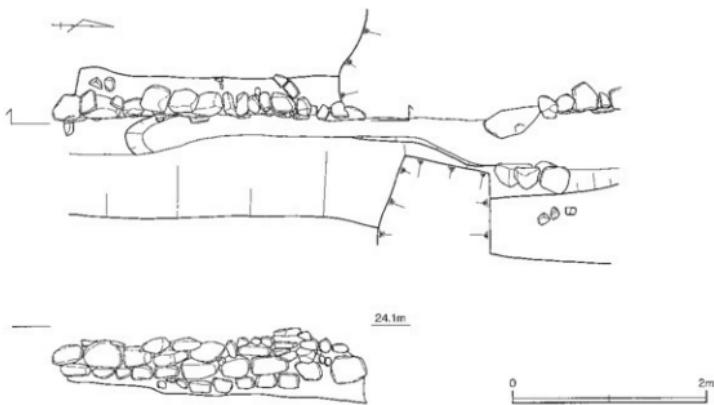
990132

SB01

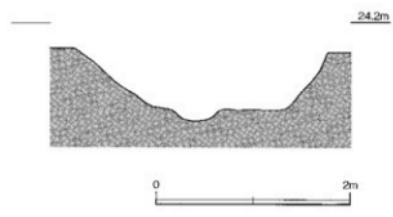
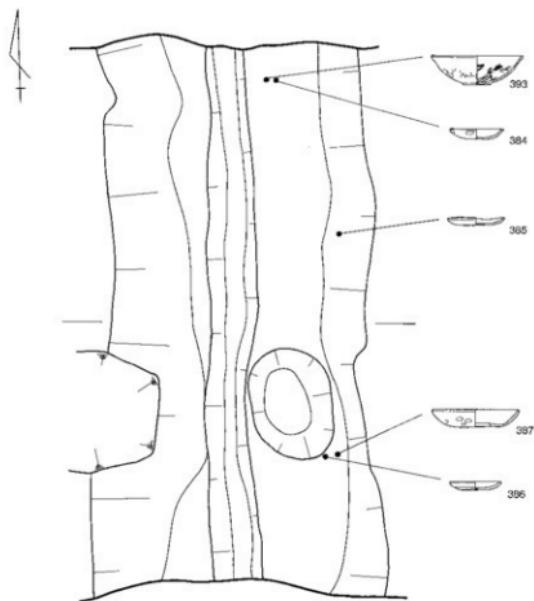
図版
41



SD110 上層石垣



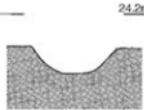
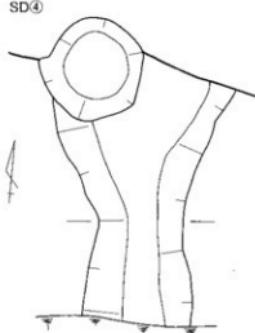
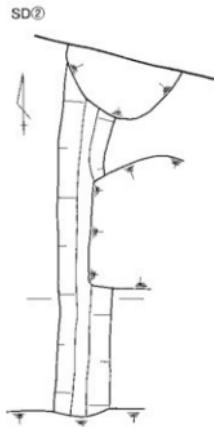
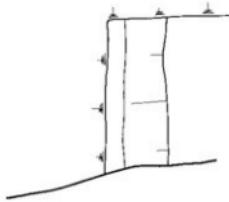
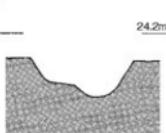
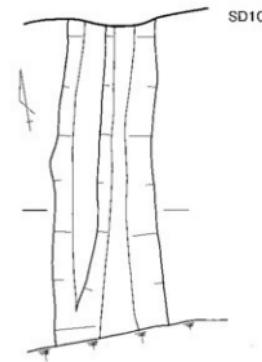
SB01・SD110 上層石垣



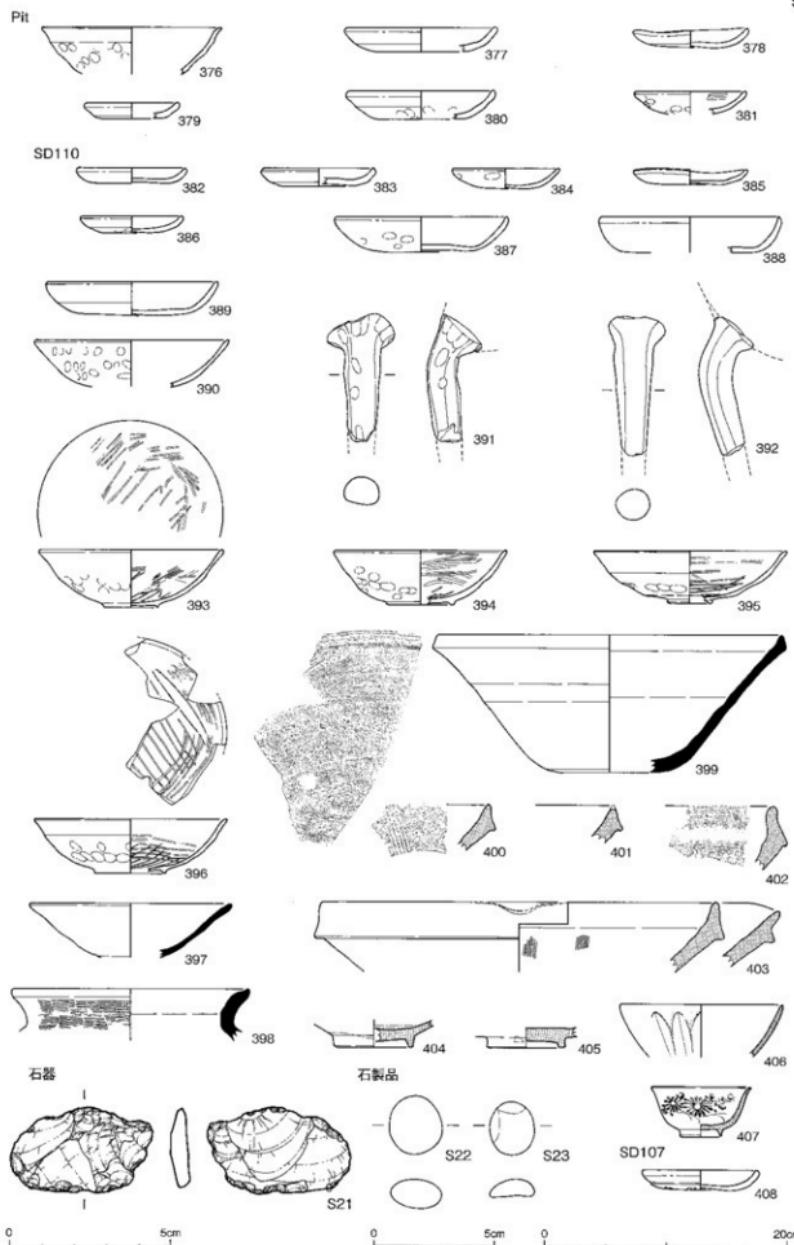
SD110

990132

図版
43

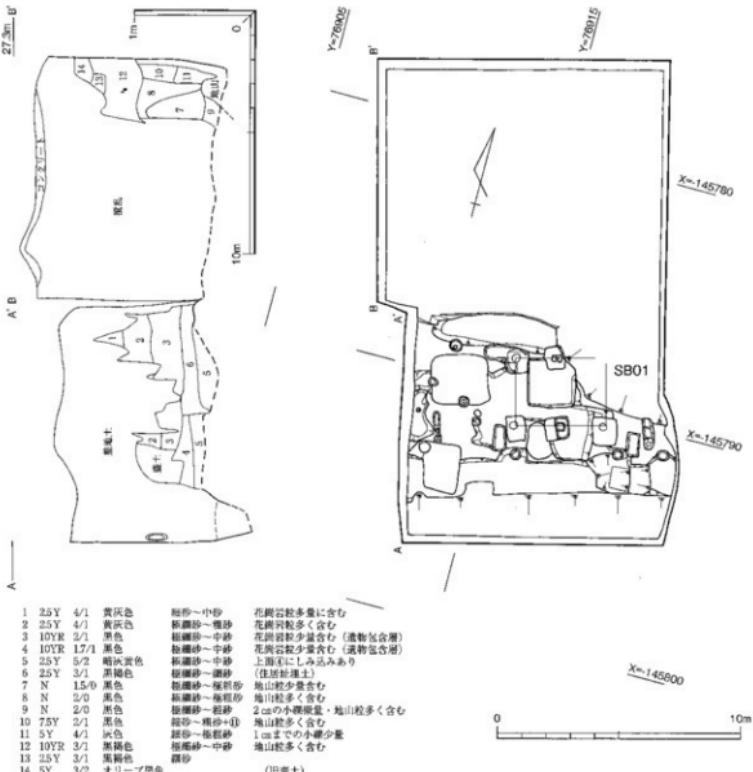


SD107 · SD① · SD② · SD④

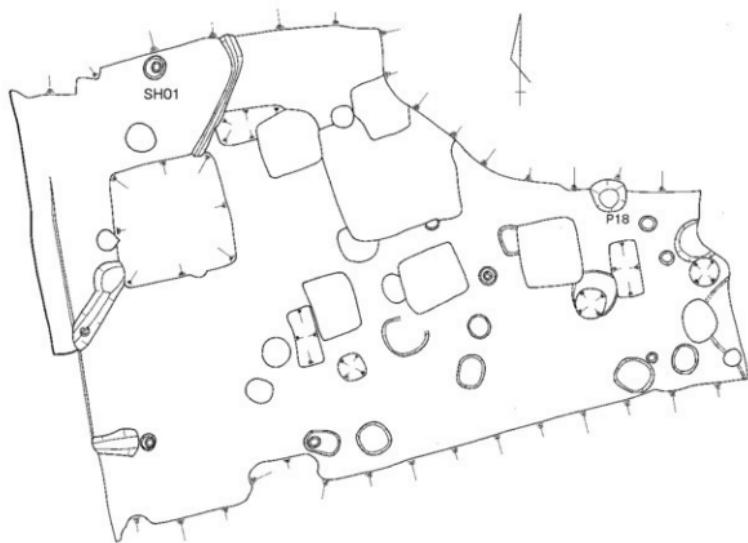
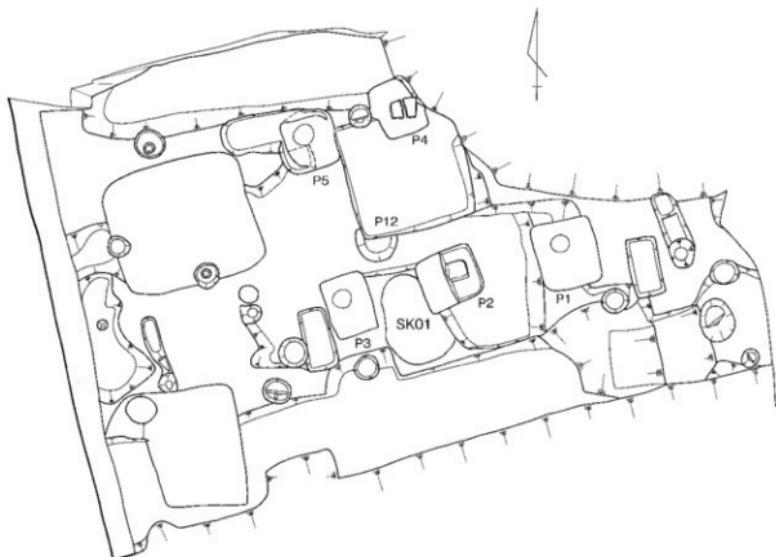


出土遺物

2003061

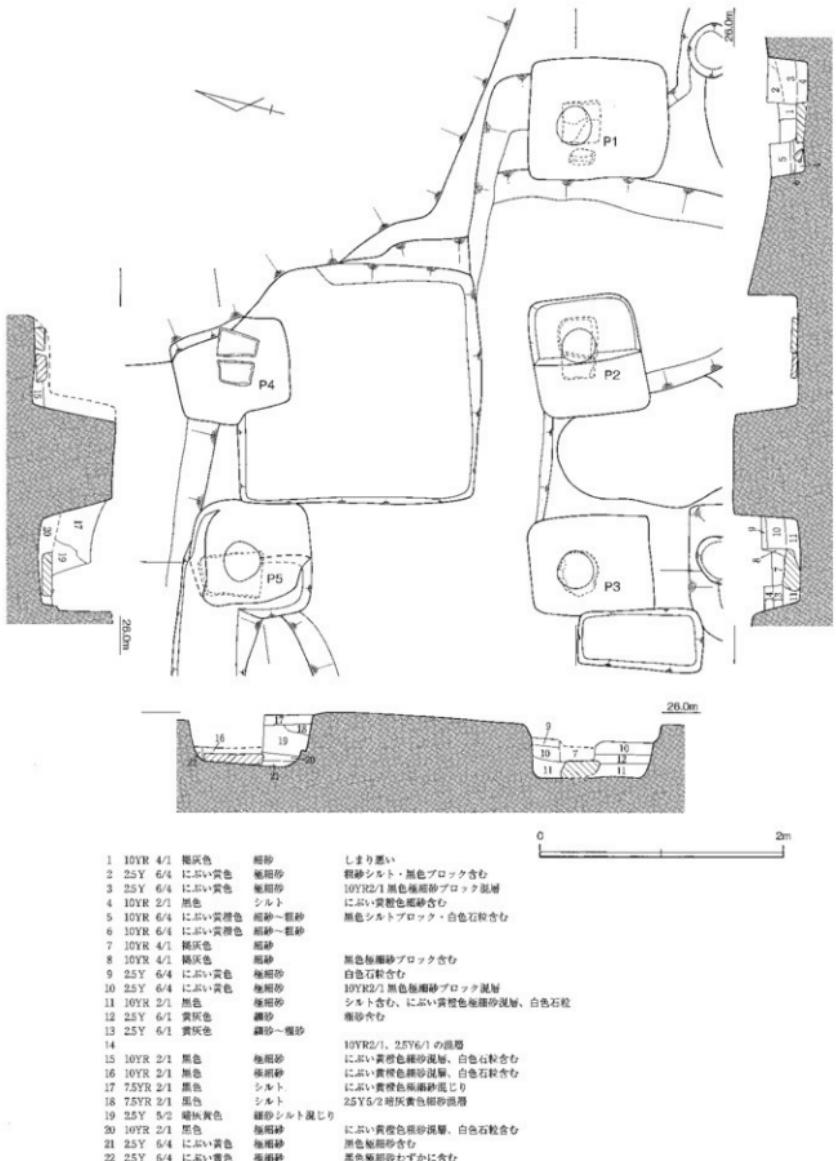


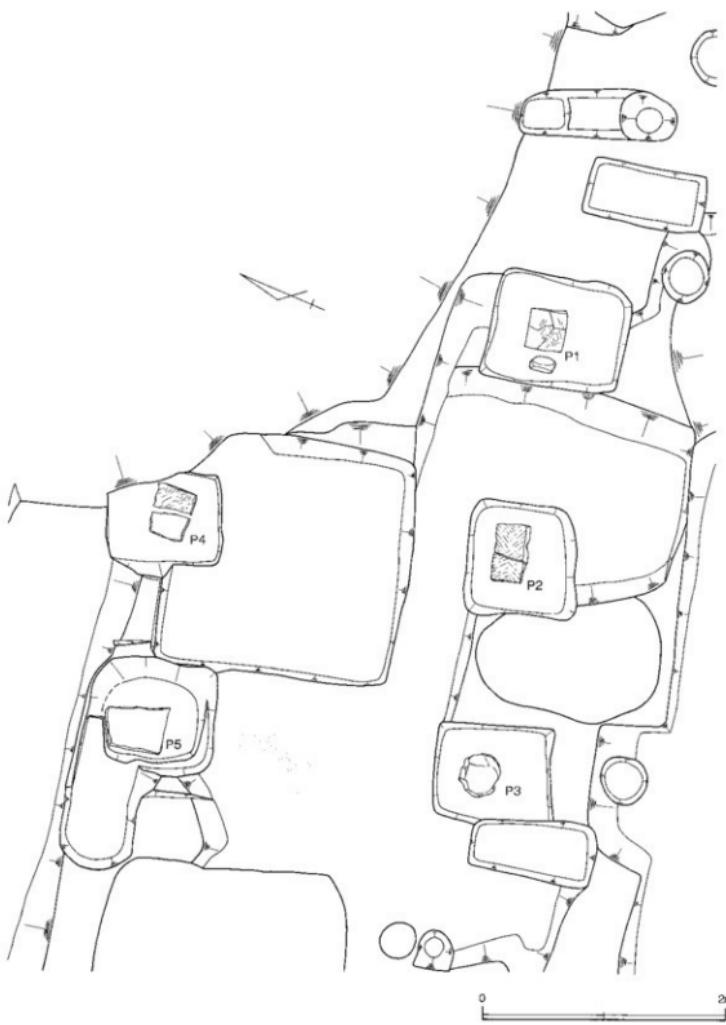
調査区平面図・土層図



0 4m

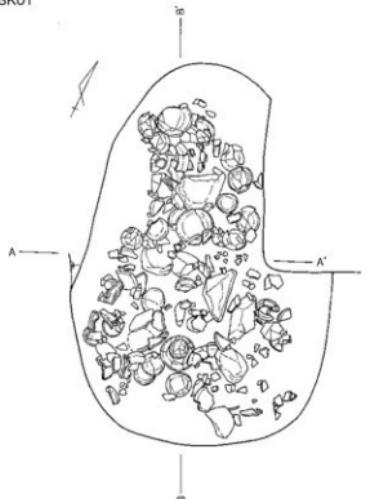
上面遺構配置図・下面遺構配置図





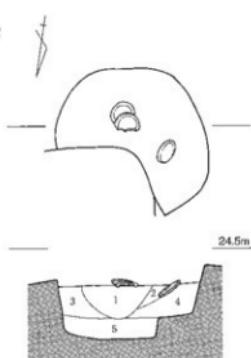
SB01

SK01



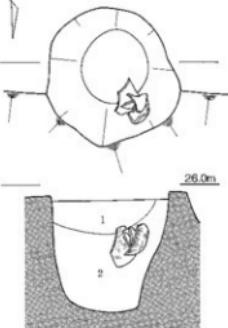
- 2 7.5YR 3/1 黒褐色 極細砂 白色石粒多く・炭化物含む
3 10YR 3/1 黑褐色 極細砂 シルト・炭化物含む

P12



- 1 10YR 4/1 黑褐色 極細砂 粗砂一白色石粒多く含む
2 10YR 4/1 黑褐色 極細砂 白色石粒少含む
3 10YR 4/1 黑褐色 極細砂 白色石粒少量・黒褐色極細砂含む
4 10YR 3/1 黑褐色 極細砂 シルト・分含む
5 10YR 2/1 黑色 極細砂 白色石粒少含む

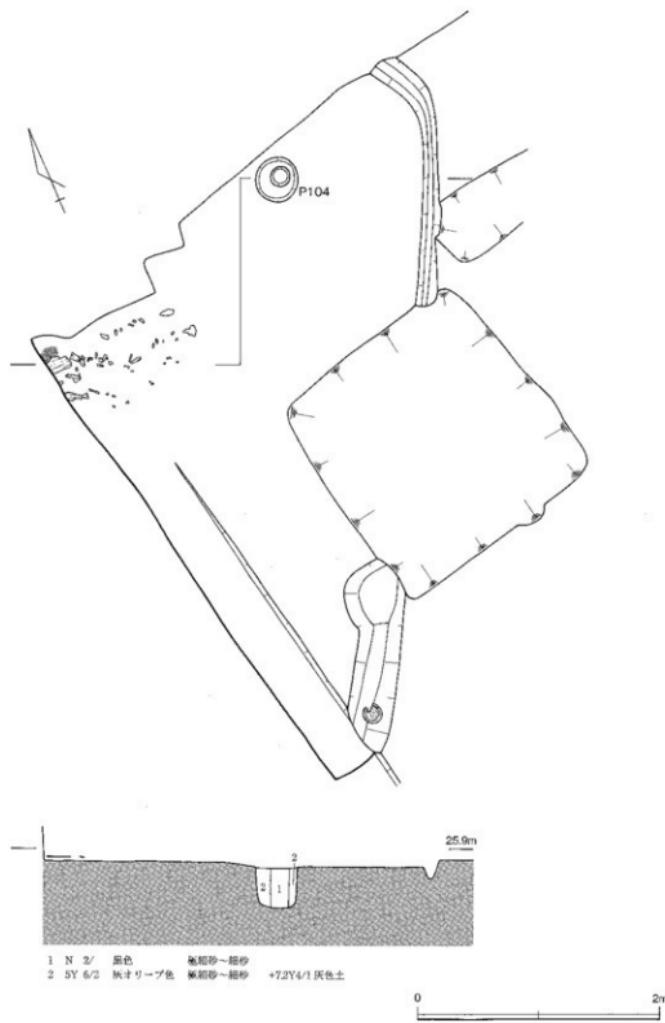
P18



- 1 10YR 3/1 黑褐色 極細砂 シルト・粗砂白色石粒含む
2 10YR 3/1 黑褐色 極細砂 シルト・粗砂白色石粒少量・
10YR 6/4 黄褐色極細砂ブロック含む



SK01、P12・P18



2003061

SK01



409



410



411



412



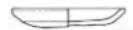
413



414



415



416



417



418



419



420



421



422



423



424



425



426



427



428



429



430



431



432



433



434



435



436



437



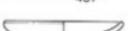
438



439



440



441



442



443



444



445



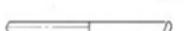
446



447



448



449



450



451



452



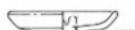
453



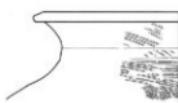
454



455

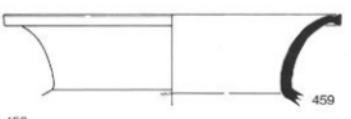


456



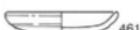
457

Pit



458

459



461



462



463



464

SH01

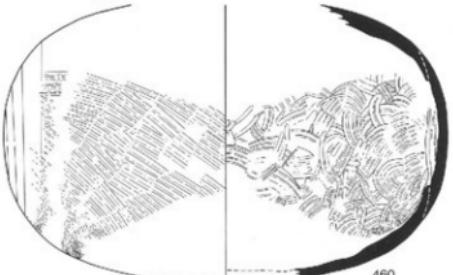


465

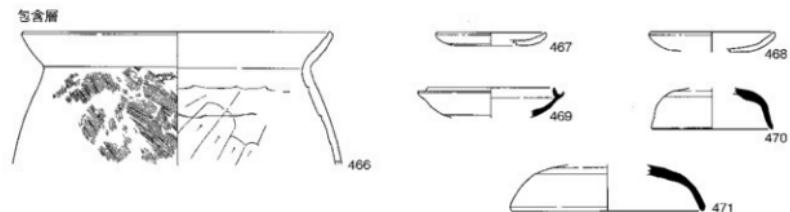
0

20cm

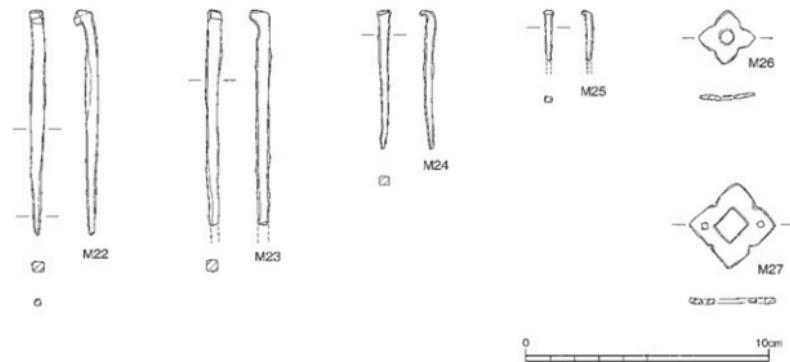
出土遺物 1



460



金属器



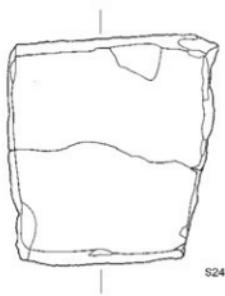
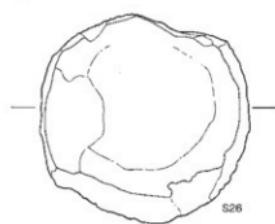
2003061

図版
53

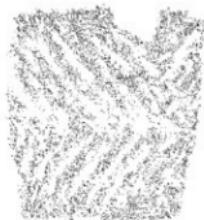
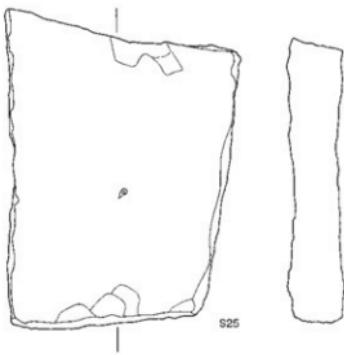
斐登石
P4



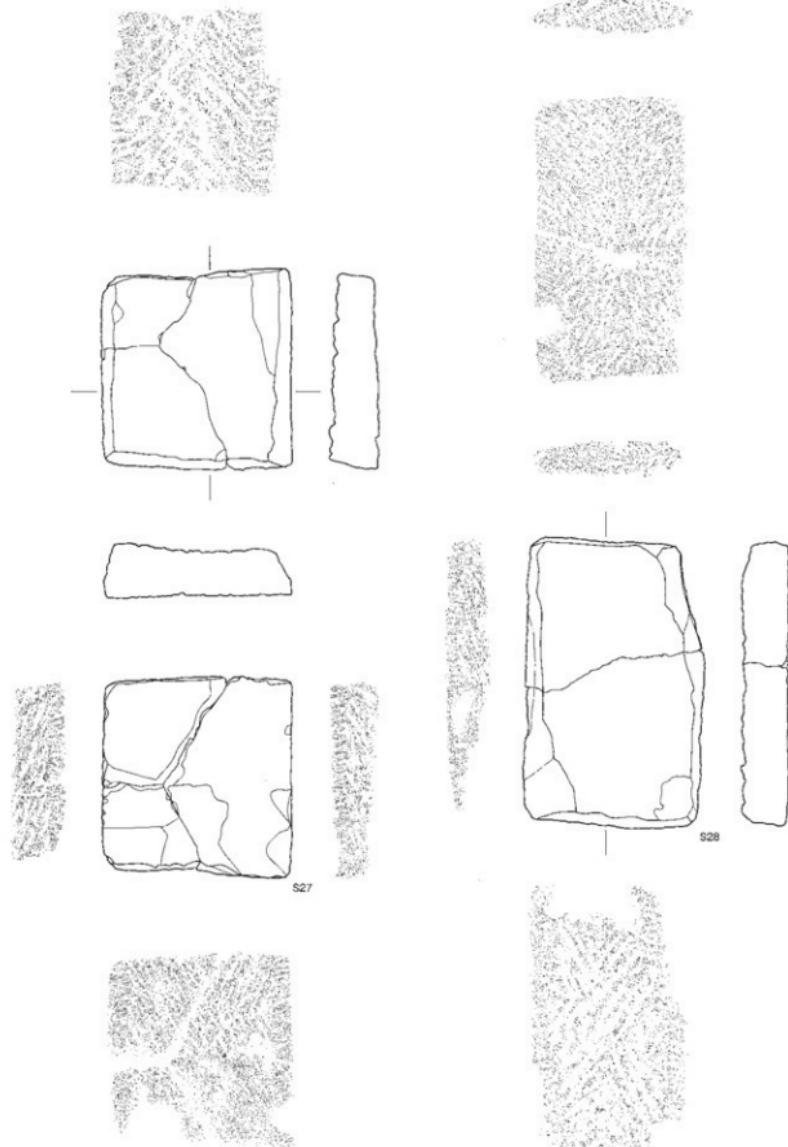
P3



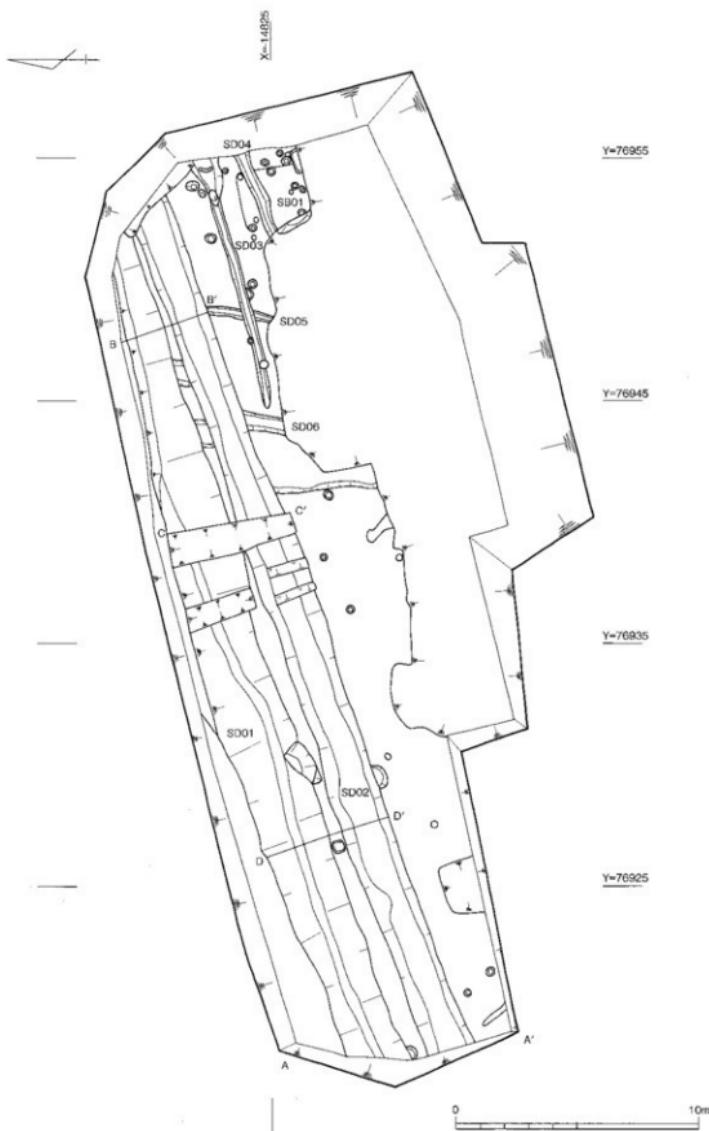
P5



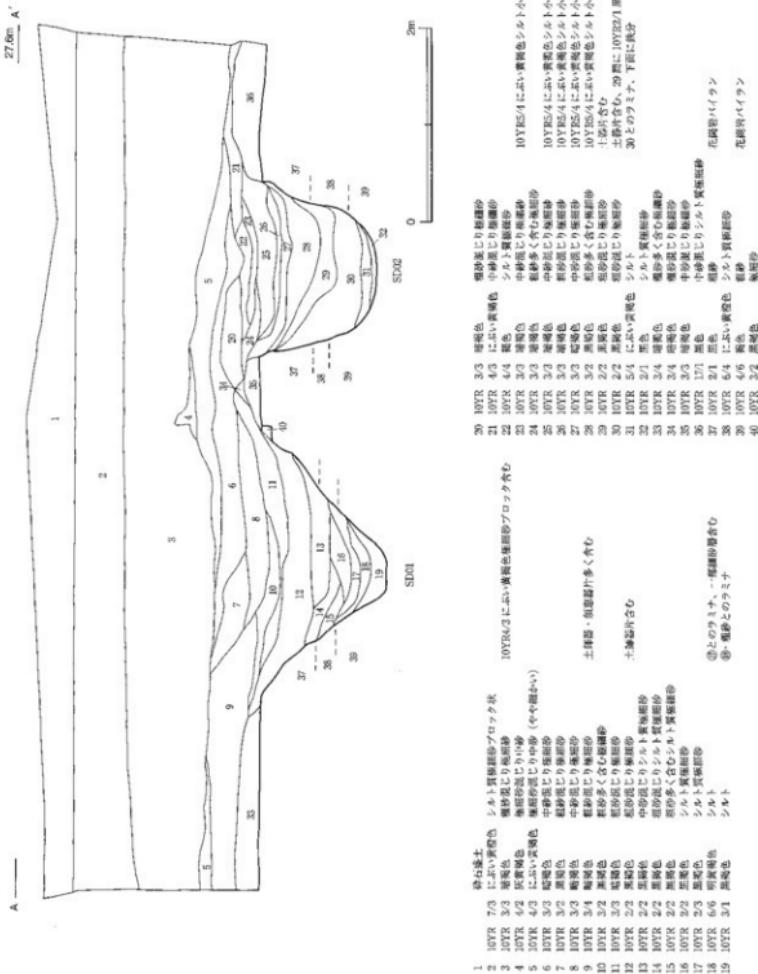
出土遺物 3



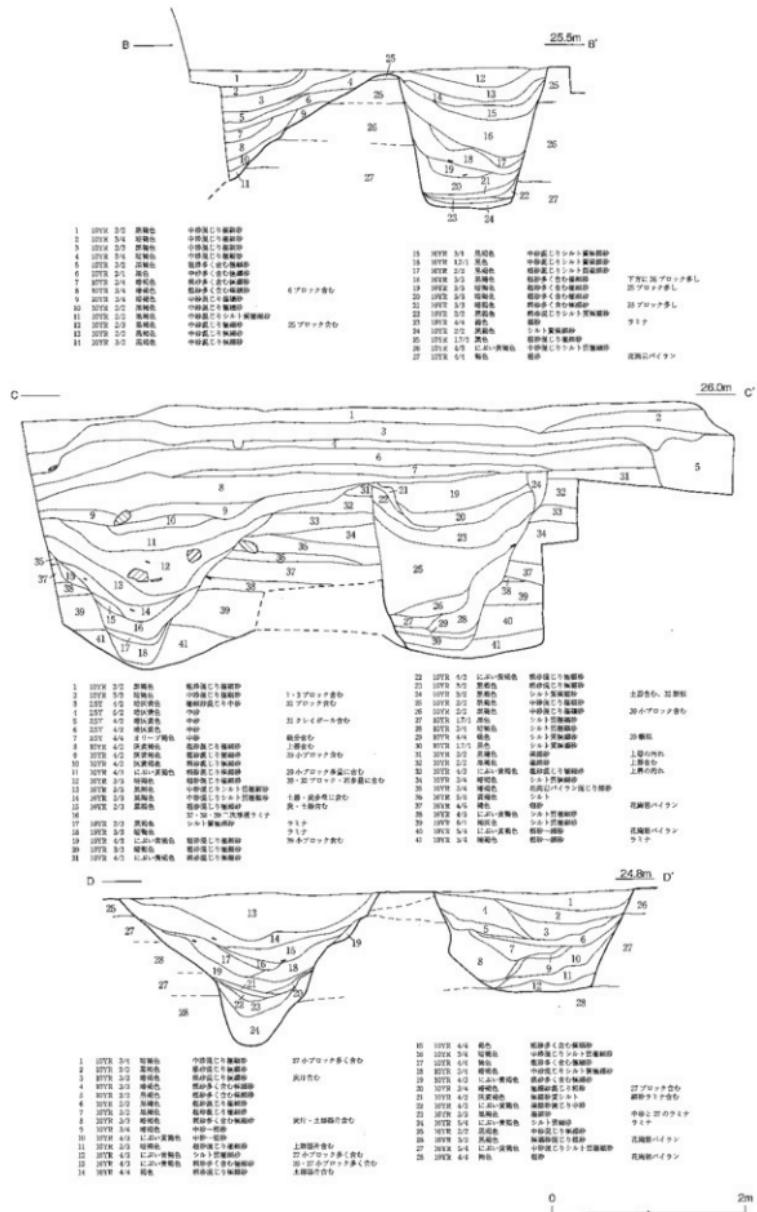
出土遺物 4



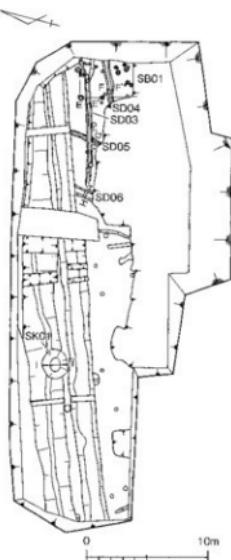
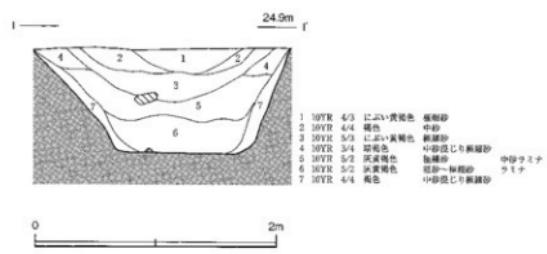
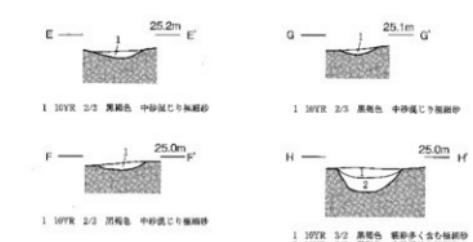
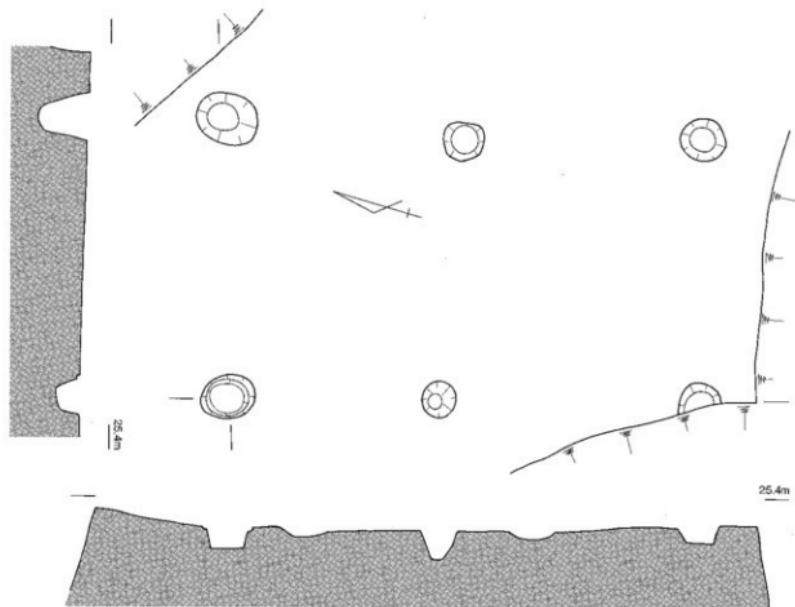
造構配置図



土層圖

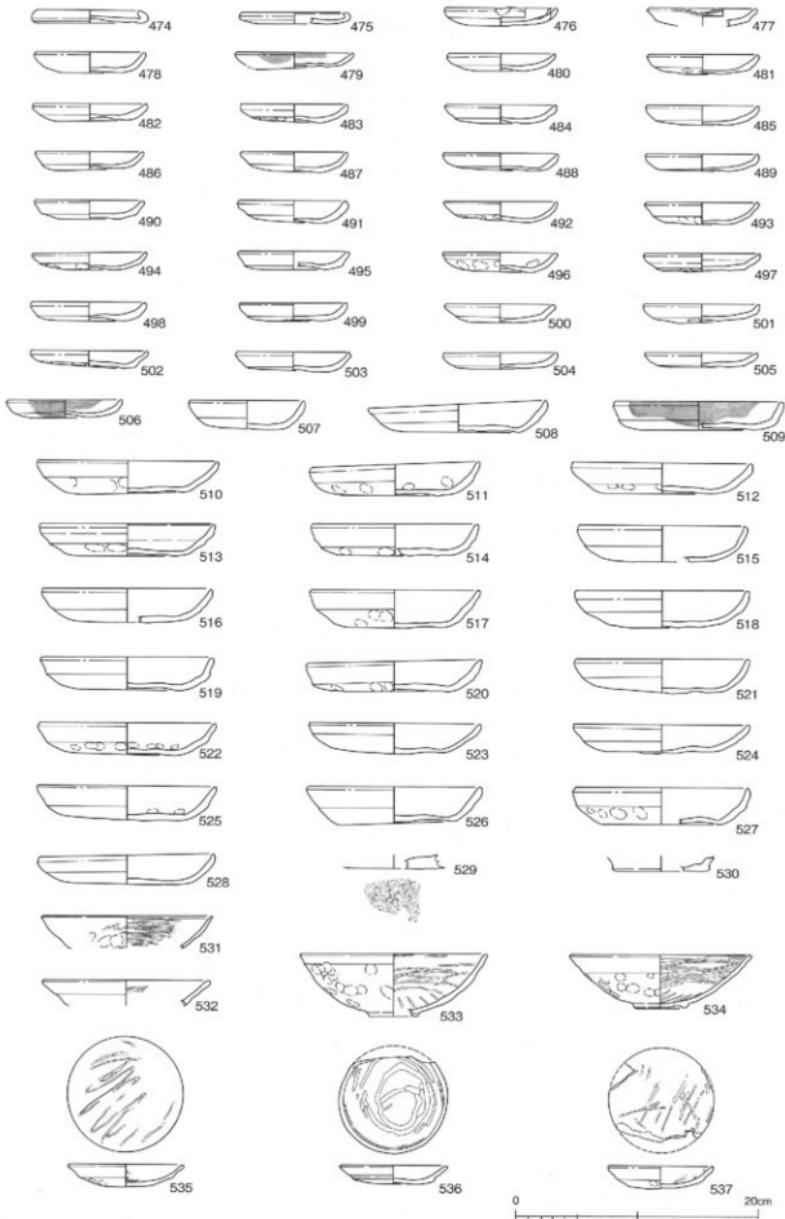


SD01 · SD02



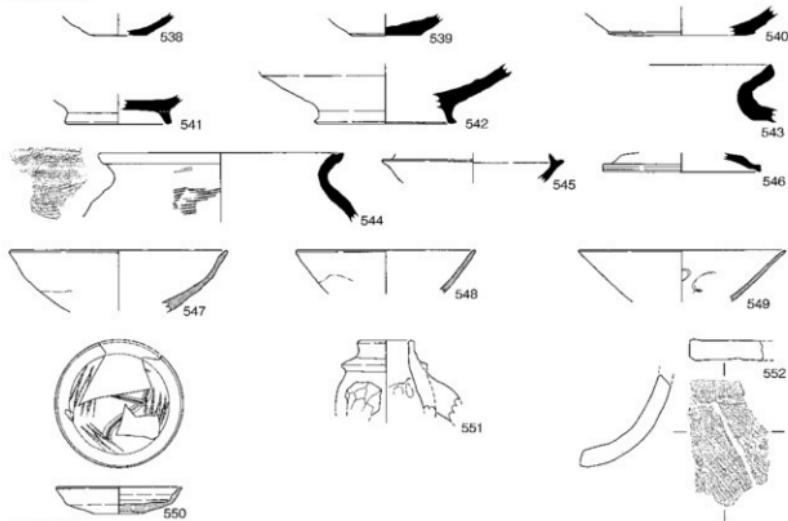
SB01、SD03・SD05、SD06、SK01

SD01 最下層

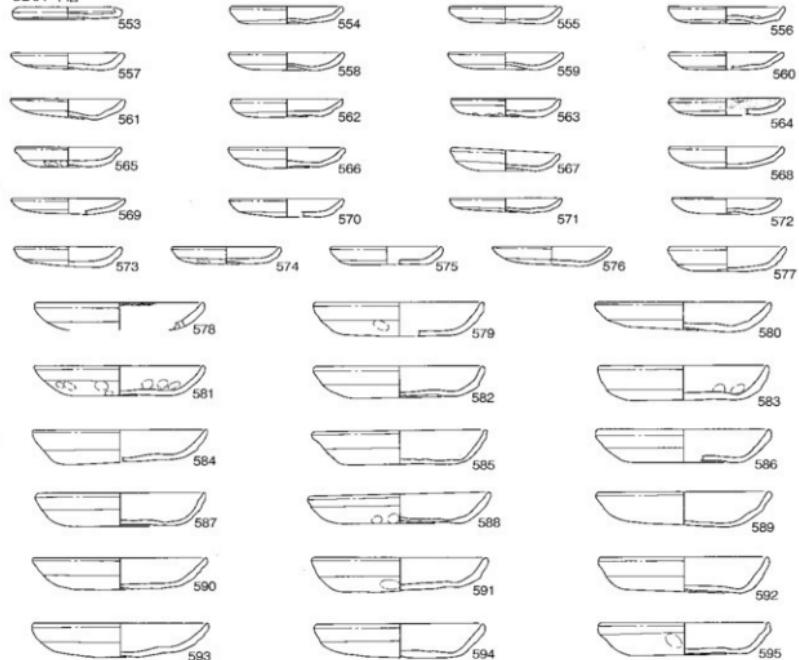


出土遺物 1

SD01 最下層



SD01 中層

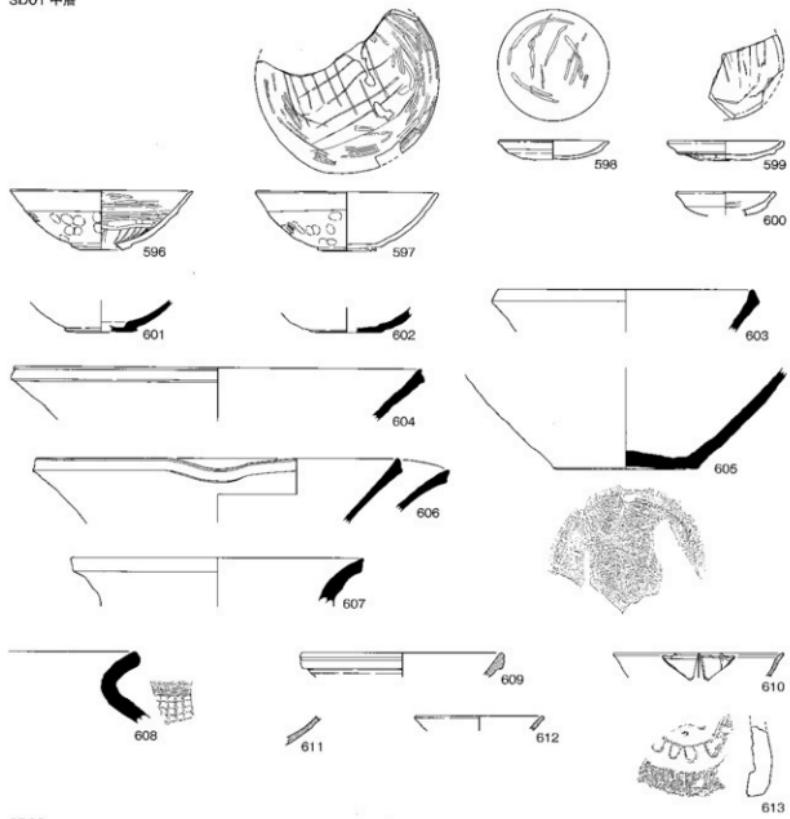


出土遺物 2

2003172

SD01 中層

圖版
61



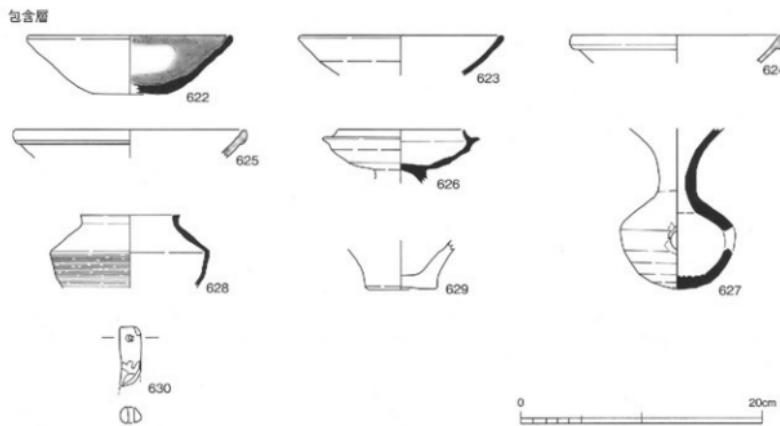
SD02



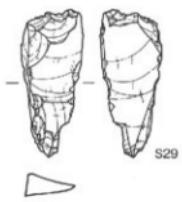
Pit



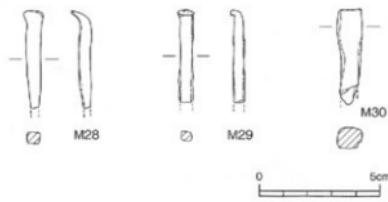
出土遺物 3



石器

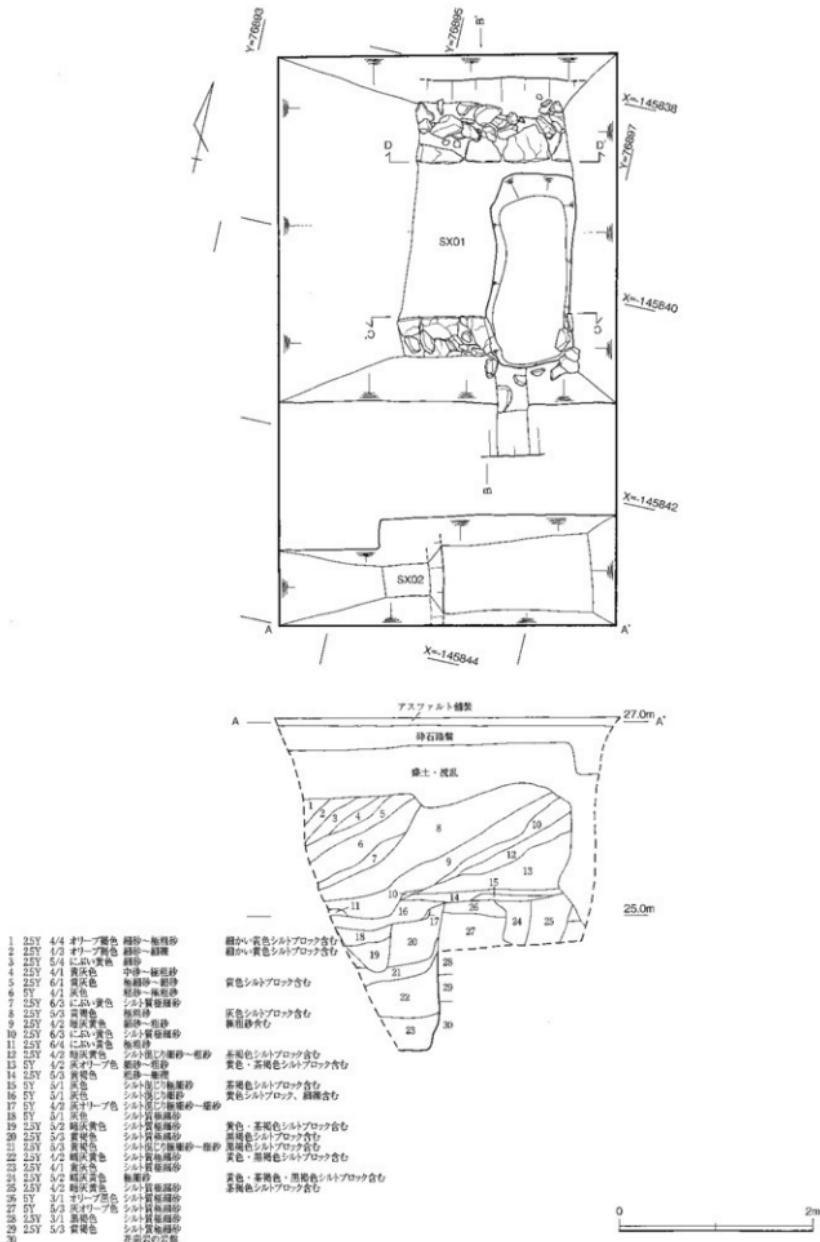


金屬器

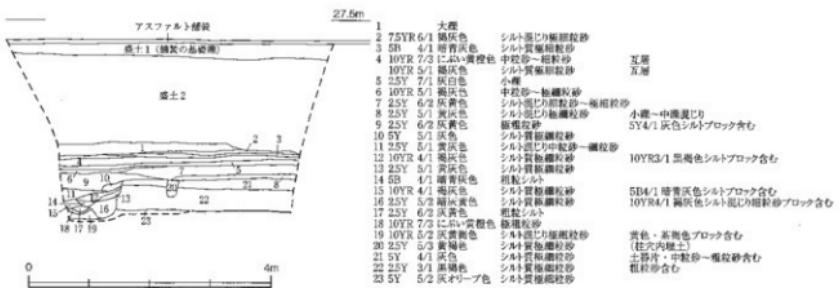
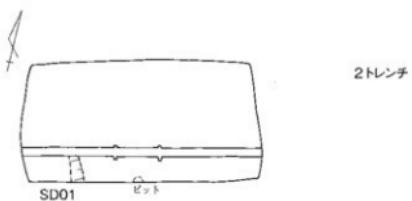
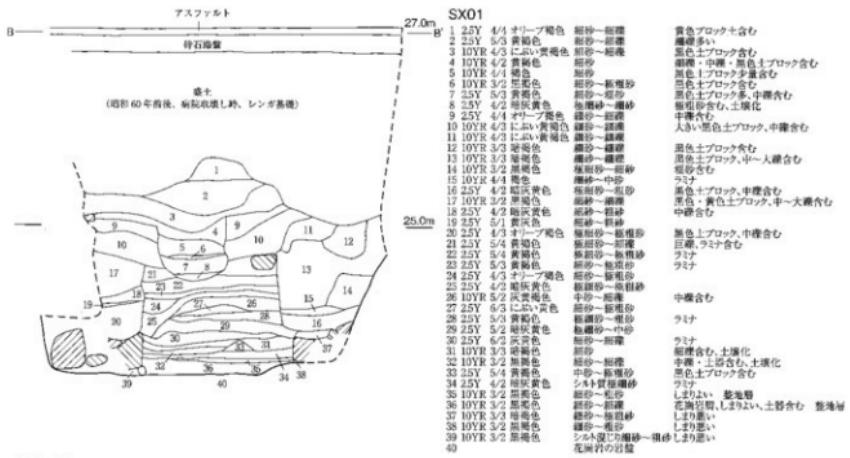


石製品

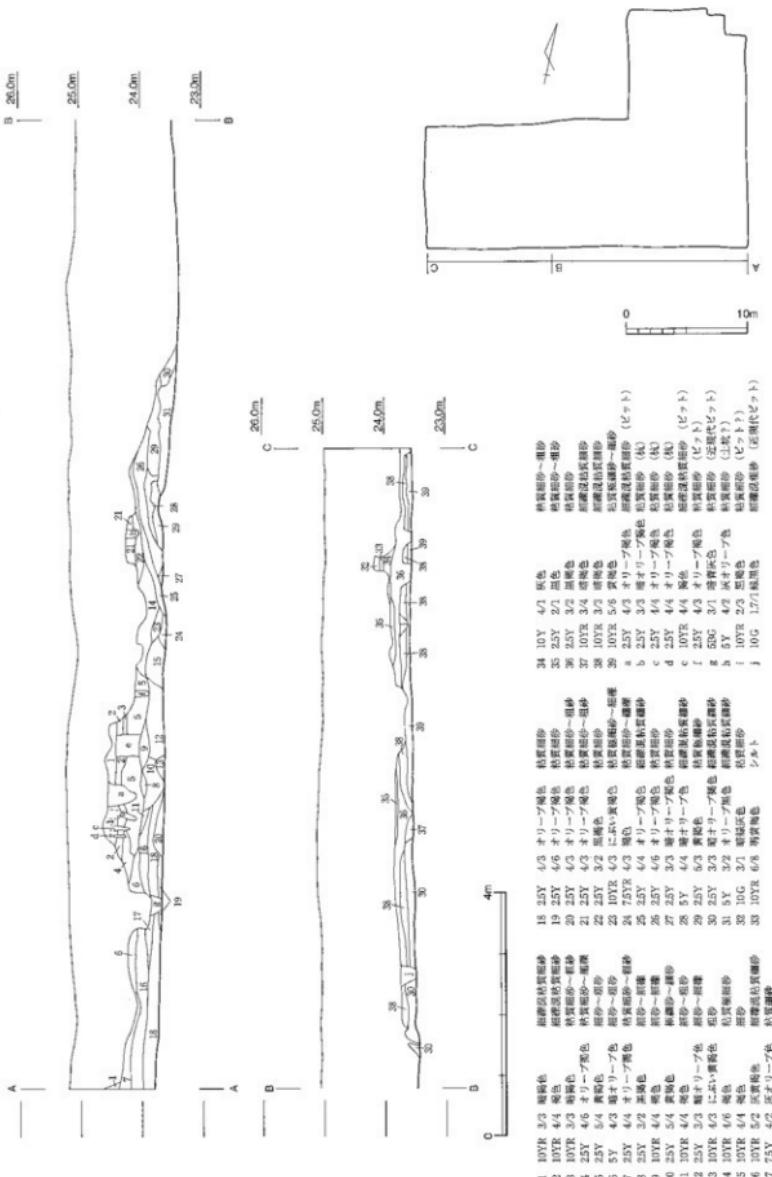




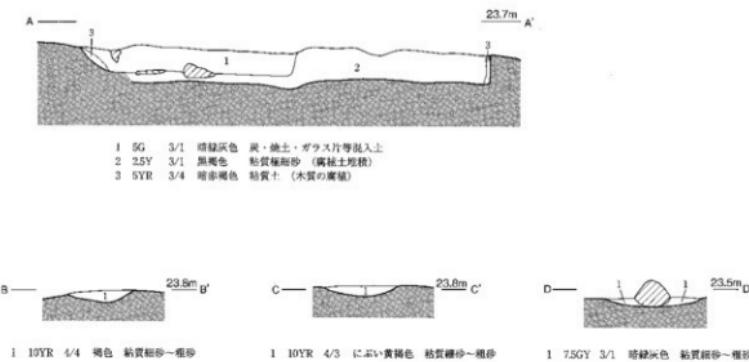
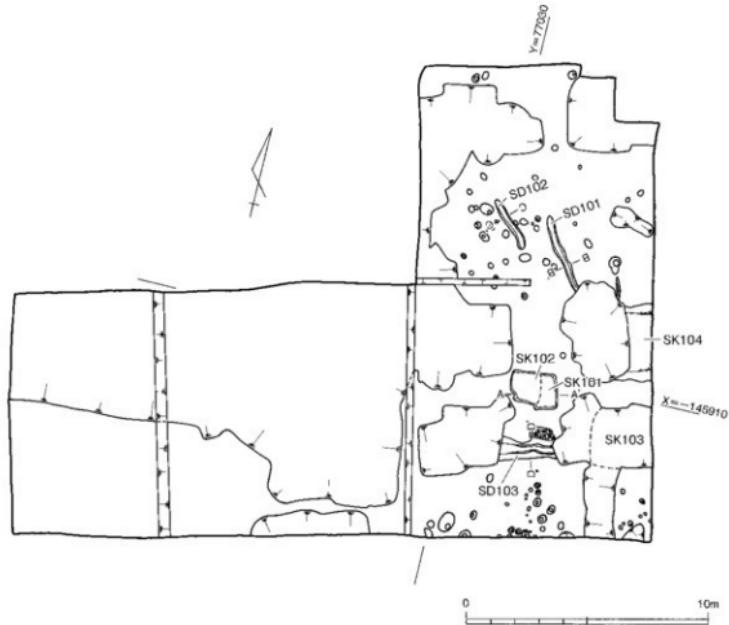
1 トレンチ平面図・土層図



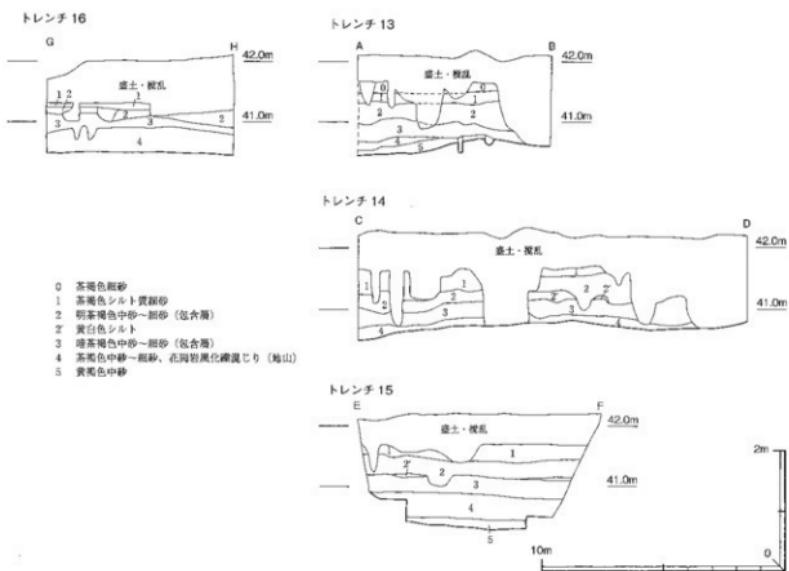
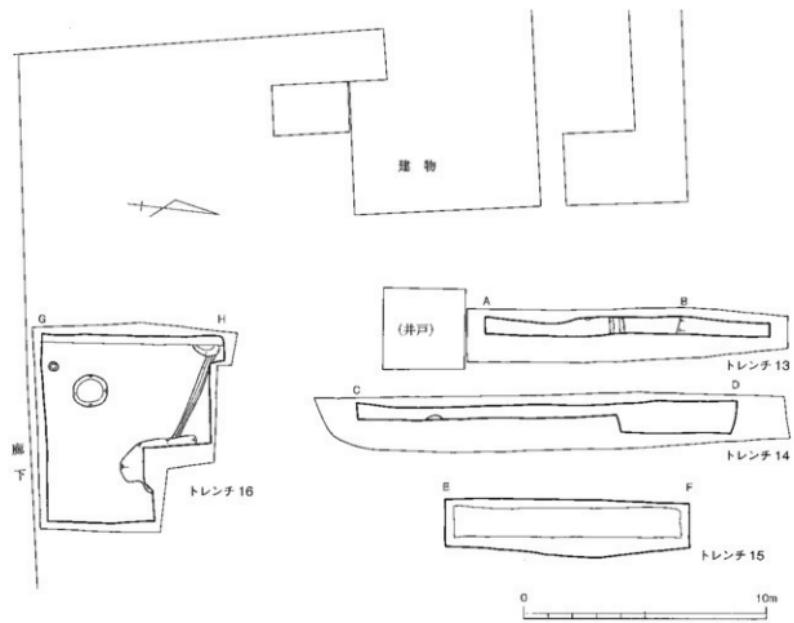
1 トレンチ SX01 土層図・石垣立面図、2 トレンチ



調査区南壁断面図



遺構配置図、遺構断面図

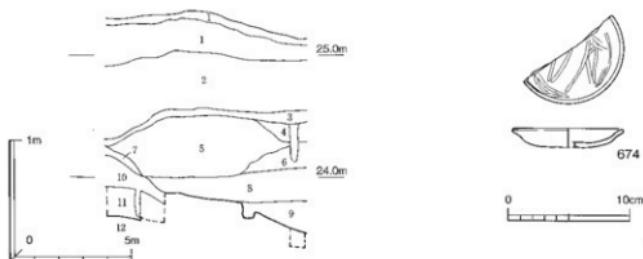


調査区全図、土層図

950259 例



980112

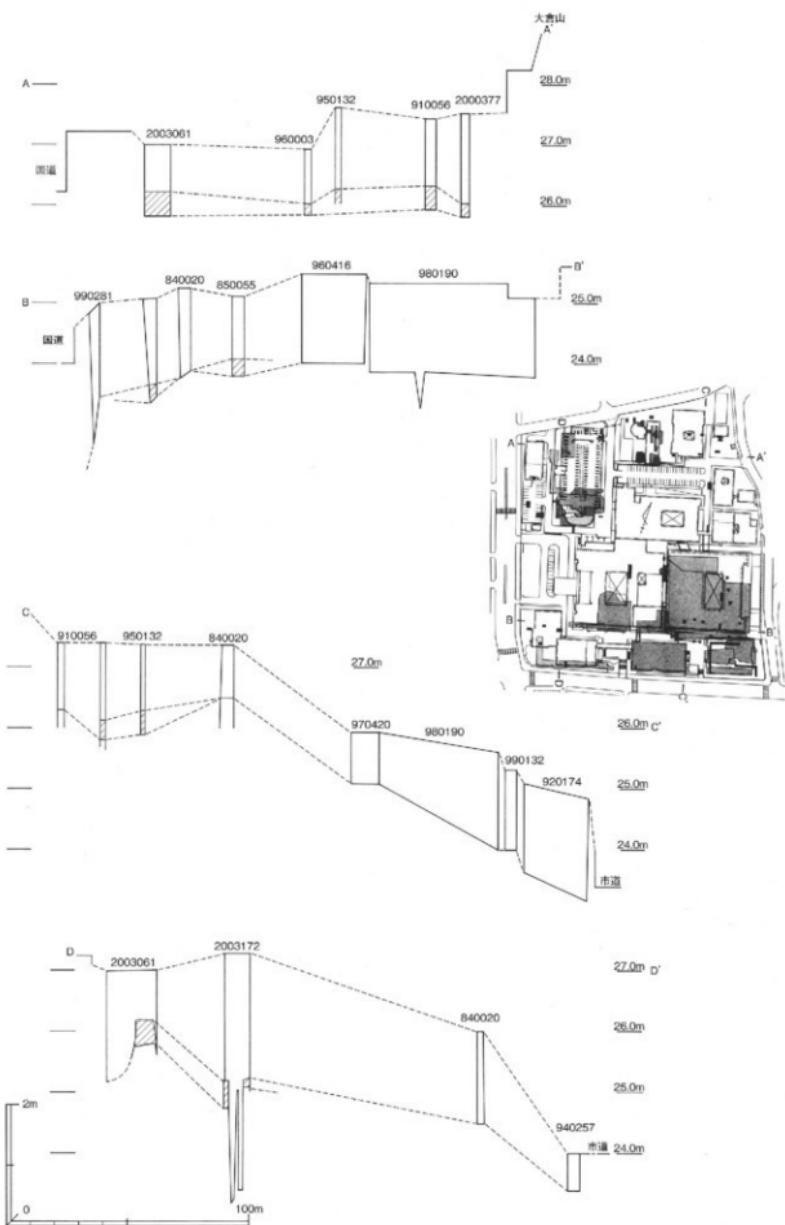


1	10YR	8/3	板白色	コンクリート及び埋蔵面
2	10YR	5/2	灰青褐色	底土 滲土多い
3	N	15-0	黒色	灰層 次二次世界大戦面?
4	5Y	7/4	浅紫褐色	整地土
5	5Y	6/2	灰色	粗瓦・レンガ等含む
6	25Y	5/1	黄灰褐色	粗砂～中砂 近世耕作土?
7	5Y	7/4	浅黄色	中砂
8	75Y	5/2	灰オリーブ色	中砂～粗砂
9	25Y	6/1	黄灰褐色	遺物包含層
10	5Y	6/2	灰オリーブ色	中砂～粗砂
11	5Y	4/1	灰色	粗砂 遺物包含層
12	10YR	8/3	浅黄褐色	ベース?

970349

970318





地形の復原

写 真 図 版



遠景(東から)



遠景(南東から)



遠景(南から)



遠景(東から)